

浜松市民文芸

68



浜 松 市

令和5年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講 座

講座名	講師	開催日時等	受講料円
『源氏物語』入門講座 —北村清春の『源氏物語忍草』をよむ—	松 平 和 久	4/5、12、19、26、5/3、10 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	4,200
江戸の絵本講座 —恋相撲『川隔小瀬世話』をよむ—	勝 田 敏 勝	4/13、5/11、6/8、7/13、8/10、9/14 第2木曜日(全6回) 13:30～15:30	4,200
川柳入門講座 —風刺やユーモアのセンスを磨こう—	今 田 久 帆	4/23、5/28、6/25、7/23、8/27 第4日曜日(全5回) 9:30～11:30	3,500
『平家物語』講座 —法皇と義仲が破綻、範頼・義経登場。—	大 石 嘉 美	4/23、5/28、6/25、7/23、8/27、9/24 第4日曜日(全6回) 13:30～15:30	4,200 (テキストは 個人で購入)
『おくのほそ道』講座 —その出会いと別れ—	勝 田 敏 勝	4/28、5/26、6/23、7/28、8/25、9/22 第4金曜日(全6回) 13:30～15:30	4,200
篆刻初級講座 —一寸の芸術に挑戦—	下 石 哲 幸	5/20、27、6/10、17、24 土曜日(全5回) 9:30～11:30	3,500 (別途材料費 2,000)
俳句入門講座Ⅰ —俳句をはじめてみよう—	笹 瀬 節 子	5/27、6/3、10、17、24 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	3,500
朗読入門講座 —声で表現する楽しさを味わおう—	堤 腰 和 余	6/13、7/11、8/8、9/12、10/10、11/14 第2火曜日(全6回) 9:30～11:30	4,200
朗読書講座 —本の世界を朗読で表現しよう—	堤 腰 和 余	6/20、7/18、8/15、9/19、10/17、11/21 第3火曜日(全6回) 13:30～15:30	4,200
夏休み読書感想文講座 —これで読書感想文が書ける—	林 容 子	①7/22(土) ②7/29(土) 9:00～12:00 4～6年生対象 付添不要	700
夏休み絵本づくり講座 —世界に一つだけの絵本—	井 口 恭 子	7/22(土) 13:30～16:00 3～6年生対象 付添不要	700
楽しいお話づくり講座 —おはなしづくりにちようせん—	井 口 恭 子	7/29(土) 13:30～15:30 1～3年生対象 付添不要	700
短歌入門講座 —三十一音で遊ぼう—	村 松 建 彦	9/2、9、16、23、30 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	3,500
俳句入門講座Ⅱ —俳句をはじめてみよう—	村 松 二 本	9/2、9、16、23、30 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	3,500
石川啄木鑑賞講座 —手製本で楽しむ啄木の歌と詩—	折 金 紀 男	9/3、10、17、24、10/1 毎週日曜日(全5回) 9:30～11:30	3,500 (別途材料費 1,000)
『万葉集』講座 —人麻呂・家持・坂上郎女をよむ—	松 平 和 久	8/21、9/4、11、18、10/2、9 月曜日(全6回) 9:30～11:30	4,200
『和泉式部日記』講座 —男女の知性と感性の応酬をよむ—	松 平 和 久	2/7、14、21、28、3/6、13 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	4,200 (テキストは 個人で購入)

展示 9:00～17:00 5階 展示室

●企画展 収蔵展

特別収蔵展 「原田濱人とその思いを受け継ぐ浜松の俳人たち」

3月1日(水)～ 6月18日(日)

特別収蔵展 「没後三十年 藤枝静男が遺したもの」

7月1日(土)～10月15日(日)

※ 以降の企画展、収蔵展は計画中

●講演会

「プーチンのウクライナ侵攻について」

金原増吉

5月13日(土) 9:30～11:30

700円

「藤枝静男邸を訪ねた作家たち」

和久田雅之

8月6日(日)13:30～15:30

700円

「(仮)芭蕉に学ぶ俳句の作り方」

高柳克弘

11月11日(土)13:30～15:30

700円

●朗読会

「山本周五郎『日本婦道記』より」

堤腰和余

10月22日(日)13:30～15:00

700円

浜 松 市 民 文 芸

第 68 集



作家「藤枝静男」邸のつくばい

このつくばいは小説『田紳有楽』の舞台となった藤枝邸の庭にあったもの。

現在はクリエート浜松駐輪場北側に置かれている。

浜 松 市

選者		小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳	
		竹腰幸夫	柳本宗春	住吉玲子	中西美沙子	たかはたけいこ	橋本由紀子	清水正人	高柳克弘	宮本卓郎	今田久帆

☆ 表紙絵

池田 吉仁

令和四年度 浜松市芸術祭「第70回 市展」
芸術祭浜松市長大賞受賞作品 絵画（油彩画）部門
題『街角のカフェ』

絵の仲間数名でチェコにスケッチ旅行に出掛け、世界遺産や美術館を巡り、歴史や文化、芸術に触れて数々のスケッチも残す事ができた。

後日、それを元に描いた数点の中より自分の構想に心象を込めたカフェ・モナリザの光景です。

ゴッホの「夜のカフェテラス」とイメージが重なったのかもしれない。ゆったりとした時の流れを辺りの様子に合わせて感じていただけるように描きました。

※絵を見ながら左側から右側に移動し、もう一度中央に立って絵の細部まで目を配ると、ゆったりとした時の流れと空間を感じていただけたと思います。

「浜松市民文芸」第68集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者	部門	受賞者
小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌	仲井 英之 鈴木 篠千 村 上 拓 嘉 山 春夫 如 月 はるの 河 島 憲代 木 俣 統裕 犬 塚 賢治 中 津 川 久子 サカイ ケント 乗 松 弘幸 水 野 次郎 山 下 進 尾 内 甲太郎 坂 口 ちせ 桜 花 ふみ 松 浦 ふみ子 すずきとしやす	定型俳句 自由律俳句 川柳	藤 田 節子 松 島 義徳 大 平 悦子 峯 村 友香里 和 久 田 郁江 名 倉 智代 二 橋 三千代 鈴 木 やよい 山 口 一郎 加 藤 喬 源 次郎 中 津 川 久子 山 口 英男 菊 川 文江 竹 山 恵一 宮 崎 和子

目次

小説

市民文芸賞

三日月の辻で……………仲井 英之……………10

都合……………鈴木 篠千……………28

きらきら星変奏曲……………村上 拓……………46

スマホ……………嘉山 春夫……………60

入選

このみとさらさのいた日々……………加藤 喬……………77

選評……………竹腰 幸夫……………93

選評……………柳本 宗春……………94

児童文学

市民文芸賞

ぼくの名前は茜……………如月はるの……………95

あまがえるのケロくんとおじいさん……………河島 憲代……………103

入選

おかあとおいらとわし……………内山 文久……………110

じいさまの黄色い花……………金指美美代……………118

選評……………住吉 玲子……………125

評論

市民文芸賞

入選

実朝論の構成と解体……………木俣 統裕……………127

発明群……………内山 正己……………136

選評……………賀茂真淵の業績……………神谷 司……………145

……………中西美沙子……………149

随筆

市民文芸賞

五十年目の告白……………犬塚賢治郎……………151

私も忘れたわ……………中津川久子……………153

入選

調子の良い男の顛末……………松田 健……………155

混ぜご飯……………大庭 拓郎……………157

昔の飛騨の正月の風習……………高橋 幸……………158

生きてきた道……………藤原百合子……………160

選評……………たかはたけいこ……………163

詩

市民文芸賞

ツケマツゲ……………サカイケント……………166

巨星……………乗松 弘幸……………167

苦難だった日々……………水野 次郎……………168

入選……………時間……………山下 進……………170

靴……………	尾内	以	太……………	171
出会い……………	根本	文	子……………	172
すみれの願い……………	吉川	愛……………		173
日常……………	岸田	彩流……………		174
選評……………	橋本	由紀子……………		175

短歌

市民文芸賞

尾内甲太郎	坂口	ちせ	桜花	ふみ
松浦ふみ子	すすきとしやす			

入選

大庭 拓郎	阪口佳寿子	峯村友香里
宮本 恵司	森 都子	相曾多加根
赤堀 進	井口 絹子	石原新一郎
伊藤 美代	内山 文久	内山 正則
加藤 久子	河合 和子	木下 文子
柴谷 俊行	清水 紫津	鈴木 和子
鈴木 健示	鈴木 壽子	鈴木 弘子
高山 紀恵	坪井いち子	手塚 みよ
波静かを折る	野末 妙子	袴田 成子
平野 旭	福島 正義	古谷聰一郎
堀川 知音	増井 照美	松本ひで子
宮澤 秀子	谷野富久恵	山本 勝彦
和久田郁江	和久田俊文	渥美 朋可
安藤 圭子	池谷 和廣	石黒 實

定型俳句

市民文芸賞

選評

伊藤 友治	伊藤 雅章	伊藤 米子
井浪マリエ	岩城 悦子	江間 得二
遠藤 ゆき	青海 まち	大城きみ子
大檐 一郎	大山 啓	岡本 蓉子
小川 道子	加藤貴代美	神谷 司
かもともこ	佐野美佐代	寒風澤 毅
澤木 辰子	柴田千賀子	清水 孜郎
白柳ますみ	杉浦 庸暢	鈴木 勝則
鈴木 賢三	鈴木由起子	高木 勝海
高橋 幸	竹内オリエ	遠山 長春
戸田田鶴子	鳥井 美代	中村 淳子
中村 照美	根本 文子	巴 勢里
飛 天 女	平井 要子	福田美津子
藤原 孝志	招 金	水野佐喜恵
美山 愛	村木 幸子	ムラマツ
村松ヒサ子	山下 晏義	山田 文好
山中 伸夫	吉川 一美	由倉 典之
リコリス	渡野邊すみ子	
選評……………	清水 正人……………	

入選

堀川 知音	藤井 星子	根本 文子	外山 加代	竹平 和枝	鈴木 みちゑ	鈴木 健示	笹瀬 幸代	かもともこ	加藤 雅子	小野田 みさ子	岡部 すみれ	太田 沙知子	伊藤 倭夫	縣 裕子	鈴木 由紀子	酒井 浩之	嘉山 春夫	小楠 恵津子	内海 セツ子	池谷 和廣	加藤 喬	二橋 三千代
松本 ひで子	藤生 君江	橋本 英夫	中津川 久子	伊達 千春	鈴木 嘉子	鈴木 賢三	清水 康成	河合 三代子	金子 典子	尾林 せい子	小楠 勝代	小粥 通恵	岩崎 五郎	赤堀 進	野田 俊枝	須川 てる子	汽 水	小澤 幸一	大橋 秀一	伊藤 久子	鈴木 やよい	
宮崎 季有美	藤原 孝志	林田 昭子	中村 つぎ子	戸田 鶴子	竹内 オリエ	鈴木 利久	杉田 みさき	川島 泰子	神谷 知恵子	糟谷 修子	小楠 達司	岡部 澄子	岩崎 芳子	池谷 静子	渡辺 きぬ代	鈴木 浩子	齋藤 純子	勝田 洋子	大村 千鶴子	岩城 悦子	山口 一郎	

まさこ	古橋 美由紀	平野 旭	菱田 淡海	中村 日出子	永田 恵子	手塚 みよ	田中 愛子	竹田 道広	砂間 達也	鈴木 早苗	鈴木 敦子	白柳 ますみ	柴田 ミドリ	切畠 正子	川口 八重子	小栗 道子	大屋 智代	右崎 容子	伊藤 好子	伊藤 栄里	池田 智子	山田 知明	宮澤 秀子
松本 栖枝	古谷 とく	藤本 幸子	飛天 女	野田 多満子	中野 ふさ子	桃 花	田中美保子	竹平 安則	高木 勝海	鈴木 利定	鈴木 和	すずき	清水 孜郎	佐藤 長徳	菊地 奈々子	おっさん	岡田 親敬	内山 文久	伊奈 宜子	伊藤 正	市川 敏	渥美 朋可	美山 愛
村松 和憲	牧 元久	藤森 文臣	日比 つや子	伴 周子	中村 淳子	鳥井 美代	坪井 いち子	館石 照子	竹下 勝子	鈴木 由起子	鈴木 京子	鈴木 章子	白井 宜子	澤木 辰子	絹 枝	川合 泰子	小川 恵子	大田 勝子	井浪 マリエ	伊藤 久子	井手 賀代子	井口 絹子	山口 京子

山川美恵子 山口 英男 山中 伸夫
 由倉 典之 和久田俊文 渥美 貴輝
 あ ひ る 有賀 千子 飯田 邦弘
 石原 煌騎 伊藤アツ子 伊藤 美代
 氏原 鳳星 内山 昭子 内山 琉生
 大石 万鈴 岡部 涼汰 岡本 蒼子
 尾内 以太 尾上 正代 影山 久恵
 加藤貴代美 加藤美恵子 神谷 淳子
 神谷 司 後藤 とも 桜 春 咲
 佐藤 永典 穴戸 理乃 柴谷 俊行
 鈴木 海音 鈴木 勝則 鈴木 茂子
 鈴木 聖二 鈴木 直美 鈴木 聖人
 鈴木 蓮 高田 周 高橋 柊
 高山 紀恵 竹田たみ子 たろ う
 中村 功 中村 敏之 中安 未彩
 西野久美子 松本憲資郎 宮田 昭夫
 選 評 …… 高柳 克弘… 220

自由律俳句

市民文芸賞

源 次郎

入 選

縣 敏子
 加藤美恵子

中津川久子

伊藤千代子
 源 次郎

尾内 以太
 中津川久子

川 柳

市民文芸賞

山口 英男

宮崎 和子

入 選

浅井 常義

源 次郎

中村 雅俊

牧田 龍司

菊川 文江

竹山恵一郎

伊熊 靖子

田中 恵子

名倉 智代

荒沢 博

恭 子

中村 禎次

古谷聰一郎

伊藤 信吾

選 評 …… 宮本 卓郎… 228

美山 愛

リコリス

巴 勢 里

戸田 敬三

中野まりこ

鈴木 勝則

杉田みさき

鈴木 和子

鈴木 勝則

おっさん

神谷 司

嘉山 春夫

遠藤 ゆき

桜花 ふみ

大内 愛子

渥美 朋可

伊藤 美代

内山 文久

松尾 尚子

村松ヒサ子

渡辺 憲三

中村 淳子

根本 文子

古谷聰一郎

戸田田鶴子

戸塚 郁代

中谷 則子

櫻井 恵子

鈴木 章子

竹内オリエ

要 弘子

河合 香織

木俣 史朗

岩城 悦子

岩本多津子

岡本 蒼子

雨宮 智彦

井手賀代子

伊藤 正

「浜松市民文芸」第69集作品募集要項……………246

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。

掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作品は選考順または五十音順としました。

第68集の作品応募状況

部 門	作品点数	部 門	作品点数
小 説	一二	短 歌	四六九
児童文学	七	定型俳句	九二一
評論	四	自由律俳句	二〇四
随 筆	二七	川 柳	四四八
詩	四二	計	二、一三四

小説

「市民文芸賞」

三日月の辻で

仲井英之

(1)

二〇〇六年（平成十八年）のこと。まだ、街の中心地にあるJR駅前には半円型の屋根を持つ全面ガラス張りの大きな官民複合ビルが立っていた時代。バブル経済の真ただ中に完成したそのビルの前面は「アトリウム」と呼ばれる大きなガラス空間になっており、夜間には色彩光が浮かび上がり、駅前の都市景観を華麗に演出していた。

一階部分は、出入り自由のフリースペースになっていた。市民の待ち合わせによく利用されていた。亜希人もその一人で、その夜、そこで友人と待ち合わせをしていた。三月の最初、冬の厳しい寒さが戻ってしまったような深々と冷え込む夜だった。この地方特有の「からっ風」と呼ばれる冷たい季節風が身体にこたえた。

吹き付ける寒風を避けるためにも、ガラス張りになった空

間は待ち合わせ場所として最適だった。亜希人は、自動販売機で温かい缶コーヒーを買い、それを両手で包み込むように持ち、寒さでかじかんだ指先を温めながら、ガラスの向こうの外側に目をやった。

週の始まり、月曜日の夕刻から街に飲みに出る人がそういるわけではなからうに、ここだけは、それなりの人がせわしく行き来している。このガラス張りの複合ビルの隣には、市内唯一の大型百貨店が立ち、その建物と連結して、市内を南北に走るローカル鉄道の起点駅がある。まさに、この地方都市の玄関口であり、会社や学校からの帰宅で、人の行き来が激しいのは当然の時間帯である。

指先の血行がようやく良くなってきたので、亜希人は缶を開け、コーヒーをすすり、人々の往来の中から、待ち合わせをしている友人の姿を探す。昼間、仕事をしていると、オフ

イスにかかってきた電話を取ってくれた女性スタッフから声がかかった。

「岡田さん、赤松さんって方からお電話ですけど」

赤松——。所属名を告げずに職場にかかってくる電話はろくでもないものが多い。最近では、ありがたくないセールス電話にうんざりしていた。しかし、赤松という比較的珍しい苗字に加え、自分の所属を名乗らずにいきなり電話をしてくるせわしなさといったら、あいつしかいまいと亜希人は感じ取った。

「もしもし、俺だけど」

電話に出ると、いきなり「俺だけど」だ。本当に相変わらずの奴だ。すぐに学生時代の友人だと分かった。

「久しぶりだな、赤松」

「今さ、お前んちの街に来てるのさ。仕事でちよつとこつちまで来る用事があつてな。今夜、東京へ帰る前に飯でも食わんか」

腕時計を見ると、午後五時五十分。約束の時間の十分前だ。

時間きつちりに来るような人ではないので、もうちよつと待たないといけないだろう。それでも、と思い、外を行き来する人の群れに目を向け、亜希人は友人の姿を探す。冬に戻ったような気温だったが、日の入りの時間は遅くなり、ようやく太陽が沈み、街が夜の暗がりに包まれ始めていた。

隣の大形百貨店前の路上空間の一角で若者が路上ライブを

やっていた。二人組がギターを弾き、歌をうたう。数人の女子高生がその前で熱心に聞き入ってはいたが、多くの人はその前をせわしなく通り過ぎて行つた。この地方都市は古くから楽器製造が盛んで、世界的な楽器メーカーの本社があり、楽器関連の中小企業も集積していたことから、行政も「楽器のまちから音楽のまちへ」をスローガンに、市民の音楽文化を後押ししていた。路上ライブが盛んに行われているのもそのゆえんだろう。

その路上ライブの若者の横に、ワゴン販売の花屋が出ていた。わずかな展示スペースにぎつしり花束を並べ、ライブを鑑賞している女子高生と同じくらいか、もう少し幼い感じの女の子が、大きな声を出して道行く人に声を掛けていた。

「いらつしやいませー、季節のお花はいかがですか。贈り物に、お花はいかがですか!」

隣で演奏を続ける路上ライブの若者には申し訳ないが、歩行者たちは、彼らの音楽より、花売りの少女の掛け声に立ち止まり、花束を買って帰って行つた。そんな花売りの少女に亜希人が気を取られていると、複合ビルの自動ドアが開き、大男が野太い声を上げながら近づいてきた。

「よおっ!」

もじゃもじゃ頭にでかい顔、分厚い眼鏡、セーターの上によれよれのジャケット……。学生時代と全く変わらない友人との再会が嬉しく、思わず亜希人も声を上げた。

「久しぶりだなあ」

「お前、相変わらずだなあ、童顔で」

赤松は、大きな手を差し出してきた。亜希人も両手を差し出すと、毛むくじらの甲の手で包まれた。

「変わらないのはお前のほうだよ。いきなり会社で電話をしてきて」

「たまたまこちに仕事で来る機会があつてな。せっかくの機会に、お前に会いたくなつたのさ。飯でも食いいに行こう」

赤松は、手を離すとそそくさと外に出た。後を追いつながら、亜希人も急ぎ足で歩いた。

「軽く飲むか」

「俺は下戸なんだ、相変わらず」

そうだった。こいつは、ゼミの仲間と夜通し飲んだ時も、ウーロン茶を飲み続け、誰よりもハイテンションでいられたんだつたつけ、と亜希人は思い出した。それでいて、食べるほうは人一倍食べる奴だった――。

「せっかくこの街に来たんだから浜名湖の鰻でも食べて帰るか」

「鰻か、悪くないな。亜希人がおごってくれるんだつたら――」

一応、誘ってみただけだったのだが……。亜希人の心の悲鳴が聞こえたのか、「アハハ、冗談だよ。昼に支局長に駅南の名店と言われる老舗で特上鰻をご馳走になつてな。腹もまだ減つてないから、軽く食べればいいよ」と赤松は明るく返した。結局、二人は駅前の中央郵便局の裏手にある昔なが

らの町中華の店に入った。

「再会を祝して乾杯！」

赤松は、最初一杯だけビールを頼み、一口だけ飲むとすぐにウーロン茶に切り替えた。小一時間そこにいたのだろうか。本当に飲むというよりは赤松の飯に付き合う形だったが、亜希人には嬉しかった。餃子にニラレバ、かに玉を赤松は美味しそうに頬張り、亜希人はその間、ビールを中ジョッキで三杯、最後の一杯はレモンサワーを飲んだ。

赤松は、教育学部的美術専修からマスコミへと進んだ変わり種。日本でも最大手の新聞社に入り、甲府支局勤務を経て、東京で資源エネルギー庁付けの記者となつていた。その日は、浜岡原子力発電所でマスコミ向け公開説明会があり参加。その帰りにこの街まで出てきてくれたのだという。

「大したもんだなあ。教育学部で美術専修だった男が――」
赤松の話にビールジョッキを傾けながら、亜希人は相槌を打つ。

「新聞社に入つていつか、映画や演劇を担当する文化部の記者になりたいって思つてたんだがな。そうもいかんよ。でも、やってみると、これが意外に性に合つていて楽しい」

実際、赤松は楽しそうだった。私生活のほうも順当で、こんな男に惚れこみ、一方的に押しかけてきて、部屋に住み込み、ついには結婚するに至つた可愛い奥さんがいた。なれそめは、甲府支局時代、休暇を取つて行つたタイ旅行だそうだ。

一方、彼女のほうもタイへ友達とバカンスで来ており、首

都バンコクで、ひたつくりの被害に遭いかけていた。そこに赤松が出くわし、犯人の男を一瞬にしてねじ伏せてしまった。背丈が低く、やせ細ったタイ人の青年は、大柄な赤松に到底かなうわけがなく、財布を取り返すことなど造作もないことだった。とはいえ、旅慣れていない彼女は、すっかり赤松に感謝し、日本に帰ってからお礼をしたいと、国内の連絡先を交換した――。

「人生どこで何があるか、分かったもんじゃないな」

ビールをおりながら、亜希人は赤松の話を面白おかしく聞いた。彼女の実家は関西で、地元でOLをしていたというのだが、甲府の赤松と連絡を取り合ううちに、仕事を辞め、押しかけてしまったというのだから。

全く、人生どこで何があるか、分からない。こんな男に、可愛い押しかけ女房かよ。

赤松の話に適当に合いの手を入れながら、三杯目のジョッキに口をつけようとしたところ、急に話が亜希人に向けられた。

「そういうお前のほうはどうなんだ？」

「残念ながら、お前の人生のような鮮やかさはないよ」こう答えてから、亜希人はこれまでの普通の人生を振り返った。

埼玉の大学の教育学部で美術を専修。両親が教員だったため、とりえず地元の教育学部に進学するも、教師になる気など最初からなく、ゲームソフト制作会社に就職し、パッケージデザイナーを担当。教育学部で小学生に図画工作を教える

ノウハウを学んだことが意外にも生かされ、子供の心を捉える斬新なパッケージデザインが社内外で高く評価された。

ただ、仕事は忙しく、生活も不規則だったため、学生時代から付き合っていた一つ下の後輩、佐和と結婚を機に退職。

佐和が郷里で教員になったため、妻となった佐和の実家のあるこの街へ移り住むことにした。そして、「皐月印刷」という市内では老舗の印刷会社の社内デザイナーとして再就職。

この時代は、まだネットの普及率も今ほどではなかったため、地元の企業や官公庁からの印刷物制作の依頼が多かったし、印刷会社としても独自にタウン情報誌を発行していた。

「子供に美術や図工を教えたくない」という思いから教員への道を拒んだものの、小学校教諭の妻の影響や一応、大学時代の文芸サークルでの経験から、小学生向けの啓発絵本の制作を多く請け負うようになった。

「へえ。それこそお前、人生、何があるか分からないじゃないか」

赤松は、丁寧に相槌を打ちながら亜希人の話を聞いてくれた。「そんな形でお前の経験や才能が生かされているんだっただら。ところで、小学生向けの啓発絵本っていうのは、どんなものなんだい？」

「人権、世界平和、虫歯ゼロを目指した歯磨きの大切さ、エイズ、ユニバーサルデザイン、行政からの発注がほとんどだけど、そういうものを子供に分かりやすく絵本で啓発するんだよ」

確かに、亜希人の作品はそれなりの評価を受けるようになってはいたが、どんなに優れたストーリーを考え、素敵なイラストを添えても、それらの作品が「岡田亜希人」として世に出るわけではなく、著作権が発注者側にあることに不満を抱くようになっていた。

「なるほどねえ」

赤松は、新聞記者として、人のつまらない話を我慢強く聞く処世術のようなものが身についているのか。いや、こいつは学生時代からそうだった。いつでも亜希人の大したこともない話を丁寧聞いてくれた。大学を二浪で入っており、亜希人より年上だったから、友達であり、アニキのような存在でもあった。

「ところで、佐和ちゃんは元気か。子供もいるんだろ」

赤松にとつても後輩となる妻の話題が出た。そして、亜希人は思い出した。その日の朝、妻と喧嘩をして家を出てきたという現実を。佐和との間に二人の女の子が生まれ、長女を香菜（かな）、次女を未菜（みな）と名付けた。当時、香菜は五歳、未菜は三歳。二人を保育園に預け夫婦共働きをしていた。その日、保育園にどちらが朝送っていくかで亜希人と口論になった。

月曜日の持ち物は、普段のおむつや着替えに加え、昼寝用の布団を運ばなければならず、朝の忙しい時間帯に二人の子を連れて登園するのは結構な努力だった。しかも朝は、冷たい雨が降っていた。教員である佐和のほうは、研究公開授業

となっており、教育委員会の偉い人たちが来るということで、朝からパニック寸前の状態だった。

一方、亜希人のほうも、その週の後半に、大手楽器メーカーのパンフレット制作の提案コンペを控えており、朝から社内最終打ち合わせに臨むことになっていた。結局、亜希人が折れて子供たちを園に送って行くことに。忙しい二人にとって、そんな衝突や喧嘩はしよつちゅうあった。

しかし、この五年後、佐和は病気でこの世を去る。他愛のない日常。些細なことで喧嘩しても、そこに妻がいて、ささやかな日常があったことのありがたみを噛み締めるようになることをこの時、想像だにしなかった。

「うまかったよ、鰻じゃなくても」

店を出た赤松は満足気だった。「特に餃子がうまかった。東京じゃあ、食えない味だな。もやしが添えられていたのがまた、いい」

「餃子にもやしが添えられているのって、この街独特の食文化だってことを、ここに住んで知ったよ」

そんなことを話しながら、二人は駅まで歩いた。風は依然と冷たく、酔った亜希人の身体にこたえた。腕時計を見ると、夜の七時半を回ったところで、八時過ぎの「ひかり」に乗れば、十時に東京のマンションに帰りつけるというから、意外にこの街と東京は遠くないことを実感した。

「いらっしやいませう、季節のお花はいかがですか。贈り物に、お花はいかがですか！」

駅前百貨店のところまで来ると、先ほどの少女が相変わらず懸命に声を掛けていた。

「へえー、花かあ、いいなあ。嫁さんに買って帰ろう」

赤松が立ち止まった。そういう柄だったのか——という突っ込みは、健気な少女の手前やめておいた。少女は、赤松にこりと笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。奥様へのお土産でしたらガーベラはいかがでしようか。この街はガーベラの生産量が日本一なんですよ」

「へえー」

亜希人も思わず声を上げてしまった。

「浜名湖のほとりにたつぷり降り注ぐ太陽の光を浴びて咲くガーベラ、奥様もきつと喜ばれると思いますよ」

こんな言葉がよどみなく出る少女にますます感心してしまつた。

「じゃあ、お願いします。適当なのを包んでください」

気恥ずかしそうに言う赤松がおかしかった。

「今日は付き合ってくれてありがとう」

少女に包んでもらつた三本のガーベラの花を大事そうに持つ赤松の姿がミスマッチではあったが、「俺のほうこそ、連絡くれてありがとう。会えて嬉しかったよ」と亜希人は笑顔でこたえた。

「佐和ちゃんによろしくな。ちゃんと仲直りしろよ」

赤松は、改札を抜け、人の群れとともに階段を駆け上がり、

東京へと帰って行つた。駅を出て、バス停へ向かうと、ワゴン販売の花屋の前を通ると、オーナーらしき中年の男性と先ほどの少女が片付けに入っていた。

「もう、おしまいですか」

亜希人が声を掛けると、「あら、先ほどの……」という感じで少女が反応してくれた。

「まだ、大丈夫ですよ、もしお買い求めいただけるようでしたら」

「良かった。じゃあ、ください。浜名湖のほとりで太陽の光を十分に受けて育つた日本一のガーベラを、僕にも三本ほど」

「ありがとうございます」

店じまい間で嫌な顔をすることもなく明るく応えてくれたのが嬉しく、亜希人は思わず余計なことを言ってしまった。

「僕にも……、というより、妻に」

「奥様に……、素敵です。きつと奥様、喜ばれると思いますよ」

「だといんだけど。今朝、出掛けにつまらないことで口喧嘩をしてしまひましてね。それでいて、月曜日から飲んで帰る羽目になつちやつたから、罪滅ばしというか……、機嫌取りのためですよ」

「そういうことでしたら……」

柔和な笑みを浮かべ、ワゴン車に並ぶ花束の中から、三本のガーベラを選び、紙に手際よく包み、ピンクのリボンを巻き付けた。

「へえ……。素敵ですね。茶色のクラフト紙でラッピングするとこんなにもピンクの花が映えるんですね」

「お客様こそ、この紙を見て、クラフト紙って一目で分かるというのはすごいですね」

「まあ、そういう仕事をしていますので」

つい余計なことを言ってしまう——。口をつぐもうとする亜希人に、「いかがでしょうか」と少女が三本のガーベラを差し出した。本当に、素敵だ。早く家に帰って妻にこれを贈りたい——、とまで思えてきた。

「ガーベラは、花の色によって花言葉が異なり、ピンクのガーベラには、『感謝』『崇高美』の意味があるんですよ」

「『感謝』『崇高美』……」

亜希人は感心して思わず、繰り返ししまった。「感謝」は、すぐにイメージできるけど、「崇高美」と言われると、いかなる美なのか。この少女こそ、「崇高美」を体現した存在なのではないか——。胸の中でつぶやいていると、少女はさらに続けた。

「それから花束には本数にも意味があるんですよ。花束三本は、『愛している』」

「『崇高美』に『愛している』と来たか……。またもや、亜希人は言葉失ってしまった。

「この花束で奥様に感謝とともに『愛している』の気持ちをさりげなく伝えてみたいかがでしょうか」

三本のピンクのガーベラのおかげで、亜希人は妻の佐和と仲直りができた。月曜日の夜から酒を飲んで帰るうしろめたさを引きずり、恐る恐るマンションのドアを開け、中へ入ったが、佐和は意外にもご機嫌で、鼻歌をうたいながら、台所で洗物をしていた。学校での研究公開授業がうまくいき、終わってから、ディスカッションの中で、教育委員会の担当や見学に来た他校の教員が口々に、妻の図工の指導を褒めたたえてくれたのだという。

亜希人は人権啓発絵本の制作で小学校ともかわることが多く、教員が必要以上に人を褒めることに長けていることをよく分かってはいたが、複数の人から褒められ、その結果、彼女が上機嫌でいられるのなら感謝しよう。タイミングを逃さず、「はい」と花束を佐和に差し出した。

「どうしたのよ」

「買ってきたんだよ。駅前の花売りの少女から」

「ふうん」

「『崇高美』、『愛している』の花からのメッセージが伝わらないのか、佐和の反応はいささか淡泊だったが、翌朝、下駄箱の上に、可愛い緑色の花瓶に、三本のガーベラが生けられていた。

亜希人のほうにも、幸運が訪れた。どうしても社として取りたかった大手楽器メーカーの提案コンペで、自分がメインビジュアルを担当した企画が採用されることになったのだ。社内での最終打ち合わせで、「グラランドピアノの曲線美を前面

に打ち出したデザインで行こう」というところまではまとめたのだが、どうしてもコピーが弱かった。せっかくの格調高いデザインを活かすパンチの効いたコピーはできないか……。そんな時、閃いたフレーズがあった。

「崇高美を奏でる。」

最高級ブランドピアノの漆黒の艶に、このコピーは見事に映え、格調高いデザインに仕上がった。地元の大手広告代理店とコラボした企画が評価され、リニューアルする総合パンフレットのメインビジュアルを飾るだけでなく、年度が改まる四月一日の新聞紙の全面広告に掲載されることになったのだ。

人権啓発絵本の制作に明け暮れるだけでなく、たまにこういうことがあると、亜希人のデザイナーとしてのモチベーションが格段にアップする。

「ありがとう。君のおかげだよ」

この間の少女に素直なお礼を言いたくなり、亜希人は仕事帰りに、駅前を訪ねた。

「そんな風に言ってもらえて嬉しい。誰かのために存在できることはとても幸せです」

「誰かのために存在できることは幸せなこと、か」

大人びた表情を見せる少女に、亜希人はドギマギするものを覚えた。この間は初対面で、しかも夜の暗がりの中だったので、しっかりと見るのがなかったのだが、大きな目がす

こし吊り上がっており、きりりと引き締まった顔つきをしている。それでいて、鼻の中央に大きな黒子があり、どうしてもそこに目が留まってしまう。そして両髪をツインテールで縛っているから、余計に幼く見える。やはり高校生にはなっていないくらい年齢か。

頬を少し赤くした少女は、「花たちもきつとそう思っているはずですよ」と、両手を上に広げ、ワゴン車の上に並んでいる花を示しながら可憐な表情をほころばせた。

「なるほど」

「奥様と仲直りできたのは、わたしのおかげではなく、花のおかげですよ。そしてお客様の優しさのおかげでも」

少女は恥ずかしそうに応えた。「花は人の心を癒し、優しさで生きる勇気を与えてくれます」

「優しさで生きる勇気か——」

少女の言葉を噛みしめるようにつぶやくと、たくさんの花が並ぶ中から赤い花一輪を手にとった。

「いい匂い。紅茶のような甘い香りがする」

「『永遠の喜び』、そして『わたしを忘れないで』」

亜希人が花の香りにうっとりしていると、こんな言葉とともに微笑みかけてくる。

「永遠の喜び？」

亜希人は思わず首を傾げた。「わたしを忘れないで？」

「花言葉ですよ。この花の」

「そうか。花のこと、実は何も分かってないから、花言葉だ

なんてものがあることもよく知らなかった」

花を持っていない方の手で亜希人は頭をかいいた。「明日からの優しさで生きる勇気のために、今夜はこの花を一輪だけ買って帰ることにするよ」

「ありがとうございます」

少女はにつこり笑うと花一輪をクラフト紙できれいに包んだ。亜希人はお金を渡しながら尋ねた。

「ところで、この花、何ていうの？」

「スイートピーです」

「そうか、この花がスイートピーなんだ」

亜希人の頭の中では松田聖子が歌う懐かしい曲が流れてきたが、少女には意味が分からないようだった。

それからというもの、亜希人は街中へ行くたびに、駅前ワゴン販売の花屋の前を通る習慣がついてしまった。ただ、昼間の時間帯に少女はおらず、夕方以降出勤しているようだった。昼間は学校があるだろうから、居なくて当然と言えば当然なのだが。花を買わなくても、少女が懸命に花を売っている姿を遠めに見るだけで心が和んだ。

なのに、ある日を境に少女は姿を消した。

きっと収入に余裕ができたので寒い夜に花を売り歩かなくてよくなったのだろう……。

そんな想像が頭の中を駆け巡った。温かな家の中で、幸せそうに笑う少女の姿を目に浮かべた。彼女には幸せになってほしい。たった二回、花を買う際に言葉を交わしただけの少

女なのに、そんな風に願った。一方で、彼女の姿を見ることができなくなったことで、心に穴が開いたような寂しさを覚えた。

(2)

二〇二〇年（令和二年）の年が明けた時、誰が、新型コロナウイルスに明け暮れる年になると想像できたであろうか。

前年の暮れ十二月に、中国湖北省の武漢市で正体不明のウイルスに感染した最初の患者を確認。その後、感染した複数の患者が武漢市内にある海鮮市場へ行っていたことから、そこで売られていたコウモリやヘビなどの野生動物との関連がメディアで報じられた。

ただ、その頃は、そうしたニュース映像を見ても、そのウイルスが日本に持ち込まれ、こんな大都市にまで感染が拡大するようになるとは想像だにしなかった。

二〇二〇年は、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催される年であり、「平成」から「令和」と元号が改まり初めて迎える新年に、多くの人が希望に胸を膨らませていた。

日本国内で初めて新型コロナウイルスの感染が確認される一日前のこと。この日の午前中、亜希人は久しぶりに市役所へ用事があり出向いたが、月曜日の「成人の日」を含む三連休明けで一階の市民窓口は、多くの人で込み合っていた。結局、用を済まし終えたのが昼時になってしまったので、市役

所近くで食事を取り、次の仕事先に向かうことにした。

横断歩道を渡ると、そば処「遠江」という看板を掲げるそば屋があつたので、暖簾をくぐつた。昭和の時代から続く昔ながらのそば屋だが、この後のコロナ騒動で、飲食店への休業要請があり、多くの市民も自粛要請に従つたことから、このような個人経営の飲食店にとっては大打撃となり、夏にこの店の前を通つた時「閉店」の張り紙が出ていた。

しかし、この頃はといえば、そんな災いの波が押し寄せてくる気配など微塵も感じることなく、広くはない店内はすぐに満席になつてしまつていた。まさに店内は三密状態だったが、「三密」だなんていう言葉もこの頃には存在していなかった。

運よく亜希人が座ることができたテーブル席の向かいには、前の客が出て行つたばかりで、汁の残つたお椀とそばが乗つていたざるが置かれていた。空いている席は、そこしかなかつたのだ。それでも、待つことなく座ることができたのはラッキーだった。メニューを広げ、迷うことなく、釜玉うどんを食べようと決めた。せわしく動き回る店員のおばちゃんに声を掛けようとしたところ、客がまた一人入つてきた。

「いらつしやいませーっ」

おばちゃんは、新しく来た客に声をかけ、店内を見渡すと、「ご相席になつてしまいますが、よろしいでしょうか」とエプロンで手をふきながら言つた。いいも悪いもなく亜希人は相席を余儀なくされた。

「今、こちら片づけますね」

おばちゃんはお椀とざる、飲み残しのお冷やが入つたコップを下げて行つた。すると黒色のシャツの上にキャラメルブラウンのカーディガンを羽織つた若い女性が亜希人の前の席にかけた。そして、食器を下げて戻つてきたおばちゃんが注文を取ろうとするとメニューを開きもせずに、「冷やしキツネそば、お揚げダブル、ネギ抜きでお願いします」と答えた。

そんなのありなのか……、亜希人は思わず絶句した。暖房が十分効きすぎていて、店内には生暖かい空気が漂つていた。女は、カーディガンを脱ぐと、軽くだたみ、横の椅子に掛けた。

そして、カバンの中から扇子を取り出し、軽くぱたぱたとあおぐと、柑橘系の香水の匂いが広がつてきて、亜希人の鼻まで届いた。季節が冬であることを忘れさせてくれるような仕草であり、香水の匂いだった。思わず気まづくなり、亜希人は読みもしまいと持つてきてあつた週刊誌を開いた。しかし、たまたま開いたのが、女優のヌード写真のページでさらに気まづくなつてしまった。そんな気まづさを察知したのか、女が声を掛けてきた。

「こんにちは」

とつさに誰か分からず亜希人は首を傾げた。

「わたしが『わたしを忘れないで』って言つたの忘れちゃつたのかしら」

亜希人はさらに困惑した。妻を病気で亡くしてからという

もの、女性に目を向けることなく、仕事に向き合い、娘たちのほうだけを見てひたすら生きてきたつもりだったが、目の前にいるきれいな女性にそう言われると、心がざわついてしまふ。女は柔らかな笑みを浮かべて続けた。

「正確に言うと、お客様にお買い求めいただいたスイートピーの花言葉が『わたしを忘れないで』だって、わたしが言ったことを忘れちゃったのかしら、ってことになるのですけど……」

「あっ！」

一瞬にして記憶が蘇る。寒い夜の暗がりの中で懸命に花を売る少女の白い吐息までも。

「花は人の心を癒し、優しさと生きる勇気を与えてくれます」
あの時の少女だ。色白の頬に少し吊り上がった大きな目、きりりと引き締まった唇。特徴的な鼻の中央にある黒子。さすがに、両髪をツインテールで縛っていないものの、あの頃の面影は十分残っている。それでいて大人の女性としての魅力放っている。

亜希人は自分を落ち着かせるために、コップのお冷やを飲み込んだ。

「確かに、僕は優しさと生きる勇気をもたらしたよ。赤いスイートピーから。そして、君から」、亜希人も精いっぱい笑顔で返した。

それにしても、こんな場所で。あれから何年たっているんだ……。あの日以降も、僕は君が花を売っている姿を遠めに

見ながら、家庭に向かっていたんだよ。しばらくして忽然と居なくなってしまうたから、ちょっと寂しい気がしたけど、君が元気でいたのならない。

あれから僕は妻を亡くし、二人の娘を育て懸命に生きてきた……。思わずこんなことまで話そうかと思いを巡らせたが、当然言葉にならず、彼女が柔らかな笑みを浮かべたのを最後に会話は止まってしまった。

コップのお冷やを最後まで飲み干し、再び週刊誌に目を向けるとすぐに亜希人が先に注文してあった釜玉うどんが運ばれてきた。

「お先に、いただきます」

何も言わずに食べ出すのも気まずいと思い、とりあえず断りを入れた。すると「どうぞ」という代わりに、割り箸と七味や爪楊枝が乗ったトレイをするりと差し出してくれた。

かえって余計に気まづくなつたが、「じゃあ、いただきます」、心の中でそうつぶやき、両手を合わせると彼女が差し出してくれた調味料を取り、七味を思い切り振りかけた。

チェーン店のものとは違った独特のコシがあり、汁の風味がよくしみ込んだ美味しいうどんだった。亜希人が生まれ育った埼玉県北部は、全国有数の小麦の産地で、市内には美味しいうどんが食べられる店がいくつもあった。そんなこともあって夏でも熱いうどんを頼むほどの「うどん派」だが、寒い冬には無性に食べたくなる。フーフー息を吹きかけ、口にかきこむのは至福の時だった。

まだ、感染症予防対策で対面のビニールシートやアクリル板のパーテーションが当たり前のように設置される前だったので、麵をフーフーする際、汁が対面の彼女のほうに飛び散らないか、気をつけながら食べないといけないのが難点だった。

「お待たせしましたー。冷やしキツネそば、お揚げダブル、ネギ抜きです」

「ありがとうございます！」

亜希人が半分ほど食べ終えた頃、女が注文した「冷やしキツネそば、お揚げダブル、ネギ抜き」が運ばれてきた。釜玉うどんを食べることにまずは集中し、気まずさを忘れていたが、彼女が渡してくれた調味料が乗ったトレイを戸惑いながら差し出した。

「すみません」

笑顔で返してくれたが、七味を掛けることもなく、割り箸を割ると、つるつると美味しそうに麵をすすり出した。亜希人が残りのうどんを食べ終え、彼女がそばを食べ終わると席を立たないといけなくなる。どこの誰か分からないこの不思議な女と偶然ここで会ったわけだが、聞きたいことは山ほどある。

偶然……？

果たして偶然なのだろうか。この女が、この店に入ってきたて亜希人の前に座ったのは。

三十代の半ばだった頃、学生時代の友人、赤松と待ち合わ

せをした駅前で花を売っている可憐な少女を初めて見た時、何かしらのインスピレーションを受けた。そして花を買い、花からのメッセージを授かった。それは、亜希人と亜希人の家族に幸運をもたらすものだった。しかし、彼女はある日を境に居なくなった。ワゴン販売の花屋は営業を続けていたのだが、店主らしき男性が一人で寡黙に売っていた。そして、ほどなくしてワゴン販売の花屋自体も駅前からなくなった。路上販売の店は、そうしたもので、長期間存続することはまずない。

亜希人が少女と出会い、花を買ったのが三月のことだったので、四月になり進級、または進学したのを境に新しい生活に専念するようになっただけのことだろう。そう考えるのは自然なことだったし、しばらくして駅前の花売りの少女のこともすっかり忘れてしまっていた。

しかし、それから五年ほどがたった後、最愛の妻を病気で亡くし、亜希人は男手一人で二人の娘を育てることになった。そして、その頃から、花売りの少女の影のようなものを感じるようになる。彼女の気配を身近に感じ、亜希人たちを見守っていてくれるような気がしていたのだ。

君は一体何なんだ。正体は何なんだ。目の前でつるつるとそばをすすめる女に、亜希人は声を掛けたい思いに駆られた。そんな思いが届くこともなく、女は最後に残った二枚の厚い油揚げを一口でぺろりと頬張った。実に美味しそうな食べ方だった。亜希人のほうから何か話を切り出そうか、相手が何

か言ってくれるのを待つか、心が激しく揺れ動いた。

小さな花瓶にスイセンが二輪挿してあり、テーブルの片隅を飾っていた。白と黄色のスイセン。花に目をやりながら、コップのお冷やに口をつけた。女は食べ終わると、紙ナプキンで軽くたたくように口元を拭くと、そのスイセンを眺め言った。

「花はおりここのよ。ちゃんと人間に季節を教えてくれる」確かにその通りかもしれない。そして、花にまつわるうちくを聞かせてくれるあたり、やっぱりあの時の少女なんだ、と改めて思った。亜希人は試しに言ってみた。

「誰かのために存在できることはとても幸せなこと。この花たちも、誰かのために存在しているのでしょうね」

彼女は、手にした紙ナプキンの使用面を畳みながら、柔らかな笑みを浮かべただけだった。

俺、何言ってるんだろ……、亜希人は恥ずかしさを覚えた。

「このスイセンの花言葉は？」

恥ずかしさをかき消すように、半ばやけくそになりながら尋ねてみた。「白と黄色のスイセンの花言葉……」

「スイセンは、花の色によって花言葉が異なるんです」

あの時の花売りの少女と同じように答えてくれた。「白のスイセンは『神秘』、そして黄色のスイセンは『わたしの元へ帰って』」

おいおい、今度は、「神秘」と「わたしの元へ帰って」と来たよ。胸の中でそうつぶやきながらも、続く言葉が浮かば

ない。なんと返せばいいのか。

まず、「神秘」はそのまんま、この謎めいたきれいな女を象徴するような言葉だ。そして「わたしの元へ帰って」は何を意味するのか。まあ、所詮は花言葉じゃないか。それまたまたま、そこに生けられていたスイセンの。昭和時代から続くと思われるこのそば屋の店主が、スイセンの花言葉を意識してテーブルの上に置いたとは思えない。本来、この女とは関係のない話なのだ。なのに、「神秘」と「わたしの元へ帰って」は、俺に向けられた重要なメッセージに思えてならない。

そんなことを亜希人は深く考えながら、お冷やをすすると、女は何かを言っ席を立った。うまく聞き取れなかったので、首を傾げる亜希人に、もう一度言った。

「三日月の辻で」

「三日月の辻で——？」

聞き返す亜希人にまたもや柔らかな笑みを浮かべ続けた。

「三日月の辻で逢いましょう」

こんな謎めいた言葉を残すと、横の椅子に掛けてあったカーディガンに素早く腕を通した。そしてテーブルに置かれた扇子と伝票を取り、勘定を済ませると、振り返りもせずに出て行ってしまった。

テーブルの上には、きれいに平らげられたどんぶりと柑橘系の香水の匂いだけが残された。赤いスイートピーの花言葉が「わたしを忘れないで」なら、黄色のスイセンの花言葉は、

「わたしの元へ帰って」、か。

そして立ち去り際に残していった「三日月の辻で逢いましょう」という言葉。

三日月の辻——。そんな場所が果たして本当にあるのだろうか。

「狐につままれたようだ」

思わずつぶやいた後で、脳裏に何かが閃めいた。冷やしそばに乗った油揚げ二枚を一口でべろりと平らげる仕草。少し吊り上がった大きな目や鼻の中央にある黒子——。

俺は、狐に化かされたのか。

狐の靈力に守られ、俺は二人の娘たちを育ててくることができた。そう解釈することで合点がいく気がしてきた。それにしても彼女は、「三日月の辻で『逢いましょう』と言った。少なくとも、もう一度逢いたい」という意思を示したのだ。「三日月の辻」がどこにあるのか分らない。しかし、俺は、三日月の辻のある場所を探し出さないとけない。そして、そこで、もう一度、あの日の花売りの少女に、「わたしを忘れないで」という言葉を残した女に逢わなければならない。そんなぞわぞわした感覚に亜希人は駆られた。

(3)

二〇一一年（平成二十三年）は、日本人にとって忘れることができない年だ。三月十一日、未曾有の大災害、東日本大震災が発生。観測史上最大のマグニチュード九・〇の巨大地震

震と大津波が東北地方を中心に広範囲を襲い、多くの人命とモノが損なわれた。

同時に亜希人の家族にとっても忘れることができない年となってしまった。震災の悲惨な報道が連日続く中、佐和の身体に異変が起こる。倦怠感と頬の腫れを気にし、医大病院で受診したところ、血液の癌と診断された。

季節は春から夏へと移り、連日の猛暑が続いた。そして、戦後最大級と言われた大型の台風がこの地域に上陸し、爪痕を残して通過していく。その間も、佐和はずっと入退院を繰り返していた。一度、ドナー提供者が見つかりかけたのだが、先方のいろいろな事情が重なり、その話は立ち消えになってしまった。次にドナーが見つかるまで、投薬により進行を食い止めるしかなかった。十月も後半になると、身体が明らかに衰弱していつているのが分かり、亜希人たち家族としても辛かった。

「昨日も病室に新しいお花が届いたの。素敵でしょ」

差出人が書かれておらず、どこの誰か分からない人から、病室に不定期に花束が届いた。

「教え子なのか、保護者なのか、同僚なのか……。分からないけど、わたしのことを気遣ってくれている人がいると思うと嬉しい」と、気に留めることなく、自分の下に届く花を楽しむにしていた。これも独特の教員文化で、そういうことをする人もいるのかもしれない。

ベッドサイドに置かれた小さな花瓶に三本のピンクのガー

ペラが生けられていた。それにしても、三本のガーベラだ。もしかして、もしかしたら、あの日の花売りの少女が……。そして、あの少女の正体がもしかしたら……。

そんなことが亜希人の頭をよぎったのだが、佐和のほうは、送り主が誰であろうと、その善意だけに感謝をしていた。そういうところが佐和のとてもよいところだ。亜希人の妄想を打ち消すように、静かな声で言った。

「毎日、ベッドに横たわっていると、いろんなこと考えちゃう」

窓際に掛けられた千羽鶴に目をやりながら佐和がつぶやく。また弱気な言葉が出るのかなと思い、亜希人はか細い手を握った。

「こんなお話を考えたの。この病気が治ったら、小説を書くうと思っているのよ。そうしたら、あなたにイラストを添えてもらおうかしら」

「へえ。どんな話なんだろう。少しでも聞かせてほしいな」

「いいわよ」と声は意外にも明るく、こんな話をし始めた。

「わたしの中で暴走する白血球と闘ってくれる赤血球だけを求めて、安らかに眠る女の子の生き血を吸いに夜の街を徘徊するの。でも、心優しい吸血鬼のおばさんは、女の子を襲うことができず、夜な夜な街をさまようだけ」

悪くない。亜希人の中でイラストのイメージが膨らんで来ていた。

「魔物と言ったら満月の夜なのかもしれないけど、こんな中途半端な吸血鬼、多くが欠落している吸血鬼だから、欠けている月の時のほうが元気が出て、マントを背中にまとい、夜の街に繰り出していくんだけどね」

「面白い！、心の底からそう思った。」

「よかった。あなたにそう言ってもらえて。あなたの素敵なイラストを添えて、本を出版しましょう」

「素敵な夢だ。その夢に乗るよ！」

亜希人は力を込めて佐和の手を握った。

だが、その夢は叶うことなく、吸血鬼になりそこねた佐和は、天使になって夜空に羽ばたいていつてしまった。亜希人と二人の娘を残して。

(4)

年明け、市役所向かいのそば屋で再会した花売りの少女が言い残した「三日月の辻で逢いましょう」という言葉に亜希人は半年間以上、囚われ続けてきていた。「三日月の辻」という場所が果たして実在するのか。もしあるとしたらこの街のどこかに存在するのか。インターネットや図書館の郷土史コーナーなどで調べてみたものの、それらしいヒントにたどり着けないでいた。

そうこうするうちに、国内で感染事例が初めて確認された新型コロナウイルスを取り巻く状況が大きな展開を見せることになった。春には全国一律の学校への休校措置が敷かれた

り、緊急事態宣言が発令されたりと社会情勢が一変。感染は一時的に収束するものの、夏には第二波が到来し、この地方都市でも夜の街の飲食店やスポーツクラブでのクラスターが発生した。

そんな第二波も、秋風が吹き始める頃ようやく収束しつつあった。壁のカレンダーを眺めると、九月十二日。

「そういえば、義父さん、誕生日だったな」

亡くなった妻の父親の誕生日が前日だったことを亜希人は思い出した。なじみの和菓子屋で栗どら焼きを買い、亡くなった妻の実家に届けることにした。

義父の和夫は二年前の八十歳の時まで、現役職人として、町のクリーニング屋さんを自営してきたのだが、腰をかがめアイロンがけをするなどの職人技を長年にわたって続けてきた結果、腰への負担がかかり、腰椎圧迫骨折を起こしてしまった。幸いにも義父より四つ下の義母、むつみがいたって元気で、介護保険のサービスを受けながら、在宅でしっかりと和夫の面倒を見てくれていた。

老夫婦は、誕生日プレゼントまで携えてきてくれた亜希人の訪問をひどく喜んだ。亜希人もベッドに横たわりながらも元気な表情の和夫を見て安心した。

「リハビリ頑張れば、前のようにスムーズに歩けるようになりますよ。こういう身体になる前に戻れたら、何をしますか」

「そうだ、母さんと朝の散歩に行きたいな」
「朝の散歩、ですか」

亜希人の問いにむつみが横から口を出す。

「毎朝、五時半に目覚めて、町内を一周散歩するだけなんだけどね。ぐるっと歩いて回って、途中にあるお稲荷さんのところで手を合わせて拝むの。『家内安全、商売繁盛』って。それだけで、毎日、幸せに過ごせそうな気になるのよ」

「お稲荷さん、ですか。お稲荷さんだけに、狐の石像が鎮座している……?」

「ええ。本当に小さな稲荷神社なんですけど、左右に二体の狐さんが鎮座していて、ご利益がありそうなの」

二体の狐が鎮座している稲荷……。亜希人の脳裏に強い光がきらめいた。

「お義父さんの代わりに僕がそこに行って手を合わせてきますよ。そんなにご利益があるんだったら僕も仕事運を向上させたいから」

「その三叉路を入り、細い路地を右に進んで……」

むつみはチラシの裏の白い面に簡単な地図を書き出した。

「路地を出たところで左に曲がって、東に少し行くと十字路があるのよ。その辻の角にあるのが、そのお稲荷さん」

「辻の角……」

「三日月稲荷っていうんだけど、あまり地元の人には正式名称は言わないわね。『あそこの角のお稲荷さん』とかって呼んだりして」

三日月の辻は、意外にも身近なところに存在していた。そ

こは、十字路の角に立つ小さな町の稲荷神社だった。鼠色のコンクリートの鳥居をくぐると、萩の花が左右に群生していた。しだれた枝につくきれいな葉の緑と、小さな蝶のような形をした花のコントラストが夜の暗がりの中に鮮やかに浮かび上がる。

その脇には、この地にゆかりがあるとされる万葉歌碑が設置されていた。「平成」から「令和」に変わった時、出典が万葉集にあるとされ、注目を浴びたのを思い出した。その万葉集で最も多く詠まれている花が萩だという。万葉の昔から萩が群生するこの三日月の辻は特別な場所だったのだろうか。

小さな祠の前に狐の石像が二つ左右に鎮座していた。左側の狐は巻物を、右側のほうは玉を口にくわえている。その奥の祠によくよく目をやると、一輪の赤い花が生けられていた。神社の祠に花が供えられていること自体は珍しいことではないのかもしれないが、その花はスイートピーだった。

屈んで鼻を花に近づけると、甘い紅茶のような香りがした。「永遠の喜び」「わたしを忘れないで」がこの花の花言葉だとあの日の花売りの少女が教えてくれた。「明日からの優しさで生きる勇氣のために」とあの夜、亜希人は自分のためにこの花を一輪だけ買って帰ることにしたのだ。

亜希人が空を見上げると、黒々とした雲が風で流され、星空が広がってきている。重く厚い雲が上空を流れる風で分断され切れ間から月光の揺らめきを見ることができた。やがて

雲が風で押し流されていくと、清らかな月が姿を見せた。半分が欠けた月だった。

その時、ふわりと大きな鳥の羽ばたきのような音と風圧が同時に起こった。鳥？

違う。大きな黒いマントをはためかせ、吸血鬼になり損ねた天使の姿がちらりと亜希人の視界に映った。

「魔物と言ったら満月の夜なのかもしれないけど、こんな中途半端な吸血鬼、多くが欠落している吸血鬼だから、欠けている月の時のほうが元氣が出て、マントを背中にまとい、夜の街に練り出していくんだけどね」――。佐和の言葉がよみがえる。今も空の上からずっと俺のことを見守ってくれているのだ。

この石像の狐も三日月の夜、生きた白狐として動き出し、人間の女の姿に化けるのか。小さな町の稲荷神社のはずなのにただならぬ靈力が漂ってくる。ぞくぞくする感じを振り払うように、まずはせっかく、こうして「三日月の辻」へとたどり着いたのだ、と静かに手を合わせ、祈りを捧げることにした。

「新しい風は必ず吹きます」

そば屋で相席になった女性の甲高い声が背後から聞こえてきた気がした。これも、花言葉なのだろうか。だとしたら、どんな花なのか。三月の寒風が吹き寄せる夜に出会った花売りの少女の健気な姿が鮮やかに脳裏に浮かんた。あの日からいろいろな風が吹いてきたな。そして、新しい風がまた吹く

という。
尋ねたいことは山ほどあったが、振り返ってもそこに誰も
いないことを亜希人は分かっていた。

(中区)

小 説
児童文学
評 論
随 筆
詩
短 歌
定型俳句
自由律俳句
川 柳

「市民文芸賞」

都合

鈴木篠千

二千二十一年のゴールデンウィークの終わった次の日、久しぶりに浜松の街中に出てきた俺は、久しぶりに居酒屋『六兵衛』に向かうことにした。

去年、派遣の仲間らと訪れて以来、顔を出していない。この新型コロナの『第四波』で、閉店などしてないだろうか。心配だった。

静岡銀行のある通りから鍛冶町通りを渡り、赤電（遠州鉄道）の高架を潜ると、コンビニがある。その信号を渡り、地上連絡通路が見えたらJR浜松駅に続くバスロータリー沿いに入る。

道の右に、いつもの六兵衛の看板が出ていた。「ホッピーあります」と書かれたいつもの看板だ。字の下に店のメニューが細かく書かれているのもそのまま。少し安心した。俺は店に通じる階段を降りて、木製の玄関を開けた。

「…いらつしやい」

店長らしき男性とその妻らしき女性が戸惑いながら、俺に挨拶をした。

二人で店内の備え付けのテレビを見ていたようだ。

まだ時間が早かっただろうか。

午後七時前だ。しかも平日。完全に油断していたようだ。

コロナで暇だったのかも知れない。

俺は焼き鳥を数本と日本酒を注文した。

二人が忙しそうに動き出した。本当に油断していたようだ。

俺は厨房を見回した。

いつもいる中国人店員がいない。

確か「カン」と言ったか。可愛らしい娘さんで、まだ日本語が未熟で、お客の俺におかしな日本語で話しかけてきたりしていた。

その姿が見えない。

「あ、あの、中国人の、の、お、女の子、ど、どつか行つたの？」

俺は思い切つて、女将に尋ねた。

「あー、カンさん？あの娘ねー、辞めてもらつたんですよー。最近、いろいろ厳しくてね。雇つてられないですよ。こっちは辞めさせたくはなかつたんだけどねー」

女将は大変そうな、疲れたような表情で述べた。

「お客さん、カンさんのファン？」

「……」

俺は無言で手を振った。

去年からのコロナの影響はこうした居酒屋にモロに影響を与えているらしい。人手を削るのは仕方ない。

実のところ、この女将と話すのは初めてではないが、俺を覚えてはいないようだ。そんなに頻繁には訪れないからだろう。

「そのカンさんなら、三方原にある岡部コートっていう工場で働いているよ」

女将が興味を引きそうな口調で言った。

「……？」

俺は少し戸惑った。

居酒屋から工場へ移籍などあるのか。

女将は俺を怪訝な顔で見つめながら、日本酒を出してきた。そしてジロジロと見つめている。俺をおかしな風に思い

出したようだ。変な勘違いをされるのも迷惑だ。

「へ、へー。そ、そうなんだ……」

俺は目線をカウンター奥のテレビ画面に向け、女将からの視線を避ける事にした。

「はい、砂肝」と女将が出してきた小皿を受け取りながら、俺は今夜は静かに飲んで、すぐに帰ろうと思っていた。

一人で飲みながら、俺は自身の事を思い出していた。

今から約九年ほど前に脳腫瘍を患った。

大脳と小脳の間に来たこの厄介な腫瘍は、二回の手術で除去されたが、俺から滑舌と言葉を奪った。

以来、理学療法で多少改善されたが、俺は会話が苦手になった。

言葉が少し出にくくなった。呂律も上手く回らない。腫瘍が奪っていったのはそれだけでは無い。

俺は当時、勤めていた某公的保険事務所を辞め、さらには交際の恋人と別れた。

もっとも、年金事務所を辞めたのは俺からであり、恋人に別れを告げたのも俺からだから、『腫瘍が奪った』は正しくはないが……。

職を失った（手放した）俺は、退院後、浜松市内（時には市外）の様々な仕事の求人に応募し、ことごとく落ちた。

それはそうだ。三十代半ばの病み上がりの男を雇う会社は

そうは無い。

金が無くなりいろんなバイトをした。複数の派遣会社に登録している職場を巡った。

ここ数年は、高校野球の有望な選手を救ったり、離散した一家を結びつけたり、その原因になったおかしなスピリチュアルカウンセラーを潰したり、大学の研究室で悪い教授に操られていた事務員の女をお節介に助けたりした。また、市内の倉庫で働き、そこで揉めたりした。

DV騒動に巻き込まれたり、元カノの為に半グレと争ったりもした。

最近、幼なじみの相談を聞いたり、青い髪をしたおかしな若者と口論したりしている。

現在は、自宅近くの病院で清掃のバイトをしている、四十才を越えてもフリーターとして働いている情けないおじさんだ。

俺みたいのを「下流」というのだろう。否定出来ない。

そんな事を思いながら、その夜は六兵衛から退散した。

「…はい、砂肝ね」

また女将が俺の顔を見つめている。

約一ヶ月半後、六月の後半になり、俺はまた六兵衛を訪れた。隣には会という友人がいて、東京五輪のボランティアに

向かう彼の話を聞き、共通の知り合いや去年の話などを話していた。

注文した砂肝が来て、俺は厨房を眺めた。

「…だから、カンさんなら居ないって」

それに気が付いた女将が俺に告げた。

もう完全に俺の事を覚えていて、俺があのカンという中国人女性を気にしていたのも記憶しているらしい。

そして、どうも俺があのカンの娘に気がある、と思っているようだ。

断じて、そんな事はない。

「…カンさん？」

隣で2杯目のホッピーのジョッキを煽っていた会が尋ねてきた。

「…な、何でもない、よよ」

「誰っすか？」

ニヤニヤするな。

「…だから、あの子は三方原の岡部コートっていう工場へ行ってんだよ」

女将が余計なことを言った。

「岡部コート？」

会が高い声で叫んだ。

「し、知ってんの？」

「それ、三方原にあるパチスロとか、車の装置を組み立てている会社でしょ？」

「そ、そうなの？」

女将が頷いている。知っているのだ。

「あそこは……」

会の顔が歪んだ。2杯目のビールのせいでは無さそうだと。

「そこ、丸ウケハケン」のところですね」

（丸請けの派遣か……）

俺は砂肝を噛みながら嫌な感じがした。

丸請けとは零細工場などが、大きな精密工場などから製品の受注と、それを製作する機材まで請け負う事だ。つまり零細工場側は、製作場所とそれを動かす人間を集めたら良い。製品を作る機材ごと借りているので、後は人手を確保すれば仕事は回る。

人員が足りないから派遣を雇い入れる。

請負なら、現場での指揮は基本的に作業を頼んだ請負元になるが、派遣の人間を集めているのは、それは派遣先である岡部コートに委ねられる。集めた派遣らへの指揮命令は、派遣先にあることになる。

厳密に言うとかかなり微妙なところだが、このシステムだと、雇われた派遣らは、かなり雑に扱われたりする。

「いきなりなんですよ。『あー、明日からもういいから』とか『発注なくなったから仕方ないよね』なんて言ってきた、そこでおしまい。……ではらくしたら、また『来れそう？』なんて訊いてくるんすよ。『発注、増えちゃって、仕方ないよねー』って、また」

会が苦笑いしながら言った。

まさに「調整弁」だ。

そこに、あのカンという中国人の女の子がそれで働いている、というのか。

少し心配になった。

以前、俺が焼き鳥を頼むと、片言の日本語で何故か「ツミレ、ウマイぞ？」と言って勧めてきたりしたあの彼女が工場で泥のように働くのか。

（……）

想像できない。

七月。

居酒屋『次郎』で飲み過ぎた俺は、気が付くと、また六兵衛のドアを引いていた。

何故か、迷うとここに来てしまう。

先に次郎でしたたかに呑み、駅南のネット喫茶に泊まるつもりが、浜松駅の北ロータリーを歩くうちに、ここへ繋がる階段を下ってしまった。

止せば良いのに、次郎で焼酎のボトルを開けてしまったので、俺は金が無い。

「いらっしやい……」

女将と主人しか厨房にいない。やはり、あのカンという中国人アルバイトはいない。

「また来たんだね、カンさんファン」

「お通しのイカの煮付けを出しながら、女将が俺に言った。遂に顔を覚えられたようだ。」

「ち、違うよ」

俺は手を振って苦笑いした。

「…あの娘よく働いてくれたんだけどねー。この状況じゃ」

この女将は基本的に人の話を聞かない。

「出る日が減ったらね。コーディネートって人が来てね。」

『別のところに行かせますから』って…。カンさん、コロナ

で本国にも、戻れないらしいのよ…。なら岡部コートっていうその工場で働くってわけね…」

確かに各国の検疫が厳しく、入出国には長い時間と費用が掛かるようだ。

「あ、あの中国人の子、な、何しに、に、日本へ、へ？」

俺はついつい尋ねてしまった。また勘違いされそうだった。

「カンさんは日本語の勉強で来ててね。で、なかなか仕事が見つからなかったみたい。それでウチに来たのよ」

日本語学校にいたのか。『語学留学生』というやつか。それにしても日本語は下手だったが、来日したばかりだったのだろうか。外国人には日本語の敬語が難しいらしい。

「こっちにいる間の仕事とかは、そのコーディネートが世話するらしくて、それで違う場所に行っちゃったの」

引き止めはしなかったようだ。

女将は前に「やめてもらった」と言っていたので、店側も納得していたのだろう。

それだけ、今の状況が厳しいのだ。仕方ないし、経営者夫婦を責める事は出来ない。

俺もリーマンショックの時に求人誌の編集部をクビになっている。労働者とはそういうものである。組織（店）の維持という『正当性』には抗えない。

「そ、その岡部コートと、とかいう、工場は、は、し仕事、あんの？」

俺は焼き鳥を注文しつつ、女将に訊いた。

「さあ、あるんでしょねえ。他にも中国から来た人もたくさんいるらしいから」

俺は別の意味でも、その岡部コートが気になっていたのだが、この女将に詳細を尋ねても知らないだろう。

「なんか、寮もあるみたいで、カンさんには良かったみたいよ」

ホッピーとグラスを出しながら女将が付け加えた。そういう事ではないと思うのだが。

カウンターの奥に吊られているテレビでは、土曜に起きた熱海の土石流の話題が流れている。

八月後半の精密工場は、夕方になっても蒸し暑い。

俺は三方原にある精密加工工場『岡部コート』の一階フロアに夕方から出勤した。

「早上好（ザオシャンハオ）！」「早上好…」と、もう夕方に朝の挨拶してきたのは、カンさんとテイさんだ。冗談

ではなく、真剣にそう言ってきた。

「…ショウチェン、今日もイーユアンか？」とカンさんが尋ねてきた。

『ショウチェン』とは篠千を中国語読みしたもので、『イーユアン』とは医院であり、病院を指す。

僅か二週間だが、早くもこの二人とは仲良くなれた。

というよりも、向こうからいろいろと声をかけてきて、名前を中国語で呼び始めた。

「早啊（ザオアー）、あ、あー、そうだ、だ、よ」と、俺は笑って応えた。

『早上好』も『早啊』も朝の挨拶だが、『早上』は少し丁寧なニュアンスがある。日本人とはいえ、同僚の俺などには一言、

『早（ザオ）ー』（＝おはよー）くらいで十分なのだが、どこかで俺に遠慮がある。

俺は二週間前から、女将の言っていた岡部コートで病院の仕事の後に働くようになった。

午後五時半から九時半までの三時間。

今は月水金の週三日勤務だが、現場を仕切る中野という部長の話では、今後出勤日が増えるようだ。

任されたのは、ライン作業の一番初め。『マシンオペレーター』というやつだ。ケースからパチスロのボタンとシールを出し、機械にセット。機械のレバーを下ろすと、ボタンの

裏にシールが吸着する。

それをケースに詰めて、次の工程に渡す。

いわゆる『ライン作業』だ。単純作業だが、昼間は病院で働き、疲労のある俺にはこれくらいの作業が丁度良いかもしれない。

カンさんとはすぐに再会した。同じ作業ラインに配属されたからだ。彼女も俺を覚えていて、すぐに話すようになった。

六兵衛で、彼女の話をしていた会も隣の『元工場』で働いている。

俺は、父親の影響から、完璧ではないが、中国語が少しだけ分かる。

カンさんらと話すようになり、彼女の状況が少しずつ分かってきた。

カンさん自身は中国の大連からの語学留学生として日本に来了。『日本語を学び、日本の会社に入れたら、将来は明るい。しかも働きながら学べて、中国に仕送りの出来る』とコーディネーターという日本人に言われたらしく、中国通貨で安くない金額を支払って、浜松に来了。

最初に「仕事場」として派遣されたのが、あの居酒屋の六兵衛だった。そこで二年ほど、昼間は日本語学校、夕方から働いた。

そこにコロナがやって来た。

居酒屋の業績は落ちるばかりだ。出勤日自体が無くなる

と、カンさんの収入も減る。生活も厳しくなるし、仕送りも滞る。

すると、コーディネーターは「もつと稼げるバイトがある」とカンさんに告げ、居酒屋からここ、精密加工工場に移籍させた。

「に、日本語の、の、勉強は、は？」

そう俺が聞くと、彼女は「無問題（モーマンタイ）！」と気軽に返してきた。

カンさんは日本語学校には通っていた。

朝八時半から午後十二時半までは市内の学校。そこから専用のバスで、こちらに送られてくる。その費用はカンさんの月給から差し引かれるらしい。

午後一時から休憩を挟み、定時の午後五時までが仕事だが、平日ほぼ毎日午後九時半まで残業する。

さらに土日は日本語学校が休みだが、工場には出勤する。土曜日は午前八時半から午後五時くらいまで。もちろん残業がある。日曜日は午前八時半から十二時まで。その日曜の午後がカンさんの週一回の唯一の休日らしい。

ほぼ休みらしい休みなど無い。

外国人留学生の労働時間は「週に二十八時間と決められている」と聞いたことがある。

カンさんのそれは相当にオーバーしている。法的に大丈夫なのか。それよりもカンさんらは平気なのか。学校は大丈夫なのか。

しかし、カンさんもテイさんもそのような労働環境で構わないようだ。

それよりも工場での仕事が一瞬切られる、事を異常に怖がっている。

「シゴト無い。お金もナイ。だから、働くのダイジね」

カンさんには怯えと憂いの眼差しがあった。

数ヶ月前、この工場への発注が減った事があった、という。

当然だが、カンさんから工員に任せる仕事も減る。時給で働いている彼女らの収入が激減したらしい。

「お金ナイ。困る。とても困る。ほかにお仕事、ナイ……」

派遣となれば、中国人も日本人も基本的には大して変わらない。働かなければ、生きてはいけない。そして『非正規』とは、まさに調整弁……。

以前、会が言っていたのを思い出した。

「いきなりなんですよ。『あー、明日からもいいから』とか『発注なくなったから仕方ないよね』なんて言ってきて、そこでおしまい……」

俺も非正規生活が長いからある程度はわかっているし、理解もしている。

非正規などが一番キツいのは、労働そのものをさせてもらえない事だ。

正社員、経営者は、その会社や組織の維持を第一に考える。

それが継続すれば、自身の立場も収入も確保されるからだ。

だが、雇われる側は違う。

労働は己の利益の確保だ。

特に我々非正規労働者が考えるのは、悲しいかな、日銭だ。

お金、収入の額だ。

俺達、日本人の派遣は他の仕事を探せるが、カンさんらは違う。今はここでしか稼げないのだ。彼女らにとって、岡部コートでの労働は生きることと直結している。

その為か、カンさんらは生産ラインを仕切る生産管理部長の中野を非常に恐れている。

休憩中はおしゃべりばかりしている彼女だが、たまに中野が様子を見に來たりすると、押し黙り無口になる。他の労働者も同じだ。

だが、中野と親しく話す派遣や外国人もいる。

中野への親しみには、何故か、濃淡があるように思えた。

俺はこの中野とは面接の日と初出勤日の作業説明以降、言葉をかわしていない。

この男は俺など『口が不自由な金に困っているおじさん』

(中野よりは年下のはず)とでも決め付け、面接時に提出した履歴書から『コイツは病氣持ち』(回復しているが)と決め付けて、関わらないようにしているのだろう。俺の出会った人によく見られる傾向だ。とにかく働いてくれたら、それで良いのだろう。

厳しい労働環境で、日本語の習得など可能か、と思ったが、

当のカンさんは明るい。同じような境遇のティさんも明るい。

二人を含め、この工場に多くの中国人留学生を連れてきたのは、六兵衛の女将も言っていた『コーディネーター』なる人物である。

一体、どういう人間なのか。

それから少し経ち、俺は土曜も午後三時過ぎから働く事になった。短期だが、週四日出勤だ。

「シヨウチェン(篠千)、カノジョ、いるのか?」

ある日、カンさんが突然訊いてきた。

俺は機械を操作する手を離して振り、

「い、いないよー」と苦笑いする。

「ナンデ?」

彼女は答え難い事をさらっと尋ねてくる。

「さ、さあ?」

俺は首をすくめてパチスロのボタン裏にシールを吸着させる機械を見つめた。

「ナンデ?ナンデ、カノジョいない?」

俺が無視していると、隣で俺が吸着させたボタンを基板に押し込む作業をしていたティさんに中国語で話しかけ、俺を見て二人で笑っている。

俺のリアクションを見て楽しんでいるのだろう。普通の若い女性らと変わらない。

「こらあー、手を動かせ!」

そこに紺の作業着を着た中野がやってきて、怒鳴った。

カンさんとテイさんがおしやべりを止めて、自身の作業位置に急いで戻った。

「生産数、間に合わせろよー」

中野は眼鏡を上げながら、俺達が書き込む製造個数を書き込む日報を見た。

俺はともかく、日曜の午後しか休めない彼女らには雑談くらいさせても良いのでは。

中野の頭には生産量と製品精度しかないようだ。

次の出勤日、午後五時半に出勤すると「ショウチェン！」とカンさんに肩を叩かれた。

「ん？」と俺が言うのと、「これ…」と紙を見せてきた。そこには『生産製造緊急事態宣言』と書かれていた。

驚いて、内容を見ると先日、発注先の工場から「製品にロスが多い」と通達があった、と書かれていて、「ロス発生率が0・05%です。これを越えろと」「製造にもっと慎重さを…」とあった。

要するに「お前ら、ミスをするなよ。しっかりやれ！」という事であり、それをいちいち「緊急事態宣言」と言つて、俺達にまるで非常事態が発生したかのように告げてくるのだ。

俺は、自分自身が一時間にこの機械でいくつ、パチスロのボタンを造り、次の工程のテイさんに渡しているか、数えて

みた。

一回の接着でできるボタンは二十四個。それに掛かる時間は二分ほど。つまり俺は一時間(六十分)に三十回はこれを繰り返す。二十四個×三十回は七百二十個だ。ロス(ミス)の発生率が0・05%という事は、この内三十六個がこの宣言のいうロスとなる。

俺は週に月水金土と四日出勤し、合わせて十四時間働いている。そうすると、俺は週に一万八十个、このボタンを造っていて、その内の約五百四十個がロスになる。

この五百四十個のロスは俺のミスであり、それに言い訳は出来ない。中野に怒られるのは仕方ない。

カンさんが恐れるのは、こうしたロスが判明すると、中野が「あんまり多いと、クビにするぞ」と脅す事だ。

カンさんらはこの岡部コート以外に「お金、もらうトコロ、無い、無い…」と言う。元の居酒屋も感染者が減ってきたとはいえ、元のように戻るのには不可能だろう。

カンさんが俺にこの紙を見せてきたのは、この『生産非常事態宣言』が彼女らの生活を壊滅させる可能性のある「脅迫」で、それを俺に訴えたのか。

「ワカシ、困る。お金、無くなる、困る」

カンさんが眉間にシワを寄せながら話す。

ロスが生まれるのは、従業員の問題だ。

しかし、中野は、俺には「クビにするぞ」とは言わない。俺は、ここをクビになったとして、すぐに生活に困るわけ

はない。昼間は、もう一つの病院での派遣があるからだ。彼女らのように困らない。

おそらく、だから中野はそれが言えない。

別に俺が優秀だからでは無い。とにかく俺に働いて欲しいのだ。ミス無く、サボる事無く、そして反抗する事無く。

こういう上司（中野）が求めるのは、従順な労働者だ。正確に、休まず、文句を言わずに動く機械のような労働者を欲する。

今までそういう奴らをたくさん見てきた。

少しでも反抗的だと怒る上司…。

自分は動かず他人を動かしたがる上司…。

派遣やバイトを見下す正社員…。

とにかく働く事を強制する会社…。

給料（お金）で、従業員を縛り、シフトや出勤日を減らす奴…。

そんな奴らを見てきたし、過去には俺がそんな奴だったかもしれない。

大学を卒業し、正社員として働いたブラック企業は、人間を人間扱いせず、常に高圧的だったが、俺も部下のバイトとよく揉めた。あの時の彼らからしたら、俺はこの岡部コートの中野と変わらないかも。

病気になる前に働いていた求人誌の会社では、バイトから正社員になったが、コキ使われ、会社の業績が悪くなると解雇された。

某年金機構では、アシスタント職員という非正規雇用で、脳腫瘍になり、復帰させてもらったが、その後に契約満了で解除された。俺を出勤させないようにシフトを削ってきた奴もいた。今の病院の派遣も安泰とは言いがたい。いつクビになるか分からない。

それはもちろん、自身の責任である。

しかし、給料やシフト、仕事で労働者を縛るのは正しい事か。俺達は機械では無い。ミスもするし、文句も言う。給料も欲しけりや、休みたくもなる。

「それが嫌なら辞めたら？」と簡単に言う人間もいる。

だが、それが出来ないから人は困惑し、苛立ち、抗うのだ。

俺には『生産非常事態宣言』が、『服従強要宣言』にしか思えない。

九月の半ばの土曜日。岡部コートに出勤すると、珍しく、仕事が午後五時に終わった。土曜はいつも午後三時半から九時半まで働いているのだが、発注が減ってきたらしい。

俺は、このタイミングを活かし、この工場の事務所で働く、中学校の同級生だった波多野美帆子を捕まえ、気になっていた事を聞く事にした。

すると、彼女の上司の江間という年配の女性事務員が社内の話を聞かせてくれた。

俺は続いて、カンさんら外国人バイトの事を尋ねてみることにした。

「ち、中国の人、と、とかつて、どういう、け、経緯で、働いているの、のですか？」

「どうって？」

江間さんは不思議そうに聞き返してきた。

「いや、その、の、に、日本語、勉強、し、しながら、大変だなーって、て？」

「そうねー！」

江間さんは、外国人労働者らの事も教えてくれた。

岡部コートは、本格的に請負業に乗り出してから、常に人員不足に苦慮していた。

せつかく大口の発注をもらい、機器をリース出来ても、働き手がいなければ、生産が出来ない。

日本人のバイトなどを雇ったりしたが、受注分を造り、納めたら、次の発注がすぐにあるとは限らない。一時的に解雇にする。

だが、日本人は一度「切る」と簡単には戻って来ない。他の職に就くからだ。

岡部コートとしては、発注された時だけ働いてくれる労働力が欲しい。

そんな時に『外国人留学生や実習生を雇わないですか？』と言ってきた人間がいる。

例のコーディネーターという人物だ。

外国から日本に来て、日本語を学びたいという留学生や、本国より賃金の良い日本で働きたい外国人は多い。

それを雇わないか、という話だった。

彼らは「切った」としても、日本ではなかなか仕事に就けない。それで、また発注が入り、人員が欲しくなれば、喜んで戻る。

なので、彼らに寮などを用意し、住居させ、仕事の量により『調整』する。

もし受注が無ければ、出勤は無いから賃金が発生しない。だから人件費もかからない。

俺は呆れた。まるで便利な機械だ。工場側の都合しか考えていない。外国人労働者を寮に住まわせたり、学校からバスで送ってきたり、まるで『飼っている』ようではないか。

派遣も外国人も人間だ。

「だ、大丈夫、な、なんすか？」

「そう？外国の子もそれで納得しているみたいよお？」

確かに、それは否めない。

カンさんは居酒屋（六兵衛）での仕事が無くなったので、この話（岡部コートでの仕事）に乗り換えた。それにその寮での生活も同郷の仲間とそれなりに楽しんでる。

彼女の心配は今のようには仕事が減少し、収入が減ってしまう事だけ。

「中ちゃん、あれでも人気あるのよー」と江間さんは付け加えて、また笑った。

それも否めない。

派遣やパートの中には、中野とにこやかに話す者もいる。

そうした人間からすると、中野は『良い上司』『良い人間』『頼もしい人間』なのかもしれない。

江間さんからこの会社の昔の話を聞いたから、そんな気もした。

さらに、俺自身も『昼間は病院で働き、疲労のある俺にはこれくらいのも単純作業が丁度良いかもしれない』と思ったりしていた。

工場には工場の都合があり、カンさんにはカンさんらの都合があり、俺には俺の都合がある。それが合致していたら問題はない。

さらに言えば、俺がこの岡部コートで働こうとしたのはカンの事もあるが、ある人物の過去を探る為でもあるし、僅かな賃金の為でもある。

そんな俺にこの岡部コートの内情をとにかく言える資格などあるのか。放っておけば良い話に思えてきた。

翌週の月曜日。

俺は出勤すると、いつもの位置に着き、ケースの中のボタン（レンズ）とシールを機械にセットした。

すると、中野が顔をしかめながらやってきた。カンさんとテイさんが強ばるのが分かった。

「ちよつと、君さー」

「は、はい？」

「先週、ロス出し過ぎだよ…。0.05%越えているぞ」俺は集中して作業していたつもりだったが、予想外にミスしていたらしい。

ロスの内容は、ボタンとシールの間にゴミ（細かい毛のようなもの）が挟まったまま出荷された、という事だった。

「これね、発注先から注意されてんのよ。今、『生産非常事態宣言』が出てんの、知ってる？」

「もちろん知ってる。」

「す、すいません、んん」ここは謝るしかない。悪いのは俺だ。吸着前にエアースhowerでゴミを吹き飛ばさなくてはならない。それを怠ったと思われる。

「…病院で働いてるからって、ロスはダメだよ。しっかり頼むよ」

「は、はい」

そう答えながら、内心、少し違和感を感じた。

「昼間の方も忙しいだろうけど、こちらもしっかりやってくれないと困るよ…」

「…」

カチンと来た。

この中野は、俺が昼間は病院で働いているのは初めから知っているはずだ。俺は別に「病院の仕事が忙しい」とか「昼間も働いているから大変」などと愚痴ったことは無い。

何故コイツはそれを強調するのか。まるで俺に病院で働い

て欲しくないみたいだ。

つまり、中野が言いたいのは、『お前も俺の言うことを聞けや』『こちら側になれよ』という事だろう。他のパートや外国人労働者同様、この工場専属になれば、中野は俺の出勤シフトを操作し、収入を握る、それは生殺与奪をコイツに渡す事に他ならない。そうしたら、もう俺は中野の『奴隸』だ。そうならない俺に苛立っているのだ。

俺は今までこうして他人を『従わせる』馬鹿を山ほど見てきたし、その馬鹿の一人の過去を知りたくて、この工場に来た。

そして思う。

「人間の『元値』は変わらない」

どんなに好く見えて、優しそうで、頼りがいがありそうでも、社長だろうが、部長だろうが、平社員だろうが、人間の『元からある気質』は変わらない。結局はそこだ。元値からかけ算されて、その人の思考が出来ているのだから、結局はそうなる。

中野の元値は『他人は自分に従えば良い』『それがこの会社の為だ』という思考なのだろう。

俺も過去にはそういう人間だったので、よく分かる。

その日から、俺は猛烈に中野ら正社員らに反抗を始めた。

指示や日々の目標数には従うが、不満そうな顔を表すようにした。

ロスを出すと、当然、中野は怒ってくる。

「…鈴木君、またロス、増えているよ」

「は、はい。すいません」

「頼むよ」

「はい。申し訳、あ、ありませーん」

「…最近、そんなに忙しくないんだから、慎重にね」

「すいません。ちよつと、な、何を言っているのか、わ、わかんないんすけ、けど…」

「…君ねえ」

こんな調子で、中野は俺に向ける眼差しを厳しくしていた。

断っておくが、俺はわざとロスを出してはいない。作業自体に手抜きはしない。

それでもミスは出てしまう。人間だから。

やがて中野は俺に注意をしてくる事が無くなった。

代わりに、中野を慕う若い女性の正社員が俺に注意をしてくるようになった。

その正社員とも俺は揉めた。

すると、今度はテイさんが俺に声を掛けてきた。それは俺が土曜日に出勤した時だ。

「スズキさーん」

「ん？」

紺の作業着を羽織り、いつもの機械の前に行くと、テイさんが近づいてきた。

「スズキさん、怒ったらダメ…」

「は、は？」

「みんな、お仕事、タイヘン。ミスしたらダメよ」

「わ、分かっている、よよ」

彼女は俺と中野や社員らの争いを聞いていて、その事を指している、と思った。

「中野さん、みんな困るの。仕事、すぐに出来なくなる。スズキさん、ガマン」

「み、明白了（ミンバイラ）」

俺は苦笑いをしながら応えた。

「違うネ！」

俺はテイさんの大声に驚いて表情をみた。テイさんは戸惑った顔をしていた。

「スズキさん、仲良くしないとダメね！」

俺はテイさんが何でそんな事を言い出したのか、分かった。

中野、もしくはあの社員からの指示だ。

言うことを聞かない俺に、親しいテイさんを使って言わせたのだ。

（…あいつら）

俺の中に怒りが沸いた。言いたいことがあれば、直に俺に告げたら良い。それを立場を利用してテイさんに言わせたのだ。

なんという腰抜けっぷりだろう。

俺は中野との『最終決戦』を感じた。

それから、俺は相変わらず、中野と社員らに反抗的な態度をとり続けた。

俺の出勤日は『発注減少』を理由に、週四日から土曜日が停止になり、三日になった。

もちろん予想通りだ。そして、別の仕事を持つ俺には影響は少ない。多少収入が減るのは痛い、が、あの中野らが許せなかった。

俺は平然と出勤し、カンさんらと談笑し、中野と社員に舐めた態度をとり続けた。

十月の最初の週。菅首相が退陣し、岸田政権が発足し、コロナの波が落ち着き出した頃、俺が出勤すると、中野が俺を面接した二階の食堂兼会議室に招いた。

ついに来た。

俺は『何ですか？』とどけた顔をして中野の前に座った。彼の横には俺を注意した女性の社員が睨みながら座っていた。

「…あのね。鈴木君？」

「は、はい？」

「今さ、受注が減ってきてねー」

「そ、そーすか？ ふ、増えてきてま、せせんか？」

中野の顔が曇り、隣の社員の目線が厳しくなった。今日の俺は自宅で親父と口論し、機嫌が悪い。

「…つまりね。余っちゃってんだよねー」

「な、何が？」

「だから、人員がね……。こちらとしても、無駄な人間を雇い続けるのも厳しくてね」

『無駄な』という部分に中野は少しアクセントを付けた。

「へー……」

「でね。申し訳ないんだけど……」

「せ、製造こ、工程とか、け、経費や、やらをみ、見直した、たりしたら？」

「……それもね、限界があるんだよ」

中野の目付きも厳しくなった。

「……な、なら皆さんの、の、き、給料を減らし、したりしたら、どうですか？」

「君ねえ……」

中野は俺を睨み、隣の社員はさらに俺を睨み付けた。

「鈴木君はここ以外にも、昼間に病院で働いているよね？」

「ええ……」

「ならば、申し訳ないんだけど……」

「いやいや」と俺は右手を左右に振った。中野らが戸惑って、こちらを見た。

「じ、実はあの病院、や、辞めようと、と、してまして、ね。こちら、一本に、にしようと思つて、ま、ましてねー」

中野と社員は驚嘆した。

もちろん嘘だ。俺はあの病院でも揉めたりしているが、今のところ退職の意思は無い。

「そんな勝手に……」

「いやいや。か、勝手なのは、辞めさ、させようとする、そ、そちらでは？」

中野は再び戸惑って、こちらも黙った。

「……それなら」

「？」

「君はもつと真面目に働いてくれないかな？　ロスが多過ぎるよ。それでないと雇えないなあ」

「うーん」と俺は腕を組み、悩むふりを見せた。

親父との口論を思い出した。

中野らがまた見つめてくるのがおかしい。

「ば、僕としては非常にま、真面目に働いて、て、いるつもりですが、そういうじ、状態な、なのは、分かってますよ。……ならば、退職した、方が、よ、良いのですか？」

『退職』という言葉に中野と社員の顔が崩れたのが分かった。

「鈴木君がね、頑張っているのはよく分かるよ。しかし、我々も仕事で、日々の生産や精密性を考えないといけないんだよね」

「……なるほ、ほど」

「どうしても厳しい事を言わないといけなくなるのは、仕方ないんだよ……」

中野から『仕方ない』の言葉が出たのを俺は確認した。

「……つ、つまり解雇と？」

「ま、そういう事に……」

「そ、それは俺が、が、病氣上がりだから、で、ですか？」
中野の表情がまた歪み出した。

「ち、違うよ」

「く、口が不自由、だからです？」

「…関係ないよ」

「で、では、病院に、つ、勤めているからら、ですか？」

「そんな話、してないよ…」

俺は、中野がそういうと予想していた。

「じゃ、今、ま、まで通り、午後からの、出勤で、よくないですか？」

「だからね、鈴木君、それはね…」

「なら、そ、それはき、強制解雇では？」

「…鈴木君、話聞いてくれた？」

「ロスは、は、俺のミスだけださ、さ、い、いきなり、く、クビって、そ、それって、会社、つ、都合。先程、『無駄』と、

と言ったのは、余剰人員の整理り、か？」

「そ、そうだよ？」

「な、なら、出勤ゼロでも、も、良いですよ。また、た、受注増えたら、同じようには、働きま、ますが？」

横の社員が、俺に何か言いたそうだ。

「…まさか、かとは、思うけどさ。俺が、は、反抗的だ、だからとかか、ですか？」

中野は少し強ばって口を開いた。

「それもあるよ。僕らも仕事しているんだ。協調してもらわ

ないとね」

「じ、従順の、ま、間違い、だ、だろ？」

中野が驚いて、俺を見つめた。

「そ、それが本音ではないの、の？」

「…」

二人とも押し黙った。

「ひたすらだ、黙ってさ。自分らの為に働いてくれると、奴隷みたいな人間が、が欲しい、の、のでは？」

「違う」

「た、たくさんのが、外国人が働いているけど、い、言うこと聞きやすいからだろ？」

「アンタねえ！」と黙っていた隣の社員が溜まらず怒声を出したが俺は構わず続けた。

「あなた達からしたら、ら、俺が病院で、は、働いてんのが、都合悪かったんじゃ、な、ないの？」

「…何で？」と中野が尋ねてきた。

「今、俺はアンタらにシフトを削られても、も、平気な、ぶ、部分がある。な、何故なら収入はあっちの方が多からね。

別に俺はこっちの出勤が一日でも、も、平気さ。…それが気に入らないんだろ？」

「…」

「い、言うことき、聞かない奴は、シフトをし、締め上げて、出勤させない。そうして、て、言うこと聞かすの、のが、あなたちの手口だろ？」

「君ねえ…」

「『仕方ない』だ、だよな？か、会社の為、仕事のため、為。それが、が、正しいと、あなたらは思っている…」

中野は少し頷いたように思えた。

「だ、だけどさ、俺はそれはどうかと思うね。が、外国人を仕事で縛り上げて、さ、散々、は、働かせて、す、少しは自責と、とかの念がな、ないもんかね？」

「そんな事を言われる筋合いはないよ」
俺は笑って見せた。

「…少し、お、驚いたのでは？」

「？」

「単なる『口の不自由な貧乏で従順な奴』って、て、くらいに思っていたら、お、俺がこ、こんなに、は、反抗的でさ」

「…別に」

明らかに嘘だった。

中野（と社員）の顔には『予想外』と書いてある。

「ま、クビなら、そ、それで構わないですよ、よ？」

今度は中野と社員の顔に緩みが見られた。忙しい奴らだ。

「…しかし、俺もふ、不正はみ、見過ごせないな」

「不正？」

「が、外国人留学生の、就業時間は、週に決められた時間がある、あるんじゃない、な、なかったかな？」

「あれは…」

「『仕方ない』？」

「…」

「それに、随分と、と、残業、あったなあ。あ、あれって労働基準法だと、ど、どうなるのかな、な？」

「何も違法な事はしてないよ」

中野が俺を睨む。

「そ、それをきめんのは、あなた、た、では、無いよ」

「君い、脅す気か!？」

「いやいや、も、元年金事務所のし、職員として、み、見過ごせないだけ、け、だよ。…あ、あれ？ お、俺のり、履歴書、読んでますよね、ね？」

俺はいつもの手を使ってしまった事を後悔していた。

過去に縛られている人間に未来は無い。過去を否定してはいけないが。

「ま、とにかく、や、辞めさせて、て、もらいますよ。そ、その方が、お、お互いの都合良さそう、ですかね？」

「…」

「に、人間ってのは、か、変わらないもので、ですな…」

「？」

「ぐ、偶然ですが、か、過去にこの工場で働いていた人間を知っている、ましてね…」

「だ、誰？」

中野の表情がまた強ばる。

「さあ。…で、でも、その人とアンタ、や、やっている事は同じ、で、では？」

「…」

隣の社員が中野の顔を覗き込んだが、中野は赤い顔をして
いるだけだった。

(中区)

俺はいつもの位置に戻ってきた。

「ショウチエン、どうした？」とカンさんが訊いてきた。俺
はお別れの挨拶をしなければならなかった。

「か、カンさん…」

「？」

「お、俺ね。ここ、き、今日で最後みたいだね」

「最後？ 辞めちゃうの、ショウチエン？」

「まあね…」

カンさんの目から涙が流れた。本当の涙だろうか。そんな
疑いを持ってしまふ俺は、もうここに居ない方が良さだろう。

「明天見！（ミンティエン ジィエン）」とカンさんは言う
が、それは『また会いましょう』というニュアンスがある。

こうした時は違うだろう。

なんて言えば良いのか。俺は父から教わった中国会話を思
い出した。

「…一路平安（イールー ピンアン）…」

『お元気で…』といった意味だった気がした。この方が合っ
ている。

俺はこの工場で最後の仕事に取りかかる事にした。カンさ
んの方は見ないようにした。

「市民文芸賞」

きらきら星変奏曲

一

菓子なんか欲しくもなかったし、食べたくなかった。だから受け取るつもりもなかった。

でも受け取ってしまった。女の差し出した洋菓子は、差し出された瞬間にもう女のものではないようだった。宙に浮いている感じがした。それを哀れに思ったのかもしれないし、あるいはただなんとなくだったのかもしれない。透明な袋に封の代わりか、赤いリボンの付いたシールが貼られている。中心が歪に膨らんだ、四角い形の小さな焼き菓子だ。表面は飴色に焼けていて、砂糖を塗ってあるせいかな、ほんのりと薄い膜の質感がある。その質感は、まるでこの記憶のようだとぼくは思う。決して濁っているわけではない。不自然にぼやけているわけでもない。ただそこには何かしらのフィルター

村 上 拓

が掛かっていて、それが本当ではないものを映しているような感触がする。目を擦っても取れない。参観会の日の、雑然とした小学校の校舎の前。いろいろなものの輪郭が、昨日とさほど変わらないはずなのに、不自然なもののように感じられる。女は笑う。ぼくの手の中に収まった菓子を見て女は笑う。上品に整えられた新月の二日前のような唇が震えて、呼吸がその景色をますます燦らせていく。

「これからも娘をよろしくね」と女は言った。それから腰を曲げるようにしてお辞儀をし、校舎の中へと消えていった。ぼくはその背中と菓子を交互に見る。その人の娘が誰なのか、ぼくには分からなかった。そもそも、その女が本当に誰かの母親であつたのか、それさえもぼくには分からなかった。

二時間目の終わりに、ぼくはふと、この菓子を捨ててしまうことを思いついた。別に毒が入っているかもしれないと

か、そういうことを思ったわけではない。ただ漠然と、そういう風にしたら愉快だろうなど、ぼくは思ったのだ。

早速、校舎裏の空き地に向かった。雑草と荒地ばかりの見捨てられた空間を見下ろすと、ぼくはリボンのシールを剥がし、袋から菓子を取り出した。菓子からは砂糖の甘い匂いがした。檸檬のような匂いもした。ぼくはその菓子を荒地地の上に転がして、靴の裏で踏みつける代わりに、ひとすくいの砂を掛けることにした。そのアイデアは上出来だった。砂まみれになった菓子はもはや菓子には見えなかった。ぼくの手ひらにはその甘い匂いが移っていた。ぼくはもはや空っぽになった透明な袋を握りつぶしてポケットにしまい、校舎前の水道で指先を濡らしてから、教室に帰った。

何日か後に校舎裏を訪れると、そこには無数の蟻が群がっていた。大きいのも、小さいのもある。大きな蟻の方が灰色と黒の縞模様が鮮やかで、ぼくは好きだ。

二

「むかし夏休みの自由研究で、蟻を飼っていたことがある」とぼくは彼女に言った。「たった一匹の大きな蟻を、ジャムの入っていた空き瓶に入れて飼っていたんだ。蓋のところにこう、空気穴みたいなのをあけてね、一日に数回、そこから砂糖水を垂らしてやるんだよ。コップ一杯の水に、一つまみの砂糖。それが適量。蟻は二本の触角をぴくぴくさせながら、

その蜜をいつも美味しそうに舐めた。でもあるとき、砂糖の量が少し多かったんだね、瓶の蓋の上のところに、他の蟻が来ているのをぼくは見つけた。瓶の底では僕の蟻がじっとしている。蓋の蟻は、どこかで砂糖水の匂いを嗅ぎつけて、部屋の中へやって来たんだ。もちろん一匹や二匹じゃない。ぼくが気づいたときには、まばらで不均一ではあるけれど、蟻の行列らしきものもできていた。彼らは蓋の穴の縁についた砂糖水を舐め、穴の中へ潜り込もうと試みる。それから諦めて引き返し、ろくでもない巣穴に帰っていく。そういうのを、ぼくは三時間ばかりじっと見続けた。やがて、ぼくは二つの気づきを得た。まず第一に、ぼくが作った瓶の世界は蟻たちにとって羨むに値する場所だということ。そして第二に、その場所は固執するには値しない場所だということ。その二つだ」

彼女は机の表面を右手の薬指で叩きながら（それは彼女の癖だった）、慈悲深そうな目でぼくを見た。

「その蟻に名前はあったの？」と彼女は言った。

「名前はないよ」とぼくは言った。「それはただの一匹の大きな蟻だった。蟻はその夏の終わりに、瓶の底で乾いて死んでしまった。死んだ蟻の身体はたちまち白くなって、触れたら砂になって崩れてしまいそうだった。だからぼくは、せめてものはなむけに、その蟻を瓶ごと土の中に埋めてやった。一匹の大きな蟻がその身体の形を保ったまま、永遠に土の中にいられるように。上手くは言えないけれど、そういうのが

一匹の大きな蟻にとつて、なにか重要なものごとであるという気が、そのときのぼくにはしたんだ。つまり、身体の形を永遠に保つということが」

彼女はそれについてしばらく考えているようだった。「私もむかし犬を飼っていたの」と彼女は言った。「マルチーズ。小さくてまっしろで、ふわふわなやつ」

「その犬はもう死んでしまったんだね」とぼくは言った。

「ええ」と彼女は言った。

「その犬の名前はなんていうの?」とぼくは言った。

「ふらんそわ」と彼女は言った。「お母さんが名前を付けたのよ。私の名前と同じように」

彼女の手には指がなかった。正確に言えば、彼女の両手には指が三本しかなかった。左手の小指と、右手の親指と薬指だ。彼女はなくなつてしまつたすべての指に名前を付けていた。左手の薬指がえま、左手の中指がじゃど、左手の人差し指がるいず、左手の親指がありす、右手の人差し指がくろえ、右手の中指がりな、そして右手の小指がかとれあ。これは私が名付けたの、と彼女は言った。そういうのつて素敵じゃない? 自分を通り過ぎていくすべてのものに名前を付けて覚えておくのよ。生まれてから死ぬまでの間に、とてつもない長さの名前のリストができるでしょうね。もちろん名前だけを見たつて、それがいったいなんなのか、すぐには思い出せないかもしれない。でもそれに名前を付けたという事実は決してなくならないの。私とその名前がそろつたら、そこ

には事実として、ただひとつのものが規定されるのよ。それはもしかしたら、まっしろで小さな可愛い犬かもしれないし、ぺちゃんこにつぶれた左手の中指かもしれない。でもいづれにせよ、それはすでに私を通り過ぎてしまつたものの。そしてそれが誰からも見向きされなくなつたとき、それがかつて存在したことを証明できるのは私と私の付けた名前だけなのよ」

「君はつまり、ぼくがその一匹の大きな蟻に名前をつけたことが気に入らないんだ」とぼくは彼女に尋ねた。

彼女は首を振つた。「要するにね、それはこういうことなの。あなたにはあなたのやり方があつて、それは私のやり方とは違つていた。ね? まとめてしまえば、こんなに簡単なことはないでしょう? ただ私たちは、かつて、そのやり方の違いを認めることができなかった。いいえ、認める必要なんてないわ。ただ、そういうものが存在するということを受け入れさえすれば良かったの。でもかつての私たちにはそれができなかった。だからそこに罪が生まれて、罰が生まれて、私は指を失つた。これはそういう話なのよ。もちろん、私の理解ではね」

「罰」とぼくは言った。辞書の見出し語を読み上げるように、淡々とした響きだった。

かつて彼女は、ピアノをとでも上手に弾いた。小学六年生の時だ。

ある放課後のこと、なにか細々した用事があってぼくは音楽室に行った。音楽室の中は音で溢れていた。先生がピアノを弾いているんだろうと思った。ぼくは窓から差し込む夕日に目を細め、ピアノの方を見た。そこに先生の姿はなかった。鍵盤を叩いているのはもつと小柄で、白いワンピースを着た女の子だった。

『幻想即興曲』とぼくは言った。彼女は演奏を止めず、ぼくの方をちらりと見た。扉を開けてほしいのだとぼくは思った。なんとなくそういう気がしたのだ。ぼくは扉を開めた。

彼女の演奏はとても見事なものだった。短い音と音とが重なり合い、音節から音節が生まれてくるのが分かった。その演奏には明確なはじまりと終わりがなかった。その演奏の中では、はじまりは終わりであり、終わりははじまりだった。ぼくたちはその永遠のようなループの中、閉じられた確かな空間の中で、ただ二人きりだった。

そして彼女の演奏は唐突に終わった。そこには残響すらも残らなかった。部屋の中は突然に作り出された沈黙のせいだ、なにか新しい音を求めて、喘いでいるように思えた。

「ぼくが宇宙図鑑を好きだったのは、そこに途方もないスケールが刻まれているからだ」とぼくはその隙間を埋めるように言った。

「地球から太陽までの距離は、一億四千九百六十万キロメー

トルで、地球から隣の銀河までの距離はその十六倍にもなる。宇宙が生まれてから今まで百三十八億年が経過している。これは秒に直すと……いや、やめよう、そんなことには意味がない。とにかくそこには、膨大な距離と、膨大な時間と、膨大なスケールが含まれている。だからぼくは、宇宙図鑑が好きだった」

ぼくが話を区切ると、彼女はぼくに向かって拍手した。ぱち・ぱち・ぱち。それはこの沈黙の中でなければ聞こえなかったと思えるほど小さな音だった。

「でもぼくはあるとき気づいた」とぼくは言った。拍手の音がぴたりと止んだ。あるいは、ぼくの声に打ち消されて、そのささやかな音はどこかに埋もれてしまったのかもしれない。「結局それは、ただのスケールでしかないのだと。どれだけ膨大な距離も、どれだけ膨大な時間も、結局それは、大さきさという見地から物事を評価するための、ひとつの基準でしかないんだ。そう気づいたとき、ぼくは改めて自分に問いかけた。僕は本当に宇宙図鑑が好きなのか、とね。結局のところ、ぼくはその分かりやすい基準が好きだったんだ。それからぼくは、宇宙図鑑を読むことを止めてしまったんだよ」

「今、その宇宙図鑑はどこにあるの？」と彼女は言った。

「ぼくの部屋の押し入れの中にしてある」とぼくは言った。「もしかしたら、いずれ処分するときにぐるかもしれない。低学年のときの教科書と重ねて、紐で縛ってあるんだ。誰かがぼくに古い教科書を捨てるようにと言ったら、ぼくは

自動的に、その宇宙図鑑も手放すことになる。その時ぼくは、宇宙図鑑のことなんてすっかり忘れてしまっているだろうか

「そう」と彼女は言った。そしてピアノの前の椅子から降りて、白いワンピースの裾を翻しながら、ぼくの前へと歩き出した。夕日はあくまで赤く、音楽室を暗い影の中へと追いつていた。だから彼女がどんな顔をして、どんな表情で目の前に立っているのか、その三十センチほどの距離でさえ、上手く判断することができなかった。

「じゃあ、名前を付けないといけないわね。今のうちに。忘れないうちに」と彼女は言った。

それから彼女はぼくの手を取り、音楽室の外へ出た。

女の子と手を繋いで帰ったのは、それが初めてのことだった。通常の下校時間をもう一時間ほど過ぎていたし、秋の暮れ近い季節のせいで、日没もだいぶ早くなっていた。おそらくはそのためだったのだろう、彼女と手を繋いで帰る途中、ぼくは一度も、同年代の子どもたちとすれ違わなかった。

ぼくと彼女とはほとんど話をしたことがなかったし、そのときだって会話ししい話は、ほとんどなにも起こらなかった。大きな横断歩道の前で、彼女は信号機を指差し「あか」と言った。すると信号は青に変わった。ぼくたちは手を繋いだまま横断歩道を渡り、また道なりに歩いた。彼女の家がどこにあるのか、ぼくには分からなかった。ぼくはぼくの家の方を目指して歩き、彼女はそれに従った。あるいはそれは逆

だったのかもしれない。彼女が彼女の家を目指して歩き、ぼくの方がそれに従っていたのかもしれない。誰かと手を繋いで歩いていると、自分が腰から下のない幽霊になったような気がする。

家に帰る途中の道で、ふいに、足の間が帰ってくる。ぼくは立ち止まり、彼女の方を見る。彼女はぼくの手を離さない。空いている方の手のひらをぼくにに向けて、ひらひらと振って見せる。

「さよなら」と彼女は言った。

ぼくは思わず、彼女のひらひらと振れる手を、もうひとつの手で掴んだ。そして繋いだままの手に、ぐっ、と力を込めた。夏の畑で蝶を捕まえたときのことを、ぼくは思い出していた。虫取り網がなかったから、手で捕まえるしかなかった。両手の間に包んだつもりが、手を開くと、蝶はつぶれてぐちゃぐちゃになっていた。羽はちぎれ、触覚は折れ曲がり、標本にさえなりそうになかった。そして芋虫の腹だけが、疼くようにひくひくと動いていた。ぼくはあの美しい蝶を、いったいどこへやってしまったのだろうか？ それだけがどうしても思い出せなかった。

「ごめんね」とぼくは言った。それから彼女の手を、絡まつた糸をほどくようにひとつずつゆつくりと離れた。ぼくが手を離れた後も、彼女の手のひらはしばらく宙に浮いていた。その手の所有者はもはやどこにもいないのだと言うように。「さよなら」とぼくは言った。

「さよなら」と彼女は言った。
「さよなら」とぼくは言った。

四

次の日の土曜日の朝に、ぼくは彼女の家の前を通った。彼女の家の開いた窓からは、かすかにピアノの音が聞こえていた。日曜日の朝には、彼女の家の前に珍しい白い車が停まっていた。彼女の家の開いた窓からは、かすかにピアノの音が聞こえていた。月曜日の朝、彼女の家の窓は閉まっていた。代わりに玄関のドアの向こうから、小さな犬の鳴き声が聞こえた。彼女が家から出てくると、ぼくは片手を上げて挨拶した。彼女も同じようにしてぼくに挨拶し、それから玄関のドアをゆっくり閉めた。

「蝶をどうしたのか、やつと思ひ出したんだ」とぼくは言った。「虫かごにその蝶と大きな重い石を入れて、川の中に沈めたんだ。どうしてかは分からない。でも、ぼくにはそうするのが適切であるような気がしたんだよ」

「テキセツ？」と彼女は言った。

「必ずしも正しいことでなかったとしても、そうするべきだということ」とぼくは補足した。

「そういうことはよくあるの？」と彼女は言った。「つまり、あなたにとって」

ぼくは肯いた。「手を繋いでもいいかな」

とぼくは言った。

彼女は何も言わず、ぼくのほうに手を差し出した。ぼくは彼女の手を三秒だけ握り、それからすぐに離れた。彼女は信号機を指差し「あお」と言った。すると信号は赤に変わった。ぼくたちは横断歩道の前に並んで立ち止まった。

「君はいつもピアノを弾いている」とぼくは言った。

「そう」と彼女は言った。「いつも。頭の中でも」

「どんな曲を弾いているの？」とぼくは言った。

彼女は首を振った。「その曲に名前はない」「あの宇宙図鑑に名前を付けたよ」とぼくは言った。「K265って言うんだ」「モーツァルト」と彼女は言った。「『ピアノのための変奏曲』。別名は、『きらきら星変奏曲』」

「悪くない名前だ。そう思わない？」とぼくは言った。

「悪くない」と彼女は言った。

すると信号は青に変わった。ぼくと彼女は並んで歩き出した。

五

あなたは誰の母親なんですか？ とぼくは尋ねてみるべきだったのかもしれない。そうすれば、少なくとももう少し話ができたはずだ。たった一言、二言だったとしても、長い時間の中で、幾度となく繰り返される中で、ぼくはその女に対する認識を、あるいは印象を、改めることができたのかもしれない。

れない。

「これからも娘をよろしくね」とその女は言った。

音楽室から出てきた彼女の指には、真つ赤な血糊がべつとりとついていた。ぼくは彼女の手を取った。彼女は酷く痛がった。

ぼくは少し悩んでから、彼女の腕を掴んで走った。音楽室の中から笑い声が聞こえたような気がする。どこかの部屋のドアが勢いよく閉められたような気がする。誰かが廊下の角の向こうをさつと横切つて、階段を一段飛ばしに降りていくような気がする。はつきりしたことは分らない。頭の中で巨大な鐘を突く音がひっきりなしに響いていて、外界のあらゆる音がその中に鈍く沈み込んでいくようだ。クラスメイトと会わなくて良かったと思う。誰と会つても、ぼくはそういったことを殴つていただろう。散々殴つて蹴り飛ばして、手足の指を一本ずつ全部折つて、まだ足りないくらいのひどい目に合わせていたはずだ。

手洗い場に彼女を連れて行つて、ぼくはハンカチを濡らし、よく絞った。その冷たいハンカチを彼女の指先のひとつにそつと当てると、やはり彼女は顔をしかめた。ぼくはそれでもハンカチを使つて、彼女の右の手を拭き続けた。拭つても拭つても、彼女の手は赤いままだつた。彼女の手は不可逆的に変質してしまつたのだと、ぼくはそのときはじめて気づいた。もはや取り返しはつかないのだ。原因がなんであれ、彼女のあの白い手のひらは、もう戻つては来ないのだ。ぼく

は自分の手のひらを開いて眺めた。そこには五本の指がちやんとついていて。五本の指は、大きな蟻の足ののようにそこにあった。そして夏の蝶の触覚のようにまっすぐに伸ばされていた。誰かが救急車を呼んだ。彼女は別の誰かに背中を押され、どこかへ連れて行かれた。ぼくは知っていることを話すようにと言われたが、話せることは何もなかった。彼女は音楽室から出てきた。そして指が真つ赤に濡れていた。それがぼくの知るすべてだった。

その日から彼女は学校に来なくなった。ぼくの記憶にぼんやりとしたフィルターのようなものがかり始めたのも、ちょうど同じ頃のことだ。

記憶……ぼくの生活は、もはや記憶の集積という以外の何物でもなかった。ぼくはこれまでと変わらず学校へ行き、友だちと話をし、授業を受けて、家に帰つた。家では宿題をして、食事をし、テレビを見て、風呂に入り、歯を磨き、眠つた。朝になったら起きて、顔を洗い、歯を磨いて、それからまた学校へ行つた。そのすべてが、ぼくにとつては後から与えられた記憶でしかなかった。ひよつとするとぼくはどこかの森の樹の下の深い洞穴の中でずっと冬眠のようなことをしていたのではなかったかと、本気でそう考えたこともある。急に冬眠から目覚めることになつても不都合がないように、何らかの機械から発される電気信号によつて、でつちあげの記憶が頭の中に、日夜集積されていく。ぼくはその記憶を頼りにぼくという人間の連続性を自覚し、時系列を捏造し

て、アイデンティティを確立する。それが一体何のために必要なのか、ぼくにはよく分からない。

記憶の中で、ぼくは彼女のことを少しずつ忘れていった。

ぼくは少しずつショックから立ち直り、友達と普通に話したり、サッカードをして遊んだり、歌を歌ったり、授業を受けたりできるようになっていった。それから半年経つと、ぼくは小学校を卒業した。卒業式の前の日に、ぼくは校舎裏の空き地に行ってみることにした。打ち捨てられた菓子に無数の蟻が群がっていたあの空き地だ。

しかしそこには何もなかった。菓子の一欠片も残されてはいなかったし、ただ一匹の蟻の姿も見つけることはできなかった。

蟻たちは、冬の寒さのせいですべて死んでしまったのかも知らない。それとも、菓子を食べ終えた蟻たちは、こんな空き地になんかもはやなんの価値もないと思ったのかもしい。この場所は決してユートピアではなかった。羨まれることなど、ましてや固執されることなどあるはずもない場所だった。ぼくはポケットの中を探った。あの菓子の袋が入っているような気がした。でもそこには何もなかった。ハンカチさえもなかった。それはぼくのいる場所を完全に通り過ぎてしまったのだ。そしてもう二度と、この場所へ戻ってくることはないのだ。

「聞きたいことがあるんだ」とぼくは言った。

「君の家の、犬の名前は何て言うんだろう。君の家の前を通

り過ぎるとき、ときどき、あの犬の鳴き声が聞こえるんだ。

あの日、君を送り出してくれたあの犬の鳴き声だ。あの犬の鳴き声を聞いたたび、ぼくは君が出てくるんじゃないかと、つい足を止めてしまうんだ。ねえ、ぼくは一度も姿を目にしたことのない、君の家のあの犬の名前を知りたいんだ。いったいあの犬は、なんていう名前なんだろう。どうか教えてくれないか。ぼくのいる場所を通り過ぎてしまう前に」

ぼくの言葉はなにもない空間に吸い込まれていった。そこにははじめからなにもなく、これからもなにもないみたいだった。そこには打ち捨てられた菓子も、かつて群がっていた蟻たちも、その墓標すらもないのだ。墓標のないところに文字は刻めない。風に名前を尋ねることができないのと同じように。

「これからも娘をよろしくね」とその女は言った。

「ふらんそわ」と彼女は言った。

六

中学生になって高校生になるまでの間も、ぼくの冬眠は続いていた。春を待つ熊が清流に泳ぐ鮭を夢見るように、ぼくはその頃、夢を見ていたような気がする。

夢の中にはあの女の人が出てきて、ぼくに向かって菓子を差し出す。「これからも娘をよろしくね」と言って背中を向ける女の黒いスートの裾を、右手を伸ばして掴む。あるとき、

ぼくは女に向かつて問いかけた。「あなたは どうして、彼女にピアノを弾かせたのですか?」と。

女はぼくの顔を不思議な顔で見た。まるでポストモダンの彫刻を眺めているような顔だった。

「あの子が弾きたいと言ったからよ」と女は言った。「私が弾かせたわけじゃない」

ぼくは女の口ぶりに、罪の意識の匂いを感じた。あるいはそれは、自分の皮膚から匂ったのかもしれないと思った。

またあるとき、ぼくは女に向かつて問いかけた。「あなたは どうして、彼女の指を潰したのですか?」と。

女はぼくの顔を驚いたような顔で見た。まるでむかし部屋に飾られていた絵画を外国の駅で見つけたような驚きだった。

「あの子はあれ以上上手くピアノを弾けないからよ」と女は言った。「そういうのって、可哀想なことだと思わない?」

またあるとき、ぼくは女に向かつて問いかけた。「ぼくがこの菓子を受け取ったら、彼女は帰ってくるのですか?」と。

女はにつこりと微笑んだ。まるで古い額の中に飾られているような微笑みだった。

「でも、あなたはきつとこれを受け取らないでしょう」と女は言った。「あなたはあの子の身に起こったことについて、あれこれ理由をつけようとする。あなたのずっと奥の方にある、静かで清潔な暗闇の中にあの子を住まわせて、あの子を風化させまいとする。それ以上前へも、後ろへも進むことの

できない、瓶詰めの中のユートピアにあなたはいる。あるいはそれは、ひとつの羨むべきもののなのかもしれない。人の善性というものの、最上の現れ方のひとつなのかもしれない。でもそれは、決して私たちを引き止めてはくれないものなのよ」

ぼくはその女の、架空の女の言ったことについて考えた。「もしぼくがあなたに何かを尋ねたら、あなたは何か言ってくれたでしょうか?」とぼくは言った。

女は静かに微笑んだ。「あなたは、きつと何も言わなかったでしょう。すべてはもう終わってしまったのよ。あの子は指を失い、ピアノを弾くことができなくなった。そしてあなたは、あの子を失った。記憶ってね、裁断された文庫本のよなものなの。ページを入れ替えたり、抜き出したりすることはできる。行間を書き足すこともできる。でも書かれたことは変えられない。変えることができない。決して、たとえば何があっても」

七

フィルターのかかった世界の中で、ぼくは宇宙図鑑への興味を失っていた。そしてその代わりのように数学に熱中した。まるで視力の落ちた人が大きくシンプルな活字を求めるように。

数学と言っても、ぼくが好んだのは左から右へと、ルール

に従つて機械的に変換していくような作業ではなく、ふたつの違う種類のかたちを論理によつて結びつけるような、カラルで統一的な理論だった。そこには直感に反する事実が、疑いのような形で提示されていた。例えば「人は飛ぶ」と書かれている。そしてその事実は「人は歩く」からはじまる一連の論理的手続きによつて証明される。その論理的手続きは、はくを少なからず励ました。そのプロセスは、はくにある種の万能感を与えてくれた。でもそれと同時に、それはしばしば、はくを深い無力感の中に突き落としもした。その無力感の正体はおそらく、次のような命題によつて表現されるものだ。

あらゆる事実は、我々が知っているかどうかにかかわらず、はじめからそこに存在して、いつまでもそこに存在し続けているのではないか？

この世のあらゆる証明は、つまりは自明な物事の検証プロセスに過ぎないのではないだろうか？

はくは夏休みの自由研究のことを思い出した。一匹の大きな蟻をジャムの空き瓶に入れて飼つた、あの自由研究のことだ。「蟻は砂糖水を舐めた。蟻は砂糖が好きみたいだ」とはくは言つた。教師ははくの自由研究にBを付けた。その年一番優れた自由研究として表彰されたのは、夏休み中毎日動物園に通つて、カンガルーを観察したというものだった。その自由研究をやつた子どもは、全校児童の前で校長先生から激励された。「蟻やアサガオを研究する児童が多いなか、カン

ガルーを観察したのは素晴らしい」と校長先生は言つた。はくはその評価に對して真剣に腹を立てたわけではない。Bという評価は、はくの提出したレポートに對して妥当なものだった。客観的に言つて、蟻に砂糖水をやるだけの研究が真面目に評価されるはずはない。ただそれとは別に、はくはこう思わないわけにはいられなかつたのだ。オーストラリアの学校に自由研究があつたとすれば、先生はこう言つただろう……「カンガルーやコアラを研究する児童が多いなか、蟻を観察したのは素晴らしい」と。

はくが言いたいのは、相対的な珍しさが物事の価値を決めるということではない。それはつまり、あらゆる物事には、平等に価値が存在しないということなのだ。

八

あるときはくは女に向かつて「はくはあなたのことがあまり好きではありません」と言つた。

女は首を傾げた。珍しい建物を細かく検分するように。「どうして？」と女は言つた。「あなたは自分の娘にピアノを弾かせるような母親だからです」とはくは言つた。「はくはむかしから、そういう種類の母親が苦手でした。なにか具体的なエピソードがあるわけではありません。あつたとしても、きつとひとつひとつは取るに足らない、小さな物事だったでしょう。でもそういう小さな物事の積み重ねによつて、ニュ

ーロンが回路を獲得するように、ぼくの中にひとつのジンクスが生まれたのです。つまりそれは『自分の娘にピアノを弾かせる母親とは関わるな』というジンクスです」

「私はそのジンクスに当てはまる母親だったから、あなたは私のことが好きではない」と女は言った。

「はい」とぼくは言った。そしてポケットの中に手を入れた。そこにはあの日受け取った洋菓子、袋に入ったままの姿で残っていた。

「これをお返しします」とぼくは言った。

女は首を振った。「それを返すことはできないわ」と女は言った。

「なぜですか？」とぼくは言った。

「だってそれは、蟻たちに食べられてしまったからよ」と女は言った。「数え切れないほどの大きな蟻たちと数え切れないほどの小さな蟻たちに噛み切られて持ち運ばれて、細かい屑は風に攫われ、鳥たちに突かれ雨に流され、そういう屑も蟻たちが見つけ、すべては広い巣穴の中に運ばれて、そうしてシステマティックに消化されてしまったのよ。ひとつの痛切な悲鳴が、雑多な音に紛れてしまうように」

「彼女に会わせてください」とぼくは言った。

「そのためなら、何だってします」

「何だってします」と女は言った。「何だってできるのなら、何だってすればいいわ。あなたが今まで蓄えてきたいくつもの理由や原因や言い訳をどれだけ積み重ねても、太陽までは

届かない。分かるでしょう？ それはスケールの問題じゃない。それ以前の問題よ。あなたが見つけてきたものは、はじめから0と1の間にしかいられないものなのよ」

「言葉をいくら並べ替えても、同じ文字数にしかないように」とぼくは言った。

「先へ進むには、書くしかないの」と女は言った。「もちろんそれは、あなたに具体的な痛みを残すでしょう。それは自分の身体を削り、血肉を削り、魂を削る行為なのだから。それでもあなたには書くしかない。先へ進む方法は、はじめからそれただひとつしかないのよ」

「二つ勘違いしていたことがあります」とぼくは言った。「まず第一に、ぼくはあの女の人の顔を見なかった。よく覚えてるんです。あの日の朝、横断歩道の道が寂しくて、ぼくはずっと泣いていた。擦っても擦っても涙が溢れてきた。そのせいで、世界は半透明のフィルターを被せたように見えた。その顔を見られなくなって、ぼくはその人の顔を、口元だけしか見なかった」

ぼくはその女の人の、上品に曲がった唇を思い出した。新月の二日前のような、整えられた唇。

「第二に、ぼくはあなたのことをよく知っている」とぼくは言った。「あなたは昔から、ぼくを慰めるために小さな嘘をついてくれた。ぼくはあなたの優しい声をよく覚えています」「もう行きなさい」と女は言った。「これはただのあなたの夢よ。夢はあなたに重要な示唆を与えてくれるかもしれない

い。でも夢は、決して本当のことではない。そこには整合性もなければ連続性もなく、時系列だって存在しないの。夢と現実の区別がつかなくなる前に、あなたはここを出ていかなくてはならない」

「さよなら」とぼくは言った。そして短く手を振った。

「さよなら」と女は言った。「あの子の名前は覚えてる?」

「れんげ」とぼくは言った。それは間違いなく彼女の名だった。

九

ぼくは高校生になり、三年振りに、れんげの家の前を通った。中学生の頃は、その家の前を意識的に避けていた。どうしても通らなければならぬときには、耳を塞いで足早に通った。正面から見るとれんげの家は、彼女と両手を繋いだ日から、まるで変わっていなかった。当然だと思う。建物というのは、そう簡単に朽ちるものではない。たとえどれだけ深く沈んだ人々をその中に囲っていたとしても。

犬の鳴き声は聞こえなかった。春の穏やかな日はまだ遠く、家並みの影に浮かんでいた。子どもたちがあざけ合いながら通りを過ぎていった。二台の自転車と一台のトラックがぼくとその家の間を抜けた。住宅地の鳥の鳴き声。手のひらに吹きかける息が微かに白く色づく季節。ぼくは自分の両手に揃った、十本の指を眺めた。そしてかつてその手が握った、

彼女の手の感触を思い出した。犬の鳴き声はしなかった。時間は七時二十分になっていた。立ち去ろうと思ったときに、その家のドアがゆっくりと外に開いた。

「れんげ」とぼくは言った。彼女はぼくを振り返った。「あお」と彼女は言った。変わる信号はそこにはなかった。

十

「私、あなたにはもう会えないと思っていた」とれんげは言った。「ごめんなさい。今は、嬉しいとか、怒ってるとか、そういう気持ちにはなれないみたい。ただあなたに会えたことが、変な言い方だけれど、よく分からなくて、どうしてあなたは会いに来てくれたの?」

「理由なんてないよ」とぼくは言った。

「私に会いたくなつたから、会いに来てくれたってこと?」
ぼくは曖昧に微笑んだ。「はつきりとした意思を示さないほうが、上手くいことだってある」

「ふうん」と彼女は言った。「あなたも大人になったのね」
「まあね」とぼくは言った。「もう宇宙図鑑は卒業したんだ」
「K265」と彼女は言った。

れんげの制服を見たとき、ぼくはとても驚いた。彼女の通う高校は、ぼくの通う高校と同じだった。
ぼくとれんげはしばらく無言で歩いた。横断歩道を渡り、かつて通っていた小学校を通り過ぎた。

「私ね」と二本目の大きな通りに差し掛かったとき、彼女は言った。「あなたが二度と私に会いに来てくれなかったとしても、あなたの名前は覚えていたと思う。あなたって、別に印象的な名前というわけでもないし、ありふれた名前ではないけれど、覚えやすい名前というわけでもないじゃない？でも私は、あなたの名前だけは絶対に忘れなかったと思う。世界中のあらゆる人が、あなたの名前を忘れたとしても」

「手を握ってもいい？」とぼくは言った。

「別に痛くないわよ」とれんげは言った。

「指が何本かないってだけで、それ以外は他の人と全く同じよ。感覚だってちゃんとあるし、残った指はちゃんと動くわ。たまに不便なことはあるけど、困ることってほとんどないの。意外よね」

ぼくは彼女の三本の指のない右手を左手で握った。それからまたしばらくの間、無声映画のような沈黙が続いた。

「あなたが私の手を握った最後の人になるんだと思ってた」とれんげは言った。

「君の直感は正しい」とぼくは言った。

十一

その日の放課後、ぼくとれんげは教室に残って、これまでのことを話した。

れんげは自分の失われた指にひとつひとつ、名前のような

ものを付けていた。左手の薬指がえま、左手の中指がじゃど、左手の人差し指がるいず、左手の親指がありす、右手の人差し指がくろえ、右手の中指がりな、そして右手の小指がかとれあ。

「これは私が名付けたの」と彼女は言った。

「そういうのって素敵じゃない？ 自分を通り過ぎていくすべてのものに名前を付けて覚えておくのよ。生まれてから死ぬまでの間に、とてつもない長さの名前のリストができるでしょうね。もちろん名前だけを見て、それがいったいなんなのか、すぐには思い出せないかもしれない。でもそれに名前を付けたという事実は決してなくなるらないの。私とその名前がそろったら、そこには事実として、ただひとつのものが規定されるのよ。それはもしかしたら、まっしろで小さな可愛い犬かもしれないし、ぺちゃんこにつぶれた左手の中指かもしれない。でもいずれにせよ、それはすでに私を通り過ぎてしまったもののなの。そしてそれが誰からも見向きされなくなつたとき、それがかつて存在したことを証明できるのは私と私の付けた名前だけなのよ」

ぼくはそれについて考えた。彼女はきつこう言いたいのだろう。『あなたが私に会いに来たのは、私があなたのことを覚えていたからだ』と。それはおそらく半分だけ正しい。「要するにね、それはこういうことなの」と彼女は言った。「あなたにはあなたのやり方があるって、それは私のやり方とは違っていた。ね？ まとめてしまえば、こんなに簡単なこ

とはないでしょう？ ただ私たちは、かつて、そのやり方の違いを認めることができなかった。いいえ、認める必要なんてないわ。ただ、そういうものが存在するということを受け入れさえすれば良かったの。でもかつての私たちにはそれができなかった。だからそこに罪が生まれて、罰が生まれて、私は指を失った。これはそういう話なのよ。もちろん、私の理解ではね」

「罰」とはよくは言った。辞書の見出し語を読み上げるように、淡々とした響きだった。

「ぼくたちが罰を受けるとすれば、それはぼくとれんげの考え方が違ったからじゃない。ぼくたち二人が、二人とも間違えてしまったからだ。ぼくたちは幼く、未熟だった。だからぼくたちは、お互いに違った方法で、物事を抱え込もうとしてしまったんだ。ぼくが言いたいのは、つまりこういうことだ。人は決して、ひとりでは生きていけない。ひとりの人間の完璧で強固な世界は、羨まれることはあっても、固執されることはないんだ」

彼女はよくに左手の小指を向けた。「ねえ、指切りしましょう」

ぼくはれんげに左手の小指を向けた。

十二

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの作品K

265は、十二の変奏曲からなっている。原曲はフランスの古い歌曲で、多くの場合、若い少女の悩みを綴った短い歌詞が、時候の挨拶のようにそつと添えられている。その歌詞について考えるとき、ぼくはいつもありあわせの絵葉書に走り書きされた、日付入りの伝言をイメージする。「九月六日、そちらに帰る」とか、そういうなんでもない伝言のことを。その歌詞の無数にあるバリエーションのひとつは、こういうものだ。

Ah! vous dirai-je, naman
 (教えてくださのお母さん)
 Ce qui cause mon tourment;
 (私はどうして悩むのか)
 Depuis que j'ai vu Citandre
 (優しい優しいあの人に)
 Me regarder d'un air tendre;
 (出会ってしまったその日から)
 Mon cœur dit à chaque instant
 (私はいつも悩んでいる)
 Peut-on vivre sans amour?
 (ひとりでは生きていけないと)

(中区)

「市民文芸賞」

スマホ

嘉山 春夫

山田紀夫の携帯電話に親族友人知人からの着信は減多にない。発信もない。毎日使う携帯電話の機能は歩数計だ。かかりつけ医に、目標は一日八千歩プラスマイナス二千歩だと伝えた。「六千歩ならいいでしょう」と言われた。マイナスを採用する理由はとんとわからなかったが「アハッ」と息で反応した。

通信機能のキー操作は概ね一月に一、二度だ。「電気通信事業者」から届く一方的なメッセージへの対応だ。この作業は携帯電話が正常動作をしているチェックになる。【今月の料金が確定しました】案内文に従ってキーを押し進めると「暗証番号」を求めて来る。どの枠に数字を入れるのか、あれこれやってみようと思うが、そもそも暗証番号を失念している。【忘れた方はこちら】とくる。即刻削除して待ち受け画面に戻る。暗証番号はどうせまた忘れる。料金の引き落とし

は後日のがき通知で十分だ。適切な期間を空けてまた通信事業者からメッセージが届く。【現在の携帯電話は間もなく修理などのサービスがお受け出来なくなります。今がお買い換えのチャンスです】それ以上は進めず削除する。何事もなかったように歩数計だけが働く日々に戻る。小半年ほど経った。【当方からの送信メッセージは受信できていますか】随分親切なサービスだ。さらに半年が経った。【お客様お使いの携帯電話は通信方式が変更になります。二千二十四年四月以降は使用できなくなります】

アナログテレビが放送停止になるため、デジタルテレビに買い替える時期があった。人々の懐具合などお構いなしだ。一方的に技術の進歩を押し付ける。購買意欲を煽って経済を引き回す。為政者の秘技と科学技術の進歩が融合する。無いものを作り出し、既存のものを消し去って、高性能な代替品

を強要する。

「本日はご予約のご来店を頂きましてありがとうございます」

携帯ショップは予約をしなければ対応できないほど繁忙している。医院も歯科医も予約が当たり前だ。客の待ち時間短縮が目的だ。

「これ、使えなくなるらしいので廃棄してくれないかな」

「まあ、もったいないですわ。お客様。もう携帯はご不要だとおっしゃるのですか」

「そうだよ。やたらに捨てて個人情報漏れると困る。保存内容を全部消去して貰いたい」

「そうなんですネ。お客様。一つご提案させていただきます。携帯電話からスマホデビューは如何でしょうか」

山田紀夫は「そうなんですネ」が嫌いだ。納得か、確認か。疑念が分らない。「させていただく」も慇懃無礼で不快だ。

他に「ご飯」は「食事」にしてもいい。「確かに」も耳障りな返答だ。テレビの中からよく聞こえてくる会話だ。

「携帯がいらない人にスマホはなからう。歩きながらや、走る電車の吊革を握って、一体皆さん何を見ているのかな。私は紙の新聞で十分だ。テレビのニュースは二日も三日も同じ話題を繰り返す。新聞も一日おきで十分だ。大体、毎日家にいるのだから、固定電話が最適だ。たまの通話と言え、死んだ知人の通夜に行くかどうか、生きている仲間うちの相談

程度だ。それに、知り合いでもない相手からの売り込み電話は、全くの暴力行為だ」

「お客様。見ず知らずの方とのやり取りで、背中を押されることもあるそうです。ご自分の承認欲求がことのほか満たされるようです」

「今更、自己主張もないだろう」

「私共はお客様の暮らしがより豊かになりますようにと、スマホをご紹介させていただいております。きっとご満足頂けると思います」

「貴女、若いのにずいぶん敬語を操るね。差し詰め『いづれにしても』あなたは販売促進『そういった事』を『しつかり』やっているのでは『ないでしょうか』つてとこかな」

山田紀夫はおどけて時の国会答弁を真似た。

「いづれ私が死ねば無条件に解約になるのだから『そう言った事にして』頼みます」

一般公衆回線の携帯電話は自動車電話に始まる。これは財界、政界の多忙層の移動通信手段として持てはやされた。当時週末になると自動車電話の回線はたいそう混雑した。発着信は官庁街や老舗料亭、高級クラブに集中したと聞く。普通のサラリーマンはポケットベルの信号を受信すると、公衆電話を探し発信者との通話を確保した。ポケットベルに文字表示が出るようになると、女子高生間の特殊な文字通信、符号通信が流行った。多忙層は移動中に肉声の双方向同時通話が

可能だったが、一般人の移动通信は不完全なものだった。その後、自動車電話は肩掛け電話機に進化し「携帯」の態をとるが、あまりの大きさと、重さのため秘書係が持ち歩いた。加えて契約保証金も通話料も自動車電話並みに高額だった。そのため一般庶民に普及しなかった。

やがて電子部品の発達により片手で握る携帯電話が生まれた。基地局を含む無線通信網はあつという間に整備された。電線の敷設がない分、廉価にして短期間に構築された。

名札に店長とある大柄な青年は、山田紀夫を接客する女性販売員に近寄り、腰を屈めて耳打ちをした。女性は軽く頷いて微笑んだ。

山田紀夫は女性販売員の藍のベストと白いブラウスが清楚で健康的だと思った。現役時代、毅然と事務処理をこなす女性社員の姿を思い出す。この窓口の女性もベストと同色のタイトスカートだろうと想像した。

「お客様。取って置きスマホをご紹介させていただいてもよろしかったでしょうか」

「おおお、よろしかったよ。面白い話なら」

「少し長くなりますがお客様のお時間はよろしかったでしょうか」

山田紀夫は現在を過去形で語る「よろしかったでしょうか」にも違和感を持つ。

「時間は売る程あるさ。逆に貴女の営業業務に支障はないの

かな」

「いえ、大切なお客様との重要なコミュニケーションです」

「ツールの販売だけじゃないのだね」

「はい。欲しい方にお売りするだけでは営業職とは言えませんが、欲しくない方に欲しくなって頂くのが営業です。突然ですが、お客様は作家の井上靖をどのように思われますか」

「貴女達にとっては郷土の誇りだろう。私の頭にも井上靖の養分が少し蓄積している」

「『通夜の客』はお読みでしたか」

「『猟銃』『闘牛』辺りの初期の作品だったかな。『明日檜物語』の向こうを張って、私は座右の銘を『待てば椎』にしたが、精神衛生上、とても不健康な生活信条だと気づいた。以来『待つ』のは出来るだけ短期間に留めた」

「井上作品の年譜までは分かりません。新聞社にお勤めだった偉い方が脳溢血で亡くなりました。その通夜にご遺族の誰も知らない女性が見えたと言うプロログです。故人の奥様にご遺体の脇を立った隙に、その女性が白い打ち覆いをそつと上げて、故人とお別れする場面がありました。この時ご遺体の眉がピリッと動いたそうです」

「そうだったかな。通夜に来た女性が盛んに手紙を書いていたな。内容は故人にとって都合の良い言い訳、正当化だった気がする」

「お客様。ここではその筋書きより、通夜の客が奥様に話を伝える『手段』が重要です」

「その通夜の客は故人の婚外の恋人だったと記憶している。文学は不義密通を耽美する。読者はその切なさを味わいたいのだろうか」

「はい。故人の婚外恋人は奥様にお手紙を書きました。故人にも書きました。こちらは独白の形をとりました。お客様。次ですが、映画『慕情』はご覧でしたか」

「それもまた随分古い話だね。観たよ。戦場新聞記者には本国に離婚に同意しない妻が居たと記憶する。また面倒な婚外恋愛の話だね」

「新聞記者と女医さんの悲恋物語です。香港が舞台でした。このラブストーリーも粗筋は要りません」

「筋書きより大事なものは、いったい何だね」

「これも恋人同士の意思疎通の『手段』です」

「会っている時は会話だろうし、遠く離れて居れば、そう、相手が戦場なら手紙しかないだろう。あの時代、香港島と朝鮮半島を繋ぐ携帯電話回線などなかったろうから」

「この映画もコミュニケーション手段は手紙です。新聞記者が戦場で生存していた時に書いた手紙は、流れ弾に当たって亡くなった後も、女医さんの手元に毎日配達されます。まるで日記です。死者から生存者への手紙です」

「そうだったかな。私は女医さんが小高い丘の頂上に立つ、一株の頼りない古木に背を預け、東の間の逢引を待つ場面が哀れだった」

「『慕情』は死者から生存者への直接的な信書です。『通夜の客』は、故人が生存する奥様宛に代筆者を介して伝えた手紙です」

「香港島への郵便が配達される前に朝鮮半島の記者は死亡した。単なる発着の時差だろう」

「いいえ、女医は記者の死を新聞記事で知っていました。だから死者からの手紙です」

「『通夜の客』は、死んだ男の婚外恋人から、その男の奥さんへの告白の手紙だろう。だから生存者から生存者への手紙じゃないか。逆に生存者から故人宛ての伝言だとすれば、女性の独白の部分じゃあないかな」

「『通夜の客』は打ち覆いを取った時、故人の眉がピリッと動きました。気のせいではありません。奥さんへのメッセージを依頼する信号です。それを受信した『通夜の客』は故人との田舎生活を掘り起こしながら、奥様宛にお手紙を書きました。これは明らかに故人から生存する奥様への代筆による実直な報告です。故人は奥様に『誠実』を果たしました」

「果たして、それは誠実だろうか。奥さんにとっては迷惑千万だろう。不愉快な話だ。死んでも黒塗りにしておく話じゃないかな」

「それではお客様。取って置きスマホをご案内しますね。クラスは『プラチナ』です」

「やっと商売の話か。これじゃ予約も必要だな。医院では予約しても三十分待合室に居て、やっと診察室に呼ばれて先生と三分。終わって会計や処方箋でまた二十分待合室だ。この

窓口は全てがコミュニケーショントクだね」

「いつも次の方のご予約まで一時間とります。あと三十分くらいで終わります」

「カタログには載っていないスマホなのかい」

「はい特別な方にしかご紹介しておりません。生涯悲恋に憧れた方、その上、誠実な方だとお見受けした場合紹介しております」

「ちよいと待ってくれ。私に悲恋の経験はない。蚊の涙、蚤の小便^{うしん}ほどと憧れない。貴女^{あなた}に言うことでもないが、知人の勧めで見合い結婚をした。安給料を家内と一緒にやり繰りしながら二人の子を育てた。生活臭^{しやうくさう}芬々の年金生活者だ。仕事もしていないのに、ささやかなお金が定期的に貰える立場だ」

「年金は在職時の積み立てと、ご褒美^{ほうび}だと思えます。お客様、このプラチナスマホをご紹介出来るのは悲恋の経験者ではございません。お客様の悲恋がこれから先成就するように『しつかり』支援させていただくツールです」

「恋が成就できなかったから、悲恋と言うのだろう。悲恋に憧れもない私に何故勧めるのか分からないな」

「だって『通夜の客』をお読みだったでしょ。それに『慕情』をご覧になりました」

「それだけで私には『プラチナスマホ』が良いと決めつけるのかね」

「はい、お客様、この二作はリトマス試験紙のように判定します。お客様は間違いなく悲恋憧れ派で、誠実な心の持ち主

でいらっしやいます。普通の方は二作ともご存じありません。この作品だけでなく、他にも判定用物語は準備してございますが、だいたいこの二つで大丈夫です。膨大な調査データを人工知能が判断しています」

誠実さはともかく、紀夫はプラチナスマホの奇妙な機能を説明する販売嬢に応じた。

「はい、お客様。ここにご紹介するプラチナスマホは天上界から現世宛てにメールの送信が出来ます」

「何じゃ。そりゃ。死者と通じるスマホか」

「音声通話は出来ません。文字送信だけです。でも、現世の方から天上界にいらっしやるお客様宛の、上りメール^{のぼりメール}は届きません」

「一方通行か」

「いえ。双方向です。天上界の方は現世の方の希望や問いかけを、日々の『祈り』で承知されます。上り方向の情報伝達^{のぼりほうほう}は従来通り生存者の『祈り』になります。上り下りの伝達方法は違いますが、双方向通信です」

「死者との語らいは『イタコ』や『口寄せ』が仲介している。それが天上界から現世の人に直接メール送信が出来ると言うのだね。嘘だ。非科学的だ。ホモサピエンス創世のころの『物語の創作』でもあるまいし、今はそれから二万年経った、技術革新の時代だ。虚構の科学技術物語は通じないよ」

「お客様、一例をご覧ください。私の受信メールです。【早苗ちゃん。お誕生日おめでとう。プレゼントはあなたの希望

通り、少し色白にしようね。色素遺伝子をいじってみるよ。

お婿さんは今の交際相手で良いと思うけど。じゃあまたね△「私の亡くなったおばあちゃんから届いたメールです」

「おお。微笑む絵文字は天冠の三角鉢巻だ。こりゃ確かに『イタコスマホ』だな」

「このスマホは自動的に特約生命保険が付きます。お香典程度の額です。故人の除票をお持ちいただければ、ご契約時の受取人口座に保険金が振り込まれます。スマホは回収してこちらで黄泉の国との回線を設定いたします。今までの個人情報メールアドレスをそのまま使います」

「天上界には個人持ちのスマホが有るのかね。それにその機器代は如何ほどかな」

「はい。無償です。『韋駄天』様のお仲間が跳び廻って配っているそうです」

「天国でも、地獄に落ちても使えるのかな」

「はい。天上界に天国地獄の区別はございません。どなた様も霊権が手厚く保障されています。極楽浄土の霊民です。地獄は生存中に善を積んでいただくための脅迫仮想空間です。もしかししたら、死への恐怖心が生み出した都市伝説かも知れません」

「パケット通信料金はどうかなのかな」

「お客様のメールを受け取った、現世の方にお支払い頂きます。料金受信人払いです。うちのおばあちゃんは通信料を私に負担させまいとして、いつも無料のショートメールです」

「そうか、いつごろまで天上界で使えるのかね。例えば霊民になつて三年間までとか」

「永遠です。いずれ現世の方々も黄泉の国の霊民になられます。そこでメールは不要になります。天上界の内々では電話もメールも必要ありません」

「天上界は以心伝心か。そうやって現世で通信料を稼ぐ仕組みだな」

「お客様。随分立ち入った事を伺いますが」

「ああ、良いよ」

「もう遺言書はお済みでしょうか」

「いや書く気はない。遺された者で話し合えば良い。死んでからの課題を死んだ私が事前に指示するのはやり過ぎだ。相続人達で大いに議論するのが良いと思っている。と言つても問題になるほど相続財産はないよ」

「お客様。例えば十萬円の相続でも相続人が二人、三人いらつしやると必ず揉めるそうです」

「揉めるが良い。そこでその者たちの本性が露呈する。人は困ったことに直面した時、どのように解決していくか、その過程で人柄が判る。隠していた本性が出る。特に金の問題ではあからさまに晒される。『日々好日』だと誰もが善良な人で居られる。そこでは真底の実力や人柄は分らない。窮して初めて不埒な『魔』が差す人も居る」

「お客様。このスマホは『黄泉の国』から有効な遺言書が伝えられるようになります。死亡してから相続人の作つた『遺

産分割協議書』を故人が修正できます。理不尽でも、不条理でもなく、とても合理的で公平な遺言書になります。天上界のお客様のほば意のままです。有効期限は死亡後十年以内です」

「ほう、黄泉の国の私が生存者達の作った『遺産分割協議書』を修正するのだね。全くもって嘘臭い。だけど相続法はどうなんだ」

「はい。なによりも有効な遺言書として扱われます。現在総務省、デジタル庁、法務省、財務省で立法化を進めています。ただ、まだ結論に少し時間を掛けたいようです。課題は『遺留分侵害額請求権』の扱い方だそうです。故人の家族を守るための遺言権限の制限です」

「嘶は面白いぞ。現状は死んでから『こいつはこんな奴だったのか』と判っても手の施しようがない。諦めるかイラついて周囲に八つ当たりするかだ。よし、そのスマホに乗り替えようじゃないか。『イタコススマホ』だ。『プラチナ』だ。私は黄泉の国から現世に恋慕の気持ちを伝えることはない。しかし死んでから遺産相続をいじる機能はグッドだ。『買い』だ。まさに新作落語だ。嘶の『サゲ』が楽しみだ。さあ、騙されようじゃないか」

「まあ、お客様を騙すなんて。プラチナスマホの遺言は生前に書かれた最終日付の遺言書に勝ります。生前、遺言書をお書きになっていなければ天上界から相続人に遺言メールを送りください。本日はプラチナスマホをお買い上げ頂きあり

がとうございました。おかげさまで私のノルマは十分達成出来ます」

「大変だね。こんなものもノルマがあるのかね。金融商品でもないのに。営業マンの仕事は辛いね。きついね。同情します」

「このスマホは少額の生命保険が特約になっておりますので、金融商品です。確かに営業職は厳しいです。でも、お客様と立ち入ったお話が出来る楽しい仕事です」

山田紀夫のプラチナスマホに最初のメールが届いた。文字が大きく読み易くなった。

【お久しぶりです。今月は月末に時間が取れそうです。お会いしませんか。ご都合の返信をくださらないかしら】

山田紀夫は「柳原」と言う発信者に記憶がない。先方のアドレスのドメインからあの携帯電話の販売嬢ではないかとも想像した。返信せずに放置した。

【ごめんなさい。私のことお忘れですか。パリの小さなホテルのバーで偶然ご一緒した柳原です。藤田嗣治で盛り上がりました。とても懐かしいです。何気なくメアド一覧を繰っていたら、あの夜を思い出しました。ご都合がよろしければお会い頂けませんか】

二度目の不審なメールだった。ロマンス詐欺だろうとして、そのまま放置した。

山田紀夫の海外合弁会社への技術支援出張は、幾つもの国

を跨いで飛び回るものだった。しかし仕事でも観光でも欧米諸国の首都に立ち寄ったことはない。ロンドン、ワシントンDC、パリも然りだ。手の込んだ特殊詐欺がどの様に金品を搾取するのか興味があつたが、一日置いて受信拒否登録をした。

「通信の秘密」という法に守られた個人のコミュニケーションツールは犯罪の巢窟にもなる。スマートフォンは善に対する賢さの提供だけでなく、巧妙な悪知恵にも手を貸す。加えて通信範囲の拡大に反比例して、対面による肉声会話は浅く希薄になってしまった。

その後もこれと言った有益な情報の着信はなかった。「名簿屋」から番号やアドレスを入手するのだろう。広告情報は繰り返し着信する。一件毎に受信拒否登録をするキー操作が、山田紀夫のスマホとの付き合いだった。

山田紀夫がプラチナスマホに乗り替えて受信拒否登録の操作が稀になってきたころ、昼食後、日課のウォーキングを進めていた。春めいた風を全身に浴びて走ってみたくなった。桜の膨らみ具合を観ようと気が逸つた。総合運動公園を一回りして児童プールに向けて切通しを駆け降りた。息が切れた。胸から背中にかけて激痛が走った。額に油汗が湧き出た。膝を折って横臥した。土手は薄い青臭さを放っていた。通行人が途絶える時間帯だった。十分が経過した。さらに一時間後、通りがかったウォーキング愛好家が救急車を呼んだ。心

肺停止状態として病院に運ばれたが、検視は心筋梗塞だった。定期的に循環器内科に通院していた結果だった。山田紀夫を知る者は「ストレスとコレステロールを溜め込んで生き急いだ。慌て者メ。貯めて良いのは金銀財宝だ」と言つて紀夫の死を惜しんだ。

紀夫の妻、長男夫婦、長女夫婦、山田紀夫の古里に住む弟夫婦は、病院の手配した葬儀社の、無用に広い一室で通夜を営んだ。

「家族葬でお願いします」

「承知しました。明後日、葬儀の始まる前までにお見積りをご用意いたします。それに見積り外になりますが、僧侶のご手配は如何いたしましょうか」

「納棺と火葬の際に読経をお願いします」

「宗派を教えてください」

「浄土宗です」

暫くして黒服の男性が長男に尋ねた。

「この地は浄土宗が少ないため、なかなか明後日に都合の付くお坊様がいらつしやいません。所縁ある徳川家康公が浄土宗だったため、皆さんは遠慮をなさつたと聞いております。曹洞宗ならご手配できます。如何いたしましょうか」

長男は「厭離穢土欣求浄土」の旗印が戦場に翻るテレビドラマを思い出した。

「曹洞宗で構いません。出処は一つです」

「承知しました」

「読経料は如何ほど包むものでしょうか」

「お志で良いと思います」

「その志の代価が分からないので教えて頂きたいのですが」

「はい。普通五万円ほどです。それなりの読経が頂けるようです」

「分かりました。当日直接布施します」

僧侶は山田紀夫が行旅死亡者であるかのような結びの経を手向けた。

「菩提寺に戻って、ゆっくり休まれるように」

元々山田紀夫は県外の出身だが、この地に職を得て一家を成した。山田家先祖代々の菩提寺は県外の中山間地域に在る。山田紀夫の弟がその地で墓守をしている。まずこの地で火葬目的の家族葬を行い、その後菩提寺に遺骨を納める「埋葬法要」に、親類縁者が集まる予定にした。

山田紀夫には長男と二つ年下の長女が居る。二人とも四十代前半の既婚者だ。孫はどちらにも居ない。長男夫婦は紀夫の家の目と鼻の先に居住している。妹の長女の住まいは県東部に在る。長男夫婦は紀夫の所帯によく遊びに来る。妹夫婦とはここ十年交流は希薄のままで。二人の子の養育に際し山田紀夫はチャンスを同等に提供した。一方同じことをさせないように工夫した。家計の許す範囲の習い事では長男が金管やピアノに興じ、長女は水泳やバレーボールに遊んだ。通学

先はなるべく異なるように仕向けた。つまるところ長男は音楽を長女はスポーツを楽しむ成人になった。子等の個性を引き出し、独立心を旺盛にしようとした。この紀夫の目論見は果たされた。長じて長男は音響機器メーカーに職を得た。長女は私立中高一貫校に体育教員の職と配偶者を得た。

長男は母親の依頼で遺産目録の整理にかかった。親の経済に初めて立ち入る戸惑いは隠せなかった。簡単に済ませたいので、相続権を放棄したかった。それにしても書類の作成は必要だった。母親と大きめのボール紙の菓子箱三個を開けた。色褪せた蓋にそれぞれ【返納証書類と除票提出先】【相続遺産一覧】【給与明細・辞令】とマジックインクで表書きが在った。遺言書はなかった。長男は最初に相続遺産の箱を開けた。預貯金通帳、土地登記簿、固定資産税通知書、厚生年金証、生命保険証が重なり合って潜んでいた。長男はこれらを拾い出し遺産目録を作っていた。

「母さん達の住んだこのマンションの登記簿が見当たらないけど、これからも独りでここに住んでしょ」

「このマンションは生前贈与で私の名義になっているわよ。これからもここに住みます。あなた方と同居するつもりはないわ。私が死んだら、兄妹二人で良く相談して頂戴。私も遺言書は書かないわね」

「それじゃ、この菓子箱の中身だけで相続財産全部だね」
相続遺産の総額は紀夫が父親から相続した古里の宅地を加

えて一千二百万円だった。

「俺は母さんが全部相続するのが良いと思うけど。妹はどう言うかな。記録に残したいから、遺産目録に何いの手紙を付けて出してみるよ。簡易書留で送る。だけど父さんの古里の宅地は随分評価が低いね。たった五百万円だよ。六百坪もあるのにさ」

「厚生年金の手続きは私が自分でするわよ。駅南の西年金事務所で良いんでしょ」

「そりゃ助かるな。ついでに市役所へ寄って国民健康保険証に、除票を付けて返してくれないかな。福祉課から葬祭補助金が出るような気がする。税務課にも届けなきゃいけないけど、これも頼むよ。今後、市民税は母さん宛になるはずだ。除票取るのは市民課だよ」

「いいけど、役所の戸籍係は父さんの死亡を知っているのに健康保険課も税務課もそれぞれ届けるのだね。縦割り行政って面倒だわ」

「自動車運転免許証、アマチュア無線従事者免許は除票を付けて俺が返しておくよ。仕事で使った免許が三つあるけど、自然消滅で良いかなあ。念のため電話で聞いてみるか。パスポートは記念品だね」

「終身の生命保険は支払いがとくに終わっているから、死亡の時はささやかなものよ。受取人が私だから自分で処理するつもりよ。そうそう、変な保険が一つあるけど。スマホにくっ付いている死亡保険、十万円だそうよ」

「それも母さんが受取人だから相続遺産にはならないな。母さん自分で処理だね。それにしても辞令の枚数が随分多いな。四十年も海外事業に籍をおいていると、職場異動辞令、職位辞令に給与辞令か、こんなに沢山貰うものなんだ。俺なんか二十年で五枚キリだ。父さんの会社の組織間異動はとてつもなく激しいな。外からはちっとも見えなかったけど」

「父さんは世界中飛び廻っていたからね」

妹から長男宛てに配達証明の返信が届いた。【遺産目録を送って頂き有難うございました。父の遺産すべてを母が相続する案には同意できません。法律に沿った配分の相続を希望します】

長男は母にその手紙を見せた。

「そう言うと思っていたわ。その通りにすれば良いわよ」

「だって俺も妹所帯も生活に困窮しているわけじゃないよ。これからの母さんは自分の老齢年金に、遺族年金として、父さんの厚生年金の四分の三が加算されるだけだよ。日々はそれでやっていけると思うけど、一人生活をどんなに頑張っても、昇給だの賞与はないよ。何年そんな生活が続くのか見当もつかないでしょ。たまには温泉旅行にも行きたくなるだろうしさ。これから先、大病を患うかもしれないって不安は、お金で安心しておくしかないでしょ。だから全部母さんが相続しても罰は当たらないよ。ここに来たら一円だって多く持っている方が安心だよ」

「気持ちにはありがたいけど、法律が有るのだからその通りで良いんじゃないの。住む所もあるし。そのローンも終わっているし、そんなに心配することないわよ」

「そうは言っても世間の常識的な相続は、配偶者に全部ってことだと思っけどな」

「相続人の総意が得られないのだから、私が二分の一、あなた方子供は四分の一が二つで良いことにしましょ。私は生理的にあの娘の連れ合いと仲良くなれないのよ」

「あっさりしているな。分かった。じゃあ不動産の分け方だね。金額だけで言えば母さんが六百万、俺達子供が三百万ずつ。五百万相当の土地をどうするかだな。母さんが土地を相続して、俺達が五十万ずつ母さんに渡すと割り切れるんだけど。俺が相続放棄すれば妹が七百万、母さんに百万の現金を渡せばいいことになるのかな。それより俺も相続して、その金でこのマンションをリフォームするのがベストだな。そうしよう」

「父さんには悪いけどあの古里の土地ねえ、私には面倒だわ」

「そうだね。売った現金を分割するって方法は無しにしよう。買いかねないだろうし」

「あなた達の共用別荘を建てたらどうなの。高原だし温泉も近いし。私にはお荷物だけど土地は売っちゃだめよ。私が相続することになってもそのままにしておくわよ。私が死んでから考えて頂戴。おじさんに上げて、町に寄付してもいいわよ。断られるかしらね」

「俺も妹のご亭主は苦手だから共用の別荘なんか考えられないな。それに別荘を持つなんて柄じゃないよ。あそこはここから遠過ぎる。もう過疎を辿ってるんでしょ。父さんは先見の明があつたよ。この街に根を下ろしてさ」

「だけどお墓もあそこにあるし。あなたの退職後はあつちに移住すればどうかしらね」

「分割案をいくつか妹に送ってみるよ」

「揉めるようだったら、母さんは要らないよ」

長男は父の古里の土地を評価価格にして、現金をこれに加算して分割案を妹宛に送った。

一月経った。妹から返事は無かった。記録に残すため、連絡は手紙だけにして、電話はしなかった。

「母さん。妹から遺産分割案の返事が来ないよ。三案書いて出したけど、どれも気に入らないのかね。まもなくあの土地の固定資産税の納付月が来るけどどうしたものかな」

「ほっときな。私はあのご亭主が足を引く張っていると思うわ。臆病なのに独善的だからね。何考えているか分かりやしない。横着で強情でね。他人の気持ちなんか察しようとしないうわ。無礼な婿だよ。以前ね、自宅の草刈りと剪定作業を父さんに手伝ってくれて、あの娘が言ってきたね。婿は草一本筆る気もなくてさ。草刈り、剪定の三日間、部活の合宿だって留守にしたのよ。その後お礼の電話もありやしない。父さんは婿の両親を呼びつけて現状を話した。『独りよがり、

社会性の欠如』だって。それを伝え聞いた婿は周囲に『義父にひどいことを言われた』って言いふらしていたらしいわよ。呼びつけられた親の振る舞いもそれなりだったわ。『どうして再三の来訪依頼に応じなかったのですか』『お宅の娘さんが父は怒りん坊だから行かなくてよいと言ったので』『呼びかけたのは娘ではなくて私です。お宅の教育はどうなっているのですか』『普通に学校に通わせました』『家庭の躰のことです』って、父さんは声を荒立てたわ』

訪れた婿の両親の履物は玄関先に脱ぎ捨てられ、ともに幼児の態だった。

長女の婿についての母の苦言はさらに遡った。

「結婚して三年経って、中古の一戸建てを買いだいたいって言って来てね。さっきの草刈りの庭付きだよ。頭金が足りないって泣きついてね。父さんは『借金の証文を書いてこい』って帰したわよ。自分の経済能力を越える背伸びはするなど言ったつもりだったけど。婿は親子の間で証文が要るのかと呟いて、借用証書を持って来てしまった。あの娘の支援だとして貸すことにしたけど一切返済なしよ。そうやって手に入れた土地も家も、全部婿の名義になっているんだって、まあ、その後は婿の稼ぎでローン返済していくから良いのかもね。だけど、未だに共稼ぎだよ。父さんは最初からあの娘の持参金のつもりだったと思うわ。私達から見たら、『そんな婿』でもあの娘の支えになっているんだらうね。『娘が大変お世話になっております』って気持ちでないじゃないわね」

「他人なら提訴されてもしようがないだろうけど。親子だとどうなるのか分からんな。税務上の課題は額によるな。まあ持参金にしておけば母さんの気持ちは治まるね。俺は非常識の根っこは義弟の両親にあると思う」

「家柄が自慢なのよ。元士族だとか、なんかの時にすぐ言い出すのよね」

「士族だって色々だよ。むしろその自尊心が不幸の始まりになっているかもしれないよ」

「そうね。あの婿はボンボンって人を小馬鹿にした口を利くわね。表情が薄くてね。声が小さくてね。でもあの娘との会話は弾むんだって。そうなら『良し』としなくちゃね」

「思い通りにならないと『士族出』が劣等感に変わっちゃう。誇りと卑屈の両刃だね。ピシャツと戸を閉めて、他者を締め出す。卑怯な自己防衛だよ。そうしておいて駆足で逃げる。面と向かって、課題の解決をしようとしなんだ。出来ないのかも知れないな」

「親の躰と言うより、遺伝子かしら。けど律儀な人も狡い人も出てきて面白いのよね」

「明治維新の失職武士は、大河の堤に繋がる広大な台地を開墾して、私財に出来たらしい。その時、渡河職の仲間も武士の開拓農民に紛れ込んだ。だから刀や槍が伝わっていないや士族出じゃないって話もあるよ。そもそも職業で線引きするのが頂けないな。それにしても妹は亭主の『右へ倣え』だ。よくも高校の教員が務まる夫婦だと思うよ。妹も亭主の士族

出を誇りにしている節があるなあ。そんなもんは毒にしかないのにな」

「あの娘は職場と家庭では、言うことが違うんじゃないのかね。あなたと同じように育てたつもりだけど。父さんの『独立心旺盛』教育が裏目に出たかもしれないわ。『深い孤独感』と言う副反応を持たせてしまった気もするの。あの娘の孤独感を癒してくれるのは、あのお婿だけなのかも知れないわね」

「高校までは同居の親が大人の価値観を子に伝えられるけど、その先は恩師や友達、職場の上司や仲間の価値観、映画演劇や小説、評論などの説く価値観を吸収して、自分のものにしていくんですよ。大人になってから自力で身に付けていく価値観は親に教わったものより重いかもしれないな。離れて行く子の価値観と親の異文化コミュニケーションだな」

「核家族は大家族に比べて他人への思いやりが薄くなるわね。やっぱり基礎は十八歳までの家庭教育だと思うわよ。その後に吸収しようとする価値観の選択は、十八歳まで親のしでかした基礎教育が、ものを言って欲しいわ」

「結婚してからは連れ合いの影響も大きいな。夫婦愛とか言う利害が出てくるからさ」

「そうになると親も兄弟も親友も無力ね。いつも言うけど、貴方の奥さんは出来た人だわ。ご両親ともずっと親しくして頂いて来たわ」

「とにかく遺産相続をほっといたら父さん名義の預金も下ろせないし。相続処理は残された者の義務だよ。権利じゃない

と思うな」

「お葬式代は済ましたけど、生命保険が下りればお釣りがくるわよ。父さんの古里の親族が集まる『納骨法要』で丁度の予定よ」

「そうだ。古里の土地の固定資産税は放置できない。それこそ国民の義務だから。明日父さんの死亡を古里の税務課に届けておくよ」

「土地の名義は亡くなった父さんのままで、固定資産税を私が支払っても構わないらしいわよ。相続所有権の名義の書き換えには時効が有るそうよ。固定資産税を払い続けた人の名義に変えられるって聞いたわ。承知の上なら二十年、知らなかったら十年だって。知らなかった事にして、十年後に名義変更を司法書士に頼む手も有るわよね。私の友達がね、今、時効待ちなんだって」

「それはグレーだな。もう一度妹に日付だけ違って、内容が同じ手紙を出してみるよ。内容証明と配達証明にするから」

「そりゃあ構わないけど、今のままでも私はちっとも困らないわよ」

妹の無言は二か月経過した。父の古里の役場から土地の固定資産税納付者は誰にするのかと、不機嫌な女性の声の電話があった。

長男はこの解決を民間の専門家に頼むのは無駄な出費だと判断した。家庭裁判所の「調停」に委ね、代理人弁護士は不

要とした。ネット情報を熟読し、決断に迷う時は市の「無料法律相談」を予約した。これは遺産額に相応しい低額経費による解決法だった。

両親の戸籍謄本は生まれてから現在に至るまで全て必要だった。天保年間の記載がある毛筆の戸籍謄本まで送られてきた。認知した非嫡出子にも嫡出子と同等の相続権が有ることを知った。遡った戸籍謄本に特異点はなく、配偶者、長男、長女の三名が相続人だった。長男は妹に遺産分割案の手紙を三回送ったが返信は無かったので、今回「調停申し立て」の連絡はしなかった。妹に家庭裁判所からいきなり招集がかかった。裁判は「原告」と「被告」の論争だが、調停は「申立人」と「相手方」に仲介者の調停員が居る話し合いだ。最終の調停成立時以外、両者が顔を合わすことはない。各調停面談は時間をずらして行われる。非公開方式も調停の特徴だ。長男は未体験領域への好奇心が満たされていた。

調停員は男女一人ずつ、書記官一名に長男の四名がテーブルに着いた。男性の調停員が話を切り出した。

「この遺産目録に不足は有りませんか」

「はい。その通りです」

「それでは相続法に従って、お母さんが二分の一、お子さん二人が四分の一ずつという分割方法は如何でしょうか。調停では原則の配分比を基に、どの遺産をどう分けるか調整します。不動産はすでに固定資産税評価額の金額が記載されています。お三人にとっては不動産は重荷だと想像しますが、土

地をお母さんが相続して、お子さん二人が現金五十万円ずつお母さんに支払う分割法は如何でしょうか」

「はい。本日欠席の母もその方法に同意しております。私もそれが良いと思います」

一回目の調停員との話し合いは十分で済んだ。

「次回の調停日程は一月後になります。この日ご都合はよろしいですか」

「はい。その日でお願いします」

次に妹と代理人弁護士が調停室に呼ばれた。長男は下降するエレベーターのガラス窓越しに、控室の妹の連れ合いを見た。

「遺産目録に漏れはありませんか」

「あります。お兄さんには現金の生前贈与があつたはずですが。贈与税が掛からない年間百万円程度の送金記録が長期に渡って、お兄さんの銀行口座にあるはずです」

答える代理人の脇で妹は終始無言だった。

「申立人への生前贈与を遺産相続の目録に追加したいのですね。それでは次回にその旨申立人に伝えましょう」

申立人の長男に家庭裁判所書記官から次回ハコを持参するよう、電話連絡があった。

二回目の調停は長男と妹の代理人弁護士が同席した。妹は欠席した。

「代理人はご存知だと思いますが、調停は遺産目録を相続人全員が承知して、その後分割方法を話し合います。現在長女

さんは目録不承とのことです。従って調停には進めません。長女さんは長男さんに現金の生前贈与があったと発言しています。その証拠提出などは民事裁判で扱います。まず隣の建物の書記官に「遺産確認訴訟」について相談してください。従って今回の遺産分割調停の申し立ては取り下げてくださいます。取り下げ書に記名と押印をしてください」

相手方の代理人弁護士は頷きながら含み笑いをした。長男が申し立て取り下げ書類に押印を終えたと、相手方代理人弁護士は長男のハンコを借りて持ち帰りたいと言いつ出した。相手方作成書類にも長男の押印が必要だと言う。長男は貸出しに躊躇した。

「私は弁護士です。もし、あなたのハンコを不正使用したら弁護士の仕事が出来なくなります。信用してください。ただの認め印です」

「そうですか。めくら判になりますね」

二人の調停員と書記官の前での発言だからと思い、長男はハンコを代理人に手渡した。

長男は帰宅してすぐ家庭裁判所書記官宛てに謝意と今後についての信書を送った。

【このたびはご親切な助言を頂き有難うございました。身内に被告人を出すわけにはまいりません。従って民事訴訟は取りやめます。今まで相手方はこちらからの再三の投げかけに無言でした。相手方に代理人が立ちましたので、遺産分割協議は自力で解決できると思います。不実な妹は、第三者の前

に晒され、得るものはあったと思います。この度、遺産相続解決の糸口をお導き頂きありがとうございました。御礼申し上げます】

中古住宅購入の際に亡父から借りた金銭は無返済のまま触れずに、確証のない長男への生前贈与を疑い、これを明らかにせよという話は藪蛇だ、とする代理人弁護士の話に妹は従った。結局遺産分割は当初の案通り、法に従って分割することになった。拍子抜けするほど速やかに一件は解決した。

長男は法廷ドラマの観過ぎだった。相続手続きに非協力的だった妹の不実さを、調停員が指摘して説諭発言をしてくれるものだと期待していた。しかし刑事裁判の「判決」とは全く違った。未経験分野への好奇心は満たされたものの、今後、踏み込みたくない領域だと思った。

長男の相続残務は妹の代理人弁護士からハンコを返して貰うだけだ。代理人に貸したハンコは二か月経っても戻ってこない。腹立たしいまま妹の代理人弁護士に電話をした。

「お貸した私のハンコはどうなりましたか」

「ああ『三文判』のことか。毎日弁護士会の仕事で忙しくてね」

ことのほか親しげな返答だった。

「あなたの忙しさと私のハンコは無関係です」

「昨日も弁護士会の集まりがあつてね」

「昨日今日の話ではありません。遺産分割協議が終了して二か月経ちます。あなたは私のハンコの未返却をどのようにお考えですか」

弁護士は言葉に詰まった。極端に誠実さを欠いた対応に長男は自制心を失った。長男は日頃概ね穏やかな振る舞いをする。しかし理不尽な状況に直面し、自ら設定した忍耐の閾値を越えると、安全弁が開く。今回の我慢時間は二か月だった。一方相手の弁護士は借りたハンコなど一切考えない二か月だから、長男が電話の向こうで豹変したと解釈した。稀に表れる長男の気質だ。戦闘に向けて伝達物質アドレナリンが、飛沫を上げて交感神経を走り抜けた。

「おい、いい加減にしろ。あんたみたいな奴を『自己中』って言っうんだ。ハンコはいつ返すつもりだ。あんたの言う三文判は猫糞か。他のハンコも山積みだろう。『出来合いハンコ』の店でも始めるか」

長めの間合いがあつて、代理人は改まつて静かに問いかけた。

「どうしてあなたは大声を出すのですか」

「人は不快なものを振り払おうとして大声を出すんだ。腕に食いついた蚊を叩き潰すようなもんだ」

「そういう対応の仕方では、あなたの人格が疑われます」

「大きなお世話だ。私の人格はどうでもよい。この叱責の原因を作ったのは誰だ。偉そうに何を言い出す。このヤロウ」
つられて代理人の口調も声高になった。

「このヤロウとは無礼じゃないか」

「そうか、弁護士も怒鳴るのか。蔑まれるのは嫌か。漢の時代の『夜郎自大』のヤロウだ。あんたはその程度の人間だつてことだ。言い訳だけじゃないか。軽蔑されるのも当たり前だ。返却していいことに一言の詫びもない」

売り言葉に買い言葉が飛んだ。一呼吸の間があつて弁護士の方から電話を切った。

三日後、ハンコが一本入った茶封筒が普通郵便で届いた。長男は受領のはがきを送った。

【本日ハンコを受け取りました。今後私の文筆活動で、どのようなメディアにあつても、弁護士の素材をあなたに取ることもあるかも知れません。あらかじめご了承ください】

長男に世に示す文筆活動などあるはずもない。仮にあつたとしても、せいぜい工業所有権登録請求案文の、そのまた下書きが関の山だ。不快なハンコ事件を攻撃してみたかっただけのことだ。

折り返し代理人から長男に二行書きの白い封筒が届いた。差出人署名の下に大きな朱色の角印が居座つていた。

【警告 貴殿の公表、公開文書の中に、当方への侮辱、名誉棄損、脅迫などが含まれる場合は法的手段を執る】

長男は三文判一本の飛躍的な展開に感心した。しかし二、三日経て心静かになると、自己嫌悪に苛まれた。自分も代理人弁護士を立てていれば定石的手法によって、不快な思いはせずに解決できたかも知れない。取るに足りない正義を張っ

て、怒鳴りつけるのは父親譲りの性格だと納得している。氣質遺伝か幼少期の刷り込みかの区別はついていない。

目ざとい妹の夫は長男から送られて来た遺産目録を横から覗いて、義父の生涯給を推定した。遺産総額が少な過ぎると疑った。この推測は半分当たっていた。妹夫婦は長男への生前贈与を邪推したが、実際は贈与先が違った。山田紀夫は妻にマンションの他に、老後資金を生前贈与していた。無税内で時間を掛けた。もともと他人だった妻と縁があつて所帯を持った。長い間面白くない生活に付き合わせた。妻には他にもっと楽しい人生があつたかもしれない。老妻の『お独り様』生活に設えた詫びの生前贈与だった。二人の子らは自力で営巣していくものだとした。その基盤は親として人並みに提供したつもりだった。ずっと昔、人は家族や一族郎党単位で経済的集団生活を営んできた。近年の経済的共同作業は多くの場合、家族や一族集団の外に在る。そのため一族間の核化、分散は世代交代毎に着実に進んだ。

母は二人の子らに現金の生前贈与は黙っていた。この相続事件を見物して、自分達の子育てをこっそり振り返って見たかった。

妻にはもう一つ相続手続きが残っていた。電気通信事業者のスマホ販売窓口に向いて亡夫のスマホを解約した。特約の生命保険金十万円の口座振り込みを確認した。その後、念のため故人のスマホに電話をかけた。「お客様のお掛けにな

った番号は現在使われておりません。ツーン・ツーン」メールも打ってみた。折り返し【接続出来ません】と返信があった。今後、亡夫のスマホ通信料請求が一切無くなるのは、少し寂しいと思った。

故山田紀夫の遺産相続事件は四十九日と盂蘭盆会の間の出来事だった。残された者は誰一人相続の結論を仏前に報告しなかった。安堵の祈りも捧げなかった。揉めていた間も課題の解決を念ずる者は居なかった。少し早めの山田紀夫の他界に、取り乱す者は居なかった。そうすることが紀夫への敬意と謝意だと心得ていた。

定年退職の間もないころ、夫は妻に一度口にしたことがある。「これが『月給取り』のギリギリ精一杯の帳尻合わせだ。俺にもっと力があつたら、一家を成すだけでなく、直接世間の役に立つ事が出来たかなあ」一問あつて口上は変調した。「そうだ、今度は『裏の仕事人』に生まれ変わろう」結んだ口を真一文字に引いて稚拙な見得を切った。妻は「裏方ねえ、水族館のバックヤードはどうかしら。揺らぐ昆布の林で舞い踊る鯛や鰯と生活するのは楽しいかも知れませんね。乙姫様は如何しましょう」と答えた。

天に向かつて願い事を祈っても、墓前や仏前で深々と懺悔しても、謝意の報告を口にしても、神も仏もご先祖様も、何

時だつて天上界から現世に向けて語ることではない。まさしく「沈黙」だ。数万年前、人類は生き延びるため共同作業を思いついた。その統率のため想像力を身に付け虚構の物語を創作した。歴史学者ハリリ氏の説に傾倒し拡大解釈すれば、あの藍色の制服が良く似合う「ブラチナスマホ」の女性販売員「早苗ちゃん」は際立つた進化の末に「無稽噺」の語り手になったのだろう。スマホは科学革命時代の恰好な小道具だった。

引用著作物

【著書】

『サビエンス全史』 ユヴァル・ノア・ハリリ

『通夜の客・他』 井上靖

『沈黙』 遠藤周作

【映画】

『慕情』 20世紀フォックス社

(中区)

【入選】

このみとさらさのいた日々

加藤 喬

明後日からは夏休みに入る。猛暑日を記録する暑さがやってきたが、神社というのはなぜか涼しげだ。戎神社は、山崎優（まさる）の在籍する浜松育英高校から程近くにある。にぎやかな街道から少し東に入っただけに、緑に囲まれ、その緑が喧騒を否とし、思いの外静かな空間が広がる。優は今日も、南裕子とこの神社を待ち合わせの場所としていた。一時から予定されていた昨日の試合の反省会が、試合疲れなのか、顧問の体調がすぐれず中止になった。三時の待ち合わせに一時間半もあるというのに、優は不気味な予感を拭い去ることができず、もう神社の境内裏の階段に座っていた。二時を少し回りかけたころ、境内の表に裕子の声がした。友達というらしい。

「昨日は県立体育館には行かなかったんだ」

「それじゃあ山崎君の試合見てないの、優勝したんでしょ、彼」

「そうみたいね。もう三か月たったから」

「何それ、分かるように話してよ」

「あのね、山崎君のお母さんとうちのお母さんとは友達なの、バレーボールつながりでね。山崎君母子家庭で、ほとんど何でも母親に話すらしいの。で、私の事好きになっちゃって近く告るって、それも言ったんだって」

「ひくわ、それ。高校生にもなって、そんな男子っているの。かなりひく」

「別に山崎君、悪い人じゃないよ。純粹だしね。だけど本人が言ってた。劣等感の塊だって。勉強はさっぱりだし、顔もイマイチ。身長は183cmあっても、小五から柔道やってたから上半身だけでかせいでる。だいたいね、柔道なんて今どきの男子がしたくないベストスリーに入る。劣等感のかさぶたはなかなか剥がれないんだって」

「県で優勝してもそうなの。まあ勉強はね。私たちと同じ高校なんだから。そりゃそうだわ」

「山崎君のお母さんも彼が何かにつけて自信がないことを知っていて、うちに遊びに来た時頼まれちゃったの。告白してすぐあつまりふられたら、劣等感という刺青を心に彫り込んじゃう。だから、三か月くらい彼の恋愛感情はほつといて、私のほうは友達みたいな気持ちで彼と付き合っってほしいって頼まれちゃった」

「それで付き合ったの、っていうか付き合う振りしたの？最悪。そんなのありなの？だけど釣り合わないよね。裕子が山崎君じゃ、って正直思ってた」

「ふりしたって、私はふりなんかしてないもん。最初から今

でも友達のもりでいるんだから。彼の事も嫌いじゃないし。でも今日で終わりにする」

「へえ、そうなんだ」

「あのね、山崎君この前会った時ね、腕組んできたの。それでもこの辺で終わりにしないとなって思ってたね」

「なんていうの、山崎君に」

「かれ東京体育大学に推薦で行くんでしょ。私は地元で就職だから、歩む道が違う。だから終わりにしようねって。それしか言わない」

「お母さんから頼まれた事は言わないよね。言えないか」

「当たり前じゃん。親子関係にひび入れたくないもん。山崎君いい人なのよ。でもときめかない。ごめん」

「私に言われても」

一瞬にして心根から枯れた。真っ白になった。顔を上げて何が見えているのかわからない。それでも足は交互に前に出るので優はその場を逃れることができた。境内の裏から続く道を重みのない足取りで歩いて行く。どのくらいいたったのか家にたどり着いた。夏の日差しにいたぶられて体まで枯れ、水を二杯たて続けに飲んでベッドに倒れこむと眠りに落ちた。夕方遅くに目が覚めると、夕飯の準備ができていた。優は母親と差し向かいで食事をする気にはさすがになれず、友達とかつ丼を食べたから後にすると逃げ口上を言って、シヤワーを済ませ、また自室に戻った。

何ということだ。南裕子は、断り切れない人の好きで、あるいは劣等感というかさぶただらけの男子を憐れんで、俺の相手をしてただけなんだ。それなのに俺ときたらお年玉の残りはたいてかなり値の張るジーンズを買い、自然な見立てになるように、母親に何度も洗濯させていた。俺なんかの事を話しても面白くなかろうと、練習の前にほうきを相手にプロレス技を演じてみせるひょうきんな柔道部員の話で、笑いを誘う脚本を書いた。二人で過ごした時間の帰り際に、「じゃあまたね」と裕子が言つてニコツと笑つてくれた時、裕子の後姿を見ながら、今日は彼女も楽しんでくれたんだと、何度もガッツポーズをした。高校の廊下で彼女とすれ違えば、俺はこんなにかわゆい子と付き合っているんだ、と舞い上がった。何という……

それにしても困つたことになった。裕子が友達に話したことはそのうちある程度は広がる。裕子も打ち明け話の最後には、その様な話の定石として、「ここだけの話にしてね」と言ってくれただろう。しかし相手は十八歳の高校三年生女子。そうは言つても言いたがりの唇が疼く。そんな唇が高校のそこかしこで口を開く。一滴二滴の雨漏りが次第に大きなシミになつていくように、彼女たちの間で、この話がそれなりの大きさの輪紋になつていくことは十分あり得る。女子ばかりではない。お笑い芸人になりたいというクラスの男子が、お笑いの種を爆笑ものにしあげたところで、絶望の極にある俺がその笑いに入つていけるだろうか。視線をむけるこ

とさえできそうもない。それどころか今の笑いのネタはどうせ俺のあのことに決まっていると、身をすくめるのが関の山だ。

優は、いつそのこと高校など止めてしまおうかと思つた。高校を止めるということは、同時に柔道を止めるということにもなる。しかし優は、そもそもこの高校に愛着などなかったし、柔道に対する思い入れも薄れはじめていた。いや自分が今の窮地に沈んだ原因の一つは、柔道にあるとさえ思うようになった。

浜松育英高校はスポーツの強豪校で、優のクラスには偶然にも三名のトップアスリートがいた。一人は富田といつてサッカー部のフォワードであつた。勉強はからつきしダメで、勉強オンチとでも言うほどであつたが、彼はそれさえも持ち味に変えていた。英語の授業では珍回答を連発して、生徒ばかりか教師まで大笑いさせた。そんな明るさが頼りにされ、県の得点主であるばかりかチームのキャプテンを任されていた。下級生の女子にも絶大な人気を誇つていて、なんでも彼女たちの間ではトミーと呼ばれているらしい。そのトミーが、ひとたびボールを受け相手の守備陣とぶつかつても、体幹よろしく当たり負けせず、時にひらりとかわしてゴールネットを揺らす。彼女たちは小躍りして喜んだ。

もう一人は陸上の長距離選手で真岡といつた。身長は170cm前後、制服を着ていればごく普通の男子高校生である。しかしひとたび陸上のユニフォームに身を包めば、カモ

シカのように細くしまった長い脚、足首のところはいよいよ細く、赤いシューズを履いた時など、男の優の目にもとび抜けてカッコよく映った。走行フォームは上下動がなく、精密機械のように足を回転させる。遠州のからっ風を向かい風に受けた時も、そのフォームは崩れることはない。スイッチが入れば、半日は走り続けるのではないかと思わせる程淡々と走る。距離を刻めば息はあがってくるだろうが、なんだか汗のにおいはしそうなない。彼の元には、駅伝の強豪大学数校からお誘いがあるらしい。

残る一人のアスリートは優であつたが、優は自分だけはアスリートとは言われない気がしていた。富田と真岡はまさしくアスリートであるが、柔道の自分はアスリートの範疇に属さず、柔道部員・柔道選手・強い柔道選手なのだろう。女子の柔道選手が、重量級決勝戦で、抑え込みで勝利したのをテレビで見た時、確かに勝ったけどねとつぶやいてしまった。

優に柔道を強く勧めたのは、母方の祖父であつた。その祖父は、先代の立ち上げた建設会社を引き継ぎ、浜松一のいや県西部一の規模にまで育てあげた。祖父は優が勉強とは全くそりが合わないことを見て、優は学歴という果実は得られないと、そちらの方面は早々に諦めた。しかしスポーツの分野で、特に力強さに直結する格闘技などで、誇れるキャリアを残せば、猛者ぞろいの建設業界でも少しはキラリ存在になるのではないかと考えた。それで優が小五の時に柔道を勧め、知り合いの柔道家に預けることにした。運動神経と体格

に恵まれた優が、頭角を現すにはそんなに時間はかからなかつた。中学の内には県柔道界では有名な存在になり、浜松育英高校から誘いを受けた。

高校を中退しても祖父の会社には入社できるだろう。しかしそれは最悪だ。この浜松に根を生やしてしまうことになる。それだけは避けなければと思うのだが、正直なところ、優も漠然とそんな将来を思い描いていた。それで専門学校に入学して、生計を支えてくれる資格を取ろうなどと考えたことはなかつた。もう一度柔道に頼るしかない。県大会の優勝で、東体大への推薦入学はほぼ決まつた。二週間後に迫った全国大会で、一回戦さえ突破すればそれはもう決定的なものになる。それにかけてこの浜松を脱出する他はない。あとの半年余りは心を包み込んで高校に通うことにしよう。

さらにもう一つ、母親と距離を置こうと優は決めた。母は気の強い人で、ひとたび決めてしまえば、ぶれることはまずない。父との離婚の際も彼女の決心は揺るぐことはなく、離婚だけは避けたかつた父親も最後には折れる他なかつた。祖父の会社では常務を務めていたが、社員を大切にし、業者へは忠義を尽くし、理詰めで案件を決める彼女には社員の尊敬も厚く、常務の地位は縁故であるとは誰も思っていないかつた。そんな母がプライベートなこととは言え、このような拳に出るとは全く思ってもいなかった。将来どこかの女性と結婚したとして、少しの間子供を授からなかつたら、俺の留守を狙って上がり込み、嫁に夜の生活なんかを指南しかねな

い。恐ろしいことだ。母を避けずとも、内面をさらすことはもうしない、距離を置くこと。

全国大会は一週間後に迫っていた。優は登校しても教室には顔を出さず、部室に直行すると着替えて道場に滑り込んだ。練習では以前よりかなり寡黙であったが、周りが全国大会前の緊張のせいだと思ってくれたのには助けられた。

試合当日にも優は緊張感に縛られることはなかった。あと一日無事に演じられれば、もう無理強いの努力はしなくても済む。そう思うと逆に肩の力は抜けた。相手はというと、ブレッシャーを持て余し、体はガチガチに硬くなっている。足をかけてやれば決まるな、緊張が解けない早いうちの方がいい。試合開始後一分とたたぬ時、相手がモーションを起こした瞬間に足をかけ体重をぐいとかけると、大内掛けが決まり一本勝ちをした。二回戦は何かから解放されたように体が自由に動き、またしても一本勝ちを取めた。三回戦になると相手も強者、その手ごわさは組んだ瞬間に分かった。無理に技をかけようとして体制を崩したところを寝技に持っていかれた。相手は腕を棒にして締めてくる。

「おいおい俺はもう十分だ。不自然ではないように抵抗はしてみろけど、お前に勝とうなんて思っていないぞ。俺に合わせ君もそんなにむきになるなよ」

声に出すことだけはやめておいた。

東京体育大学の推薦入試の面接を受け、合格通知という東京行のチケットを得た。十月に入っていた。全国大会後、優

は道場に顔を出していなかった。県大会で優勝を果たし、全国大会では三回戦まで戦うことができたのはひとえに柔道部のおかげであった。優はその恩義は十分に感じながらも、後輩たちの前に立ち、体を差し出すだけの気力と熱がどうしても湧いてこなかった。顧問はそのことには触れず、練習を怠ると東体大では通用しない、むしろ今までよりも練習を積みなければだめだ、と気にかけてくれた。

「全国大会で体幹を鍛えることの重要性を痛感しました。ネットでは体幹鍛錬の方法を探し、家で専ら実践しています。足りないところはジムでトレーナーのアドバイスをもらっています」

半ばあだで返すような空言を言って、優はその場を逃れた。

優と裕子のあのことは、大きなうわさにはなっていないようだ。進学校でないとは言え、浜松育英高校も普通科の常として、大学進学を希望する生徒が大半である。高三の秋に他人事にかまけている余裕はない。十一月になり秋の色が進み、落葉を経て冬を迎えた。浜松に特有の遠州のからっ風が吹き始める。年を改める頃には、その西風は時にヒューヒューと甲高い虎落笛を立てる。一月になり、大学から二駅所にアパートを決めてもらった。三月から入居可能な部屋だ。四月前から大学の練習が始まると予想されたが、優はなるべく早く東京に行きたいと気がせいいていた。

三月一日卒業式、浜松育英高校の柔道部は卒業式の後、卒業生が一・二年生に稽古をつけるのが習わしとなっていた。

最後ぐらゐは責任を果たそうか。それだけでなく自分は柔道にすがって推薦で大学に入学する身だ。だが、今までに随分不義理を通してゐる。最後だけ、なにくわぬ様子で顔を出し、そこそこ色よく門出をまとめ上げるのは、むしろ卑怯なことに思われた。優という奴は、友情にも背を向け、恩師の恩義にも手のひら返しをし、後輩たちに厚情もかけぬとは、何という奴だ。スポーツマンという以前に人間として最悪だ。そうレットルをはってもらうことが、今の自分にはお似合いだと覚悟を決めた。

顧問には今までの指導に対する感謝を衷心より伝え、しかし同時に今日の午後から大学の稽古があるともう一つうそをつき、式後そそくさと高校を後にした。学生服も着替えぬまま駅に向かい、新幹線に落ち着いた。天竜川の鉄橋を渡る。浜松を抜けた。静岡を過ぎ、間もなくして富士山を左手に望む。雄大な富士が視界から消えると、優はスマホを開いた。裕子の写真、ソフトクリームを買ってきた時の裕子の動画、優は三度頬を殴り、それらを消去した。

東京の生活が始まった。明けて二日、東京の街をとにかく歩いてみようと、アパートを出て一時間ほど歩いた。やはり浜松とは規模が違う。喫茶店でモーニングセットをオーダーすると、周りの会話が洩れてくる。特に男性の話し言葉はなんだかなよなよとまるで異文化のコミュニケーションに思え、別世界の環境に身を置いたのだと身に染みた。

東体大の道場に連絡をとると、推薦入試で合格した学生は二十二日から練習に参加するということと、その一週間前から西道場に隣接するトレーニングセンターで体づくりを始めてもよい事を告げられた。自主練が急務だ。多摩川べりをとにかく走った。走りながら胸に刻んだ。これからの生活で親しく交わる人たちとは誠意をもって付き合おう。猛者ぞろいの東体大柔道部の中でどんなポジションに甘んじるかはわからぬが、とにかく柔道に教えを乞おう。

東体大は東道場と西道場の二つの道場を有していた。春休みは二手に分かれて、四年生が八時から十一時、三年生が十一時から二時、四年生には二年生が練習のサポートにつき、三年生には一年生がついた。

一年生の推薦組は十二名、高校時代のキャリアからすれば優は上位に位置してもよいはずであったが、入学時の実力はほぼどん尻であった。彼等は去年の秋も冬も今年の春も練習を積んできたのであり、怠惰をむさぼっていた優とは大差がついても道理であった。高校の顧問が案じていた通りになった。ゴールデンウィーク前には、一般入試で入学した学生が十一名入部し一年生は二十三名を数えた。

柔道部の監督は一年生の技術指導には当たらなかったが、週に一度火曜日に東道場でお話タイムを設けてくれた。それは技術論でもなく精神訓話でもなく、東体大柔道部に名を刻んだ歴代の部員の話であった。

その一、たてつづけのけがを、不屈の精神で乗り越えた部

員の話。

彼は入学と同時に右手を骨折して秋まで棒に振り、冬に復帰するや右のアキレス腱断裂の憂き目にあった。それでもひるまず二年の夏に疊に戻ったが、今度は左のアキレス腱を痛めてしまい、結局卒業するまで、試合には一度も出なかった。今では秋田県の公立高校の体育教師をしているが、顧問を務める剣道部の練習中、生徒の小手にやられて手首を骨折したと今年の年賀状にあった。やつには保健の授業しか務まらない。

その二、二年の進級時にモデル顔負けの美人彼女ができた部員の話。

彼女からは同じ年と聞いていた。彼女のおかげで童貞も捨て去り、いつそのこと同棲でもしようかと思っていた矢先、彼女に年齢詐称が発覚した。発覚しついでに実は彼女、人妻であった。そのまたついでに彼女の夫はというと有名な組の若頭であった。彼は逃げに逃げた。北海道まで逃げ切つてもう大丈夫だろうと、富良野のラベンダー畑を歩いていたらところ、若い衆三人に確保された。

その三、東体大柔道部に初めてのそしておそらくは最後のお姉系柔道部員の話。

彼女いや彼は、組み合うときに「サー行くわよ」と勇ましい声を上げるが、寝技を決められると相手の耳元で「ううん、快感」とつぶやくという。それが嫌で誰も練習相手を務めなくなったので、監督たる自分が練習相手を買って出たのだ

が、誓って言うが、自分と彼との間には何もなかった。

毎回がこんな話で、一年生たちは腹を抱えて笑い、笑いながら柔道の強弱を超え、横のつながりを固くした。優は、監督の掌握術に舌を巻いた。

三年生のさほど強くない部員に、高木耕造という先輩がいた。高木には優程度がちょうどよく、練習相手にちよくちよく指名された。学食で会えばおごってくれるのだが、その時には優の分まで高木が決めた。ラーメンやらナポリタン、チャーハンといった一番安いものばかり、ライスのみの時も二回あった。しかし後輩の前で虚勢を張らない高木に、優はむしろ親近感を覚えた。

十一時ごろ学食前に高木の姿を見た。早めの昼飯だな、後をつけた。学食に入ったところで声をかけると、少し驚いた風であったが、いつもより上機嫌のようだ。

「今日は外のお食事にご招待いたしましょうか」

気持ちの悪いことを言つて、大学近くの洋食屋に収まった。

「なんでも好きなものをお食べ」

ニヤツと笑う。

「ヒレカツ定食でもいいですか？」

「ああいいよ。ヒレカツ定食と肉ビラフお願いします」

「あのう、何か思うところあるんすか？」

「ああ、あるよ」

「先に教えてくれると、ヒレカツもなおおいしいと思うんですけど」

「おいしいものは、おいしいの。おいおい話すさ」

食事も終わりがけたころ、高木が話し始めた。

「俺な、山梨県の公立高校の教員採用試験を受けることにしたんだ。数名しか枠はないんだけどな、すげーだろ」

「決心したんですか、すごいじゃないですか、高木先生」

そう言いながら、心は全く逆であった。体育教師を目指すというのは、東体大によくある進路である。しかし教師の一体何が面白いというのか。「シャツはズボンに入れて」「髪の毛ちよつと茶色いかな」「体育祭の打ち上げは禁止」などと、飽きもせず一生言っていられるのだろうか。性善説を信じていなければ教師などできるものではないが、大人を見れば性善説を疑うこともあるというのに、子供とあらば、それを信じざるのはなぜだろう。今どきの高校生にもつばら性善説を当てはめることなどできるだろうか。

「それだな勉強しなくちゃならんじゃん、だから今やつてるバイト続けられない訳、バイト先に迷惑かけられないし、優ちゃん俺の代わりにやつてくれるよね」

「そりゃー、バイトの内容と時給によりますよ」

「優ちゃん、美味しかったよね。千八百円のヒレカツ定食、俺東京に来てから一回もヒレカツ食べた事ねーもんな、よく考えたら生まれてから一回も食べたことないかもしれない。マー君さあ、俺はかわいい後輩のマー君の事気にかけているんだよ。その俺が変なバイト世話する訳ないじゃないか。工場の単純な立ち仕事なんかよりずっといいって。百聞は一見

に如かず、今日六時半に駅で待っていること、渋谷まで行ってもらう」

七月の渋谷は相変わらず華やかな街であった。その陽なる喧騒を離れ、高木は夜の匂いの濃いネオン街へと歩く。淫靡な看板のあるヌード劇場まで来ると、従業員用のドアを開け、事務所に挨拶をすると楽屋に向かった。「おはようございます。お疲れ様です」と明るく発声する。

楽屋には七名のダンサーがいたが、なかにはあられもない姿の女性もいて、優は目のやり場に困った。

「こうちゃん、今日でやるって本当なの、寂しくなるよ。もうちよつといれば。こうちゃんに先生は向いてないと思うけどな」

「ううん、耕造は体育の先生には向いているんだよ。なあ耕造、体育の先生って頭使わなくていいんだろ、ピツトリじゃないか」

「そうなんですよ、姉さん。数学なんか俺には生き地獄で、物理だ、化学だって、ありゃあ人間のやるもんじゃありません。この頃の生意気な高校生に言っちゃいますよ。お前ら理屈こねる前に体動かせてね」

「これはみんなからの餞別だ。教員採用試験に受かったら、必ず遊びに来るんだぞ」

そう言っただけで姉さんと呼ばれていた踊り子さんは高木に白い封筒を渡した。高木がかわいいがられていた事がしのばれ、そ

いう意味でも不安を感じた。

「ありがとうございます。一年半色々な思い出があります。皆さんに怒られたり、やさしい言葉をかけられたり、本当にありがとうございます。今日からはこいつが俺の後を継ぎます。静岡は浜松の田舎もんですが、いいやつです。優！あいさつ」

「あつ、高木さんの後輩の山崎優といいます。よろしくお願い致します」

「言ったな、お前言ったな、お願いしますと言ったんだな。よし、決まりだ」

高木は優の首根っこをつかむとぐいとお辞儀をさせ、自分もつと深く頭を下げた。

優の初めてのバイトはかくしてこの様に始まった。慣れぬうちは大変であったが、幸いなことに大学は程なく夏休みに入った。仕事といっても、それは踊り子さんたちに仕えることであった。甘いものが欲しいと言われれば、急いでコンビニで買い求めてくる。ヘアメイクの際には手鏡を持って後ろに立つ。傘がないと携帯にくれば、傘を持って渋谷駅に走る。踊り子さんが脱ぎ散らかした私服をハンガーに掛けたり、ひざを折ってたんだりもした。

トゲのある言葉を投げられることもあった。ことに姉さんは手厳しく、甘いものが欲しいというのでコンビニでケーキを買ってくると、「私が甘いものと言ったら、角の葛飾屋のクリームあんみつに決まってるだろ、そんなことも耕造から

聞いてないのか」

とケーキはゴミ箱送りになった。しかし慣れてくると姉さんに限らず踊り子さんは、ステージ直前にナーバスになると気付き、それなりの距離と対応をとることを肌で学んだ。

一か月経つと、「まさる」ではなく「ゆう君」とか「ゆうちゃん」と呼ばれるようになり、要求される事も察しがつき、段取りを組んで仕事ができるようになった。優は初めて、自分が誰かの役に立っていると実感できた。給料は時給ではなく、日給制で一日四千元であった。午後一時から入って夜十一時までいても、練習が夕方に入り、一時間しか働けなくても、とにかく四千元と決まっていた。不満は無かった。お金を求めて働くというより、働いた後にお金がついてくるという感覚だった。秋を迎えた頃には、このストリップ劇場一座を陰ながら少しでも支えたいと、口に出さずとも思うようになっていた。

この楽屋にはもう一人とびきりかわいい女の子がいた。渡辺さらちゃん五歳。色白の顔に、大きな二重の目は、目じりが少しだけ垂れている。ダンサーの渡辺このみさんの娘であった。生まれ持ったの性格なのか、母親に厳しく躾けられたのか、この年の女の子にしては聞き分けがよく、大人をてこずらせることはなかった。髪の毛をポニーテールに結び、一人でいるときは楽屋でままごと遊びをしていた。踊り子さんたちは、サーちゃんと呼んでみんなで大切にかわいがった。姉さんはコンビニの弁当なんかは、子供には味が濃すぎる

と言つて、事務所のキッチンでほとんど毎日料理の腕をふるつた。このみさんは流石に恐縮したが、姉さんにとっては張り合いの源であつた。踊り子さんたちもステージが終われば、ままごと遊びに付き合つたり、膝に抱えて絵本の読み聞かせもした。彼女たちは、さらさと触れ合うその時だけは、世間に対する引け目も、自らに吹き付ける風の冷たさも忘れて、心からの笑顔を見せた。

優は仕事の要領をつかみ、少しの余裕ができると、さらさと過ごす時間が増えていった。ままごと遊びでは、さらさがコーヒールをいれてくれるので、お返しに牛乳を温めると砂糖を一杯入れて「はい、ホットミルクお待たせしました」とふるまつた。さらさは赤いくちびるをミルクに沈め、美味しそうに飲んだ。天気が良い日は、このみさんの許可を得て、コンビニと一緒に買い物に行った。手をつないで歩く。小さな小さな暖かい手。この子は自分の娘でもなく、妹でもなく、ましてや恋人でもないが、世界で一番幸せにならなければならぬ子なのだと祈つた。コンビニでは、チロルチョコを一つねだつた。着くまでに食べてしまうという約束で買ってやつた。

「わかつた、大丈夫だよ。ママにも姉さんおばちゃんにも黙っているからね。ゆうちゃん、また怒られちゃうもんね」さらさは、分かつた風の事を言つた。

このみさんのラストステージは、だいたい九時半ごろであつた。このみさんだけはタクシーで帰宅することが許されて

いる。彼女は着替えを済ませると、楽屋奥のベッドで寝ているさらさを起こして車に乗せ、電車で一駅ほどの距離を帰つて行く。ある時姉さんから言われた。

「どうせタクシーの中でまた寝ちゃうんだろ。まさる、一緒に行つてやつて。社長には話し通しておくから」

その一言で、優の一日を閉める仕事は、このみさん親子の帰宅介助となつた。このみはアパートの二階に部屋を借りていた。どちらかと言えばきしゃなこのみにとつて、バック片手にさらさを抱いて階段を上がつていくのは、ハードな肉体労働であつた。

優は玄関の中までさらさを送り届けると、一駅近くなつた駅まで歩いて行き、電車で帰宅した。しかしコーヒールやら、時に夜食をご馳走になるうち、程なくして、このみが優の初めての女性となつた。時にはこのみのアパートで朝を迎え、ついにはそれが日常となる。さらさは喜んだ。朝からテンションが高く、朝食の時には優の口にミニトマトを押し付けた。一時間目から授業がある時は優が先にアパートを出たが、授業が遅い日は、さらさを幼稚園まで送つた。

「先生に会つたら何て言えばいいかなあ？」

「そりゃあ朝なんだから、おはようございます、お世話になります。でいいんじゃないの」

「そうじゃなくて、さらさちゃんとはどのような関係ですかつて聞かれたら？」

「聞かれないよ。もし聞かれたら、白々しいけど、姪がお世

話になっています、でいいか」

「ということは、俺このみさんの弟になるわけね」

「なんか不満でも、ゆう君私のこと一体何歳のおばさんだと思っているわけ？」

問われてみて、今さらながらに気が付いた。優はこのみの年齢さえ知らない。このみは自分の事をあまりしゃべらなかつた。群馬県出身であることは知っていた。群馬県で生まれて育ったが、十六の時に両親が離婚した。母がたに付いて二年ほど経つと、母親が再婚した。継父と折り合いが悪く、十九で群馬を捨てた。それから一挙に時が飛ぶ。さらさの出産時の話。このみはかなり難産になると覚悟していたが、思いの外軽い出産で、案ずるより産むがやすしとはこのことだ。さらさという名前は人生をさらさらと生きていつてほしいと思つてつけた。それだけである。優が聞いたこのみの過去は。

日曜日になると、午前中三人で買い物をした。最寄りのスーパーマーケットで買い物を買わせると、優は時にさらさの服を買うのが好きだった。安い価格帯の服ばかりを揃えた店が行きつけの店で、いつも一着だけ買って帰った。洋服を着たさらさを、「サーちゃん、また美人さんになった」とほめてやると、さらさは身をくねらせて喜んだ。

天気の良い日曜の午後は、さらさの幼稚園に行き、キャッチボールをした。グローブは一つですんだ。このみの投げるボールは、優の所まで届かなかつたからだ。まあなんという

運動神経だろう。右利きのこのみが右手でボールを投げるのだが、どう見ても利き手を変えて投げているような所作にしか見えない。優に向かって投げたボールが、このみの足元でワンバウンドした時は、さらさと二人で爆笑してしまった。「こら、笑うな」、半分はバツの悪そうな、半分は怒つたようなこのみの顔は、とてもかわいかつた。

水曜日は、午後からの授業だった。二人で少し早めの昼食を、洋食屋でと洒落た。と言っても、その店はかなり年代物で、老夫婦が切り盛りしていた。店主は口数の少ない職人氣質風な人、奥さんはそんな店主を補つて余りある程口のないめらかな方であつた。

「まあ美人な彼女、もう少ししたら奥さんになるのかな」そんな風に冷やかされると、適当に冗談で返せばよいものを、このみは真つ赤になつてうつむいた。

初めての東京の冬を迎えた。浜松では絶対に降らない雪もまれに体験したが、浜松のようなからつ風がない分、むしろすごしやすい。劇場は年末年始を通して営業する年もあつたが、今年は踊り子さんたちを休ませてやりたいと社長が気を利かせ、年内は二十九日まで、新年は四日より営業することとなつた。

御徒町のアメ横に行きたいとこのみが言った。三十日のこと。さらさはどことわからぬくせに、もうコートを着ている。年末年始に熱を出したら大変だと、優は二の足を踏んだが、二人に押し切られた。ごった返す人波。優はさらさと手をつ

ないで歩いていたが、はぐれたら大変なことになると思い、さらさを抱きかかえて進んだ。ささやかではあるが少し贅沢をして正月用の食材を買い求めた。上野に抜けて洋食屋で昼を食べた。さらさがハンバーグを食べていると、店主が長女の所の孫に似ていると言って、アイスクリームのバナラをサービスしてくれた。さらさ完食であった。このみはアイスクリームを含んでいるかのように、あまい顔をしてさらさを見つめていた。

大晦日、優は母親に電話して、正月は帰れない、春には帰るからと、帰省を先延ばしした。さらさは案の定熱が出たが、微熱の域に収まっている。午後になると外に行きたいと少しぐずったが、優がままごと遊びの相手をしてやると、しばらくして昼寝に落ちた。このみは夕飯の準備に、お節料理らしくご馳走に、昨日の食材と格闘している。穏やかに時が過ぎている。

明けて元旦、大学の初稽古があった。先ず監督が祝賀の辞を述べ、四年生の主将が続く。新年から三年生の主将が部の運営を担っていくことが発表され、全員で正座して三分間の黙想に移る。その後二手に分かれ、稽古が始まったのは十一時過ぎであった。

昼を挟んで、優は久しぶりに高木と時を過ごした。元旦に開いている食堂を探して歩く。

「優、バイトはどうだ。姉さんにこっぴどくやられてるだろ」「そうなんですよ。姉さんが好きな甘いものは、葛飾屋のク

リームあんみつだつて知らなくて、怒られました。だけど姉さん悪気はないんですよ、言葉はきついけど」

「そうなんだ。帰りにラーメンでも食べなつて、小遣いくれたこともあったつけなあ。優しいんだよ、本当は。姉さんな、別れた亭主とラーメン屋やつてたんだつて。結局つぶれちまつて、夜逃げ同然だったらしいぜ」

「そうなんですか、それで姉さん料理得意なんですね」

「人生いろいろなんだよ、本当に。渋谷ゴールデンズカイ劇場の踊り子さんたち全員に取材して、ノンフィクションで文章にしてみろ。三百ページは越えるな」

「先輩、その人生いろいろなんですけどね、俺の人生にもいろいろありまして、実は俺、今このみさんとサーちゃんと一緒に暮らしてるんです。このみさんのアパートで」

この野郎、うまいことやりがつて、くらいに突っ込まれると思ったが、高木は茶化すことなく言った。

「そうか、そうだったんだな。いいんじゃないか、優、頑張つて生きてるもん、頑張ればそれは正しいんだよ。きつと。

見ろ、姉さんのお導きだ。ラーメン屋が開いている」

腹を満たすと駅に向かった。高木は、山梨の実家に帰省するという。

「優、今度三人で来いよ、山梨。ブドウ狩りしようぜ、サーちゃんブドウたべるだろ」

「いいんですか、飛び上がって喜びますよ。このみさんもサーちゃんも。お返しと言うわけではないんですが、母親に言

つて浜名湖の鰻送らせますよ、かあちゃんこういう時にはふんばつする人ですから」

「なに気を遣つてるんだよ。俺だつてサーちゃんがかわいいんだぜ」

高木はうれしいことを言ってくれた。

「なあ、優。俺、一年後どうなっているかなあ？」

「教員採用試験に受かつて、そろそろ赴任する高校も決まる頃ですかねえ」

お世辞で言つたのではない、高木が教師にならずして誰がなるのかと、本心で思つた。

近くて遠い未来、一年後の未来。

「お前、相変わらず優しいなあ。優しくしてやるんだぞ、このみさんにもサーちゃんにも。じゃあまたな」

高木は改札に向かいかけたがとつて返し、優に千円札を渡した。

「これ、サーちゃんへのお年玉。よろしく言ってくれ。ああ、明けましておめでとう、また」

今度は改札を抜けて行つた。元旦のこと。

二日になると、さらさの熱は平熱に下がつた。外で遊ぼうとねだつたが、お昼すぎて暖かくなつてからね、となだめた。

テレビは箱根駅伝を映している。

「箱根駅伝って、なんか惹きつけられるんだよね、この人たちが命がけで走っているからかなあ」

横で見ているこのみが言つた。第二走者は各大学のエースラ

ンナーがエントリーしているとのこと。第三走者への中継点で、八位でタスキを受けた東洋大学の走者、それは真岡であつた。

「まじか！このみさん、真岡だよ、真岡、高校の時同じクラスだった真岡が走つてる」このみは、優が急に上げたすつとんきような声に驚き、画面の真岡を探している。真岡と優は、共にスポーツ推薦で大学に合格した。うまが合い、よく話をした。たかだか一年前のことだ。真岡はよほどの雨の日でもない限り、秋も冬も必ず練習していた。日曜日には引佐まで行き、起伏にとんだ道を走っていた。サボりを決め込む優に、練習した方がいいぞと真顔で心配してくれたその真岡が、箱根駅伝の第三走者として晴れ舞台を滑走している。アウンサーは、練習熱心なところと、スピードを買われ、一年生ながら第三走者に抜擢されたこと、真岡を紹介している。解説者は風が強くなつてきて、選手たちにはきついものになるかもしれないと、気象状況を挟んだ。風なら強く吹いた方がいい。真岡の足は遠州のからつ風が鍛えたんだ。真岡が一人抜いて七位になったところで、画面は一位の走者に切り替えられた。次の中継点で、真岡は四年生の第四走者に八位でタスキを渡すと、はらはらとアスファルトに倒れこんだ。真岡、上等だ、よくやった、一年生のお前が八位でもらつたタスキを八位でつないだんだ。立派なもんだ。お前生きてるなあ、刻み込むように。だけどな、俺も生きてる、生きてるんだ、ことごとく。

四日からは劇場が営業を再開し、程なくして大学も柔道部も日常に戻った。優は、どれもスルーしなかった。「動け、働け、吸収、感謝」それはモットーというほどおおげさなものではなかったが、その頃の優の行動基準となっていた。さらさは幼稚園で時々風邪をもらってきたりしたが、大事に至ることもなく順調に成長していた。

春の兆しが表れた。さらさはデイズニールランドに行きたいとねだった。幼稚園の友達が行ったのだという。さらさの服ですら、安物揃えの店に行く優の懐には、少々荷が重かった。優は動物の絵本を二冊買ってやった。それが当たり、さらさは、「やっぱり動物園に行きたい」と言い出した。これ幸いにと、三月桜にはまだ少し早いころ、上野動物園に連れ出した。このみはなんだか疲れが取れないからと、弁当を持たせて二人を見送った。

ライオンの看板に顔を横付けしてピースサインで写真を撮った。おさるランドで、優が猿の顔真似をすると、さらさは体ごと笑った。シマウマを見ると、「シマウマのシマシマは」となんだか妙な歌を歌った。一番のお目当てはキリンだった。キリンを見上げながらさらさが聞いた。

「なぜキリンさんは、あんなに首が長いのか？」

「だってジャングルにはトラもライオンさんもいるじゃん。首が長くて高い所から見られればすぐ見つけられるからね」「ふうん、あのね前ね、怖いおじさんが来てね。ドアの前で、『おい開けろ』って怒鳴ったの。ママが大声で『帰れ』って

言ったら、ドアをバンって蹴って帰ってった。怖かったよ。さらさの首も長くなれば、あのおじさんが来た時、もっと早く見つけられるかなあ」

「大丈夫だよ、サーちゃんいい子だから、神様が守ってくれるんだよ。もう来ないよ」

神様と一緒に俺が守るんだ。この二人を。優は、さらさを肩車に乗せてやった。

このみは、この頃体調がすぐれないようだ。トイレで用をすました後、半分枯れたように座り込んでいることがある。そろそろ体の事を聞かなければいけないな、と思っていた矢先、このみは舞台から戻ってくるなり楽屋で倒れこんだ。社長と姉さんに強く言われ、社長の主治医のクリニックを受診すると、大病院での検査入院を言い渡された。優はおろおろするばかりで、「このみさん、どこの病院ですか、お見舞いに行くからね」と要領を得ないことを言った。

「何言ってるのよ、二泊して帰ってくるのに」と病院の名を明かしてはくれない。

さらさは、その日から姉さんの所に行った。「俺が面倒見ますよ」と本気で言ったが、「じゃあ優は、さらさにちゃんと栄養のあるもの食べさせてやるんだね？」と念を押されると、それ以上は抗えなかった。このみは三日が過ぎても帰らなかった。一週間が過ぎ、十日経っても戻らなかった。社長にも姉さんにも、背を折り曲げて、病状と病院名を尋ねたが、頑として教えてくれない。さらさには劇場で会った。

「ママ、もうすぐ帰ってくるからね。姉さんおばちゃんのお所でこうにしているんだよ」と言うと、さらさはみるみるうちに顔をゆがめ泣き出した。

優は居ても立っても居られず、踊り子さんに電話をかけた。

「私にも教えてくれないんだよ。見舞いに行きたいから病院を教えてくれて、何度も頼んだんだけどね。契約書にある身元引受人のお兄さんに、社長が電話して群馬から来てもらって、社長とこのみのお兄さんと姉さんの三人で病状を聞いたと、それしか知らないんだよ。今の成り行きを見ていると、そりゃあ・・・」

と言ったきり涙で続かない。

優はこのみが入院した後も、このみのアパートにいた。階段を上ってくるこのみの足音は、聞けばすぐわかる。今日は帰ってくるのではないか、今日こそ帰ってくるはずだと、足音がする度耳を澄ましてみたが、いずれもこのみのものではなかった。さらさに会うのがつらくて、劇場には二日行けていない。

一旦自分のアパートに戻った。郵便物を整理して、服を着替え、多摩川べりを歩いた。今日は何曜日だ？ オヤジ達がソフボールの試合をしているからには、日曜日だろうか。耳にさわる、金属バットとボールがぶつかるかん高い音が。冬の名残は消え失せ、いやこれからは一日一日と暖かくなるばかりだろう。頬をなよなよと生暖かい風が吹き抜けている。そんな微風は万人にとっては好ましいものかもしれないが、

その時の優にはむしろ不安を浮き上がらせるものであった。浜松のからっ風がいい、あの風を受けてみたい。西に向かって立ち上がれば、風は耳元でとぐろを巻きヒュウヒュウと音をたてるだろう。そんな峻烈な風なら、優の不安を一瞬でも忘れさせてくれるような気がした。

大病院と言っても、そんなに遠い所ではないはずだ。今日の午後から近場から始めて一つずつあたっていこう。そう考えていると、姉さんから携帯に電話が入った。十一時に劇場からすぐの公園まで来てくれという事。

優は劇場をすぎると、気がせて走らずにはいられなかった。姉さんはブランコに座っている。優は姉さんの前まで行くと、倒れるようにひざまずき、土下座の姿勢になって額を地面にこすりつけてうなった。

「姉さん、お願いですから」

「姉さん、頼みます、お願いですから」

このみの命の事と、さらさの事を頼んでいるのだが、言葉が連なって出てこない。

「姉さん、お願いです」ともう一度すがった。

「そのくらいにしときな、人の目もあるよ」

そう言って姉さんはベンチへと促した。

「まさる、つらい思いをさせちゃったねえ。私のせいだ。本当にごめんね。けどもうここまでだ。ここまでにしときな。これから先の運命は、とてもまさるが背負いきれるものじゃない。こんなことになっちゃって。本当に本当に申し訳ない

と思っているんだよ」

姉さんは最後の給料だと言って、茶封筒を渡そうとした。

「姉さん、それはいいんです。サーちゃんになんか買ってやつてください」

「本当にいいのかい、じゃあそうさせてもらうよ。これは取っておいて。このみの手紙だよ。読んでやって」

優の胸のポケットに、白い封筒を押し込んだ。

「まさる、ありがとね。こんなにこのみとさらさのことを大事にしてくれて、感謝してもしきれないんだよ。元気でいるんだよ、まさる、元気でいるんだよ」姉さんは背を小さくして帰って行った。

ゆう君へ

ありがとう、ゆう君。毎晩さらさを抱っこして二階の部屋まで運んでくれて。

ゆう君、ありがとう。さらさを幼稚園に送ってくれて。でもね、先生やっぱりゆう君のこと、私の弟だとは思ってなかったみたい。ばれてたね。

ゆう君、アメ横楽しかったね。あんなにすごい人出だとは思わなかった。さらさもテンション高かったなあ。カニ鍋美味しかったでしょ。食器洗ってくれて、ありがとう。だけど、あんなに洗剤はつけないでもいいのよ。

ゆう君、さらさに服をありがとう。さらさは赤いスカートが好きで、「さらさ、このスカートはくと美人さんなんだ」

って笑ってた。ありがとう。

ゆう君、真岡君、箱根駅伝速かったね。浜松の人はみんなあんなに足が速いのって、私が聞いたら、そんなはずないじゃないかって、ゆう君大笑いしたよね。笑ったゆう君の顔も面白かったよ。

群馬県には海がないの。浜名湖、見てみたかったなあ。ゆう君の生まれ育った浜松も。

ゆう君、さらさを動物園に連れて行ってくれて、ありがとう。さらさはキリンさんの首の秘密知ってるんだって。

ゆう君、元氣、元気でいてね。私はちよつとね。元気で、大きくて、やさしいゆう君が大好きでした。

ゆう君、ごめんね。さらさがあんなに楽しみにしてたのに、ぶどう狩りには行けそうもないみたい。ごめんなさい。

ゆう君、大きな大きな愛をありがとう。あなたは、きつときつとすごい人になる。

ゆう君、わたしのこと抱いてくれてありがとう。あたたかかった。ありがとう。

このみ

それは鉛筆書きの手紙であった。その気になればいつでも消せる過去なのよ、このみさんは、そうおもいやってくれたのだろうか。公園をなでる緩やかな風が、便箋の片端をめくっている。

(西区)

小説選評

竹腰幸夫

本年の応募作品は12編。歴史物1編、自伝(的)3編、S・F、ファンタジー、ロマン3編、現代物6編でした。うち、現代に題材をとった6作品のうち、4編が現代社会の問題点を見すえた風刺的な作品。青春ドラマが1編。自伝(的)のうち1編は終戦直後、満州の悲劇と混乱からの生々しい脱出劇。(かつて徳川家康おひざ元浜松の歴史に材をとった作品を得意とした本誌の傾向は完全に過去のものとなったようです。)

現在は、舞台は現代。それも一時は、病気や老後など重い問題意識が中心だったのですが、テーマはむしろ前向き、フイクションの楽しみを読者と共有したいという思いの窺われる傾向になってきたようです。以下印象に残った作品を紹介します。

『さらさら星変奏曲』モーツアルトのピアノ曲「さらさら星変奏曲」(1778年)は、フランスの歌曲「ああ、教えてください、お母さん」(恋に揺れる乙女が母親に問いかける歌)に曲を付けたもの。その12の楽曲をバックに、そこから浮かび上がるイメージを詩的な文芸作品にまとめ上げた。主人公は男の子。指を7本失った少女との不思議な出会いが主旋律。そこに少女とその母親の、母娘の間に横たわる思いの闇が低音部。この12分のピアノ曲から、この物語を着想した作者の感覚に驚かされる。文章も巧みだ。

『三日月の辻で』二人の幼い娘を持つ夫婦。妻は教員。夫は印刷会社社の美術部門に勤める。どちらかといえば成り行きで生きてきたその主人公。ある夜、「音楽の町」を売り物に

するこの市のJ.R.駅前にワゴン販売の花屋を見つける。今朝喧嘩した妻のために3本のガーベラを買う。売り子の少女に「ガーベラには『感謝』『崇高美』の意味があり、3本のガーベラは『愛している』です。」と勧められたのだった。心にしみた出会いだった。というのもやがて五年後、妻が病死、少女のワゴン車も見かけなくなったからだ。その後、偶然、この少女と思しき人に出会う……。花と花言葉のかもす物語。

『都合』脳腫瘍の手術で会話が不自由になった主人公は、職場と恋人を失う。以来派遣社員として食いつなぐ。飲み屋で出会った中国人女子留学生。コロナ禍で解雇され、近くのブラック企業にやはり派遣工員として転職したという。主人公はかつて社会保険事務所に勤務していた経験から、幾人もの貧苦の若者たちに力を貸してきた。彼自身が派遣として、その工場に入り込んでみる。彼女たちはその立場上明るく懸命に働いている。しかしその実態は「奴隷」状態。主人公は及ばないまでもその企業の体質改善に心を砕く。

『スマホ』スマホなど、現代社会に根を下ろす先端通信機器とその販売員の様相について、一種の哲学をユーモアあふれる筆致で描いた風刺作品。そこへ、家族の問題、特に遺産相続をめぐる骨肉の疑心暗鬼を絡ませてドラマを盛り上げる。鋭い観察力と洞察力を備えた作者による。

その他、身辺に材を取ったいわゆる「自伝(的)作品」について一言。今回の3編はそれぞれ興味深かった。どなたにも、語りたい人生の一齣があるはず。それを書き残しておきたいという思いは貴重です。それを素直に表現することをお勧めします。作家になるわけではないし、高い評価を得たいわけでもない。ただ、表現したいということが何よりの宝です。皆様の体験とその実感に基礎を置いた生涯一編の思いの筆、楽しい挑戦を期待しています。

小説選評

柳本宗春

十二作の応募で、例年と比べると幾分少ない数ですが、それぞれに個性ある小説で興味深く読みました。今年、改めて感じたのは、内容と紙数のバランスが重要だということです。多くのことを詰め込みすぎていて深まりが足りなかったり、もう少しディテールを書き込んで欲しいと思う作品が見られます。長くても短くてもバランスのよいものが面白いのです。それでは各作品について一言ずつ感想を述べます。

「このみとさらさのいた日々」

柔道で体育大に入った大学生が、バイト先のヌード劇場で子持ちのダンサーと暮らすようになる。大学以前のエピソードは削って三人での生活を深く描いた方がより良くなったと思う。

「哀しき米俵」

江戸時代の村で起きるちょっとした事件で、気持ちのすれ違いを描く。会話は良いが地の文とのつながりに工夫が欲しい。

「あの時、君といった場所がもしかしたら：あるいは『望みのがり村』」

現代文明を逃れた人々の暮らす異界に迷い込んだ男の物語。よく練られた構成だが、さらに意外な展開を期待してしまう。

「スマホ」

あの世とつながるスマホがあったら：というアイディアを遺産相続の揉め事と絡めた展開が面白くひきこまれた。

「ジニア咲く頃」

七十年代最後の夏、コロナに罹患して養生する女性の心に去来

する若き日の思い出を描く佳作。よくある話だが、構成や表現が巧みで、しっかりと読ませる小説に仕上がっている。

「思い出」

高度経済成長期に生きる主人公の高校時代から社会人になっての体験までを淡い恋心と共に描く。描写に光るものがある。

「小さな復讐」

郵便局に勤める男の、客への復讐。ワンアイディアで成立する小品だが、ちょっとしたドキドキさせられる魅力的な小説。

「満州に咲いた花」

満州で敗戦を迎え、軍に置き去りにされた日本人家族の必死の帰還。『流れる星は生きている』を思い出す迫真の描写で悲惨な戦争体験が伝わってくる。

「さらさら星変奏曲」

磨かれた叙述の力を感じる。具体的な表現の積み重ねが観念的なものを形作るのが興味深い。

「私は写真」

軽妙な語り口で、擬人化された「写真」が自分の歴史を説明していく。最近の「盛る」写真への風刺が効いている。

「都合」

都合良く使われる外国人労働者、派遣労働者の問題に小さな反撃を試みる「俺」。構成が上手く、小説としての完成度が高い。さらに描写の工夫を重ねればもっと魅力が出るだろう。

「三日月の辻で」

街頭で花を売る少女との出会いを軸に、主人公と周囲の人々との関わりを描いている。様々なエピソードやファンタジックな内容が入っているが、散漫にならずきちんとまとめてあり、非常によくできた小説。作者の力量の確かさを感じた。

児童文学

〔市民文芸賞〕

ぼくの名前は茜 あかね

如月はるの

ぼくはオスの小型犬で、犬の種類はミニチュアピンシャーである。

生まれてから今年で、13年になる。

多くの人は、ミニチュアピンシャーのことを、ミニピンと呼んでいる。

さらにミニピンは、だいたい3種類の色のタイプに分かれる。ぼくと同じ赤毛の子は、レッドと言う。黒毛に赤茶色の斑点がある子は、ブラックタン。そして、チョコレート色ベースの子がチョコレートタンだ。珍しいものでは、ブルーの子もいる。

ぼくは、赤毛だから「茜」という名前になった。日本の伝統色の茜からもらった。茜色は、赤色の少し沈んだ色、上品でいい名前ですよ。

体長は、40センチメートル、体重は4キログラム。仲間の

中ではやや大きめといえる。

顔は、面長で鼻筋が通っている。耳はぼくの場合、普段は半分開らい前に垂れていて、嬉しい時や緊張するとピンと立つ。いつも耳が立っている子もいるらしい。目と鼻の色は茶色だ。ミニピンレッドの鼻は本当は黒なんだけど、ぼくのお爺さんがチョコレートタンだから、目と鼻の色が茶色になった。

シッポは短くて、4センチメートルくらいだ。生まれて直ぐに長いシッポをカットして短くなった。切られたって心配いらない。軽くて、嬉しい時にはクルクル回っているみたい

に動くから。最後に、歩く姿を紹介しよう。歩き方は、ハックニー歩様という美しい歩き方をする。「馬が脚を高く上げて馬車を引く優雅な仕草のこと」だ。その歩き方に似てゐるってわけなん

だけど、自分でもほれぼれしている。いつかぜひみてもらいたいと思う。それからジャンプ力もすごいんだ。自分ながらまったく驚いたものだ。

さてそろそろ体の特徴についてはこのくらいにして、ぼくたちの先祖の話をしようと思う。

ぼくたちミニチュアピンシャーは、ドーベルマンピンシャーとよく似ている。そのために、ドーベルマンピンシャーを小型化したと思われるようだ。でもそれは、すこし違っている。古くからドイツにいる、スタンダードピンシャーという中型の守猟犬をご存知だろうか。2百年〜3百年前ぼくたちは、ドーベルマンピンシャーではなく、スタンダードピンシャーを小型に品種改良して作られたのだ。

ドーベルマンピンシャーは、それよりもずっと後の時代になってから、やはりスタンダードピンシャーを改良してドーベルマンピンシャーという大型犬となった。作った人の名前がドーベルマンだった。やがて、ドーベルマンピンシャーは、警察犬として活躍して、あまりにも有名になったために、スタンダードピンシャーの名前を聞かなくなった。今では、スタンダードピンシャーの数が少なくなつて、とても貴重な存在となっている。

いずれにしても、ぼくたちの大切なご先祖様は、このスタンダードピンシャーというわけだ。

さて、今から13年前の10月15日。埼玉県埼玉県の静かな住宅街に、5匹のミニピンが誕生していた。

レッドのオス1匹。ブラックタンのメスが2匹。ブラックタンのオスが2匹だった。メス2匹はすぐにもらわれて、オス3匹が残っていた。

このレッドのオスが、ぼく「茜」のこと。

レッドのぼくは、ブラックタンの弟たちよりも、少しだけ大きくて強かった。ミルクもたくさん飲んでた。

11月のよく晴れた日のことだった。あとあと、ぼくのご主人様になる人が来た。ブラックタンの弟がほしくて、見に来たらしい。弟は、もらわれてから「黒太」という名前になっている。ぼくはその時、別の弟と遊んでいた。ぼくは、お兄さんだからね。ご主人様になる人は、それを見ていたと思う。ぼくのことを頼りになる兄貴だと言っていた。

まもなく12月になり、クリスマスの音楽が聞こえるようになった。

ぼくは黒太と一緒に、もられることになった。埼玉県から静岡県浜松市まで、5時間半も車に揺られて、気もちが悪くなつてしまった。本当の事を言うと、ぼくは、もらわれた事を知らなくて心配だったんだ。浜松の家について、もらわれた事がわかった時には、嬉しくて「ウォーン」とないてしまった。

ご主人様の家族は4人。お父さん、お母さん、お婆ちゃんおばあちゃんがいる。ご主人様は、本を作る仕事をしている女の人だった。お父さんがすぐに、木を打ちつけて犬小屋を作ってくれた。それをリビングに置くと、周りをトレリスで囲った。犬

小屋の横には、トイレシートが敷いてある。ぼくたちの庭付きの家が出来上がった。

埼玉にいたときは、ダンボール箱の中に暮らしていたから、新しい家がずいぶん大きくみえた。かっこよくて嬉しかった。

お婆ちゃんやお母さんも、入れかわりたちかわり見にきてくれる。だっこして、かわいいと言うから、ぼくは兄貴なのに、だっこされるのが大好きになった。

ぼくたちの庭、つまりリビングのゆかは、つるつるしていた。ぼくたちは歩くたびにすべってころんでいた。

それも一週間もすると慣れて、犬小屋の上にも飛び乗れるようになった。ジャンプがおもしろくて、何度も飛び乗って遊んだ。

弟の黒太は、ジャンプに興味がないようだった。ぼくだけが、乗ったり降りたりして、ジャンプが大得意になった。

トレリスの穴は大きくて、ぼく達の体を通り抜ける。ぼくは、サーカスみたいに穴をくぐり抜けて遊んだ。

毎日が楽しくて、新しい生活もあつという間に、3ヶ月が過ぎていた。

ある日ぼくは、いつものように遊んでいた。

トレリスの穴をくぐろうとして顔をつつこんだ時には、すでに遅かった。いつのまにか、ぼくの体が大きくなっていった。顔だけがはまって抜けなくなった。さすがにぼくも、恐くて固まってしまった。黒太はおろおろしてワンワンなくし、ご主人様も泣き出して、大騒ぎになった。この時ばかり

は、楽しいなんて言ってもらえない。結局お父さんがトレリスを、のこぎりで切って、ぼくの首を抜いてくれた。

「ああ恐かった！」

ぼくの起こした初めての事件である。

またある日のこと。

ぼくは、外の庭に置いてあるサークルの中でひなたぼっこをしていた。もちろん黒太も一緒だよ。ぼくは、ひまだったから、ジャンプの練習をする事にした。「えいつ」とばかりに、思い切り飛び上がり、体をひねったら、空中に体が浮かんだんだ。ぼくは、自分のジャンプ力にはれはれしてすっかりのぼせてしまった。着地したところは、サークルの中ではなかった。サークルを越えて、庭に出ていたのだ。

ぼくは、得意になって庭の外に出してしまった。家の前は、横断歩道があるような広い道になっていて、あやうく車にひかれるところだった。いつもぼくと遊んでいる近所の小学生が通るかかって助けてくれなかったら、どうなっていたかわからない。ぼくは助かった。黒太は何もなかったように、サークルで寝ている。

これが二つめの事件となった。

気づくと、辺りは桜の花が満開になっていた。

弟の黒太は、相変わらずおとなしい。ぼくの後をついてくるけど、おりこうに遊んでいる。ぼくは、「茜」という名前が好きだったし、黒太と一緒にこの家で暮らすのが楽しくて幸せだった。

「ウォーン」とないたら、ぼくの短いシッポが、バレリーナみたいにくるくる回った。

四月、桜の花も終わり、新緑がまぶしい季節になっていた。

街路樹は、萌黄色に光つてみえる。

うちの庭も、サーモンピンクのジャーマンアイリスの花が満開だ。誇らしげにこっちを見ている。

ある時、ぼくたちの家に、一人のお客様がやってきた。その人は、ぼくたちにしつてを教えてくださいました。先生は、ぼくたちのご主人様と、なにやら話をしていらっしゃるようだ。

しばらくすると、ご主人様がやってきて、ぼくと黒太の首にリードをつけた。

ぼくたちは、外に行くのが大好きだから、うれしくなつてうさぎみたいにぴよぴよはねた。黒太は門の外へとび出した。ぼくは遠くに猫をみつめて追いかけようとした。

ご主人様はその時「こっち、こっち」と、やさしく言ったので、ぼくたちは、いっしょに遊んでくれると思って、ご主人様の足に飛びついた。

すると、とつぜん「までー」と言う声がしたかと思うと、首にまきついたリードが、ぴんとなった。ぼくたちは、びっくりして止まった。

先生が、ぼくたちが気付くように「ぐい」とリードをひきよせたのだった。

「この子たちは、しっかりしつけないと、大きくなって大変なことになります」

と、この時ご主人様は先生から言われた。

「えっ？ ぼくたち大変な事になるの？」

と思つたけど、何が大変なのかなんてわかるわけがない。

ご主人様はしばらく先生と、お話をしていた。ご主人様は、ぼくたちのことを、毎日かわいがってくれたから、ぼくたちのために、しつての勉強をさせたいと思つたようだ。

「かわいい子には旅をさせよ」っていう、あれだ。

警察犬を15頭もしつていらっしゃる先生のことばに、ご主人様は従つた。

なんと4ヶ月もの間、ぼくたちは、先生の家にお泊りですつてもらうことになった。

2匹一緒に行くとご主人様が寂しいので、ぼくがさきに行くことになった。ぼくが4ヶ月終わつたら、黒太の番になる。ご主人様は、これを「留学」って言つた。ぼくは生まれて7ヶ月めで「留学」したんだから、すごいと思う。

それにしてもご主人様は、思いきつたことをしたものだ。

黒太とぼくと両方の留学期間が終わり、家にもどつた時には、街路樹のいちようがすっかり黄色くなつていた。そしてぼくたちの生まれた日、10月15日を過ぎていた。

しつての留学が終わり、1才になったぼくたちは、先生のことが大好きになつていた。きびしいけど、たくさんほめてくれたから。

久しぶりのご主人様の家は、なつかしい匂いがした。

ぼくたちの寝るハウスが置いてある。リビングは、いつも

おいしい匂いがある。おいしい音もした。野菜を切る音だ。トントンと音がするとぼくたちも、大根やにんじんを、ちよつとだけもらうことができる。これがコリコリしておいしくて、リビングで遊ぶたのしみのひとつとなった。

留学から帰ると、ぼくたちは、新しい目標ができた。ご主人様と一緒に「競技会^{きぎうかい}」に出ることだ。

そしてそのための訓練^{くんれん}がはじまった。

訓練は、エサをもらうときの「おすわり」とか「お手」とは少し違っていた。まずはじめに、「待て^{まち}」と「来い^こ」を練習^{れんしゅう}した。

「待て」といわれたら、どんなにうれしいものがあっても、目の前に気になるものが現^{あらわ}れても、その場をはなれてはダメなんだ。

でも「来い」と言われたら、すぐにご主人様のおひざに向かって走っていつて乗る。

はじめは、できた時にごほうびのおやつをもらうけど、ごほうびがなくても大丈夫になるまで訓練する。

毎日まいにち、ご主人様と一緒に練習^{いししやう}した。1週間の終わりには、留学先の先生のところまで、出来ばえを見てもらいに行った。

「待て」「来い」他に「だっこ」「座れ」「伏せ」といくつかがあった。

「来い」と言われたら、ご主人様のところまで走りよって座る。次の「来い」で、ご主人様のひざの上に乗る。ピッタ

リ息が合うと、ご主人様がつこり笑う。

リードで歩くときは、ご主人様の左足の横にピッタリついて歩く。ご主人様より前に出てはいけない。ご主人様の目をみて歩く。

これがとてもむずかしくて、何回も何回もやり直した。季節は、また桜が咲く春になった。

いよいよ競技会の日が来た。お出かけ用のハウスに入り、車に乗って1時間すると、広い運動場に降^おろされた。見たことのないほどたくさんの人と、犬がいた。ミニピンだけじゃなくて、シェパードやテリアもいた。

先生は、ばくに「いつも通りやればいい」「よし、よし。」と言った。

でもご主人様はちよつといつもと違ってみえた。きんちようしているみたいだった。

次がぼくの番になった時にドキドキして待っていると、ぼくの前の順番で競技中の犬が脱走してしまった。その犬のご主人様は、泣きそうになっていた。

ぼくはそんなことはない。

先生が言ったとおり「いつも通り」にやろうと思っている。ぼくの番が来た。今回の競技会には、ぼくだけが出場している。黒太は、次の競技会に出るため、今日は応援してくれている。

ぼくはご主人様にだっこされて、運動場のまん中あたりまで行つた。そこにはひとり、小太りの男の人が手をあげてい

た。審判員だ。「オーケー」の合図だった。

ご主人様は、ぼくを地面におろすと、リードをつけたまま、向き合って「座れ」と合図した。もちろんぼくは座った。ふん、そんなことはかんたんなことさ。次は「立て」だった。立てばいいだけだ。それから次は「伏せ」。伏せして待っている、ご主人様は、ぼくから離れて10メートル位歩いて行つてしまった。ここが重要ポイントだとぼくは思っていたから、「伏せ」をしたまま動かなかった。

ぼくの前の番に脱走した犬は、応援していた大好きなお婆ちゃんの声を聞いたら、ついついお婆ちゃんのところへ走つていつちやたららしい。ぼくは「伏せ」をしながら、ちらつと応援席を見た。すると黒太がいた。黒太と目があつて、うれしくなった。黒太も、ガンバレという心をこめて「ワン」となった。

だけど、ぼくはがまんして動かなかった。

じっと「伏せ」をしていると、遠くからご主人様が「来い！」と呼んでくれた。

ぼくは、サツと立ち上がり、ご主人様がけていちもくさんへ走った。ご主人様のところまで行くと、目の前にチョコンと座る。見上げると、ご主人様の目がニツコリして「エライよ」と言った気がした。

ぼくはうれしくて、ジャンプしそうになった。

最後は、ご主人様の横にピタリとついて、もとの位置まで歩いてもどる。けつこう長かったけど、しっかりと目をみて歩

けたと思う。

到着すると「よし」の合図で、ご主人様のひざの上にポンと乗った。これですべて終了。

全部練習の時と同じ、ふだん通りできたことになる。われながらすごいと思った。

ぼくは、ご主人様を見て思わず微笑んだ。

成績は、歩く姿勢がもっと良い子がいて、ぼくは2位だったけど、満足だった。

小太りの審判員から賞状とおやつをもらうと、ご主人様は、溢れる笑顔でぼくを「ぎゅっ」とだきしめてくれた。

しつけの勉強のときも、競技会の訓練でもはじめは、なかなか出来なくて叱られてばかりだったけど、何度もやり直していくうちに「あ、これね」と、先生やご主人様の言うことがわかるようになった。出来ると、ごほうびのおやつがもらえる。おやつがもらえるとやる気になって、がんばった。もっと出来るようになる、ご主人様が本当にうれしそうにほめてくれて、今ではごほうびがなくてもがんばれるようになった。

今日は、ご主人様も、すがすがしくやり遂げた顔で、満足そうにぼくの頭をなでて、ほめてくれた。

ぼくは、もう一度、いつもより輝いて大きく笑ってみせた。この時からぼくたちは、毎年春と秋にある競技会をめざして、毎日練習した。

朝夕2回のおさんぽの時も、ご主人様の横について歩く。

歩きながら道端で、クンクンしないで、公園につくまでまっすぐに歩く。「止まれ」と言われたら「ピッ」と止まる。「走れ」と言われたら走る。合図の通りにしないと叱られる。出来ると、ごほうびのおやつをもらった。叱られもしなければ、競技会の練習は、楽しく充実していた。

黒太も競技会の練習が好きだった。号令をきいて、止まったり走ったりするのが楽しいらしい。ゲーム感覚で時間を忘れるみたいだ。とりわけ「止まれ」と言われて、ピタリと止まれた時が好きで、ご主人様と目が合う瞬間しゅんかんがこの上なくうれしい。そうして、ワクワクしながら次の号令を待っている。まったく、黒太は素直でいい子だと思う。ぼくの自慢の弟だ。

ぼくは、訓練は楽しくて嫌いやじゃないけれど、黒太と違って時々めんどくさくて練習したくないときがある。

はじめての競技会から5回めの春が来た。

ご主人様はこの頃、バタバタと忙しくて仕事からの帰りが遅いし、週1回の先生のところへ通う訓練も休みがちだった。

またもや桜が咲き、そして散って、若葉がまぶしい五月になった。

ご主人様は、ぼくたちの知らないところにお嫁に行ってしまった。

ぼくと黒太は、その日から毎日ベランダに出て、ご主人様の帰りを待つようになった。

「訓練楽しかったなあ」

この時から、ご主人様のお父さんとお母さんがぼくたちの、お世話をしてくれている。

心配はいらない。毎日おさんぽに行って、公園で遊んでいる。おいしいごはんもたべている。「おりこう」と言って頭もなでくれる。

ぼくは、黒太とも相変わらず仲よくしている。時々、黒太がひなたぼっこしていると横はிரいするけど、黒太はおこったりしない。

食欲も満点で、なんでも食べる。といってもドックフードの他は、少しの野菜だ。

にんじんやキャベツの芯は、コリコリして大好きだからたくさんねだってたべた。ねだられると、ご主人様のお母さんも、野菜だからいいと思って、どんどんくれたんだと思う。

ところがぼくたち兄弟犬の体質には、ちよつと食べすぎてしまったようで、おしっこがたまるところに石ができてしまった。ある日石がつまって、おしっこが出なくなった。

ぼくも黒太も仲よく同じようにつまった。今は医学が進んでいて、腹腔鏡手術ふくくうきょうしゅつというもので、石をとり出してもらい、助かることができた。

助けてもらってありがたいはずの病院だが、ぼくたちは、ますます病院ざらいになってしまった。

それからは、ごはんやおやつの食べ方を、とても気をつけている。

そして、元気でいられる事を大切にするようになった。

「ご主人様のお母さんは、ほくたちがごはんをたべるとそれだけで「おりこう」と言う。うんこやおしっこが出ると、「おりこう」、「よかったね」と言う。

おさんぽして、ピョンピョン歩いたり、走ったりするたびに「おりこう」、「よかったね。よかったね」という。

だからとくべつにがんばることはしていないけど、いつもいい気分でホクホクして過ごしている。

おさんぽも、時々めんどくさくて「ひなたぼっこしてたいなあ」と思うけど、おさんぽに行くようにしている。

ほくは、このうちが好きだから、黒太といっしょにずっとこれからも、長生きしようと思う。

それから今だって、お嫁に行ったご主人様の帰りを待っている。

(中区)

「市民文芸賞」

あまがえるのケロくんとおじいさん

河島 憲代

「こんどは、ぼくのばんだよ」

そういつて、あまがえるのケロくんは、田うえのおわった田んぼのあぜから、おもいきり遠くへとジャンプしました。

ポチャーン

小さな音がして、そのしゅんかん水のわが、わきあがるように、田んぼにひろがります。

「ケロくん、すごーい！」

「さっきより、遠くにジャンプしたね」

なかまのあまがえるたちが、くちぐちにいました。

あぜにもどったケロくんは、

「ぼくさ、もっともっと大ジャンプができるようになりたいな」

と、青い空をながめます。

風が、みずかがみようになっていて、広い田んぼの上をサ

ラサラとふいていきます。

田んぼのむこうには、クリーム色の三がいだてのおとしよりのしせつが見えます。

そのそばに、大きなさくらの木が一本、葉っぱをこんもりとしげらせてたっていました。

つぎの日も、つぎの日も、ケロくんたちは、ジャンプのれんしゅうをしていました。

「いちにのさん！」

ポチャーン

「もう一かい。いちにのさん！エイッ」

ポチャーン

あまがえるたちのなかで、とくに、ケロくんは、はりきっていました。

「足の力をつけなくちゃ」

と、なんかいもジャンプのれんしゅうをします。

そのたびに、田んぼの中には、水の水が、いくつもかさなつて、キラキラとひろがつていきます。

あまがえるのジャンプは、とてもたいせつなのです。

サギやヘビ、ねこたちにねらわれたとき、いのちをまもるためにすばやくジャンプして、遠くににげるためです。

ケロくんが、まい日なかまのあまがえるたちと、ジャンプをれんしゅうしているうちに、田んぼのイネは、グングンそだつて、ふとくてじょうぶになります。

いつのまにか田んぼは、いちめんの緑色。

ケロくんや、なかまたちのすがたは、イネの緑色にかくれて見えにくくなります。

それでも、ケロくんたちは、ジャンプのれんしゅうをつづけています。

ポチャン ポチャン！

ケロくんたちがとびこむ音がして、ひろがる水の水が、あちらこちらにできては、消えていきました。

あまがえるのにぎやかな声のする田んぼのよこの道を、赤い自転車にのった女の子が通ります。

前かごに、ムギワラぼうしをさかさまにして、その中にアジサイの花をいれていました。

「おじいさんに、おにわでさいたアジサイのお花をとどけるわ。紫色できれいだもの」

と、ひとりごとをいってから、ちよつぱり音がだせるように

なつた口笛を、ふいていきます。

女の子は、おとしよりのしせつでくらす、おじいさんにあいにく孫のまいちゃんです。

ある日。空に、黒い雲がもくもくとひろがりはじめました。

つよい風がふきだして、長くのびたイネは、ザワザワとゆれます。

「風がおさまるまで、ジャンプのれんしゅうは、おやすみだ」

あまがえるたちは、みんなでそういいあつて、イネのねもとをおよいだり、ごはんをたべたり、のんびりしていました。

風は、どんどん強くふいてきます。

ケロくんは、なかまにいました。

「ぼく、この風にのつて、ジャンプをしてみたいな」

「大風にのつてだって？」

「どこまでとべるかさ」

「べちゃんにされたいのか？」

「いきてかえれなくなるぞ」

「やめとけよ」

「そうだ、そうだ」

なかまたちが、しんぱいをしていました。

けれども、ケロくんは、ますますぼうけんをたくなり、ザワザワとゆれるイネのくきをのぼりはじめます。

そして、とうとうイネの葉っぱの上に出了ました。葉っぱにしがみついていないと、ふりおとされそうです。

もう空は、黒雲におおわれてしまいました。

「おりろ」

「おりてこーい」

そうさけぶなかまのこえは、ゴーとなる風の音で、けされていきました。

葉っぱにしがみついているケロくんは、ジャンプをするチャンス、いまかいまかと待ちます。

いっしゅん、風がとまります。

「いいぞ、いいぞ」

と、ケロくんは、風のくるほうにおしりをむけます。そして、さげびました。

「こい、大風！」

そのとき、うずまきのようなものすごい風がきました。

「いまだー」

ケロくんは、ジャンプのれんしゅうできたえた後ろ足で、おもいきりイネをけとばしたのです。

グオー

ビュー

ケロくんは、風にのつてとびました。

手と足をピーンとのばして、

大きな目は、前をしっかりと見て、

口は、キュッとむすんだまま。

まるで、小さな小さな鳥のようにとんでいきます。

あつという間にケロくんは、田んぼの上をこえていきました。

た。

ケロくんの目の前に、大きなさくらの木がせまってきました。

「よし、いまだーとびこめ！」

と、さくらの木の葉っぱの中へ。

ケロくんは、ふといさくらの木のえだにベタツとくつつきました。

むねがドキドキしています。

ひどくつかれて、そのままケロくんは、ねむってしまいました。

その夜は、雨もふつてきていました。

朝になって、雨がやんでお日さまがカッとてりつけました。

雨にぬれたさくらの葉っぱが、お日さまの光をてりかえします。

そつと、目を開けて、ケロくんは、目をクルンとします。

「ここは？ いったいどこだろう？」

ケロくんがいるのは高い高いさくらの木のえださきでした。

ケロくんのすんでいた田んぼは、ずっと遠くにかすんでいます。

「ば、ばく。ほんとうにとんだんだ。こんなに遠くまで。だ、だけど・・・」

おいそぎで、ケロくんは、いろいろなことをかんがえます。いっぱいいっぱいかんがえます。

そのとき、とつぜん。

「どうして、そんな高いところにいるんだい」

しわがれた声がありました。

ケロくんは、はっとしてその声の方を見ます。

「ここは、三がいだぞ。おまえさんは、さくらの木をのぼってきたのかい」

ペランダで車いすのつたおじいさんが、ニコニコとケロくんを見ていました。

「あぶないぞ。ほれ、こっちにおいで」

おじいさんは、ほそい白い手をケロくんのほうにさしだしました。

すると、ケロくんは、はっとして、おじいさんの手にピョントとびのります。

「ほお！ うまいもんだ」

ハハハと、おじいさんは、わらいました。

ケロくんは、目をクルルとしておじいさんを見あげ、おしやべりをはじめます。

小さなからだのわりには、大きな口で。

「ほくね、きのう、大風の中で、ジャンプをしたんだ。どこまでとべるかさ」

「なんと！」

「それでそれで、あっちの田んぼからここまできちゃった」

「なんと！」

「ほくだつて、びっくりさ」

「なんと！ おどろきじゃ」

「そしたら、おじいさんにあえたんだ」

おじいさんは、むちゅうにはなすあまがえるに、目をパチパチさせていました。

「ほお、おまえさんは、にんげんのことばがはなせるのかい」
「ええっ！ おじいさんが、かえるのことばなんでしょ」

「そうかい。ハハハ」

おじいさんは、とつてもゆかいそうに声をあげてわらいます。そして、

「だいぼうけんをしたものだ」

と、かんしんします。

おじいさんのわらい声は、へやの外のかままできこえていました。

ちようど、おじいさんに会いに来たみいちゃんが、

「おじいちゃん、こんにちは。きょうは、青いアジサイのお花よ。おきやくさんなの？」

こんども、ムギワラぼうしにお花を入れてきました。そして、ペランダにいるおじいさんのそばに行きました。

「やあ！ みいちゃん。いつもお花をありがとう。きれいだね」

「おじいちゃん、おきやくさんとおはなししてたんじゃないの？ 楽しそうなおじいちゃんのわらい声がきこえたわ」

「うん、かわいいおきやくさんだよ」

「でも・・・いないよ。だあれも」

すると、

「えへ、ぼくのことさ」

と、小さな声がします。

「ええっ！」

「ぼくね、ケロくん」

ケロくんは、むねをはっていいます。

「……」

みいちゃんは、目をまんまるにして、口までぽかんとまるくして、おじいさんの手のひらに、ちょこんとのついているあまがえるをじっと見つめます。

でも、すぐに、

「うふふ。じぶんのこと、ケロくんだって」

と、みいちゃんは、につこり。

「だってさ、ぼくのなかまがみんなそういうよ」

「そうだった。わたしも一年生になるまでじぶんのこと、みいちゃんっていつてたもん。ケロくんは、おじいちゃんと、どんなおはなしをしていたの？」

「ぼくの大ジャンプのことなんだ」

「ケロくんはな、きのうの大風の中をだいぼうけんをしたのさ。そして、ここにきたんだよ」

「へえー。どこから？」

「ほら、むこうの田んぼからだ」

おじいさんが、さくらの木のむこうに見える、緑の田んぼをゆびさします。

「あんな遠くから？　すごいね、ケロくん」

「ぼくも、おどろいているんだ。おもいきりイネをけとばして、こうやって、からだをピンとして」

ケロくんは、手と足をのばしていつしようにけんめいはなします。

「そしたら、このさくらの木までとんでこれたんだ」

「けさな、こっちにおいでと手をのばしたら、うまいぐあいにわしの手にのつたんだ。アハハハ。あまがえるにあうのは、ひさしぶりじゃわい」

また、おじいさんはうれしそうにわらいます。

「そうだったの。ケロくん、すごいね」

いつの間にか、ケロくんとおじいさんの話に、頭をこつくりしながらみいちゃんはききいます。

おじいさんは、まごのみいちゃんまで、ケロくんとおしゃべりするのですから。

もう、ゆかいでたまりません。

「でも……ぼく」

と、ケロくんが、ふいにしよんぼりしました。

「どうしたんだい？　ケロくん」

「あのね、おじいさん。ぼく、朝になってすごくかんがえたんだ」

「なにをだい？」

「いっぱいかんがえたんだけど、ぼく、どうやってかえつたらしいか。わかんない」

とてもかなしい顔でいいました。

「なんだ、ケロくんは、かえり道をかんがえずにとんだのかい」

「だって……」

「むちゃをしたもんだ」

「ぼくが、かえらないと、みんながしんぱいをする」

「そりゃそうだ」

「どこかで、サギにたべられちゃったかつて」

「みんなは、『やめとけ』っていったんだろ」

「うん」

ケロくんは、目をつぶってげんきをなくしました。

「はてさて。どうしたものかのう」

おじいさんは、空を見上げてかんがえます。

「ここでもうしてもよいがな。きつとなかまが、まっているだろうよ。ふむ」

みいちゃんもかんがえます。

そのときです。

ケロくんは、田んぼの見えるベランダの手すりにむかって、おじいさんの手からさゆうにジャンプしたではありませんか。

「あぶない！」

おもわず、おどろいたみいちゃんが小さくさげました。ケロくんが、ベランダの手すりにちゃんとちゃくちしたの
で、みいちゃんも、おじいさんもむねをなでおろしました。

まだ、むねがトクトクしているみいちゃんは、おじいさんに、ないしょばなしをするように耳もとでいいました。

「ケロくんは、すぐ田んぼにかえりたいんだよ。それでねー」

おじいさんは、ニコニコとうなずきます。

それから、みいちゃんは、ベランダの手すりにいるケロくんにやさしい声でいいました。

「ケロくん、しんぱいしないわ。かえり道のこと。わたしね、ケロくんを田んぼまでおくってあげる」

「よいかんがえじゃ」

おじいさんは、おもわず手をうちました。

それから、

「あんしんしてもういちど、こちらにおいで」

と、ケロくんにおじいさんは、ほそい手をのびします。

すると、ケロくんは、ピョンとジャンプをしておじいさんの手のひらに、とびおりました。

「アハハ。な、うまいもんだろ」

「わあい。ケロくんのつたあー」

みいちゃんも、おおよるこびです。

「ケロくんや、よかつたな。よいほうほうがみつかった。みいちゃんが、みんなのいる田んぼにつれていってくれるぞ」

「ぼく、ほんとうに田んぼにかえられるの？」

「そうだよ。なかまにあえるぞ」

「やったあ！ おじいさん、ありがとう」

「おれいは、みいちゃんにかな。あははは」

「うん。でも、ほく、おじいさんとあえてうれしかった。ほくの、はなしをいっぱいいきいてくれたもの」

「わしもだよ」

おじいさんは、目をほそめて、

「このとしになって、あまがえるのケロくんともだちになれてうれしいぞ。もう、むちやをするなよ」と、いいました。

ケロくんは、まあるい目をますますまんまるにして、おじいさんを見つめました。

みいちゃんは、青いアジサイの花を、紫色のアジサイの花をいれてある花びんにいれました。おじいさんのへやに、やさしいかおりがあふれます。

それから、ケロくんにいました。

「田んぼまで、このわたしのムギワラぼうしに入っててね」そして、ぶじにケロくんは、田んぼにかえったのです。

ケロくんは、なかまたちにあの大風の中、イネの上からとびつきりの大ジャンプをしたこと。

おとしよりのしせつの前にある、さくらの木にとびついたこと。

それから、おじいさんと、みいちゃんにあって、おしゃべりをしたことなど、なかまにはなしました。

「ケロくん、よかったな」

「しんばいしたぞ」

「どこまでも、大風にふきとばされていってしまつて、ケロくんには、もう、あえないかとおもつたよ」

「うん、ほくもだよ。おじいさんにいわれちゃった。『むちやをするんじゃないぞ』って。

でもね、ほくの、だいほうけんで、『あまがえるにあえたのはずいぶんとひさしぶりじゃ。ケロくんと、ともだちになれてうれしいぞ』って、よろこんでくれた」

と、ケロくんは、おじいさんのいるおとしよりのしせつの三がいながめて、田んぼの水の中からいきました。

きょうも、田んぼのあちこちであまがえるの声がしています。

まるで、ケロくんとそのなかまたちが、

「おじいさん、ほくたちの声がきこえますか」

そういつているようでした。

どこまでもつづく、緑色した田んぼ――。

その上を風がふくと、サワサワとイネがゆれます。とてもやわらかな風です。

(東区)

「入選」

おかあとおいらとわし

内山 文久

ことし、「わし」は七十一さい。そうじゃ、しょうしんしようめいの（じいじ）じゃ。いまからかきつけることはわしの母さんの話じゃ。わしがかいているから、時には、とても古い話や、またひょこりと今の話やほかの時代のいろいろな話がでくるかもしれない。まあそれは、それでもいいことにしてほしいな。それじゃあ、わしが九さい、「おいら」だったころの「おかあ」の話を聞いてくれ。

*

今、おいらは九さい。いや、おいらのはなしじゃない、おいらがはなすのは、おいらのおかあのはなしだ。なまえは「しの」と言うんだ。おいらのおかあはとつても小さい。百三十五センチくらいかな。おいらより少し背が高いだけさ。それでも六人のこどもを産んだ。おいらは六番目のこども、昭和二十六年に生まれたすえつ子さ。おいらのおとうは（じなんぼう）で「しんや」といわれるちいさな家を本家の

近くにたてた。家は町からは二キロくらい離れた山の中、道路にちかいところにある。せまい家にぜんいんで八人家ぞくなんだ。だから、そりゃあ、にぎやかなんだ。しょうしんしょうめい、びんぼうにんの、こだくさんさ。でもおいらぜんぜんきにしない。だって、みんなといること、そのたのしさがびんぼうをノックアウトしているからさ。

さて、おとうもきつとそうだと思っただけで、おかあは、こどもはもちろん、おとうのことがだいすきらしく、なにもないときは、いつもニコニコしている。ただおとうが、なにか悪さをしたり、おかあにいじわるをするとおかあは「おいおい」泣いてしまうんだ。「怒って泣いているのではなく、悲しくて泣いているのだ」と、こどものおいらにもそれはわかってる。とてもたよりにし、まだだいすきな人から「じやけん」にされると、そりゃあかなしいものだから。そう、仲がよくて、おいらもだいすきだからときどき、いじわるしたくなる弓子っていう女の子がいるのだけど、ちよつとでもいじわるするとすぐ泣いちゃう、それとおなじかな。おかあが悲しむのは決まっておとうがお酒をのんでごきげんなようすで町から帰ってきたときが多いような気がする。町で芸者さんをあげてきたというのだからむりもないらしい。芸者さんが女の人で、しろぬりのおけしようにして、きものをきてきれいにしているのを、おいらいちどだけ見たことがある。そりゃあ、おかあはあんなかつこうはしない。いつもかすりのもんぺにかすりの上つぱり。PTAや、さんかんかひの時

だけそのかすりの上下の上に、ししゅうのついたえりの、まっ白なエプロンをしてくるんだ。ほかのどうきゅうせいにもおなじかつこうのおかあさんがあるのは今の（りゅうこう）なのかな。そのとき、とてもうれいのとまぶしいのと、はずかしいのがまざって、もじもじしているおいらがいつもそこにいるんだ。

それともうひとつ（だいじなこともかもしれないこと）がある。今はまったくおぼえていないのだけれど、どうやら幼稚園にいくころまで、おかあはおいらだけにたくさんのかしはなしやじぶんでつくったはなしをしたらしい。五さい上の（ふうねえ）があとになって話してくれた。それは小さなことにとつてすごくおもしろいらしくて、おいらはケラケラ笑って「おかあもつともつ」と話がおわるたびつぎの話をおかあにたのんだらしい。けれど（ふうねえ）にとつてその話はとてもきみようなものだったようだ。たとえばキツネはにんげんをだますのがふつうなのだけれど、おかあのはなしではにんげんがキツネをだましたり、あんなにでつかいゾウがそれからふつてきたり、そりやあ、めちやくちゃだったんだって。それでもおいら、めちやめちやな話はいまでもすきだ。だとすれば、おいらがこうして話や作文がすきなのも、どうやらおかあの（おはなし）のえいきようと、おかあからのいでんのようなのだ。さつきもいったがおいらは九さい、三年生になったばかりだ。

*

おいらの「おかあ」は大正三年（1914年）にうまれた。周智郡奥山村水窪本町というところだった。そうさ、おいらがうまれた部落、奥山村河内とはちがつていても、そこはおいらとおなじの奥山村の場しよだ。今では国鉄飯田線が走っているのだけれど、大正のころは一本だけ南の西渡から馬車道だけが続いていたらしい。（ただほかにもいろんなところにいける山道はたくさんあったようだ）だから不便と思うけれど、どうしてどうして、そこは塩の道といって北の信州から、南の遠州からさまざまなものが行き来する中継点・宿場町としてにぎわっていたようだ。旅館は十軒をこえ、料亭や置屋（芸者さんのいる家）もたくさんあり鍛冶屋、髪結いの店（とこやさん）など町としてひつようなものは一応そろっていたそうさ。ただ奥山村という、おかあとおいらたちがうまれた場しよからは、南北十五キロくらい、そう塩の道があるいてそれぞれ四里くらい行かないと大きな集落はなく、そう逆に南北の町や村からそれぞれの場しよにでかけるばあい、奥山村で一泊するよりかはなかった。当時奥山村には七千人くらいの人ですんでいた、明治、大正とそのくらいのひとびとが生活し、にぎわっていたんだ。もちろん時代は変わったのだけれど「今でもそのおもかげがあるのじゃないかな」とおいらは、いきいきした町を歩くとびそうおもう。

たびびとが南から塩の道を北へと上がってくる。さいごに一つ大きなまがりかど（はんじまというばしよだ）をぬけると、まわりは山にかこまれているのに、とつぜん川ぞいに、ふしぎなくらいたくさんの家々が見えてくる。それが奥山村だった。昭和三十五年の今も、町はにぎやかで、てんきがいと、どこもかしこもキラキラとかがやいている。どうやら今は（輸出好調）のえいきようでけいきがいいのだとおうはいっている。いつけんのこらず、店という店が、新しいものであふれかえって、わらっているみたいだ。

その奥山村水窪本町に、おいらのおかあは、そのころぜんこくで「水窪絹」といわれたほどゆうめいな蚕をつかった絹糸作りの元締め（もと締め）の家に長女として生まれたらしい。それゆえ、おじようさまとしてなに不自由なく暮らしていたという。（そういわれ、考えてみると、おかあは少しわがままなところ、勝ち気なところがある。なにより、りよう理の味がハイカラで、その味はおかあのいつもつくるありふれたりよう理の中にもしみこんでいる。にもの野さいの、じようひんな味、おはぎのあん、きなのなどのあじつけもあますぎなくほどよいのだ。どうしてわかるかという、おなじ部落の中でおいらはよくほかの家に行つて、ごはんをちやつかりごちそうになることがあるのだけれど、おいらの家の味は、となりの家また部落の家々の味つけとはぜんぜんちがつている。おじようさま時代に知つた味の感覚が、おかあのからだにしみついているのだろうか。それとも・・・）ただそんな

おかあの、ゆうふくで、しあわせな時間は長くつづかず、あつという間におわりをむかえてしまったのだつた。

それは大正十四年二月二十五日のことだつた。その日おかは学年末のせいなのか学校からはやく帰つてきていた。じんじよう小学校五年生のおわりごろだつた。庭でいもうとの「さき」と手まりであそんでいた。（一番初めは「一宮、二は日光の東照宮、三また佐倉の惣五郎、四はまた信濃の善光寺、五つ出雲の大社、六つ村々鎮守様、七つ成田の不動様、八つ八幡の八幡宮、九つ高野の高野山、十で東京心願寺」ふたりでむちゆうになつて、くりかえし、くりかえし、手まりをついてあそんでいると、きゆうにカーンカーンカーンカーンと半鐘がなり始めた。カーンカーンカーンカーン、カーンカーンカーンカーン、カーンカーンカーンカーン。半鐘の音はどんどんはげしくなる。それは小学校に行くくとちゆう、よく見る、郵便局の近くにある鉄こつでくまれた高い半鐘からの音だつた。しばらくするとうちの家の上方、山ぎわにある絹糸工場からおとうが息をきらし、まつさおなかおでうちにはいつてきた。

「みんな、はやくにげろ。（たか橋）をわたつて、おばあのじつ家のある向市場のほうに向かえ」

「おとう、どうしたの」

おかあが聞くと

「火事だ。大火事だ。その火がもうすぐここまで火がやつてくる。みんな、はやくにげろ」

そういわれて、じいじ、ばあば、それにおかあと「さき」とおにいの「もへい」とおかあの「おかあ」はいそぎ足で家の下の細い道を通つて、（たか橋）に向かい、橋をぬけようとした。とちゅう煙の匂いがはげしく、背中があついているように感じた。それでようやくたどりついた（たか橋）の上からおかあがちよとふりかえつて見ると山にそつたおとうの工場をはじめ、その下につづく塩の道の街道ぞい、つまり水窪本町中に火の手が上がっていた。

「おかあ、おとうはだいじょうぶかねえ」

とおかあが、おかあにいう。

「あんじょうないら。（しようぼうだん）といっしょに火をけしているもんだから」

おかあの、おかあがいう。

おかあも、みんなも、おとうのぶじをいのつた。

火事は夜までつづいた。翌朝、かわいそうなことに街道ぞいにある火元の旅館からその主人と女将さんの遺体が見つかった。夕飯の支度中、かまどに揚げものの油が入ってもえ上がり、すいじ場の木のかべに、もえうつたそうだ。その旅館にとまっていた人の話によると二人は、じぶんのこどもとお客さんをにがしたあと、必死で火をけそうと、すいじ場のかめの水をまいていたそうだ。そうするうちに煙にまかれて、やけ死んだようだ。その日は風もひどくふいて、あつという間に町中にもえ広がったのだった。しようぼうポンプもあつたのだが、二人でこうごに押す、手押しのポンプではま

ったく（やけいしにみず）だった。

その夜、風も火事もおさまつて、おかあのはなしによると、おかあの家ぞくのほかに向市場へにげた人で、行くあてのない人たちは向市場のお寺、善住寺に、みんなあつまっていたようだ。「とまるのは本堂でどうぞ」と、おしようさんがとりはからつてくれたのが何しろ二月、とても寒いので寺の広い庭で、たき火をして、にたきをし、またさむさをやわらげていたらしい。またとうぜん、ほかの部落にたすけをもとめたひとでも多かった。城西、神原や大里、小畑に大原にとみんな、にげていた。さつきもいったのだが向市場に森山というしんせき、ばあばの生まれた家があつたのでさいわいにも、おかあらはそこでやつかいになることができたのだった。

つぎの日、それでもこのされた家の道具をすこしでもはこびだそうと、やけずにすんだ、（たか橋）をこえて行こうとしたがみるとすでに町中がやけのはらになっていた。とうぜんおかあの家も丸やけで、着いてみると、土だいになつていたおおきな（しき石）もまつくろこげだった。よそうはしていたものの、みんなの落胆振りには、はかり知れなかった。ほとんどのものをうしなうことがひとばんでおこつたのだから。

夜になって向市場の家に戻ってきたおかあのおとうはすさまじい顔をしていたという。おかあのおとうは決意をしていたのだ。地主であり絹工場の責任者のおとうは工場をたてなおすために、自分のもつほとんどどの権利と財産を放棄し、村

にゆずろうとしていた。はたらいっているひとたちのあととあのこと、取引先とのこと、そのほか出来るかぎりのことをして、自分の役目をあとのひとにまかせる決意をしていたのだ。その結果、おとうおかあの家へのこされたものは、家族五人と祖父母七人の命とわずかにのこった土地にたてたバラックまがいの家だけとなってしまったのだ。

ゆくゆくは女学校にかよい、女子高等師範を卒業し学校の教師になろうとしていたおかあ、のぞみはなくなつた。その日からおかあの、人生はかわつてしまつたのだ。その時十一さい。おかあのいもうとのさきおはさんからきいたはなしなのだけれど、せいせきもよく、ちよつとしたことにも気づいて、びんかんだったという、おかあのきもちはどうなものであったろう。

「しの、もうしわけない。こんなことになつてしまつて。何してもやれないじぶんがなさけない。たてなおそうにも、しの、今のおまえにはもう、のこされた時間がないのだから」「ごめんね、いっしょけんめい勉強にはげんでいたのに、わしらあ、なにもできなくてごめんね」

父と母はおかあに向かつて涙ながらにわびたという。

そのころの学校はきまりで十二さいになると男女とも自分の行く道を決めなければならなかつたようだ。家によううのあるひとは尋常小学校をそつぎようし、上の学校にすすむ。しかしそれができないひとは就職する。男はどこかのしことの下ばたらきをしてから一人前になつてしごとをはじめる、

女は奉公、どこかの家のお手伝いさんとしてはたらきはじめるのがふつうだった。おかあは奉公をえらんだ。いや、だれの目にも、それがいかに方法はなかつた。

「おとう、いいよ。わしはもう決心した。あにいま高等小学校をやめて大工の見習いに行つたし、いもうとのさきもまだ八さい。自分のことは自分で何とかするでいいよ」

「おかあ、おとう、さきのこと、それからいいじ、ばあばにやさしくしてよ」

そういつたという。そのおかあのことばに、おとうもおかあのおかあも、むせぶように泣いていたという。

*

おかあは十二さいの春、磐田に奉公に出るため塩の道を南に下つて、朝早く西渡を目指して、つきそいのおじさん喜八さんといっしょに家を出た。本町から少し坂道をのぼつて行くくと半島にさしかかつた。そこでふりかえると水窪の町が見わたせた。本町・神原・向市場・上村の家々、それといっしょに朝もやの中、かすかに、たか橋の袂で、おとうとおかあがこちらに向かつて手をふっているのが見えた。おいらのおかあはポロポロ涙を流しながらそれでも、喜八さんに向かつて「もう行かまいか」といい、もういちどふりかえつて歩き始めた。西渡まではうねうねと細い馬車道が四里あまりつづく。こどもの足だからとおとなたちは考えて、六時に水窪を

出ることにしたのだった。だからつきそいの喜八さんは、お昼までに西渡に着けばいいと思っていた。

十一時すぎに西渡に着いた。そこにはおかあがびつくりするほどの、水窪川とは比べものにならないくらい大きな川、天竜川がどうどうと流れていた。そのころようやく佐久間から西渡、西渡から横山までは乗り合いの秋葉バスが走るようになっていた。ふたりはそのバスに乗りうとしたのだが、じょうしゃ時間まで間があつたらしく、しかたなく、ていりゅうじよのちかくで休み、一時間ほど待つてから生まれて初めてのバスに乗り横山へと向かったという。バスといつても、そのころは十にんも乗ればいい、つかい古しのボンネットバスだった。アスファルトなんてない、くねくねした、でこぼこ道を一時間ほどはしつて横山に着いた。ただ横山から南には木のつり橋はあったのだが川幅が広く深いので、そのころは自動車のおれる鉄の橋がなかった。それでバスを木のあつい板をくつつけ、よこいっぱいにひろげた(団平舟)という渡し舟にらせてむこう岸まではこんでいた。おかあはその舟に乗ったそうさ。小さなバスだから渡しが出来たということなのだろう。(そのあと、たいへんな苦勞のすえやつと、今ある鉄橋が出来たようさ)

おかあは天竜川ぞいに下つて掛塚につき、そこから東に向かい磐田の見附というところに奉公にいった。磐田でも名家の和田さんという家にお手伝いさんとして入ったという。和田家では、いなかの素直なそれでいてものわかりのいい女の

子をさがしていたという。またおかあのこと、また家の事情を知っている水窪の村長さんからも、ちよくせつ和田さんにおねがいがあったという。

和田家の人々はみんなやさしくておだやかな人たちだったそうさ。それでも十二さいの女の子にとっては、水しごとやせんたく、りよう理、また子どもたちのお世話はいへんだったようで「あのころわしは、ねるとき、なんど、しくしく泣いたことか」と目になみだをうかべていわれたときは「ほんとにたいへんだったんだ」と思った。それより、何よりつらいのはお使用で見附の町を歩くととき、おなじ年くらいの女学校の生徒がさつそうと羽織と海老茶袴と黒い靴姿で歩いていると(さつと)うら道にかくれたそうさ。こころのそこから、かなえようと思ひ、かなえられないものがあるなんて、ほんとうにひどいとおいらは思った。

おかあはそれから十年間奉公をしたそうさ。でもやっぱりだいだいだいすきな、ふるさとのことが忘れられなくて、水窪にもどってきた。そうさ、ここがいつてことは住んでいる人みんながわかつている。それがやむをえない事情によつて、ほかの場所に住むことになつてしまっただけだ。おかあはちかくの親戚の小料理屋や旅館の手伝いをしながら暮らしていたのだが二十四さいの時、おとうとお見合いをした。それは昭和十三年、第二次世界大戦が始まる三年前だった。おとうは二十九さい。陸軍上等兵として満州にも行つていたが兵役も終わり、実家のある河内で、(今もそうさ)林業をし

ながら、きたるべきせんそうのために、部落の人を訓練する役目のひとつとなっていたらしい。ぐんたいと、ながい奉公のため、二人とも当時としてはおそいけっこうな年齢だったらしい。お見合いの席でのそれぞれの印象は決していいものではなかったようで、おかあは

「なんと、からだはしっかりでかくて、まっ黒い顔のひと。いろじろの優男のほうがわしいのに」

おとうは

「なんだ、こんなにちっちゃいおなご。顔もちんちくりん」とおたがい散々な状況だったようだ。それでもそのころとしては（お見合い）だから、けっこうすることは、きまったようなもので、おかあは河内の新家に嫁入りしたのだった。その家は今おいらがすんでいる前の道路ごしにあった、そまつの二部屋があるだけの平屋だったという。今は柿の木が一本と小さな花だんがあるくらいのはしだ。おいらが生まれる二年前まで家ぞくみんなそこに暮らしていたという。長女が生まれ長男が生まれ次女が生まれ次男が生まれ三女が生まれそして（馬のしっぽ・三男坊）のおいらが生まれた。その十二年間はもちろんそれからもずっと、おかあは家にいてこどもの面倒を見つづけた。それでもおいらが九さいになった今、おいら以外、こどもと呼べるのは上の兄貴と姉だけでその上は皆しごとをしている。上の三人は家のことを考えて中学校をそつぎようしたあとみんな、しごとについたんだ。今はどうなんだって？ おかあにとつてみればそりゃあいちばん

小さいおいらがかわいいにきまっているらしい。だから少し前まではおいらをダッコして眠るのがふつうだった。だけど小学校に入るころからおいらは、きゆうにはずかしくなつて、おいらが（いやだ）といったりすると、反対にぎゆうぎゆう、おいらを抱きしめてくるおかあだった。だからおきなこえでよいに、いやだ、いやだといったのをおぼえている。すえつこというのは、みなかわいくてしかたがないのだろうか。そう、おいらを生んだのはおかあが三十七さいのときだったし。そのころ、ちかくのいえに五十さいくらいでこどもをうんだ（おきくさん）という人がいて、こどもはおいらより五さい上の中学生になっていたが、その（きくさん）は六十五さいだったからおばあさんに見えた。そんなこともあつて、おいらは授業参観があまり好きじゃあないんだ。まわりのお母さんはおいらのおかあよりへいきん十さいくらいは若い。今、おいらのおかあは四十六さいなのだから。それからよけいに学校の勉強では負けまいと思う。お母さんの年が若いほうがこどもも元気なのだろうから。

これもなぜか思いだしたのだけれど、幼稚園のころ、おいらがぐずつて（幼稚園にいきたくない）といったのだろう。

おかあは「きつ」ときびしいかおになつて、小さな体でおいらをおんぶし、幼稚園に向かったことがあつた。幼稚園まで片道三キロある道路はぬかるんで、からだじゅうがぬれる雨の日のことだった。そうはつきりと思ひだした。時間は梅雨時の朝で、場所はもう少しで幼稚園という、永福寺の幅

二メートルくらい細い参道でのことだった。背中におかあがさしたコウモリ傘から落ちるしずくがあたり冷たくて、おいらはグスグス泣いていた。おかあはそれでも（必死だったのだろう）道のりようがわにある営林署の職員住宅のわに咲く紫陽花の垂れ下がった葉むらをからだで振りはらいながら幼稚園へと向かった。勉強をしなくても出来なかったおかあ、勉強出来ることがおかあの望みだったからそんな行動に出たのだろう。「勉強しろ」なんて一回も言ったことはないおかあなのだが、こどもを学校にいかせることには、とても（ごうじょう）なんだ。

*

おかあは昭和二十四年にあたらしい家が建つと、玄関を改造して雑貨屋を始めた。町からはなれたこの部落とそのまわりにはぜんぶで四十けんくらいの家があった。お店はいっけんもなかった。おかあのもくてきはお金もうけではないらしく、ただただ部落の人にやくにたつようにはじめたらしい。味噌醬油砂糖塩出汁昆布鰹節煮干といったりよう理のための品物や子どものおかしやジュースまたアイスキャンデーなどを売っている。話ずきのおかあは部落の人と心をつうじるためにも雑貨屋をしているみたい。ただ、へんなことにおいらと町に出かけたり、学校のもよおしものがあつておいらと帰ったりするとき、かならず町の通りを歩かず、おいら

の手をひいて、裏道、まわりは田んぼが広がり、そのとちゅうに水車小屋のある細い道歩く。どうして表通りを歩かないのかなと思う。（あとになつてわし・じいじが聞いたところによると、表の通りには何軒も仕入れ先の店があつて、借金が出来、お金を払えなくなるとその前を通れないので、みせのひとつ、出来るかぎりかおをあわせないように、裏道をとおつていたというのじや）

あと、そう、もう一つ、びつくりしたことがあつた。これは去年の秋のことだった。家に帰ろうと町からつづく家の方に向かう一本松の坂を登っていくと、後ろからうすあおいろのトヨタクラウン・水窪タクシーがブウブウ音を立てて走ってきた。振り返ると客席にまつ黒な顔をした二人のひとがいんだ。急にまどがあいてそのひとりから「おう」とかなんとか声がかかった。びつくりしてよく見ると、おとうだった。「どうしたよ？」

おいらがびつくりしてそういうと

「おかあが、お湯をかぶって、顔をやけどしたもんで」

とおとうがいった。みると、おかあは黒いぬりぐすりを顔につばいにぬっていた。黒いかおをしたふたり。おいらはどこかのアフリカ人がタクシーに乗っていると思つたのだ。おいらは歩いて家に帰つたのだが帰ってみると、おいらが、かんちがいしたらしいことが、上の姉に伝わっていた。

「だって、図書館でみた色つきの雑誌の、アフリカの人によく似たかんじの衣装をして、ふたりとも真っ黒な顔ですわっ

「ているもんで」
 という、黒い顔のふたりもふくめて、家中にとつとわらい
 声がひびいた。

*

おかあはわしが五十七さいのときなくなった。九十四さい
 だった。やけどをしてから十年あとの五十五さいから、心臓
 のびょうきになったが、それからほぼ四十年がんばった。ま
 ごも、ひまごもそれぞれ十人以上と顔をあわせ、いっしょに
 生きることが出来た。おかあは生きる目標をつぎのまご、つ
 ぎのひまごが生まれるまでと、目標を立て生きてきた。そう
 なんじゃ。新しい命にふれるときとひとは元気になるのじ
 やないかと、じいじはおもうんじやよ。

(中区)

「入選」

じいさまの黄色い花

金指美美代

海辺の村に、たった一軒の家がありました。

与一郎とその妻あさが、くらしています。

まえには、その村に、多くの村人たちが住んでいました。
 けれども、田や畑の出来が悪いので、つぎつぎと村から離れ
 てしまい、今では、与一郎とあさの二人だけになってしま
 いました。

この村から、みえる小さな島。あさのじいさまの思いでが
 いっぱいつまった島。

あさは、その島から、この海辺の村の与一郎のところに嫁
 にきたのです。

やさしいじいさまの近くにいたくて、この村から離れるこ
 とができませんでした。

「思えば、なつかしいなあ。なあ、あさ、お前は、若いころ
 ……」

小さな岩山に二人は腰をかけ、遠く島をみつめて与一郎
 は、あさに語りかけます。

「若いころ？ お前さんのところに嫁にきたのは、わたし
が、まだ十六才だったよ」

あさは、しらがあたまを手ぐしでかきあげて、

「若かった。わたし…」

空をみあげて、目をほそめました。

与一郎は、そんなあさをながめ、ほほえみを浮かべうなず
きます。

「あのころのあさは、魚をとりに、海にもぐったり、いかだ
に乗ったり…と、いろいろなことに、むちゅうだったなあ」

「そうねえ、与一郎さんも、田畑を耕やしたり、木を切った
り…力のいる仕事をしてきましたねえ。」

「ああ…今じゃ、とてもできないよ。足も腰も弱っちゃつて
ね」

「ええ」

与一郎は、あさをみつめて

「がんばって、よくここまで生きてこられたなあ、あさ」

「そうですねえ。お前さんのおかげですよ」

九十才をすぎた与一郎は、あさと、そう話しながら、あさ
が生まれ育ったむこうにみえる小さな島をながめるのでし
た。

あさは、静かに目をとじます。

やさしかったじいさまの顔が、浮かんできます。

そのじいさまは、あさが与一郎のところに嫁にきてまもな
く、病でなくなりました。

十七才になったあさは、毎日、生まれ育った小さな島をみ
つめていました。

「ねえ、与一郎さん、このごろ、あの島に黄色いきれいな花
が咲いてみえるんですよ」

「えっ、黄色い花？ どこに？ みえないなあ。みえるのは
松の木ばかりだよ」

与一郎は、島を目を細めてみながら、笑って相手にしてく
れません。

「そうですねえ、わたしには、黄色い花がみえるのですが
ねえ」

そういいながらあさはまた、島をなつかしそうにながめる
のでした。

あさが、三才か四才のころ、島の山のとっぺんに、じいさ
まと、じいさまが植えた黄色い花を摘みにいった思い出があ
りました。

幼かったあさは、じいさまに手をひかれ山のとっぺんへ、
がんばって登りました。

そして、黄色いきれいな花を手にとって、じいさまにおん
ぶされて帰ったものです。

そのじいさまの温かい背中の中にもぐもりがまだ、あさの心
の中にしみこんでいるのでした。

じいさまが亡くなってからは、じいさまのやさしい顔と、

小さな島で幼いころ摘んだ黄色い花が、いつも、浮かんでくるのでした。

「じいさま、わたし、与一郎さんと一緒に、がんばっていきましょう。安心して下さいね」

あさは、毎日手を合わせて、むこうにみえる島のてっぺんをおがみます。

そして、年月が流れ、あさは、その日も、朝日がさしかかる島に、手を合わせて、おがんでいました。

すると朝日がのぼった時、黄金に輝く光が一面にみえました。

島がひかり輝いているのです。

おどろいてあさは、目をこらしてみると、島が黄色い花でうめつくされています。

「まあ！ 美しい。島が……」

じいさまが植えた黄色い花が、キラリキラリと、まばゆい程に輝き、みごとに咲いていたのです。

「与一郎さん、ほら、みて、あの島に黄色い花が、じいさまの花がいっぱい咲いていますよ」

あさは、左手で、田畑を耕していた与一郎の手をとって、島を右手で嬉しそうに指さしました。

あさが与一郎のところに嫁いだ頃、あさに小さな島のてっぺんに黄色い花が咲いているといわれても、与一郎には、松の木しかみえなかったのです。

それがいま、みごとに黄色い花が、島の頂上に咲いているのがみえるのです。

「おお！ な、なんと美しい！」

与一郎は、

「あさ！ おまえのじいさまが植えた黄色い花が、あんなに美しい花を咲かせるなんて」

与一郎は、一面に咲いた黄色い花をジッと、みて

「みごとだ！」

そう一言いつて目を輝かせました。

あさは、目をうるませ、何度もうなずくと

「嬉しい！ わたし、あの島の花を摘んで、与一郎さんに持つてきます。」

それからのあさは、島へいく準備をします。

いろいろ仕度をしていると

「あさ、本当にいくのか。海をわたるんだぞ」

そういうながらも、与一郎は、あさのために、いかだを作り始めました。

一ヶ月かかり、ようやくいかだは、出来上がりました。

いかだに乗ったあさは

「与一郎さん、いつてきます。きつと、じいさまの花を摘んできます。待っていてくださいいね」

「あさ、ひとりで大丈夫なのか」

「はい」

いかだには、ひとりしか乗れないのです。与一郎の男の体では、とても危ないのです。

あさは、さおでこぎながら、ゆつくりと、小さな島へむかいます。

与一郎は、遠く離れてゆく、あさを心配そうにみおくりまします。

あさは、与一郎に手をふり、また、前をむき、いかだをこぎます。

おだやかな波、すきとおった海、遠くにみえる黄色い花。

あさは、一生懸命こいで、ようやく小さな島へたどりつきました。

あさの幼かった頃、じいさまと登った山のとっぺんに花を摘みに出かけていきました。

じいさまの笑い声、じいさまの白いくちひげ、じいさまのごつい手、なにもかも、胸によみがえり、あさは、一步一步と進みます。

そして、じいさまの思いでの山のとっぺんに登りつめました。

松の木の下に、守られるように一面の黄色い花が咲いています。

「まあ！ なんと美しいのでしょうか」

あさは、花の前にひざまずき

（じいさま！ じいさまの花がみごとに咲いていますよ）

じいさまのやさしいほほえみを思い浮かべてあさは手を合

わせました。

それから、その黄色い花を、与一郎にみせたいと、手に持ちきれない程摘み、一輪だけは根元から摘みました。

（じいさまありがとう。早く与一郎さんに、この花をみせたいです。）

あさは、花をたもとに入れると、また、与一郎の作ってくれたいかだに乗って、与一郎の元に帰ります。

あさが嫁いだ頃、小さな島のとっぺんの山にみえていた松の木が、黄色い花を守ってくれていたのです。

あさは、一生懸命いかだをこいで、そしてようやく村の近くまで来ました。

「もうすぐだわ」

でも、波が大きくなり、いかだが少しずつゆれ始めました。

「早く帰らなくちゃ……」

そう思っている矢先、あさに、思わぬ大事件が起こります。

空は、またたくまに暗くなり、黒い雲があさの頭上に、おおいかぶさってきたのです。

突然の強い風！ 雨も降ってきました。

海に打ちつける雨の音。

「バリバリバリ、バリバリバリ」

あさの体にも、針のような雨つぶが、降りかかります。

あさは、いかだにしがみつきながら、片手にさおを持ち、

必死でございました。

「ゴォー、ゴォー、ゴォー」

たたきつけるような風に、さおは、とうとう流されてしまいました。

あさは、歯をくいしばり、いかだにしがみつきました。

けれどもあさは、力もつきて、いかだから落ちてしまったのです。

「あーああー 助けて… 与一郎さん…」

その頃、村では、与一郎が、嵐になっっている海辺に立って、あさの帰りを待っていました。

（あさは、大丈夫なんだろうか）

あさが、夜が明けてすぐ、村を出ていつてから、与一郎は、海辺で、ずっと帰りを待っていたのです。

「ゴォー、ひゅううう、ひゅううう、ひゅううう」

風の音が海のうねりと混ざりながら、きこえます。

「ゴォー、ひゅううう、ひゅううう」

しばらくすると、海のむこうから、声が…。

（声、声がする）

与一郎は、息をこらして耳を澄ませました。

「ああ… ああ…」

かすかに、声、女の声がきこえます。

（もしや、あさ…）

「あの声は、あさの声だ！」

そう思ったしゅんかん、与一郎は、着のみ着のまま、嵐の海にとびこみました。

泳ぎの上手な与一郎は、すぐに波の上に、ゆれながら浮かんでいるあさをみつめました。

「あさ！ あさ！」

与一郎は、ぐったりしているあさを、抱きかえ海辺にもどりました。

どうやって泳いできたのか、わからないくらい必死でした。

海辺にあがると与一郎は

「あさ！ あさ！ しっかりしろ！」

青白い顔で目をつぶっているあさのほほをたたき、むちゅうで叫びます。

与一郎は、たき木を拾い集め、火をたき、あさをあたためました。

冷たいあさの体を、さすりつづけます。

あさのほほが、少しずつうす紅になりました。

「大丈夫か、あさ！」

朝日が、あさを照らしはじめます。

昨夜の嵐がうそのように、風もやみ、雨もあがりました。

「あさ、あさ、あさ」

与一郎に抱きかかえられ、何回も声をかけられ、あさは、ようやくうつすら目をあけます。

「あさ、」

「ああ… 与一郎さん…」

「あさ、わかるか」

うなずいたあさは、

「ああ… 与一郎さん、じいさまの花を…」

「うん、うん、そうか、じいさまの花を摘んできてくれたのか」

「ええ、ここに…」

あさは、ぬれた着物をさぐります。

花は流れてありませんでした。

「花：花が… ない…」

あさは、悲しそうに、がっかりしていると、あさの衿もとに、かくれるようにからまつていた、根元から摘んだ一輪の黄色い花を、与一郎がみつけました。

「あさ、あったぞ！ 花、花があったぞ」

与一郎は、花をそっと、衿もとからとるとあさにみせました。

「あー、よかった。持ってくれました」

あさは、一輪の黄色い花をみつめると、うれしそうに胸に抱きしめ

(じいさま… じいさまの花…)

なみだぐみました。

しおれた一輪の花は、生き返ったように、みるみるうちに明るい黄色い色を、とりもどしていました。

「これ、与一郎さんに…」

「おー、あさ、ありがとう。」

「与一郎さん、助けてくれてありがとう」

あさと、与一郎は、手をにぎりしめ、なんども、うなずきあいました。

与一郎に助けられ、ようやく元気をとりもどしたあさは、ほほえみを浮かべていました。

「与一郎さん、この花を海辺に植えましょう」

「よし、あさが摘んできたじいさまの花だ、きつと、じいさまも喜んでくれる」

「ええ、そうですね」

ふたりは、海辺の小さな岩の近くに、ていねいに、じいさまの花を植えました。

あさは、きょうも、いつものように、与一郎と仲よく一緒に働いています。

そして、植えた黄色い花も、一年二年三年とたつうちに、少しづつ咲き始めました。

あれから五十年。

じいさまの、名もない黄色い花は、いまでは、村中をおおいつくすように、しあわせがあふれているように、咲きみだれています。

静かに、さざ波の音がきこえます。

むこうにみえる島をながめつぶやきます。

「ながいあいだ、ふたりで元気でがんばってきたなあ、あさ」
「ほんとに… じいさまの黄色い花のおかげね」

海辺の岩の上に腰をかけ、ほほえむふたり。

与一郎九十一才。あさ八十八才。

共にしらがまじりのあたまに、朝日が、キラキラ、ふたり
を照らして、昇っていきました。

（南区）

住吉玲子

子どもの頃「ロビンソン漂流記」が好きでした。無人島にたった一人漂着し、長い年月を生き抜いた主人公の生活に、ドキドキわくわくして幾度も読み返しました。読書は、未知の世界を垣間見ることができず。空想の空に羽ばたき、疑問の海に漕ぎ出し、心揺さぶられる感動をもらえる素晴らしいさがあります。子どものやわらかな心に、物語は染み込んでいきます。

今回の応募作品のどれにも心惹かれるきらめきがあり、新鮮な感動を持って読ませていただきました。選考に当たって「テーマ」「感動・共感」「面白さ」「文章力・構成」「独創性」を判断材料にし「子どもが読者である」という視点を大切にしました。

市民文芸賞（はくの名前は茜）語り手は犬の茜。明るくさわやかな作品です。楽しく引き込まれて読みました。作者の犬への愛情が素直に伝わってきて、その愛が作品全体をイキイキと弾ませています。犬種の説明、生い立ち、競技会に出場するための訓練の様子など、簡潔な中にも丁寧に描かれていて、読者である子どもの興味をさそいます。家族で読みたい作品です。

市民文芸賞（あまがえるのケロくんとおじいさん）ほのぼのとしたやさしさを感じる幼年童話です。読者がケロくんの

気持ちに自分を重ねて、大風の中をジャンプする場面ではワクワクした心持ちになることでしよう。描写が巧みで絵がうかびます。孫のめいちゃんや物語に明るい彩りを添えて、ストーリーを引き締めてくれました。帰り道のケロくんやみいちゃんの会話にもうひと工夫あると、さらに作品に奥行きが出ると思います。

入選（おかあとおいらとわし）逆境に立ち向かい、力強く生きたおかあの生きざまが勇気を与えてくれます。難しい地名や言葉もでてきて、注意深く読まないと分かりにくい箇所もありますが、作者の筆勢に引つ張られて先へ先へと読み進みました。「おかあ」の半生を「おいら」が語り、さらに全体を「わし」が語るという複雑さは、子どもの読者の目が作品から離れてしまいかねません。語り手を一人にする工夫を望みます。

入選（じいさまの黄色い花）黄色い花の輝きが、与一郎とあさの老夫婦が懸命に生きてきた年月に重なり、読後に温もりの残る作品です。ただ、黄色い花のイメージが今ひとつ見えない為、雰囲気だけで物語を進めている印象です。季節や花の具体的な描写が少しでもあると、作品が引き締まると思います。

《電車》不思議な魅力を持った作品です。作中の『陶芸作品に失敗はありません』という、『人』にも通じる言葉が心に響きます。人物造形がしっかりしていて、愛情に満ちた物語です。最後が教育論になってしまったのが残念です。

『たいへんだあ』物語」『たいへんだあ』が口ぐせの少女。リズムに乗り、臨場感もユーモアもあって面白く読みました。主人公の気持ちがいきいきと表現されている反面、文章が流れてしまっておしいです。展開に緩急をつけることで「たいへんだあ」が生きてくるのではないでしょうか。また、このページ数でエピソードが六つあるのは詰め込み過ぎだと感じました。

〈せんそう〉平和を願う。大切なテーマです。母子の会話から作者のまっすぐな眼差し、書かずにはいられないという思いが、ひしひしと伝わってきました。残念ながら作者の気持ち为先走っていて、作品が骨組みだけになってしまっています。文章力を磨いて、再度書き直したものが読みたい作品です。

評論

〔市民文芸賞〕

実朝論の構成と解体

木俣 統裕

くるしい時には、かならず実朝を思い出す様子であった。いのちあらばあの実朝を書いてみたいと思っていた。

〔鉄面皮〕 太宰治

一時の太宰治にとって実朝とその詩魂を描くことは、自身の生を繋ぐよすがだった。生と死の狭間で生じる真なるものを看取しながら、太宰は精力的に実朝を描き続けた。実朝という屹立した個性は、真偽も時代も超えて論じる者の思想と審美とを幾度となく試してきたし、時代と論者自身を写す鏡の役割を絶えず果たしてきた。それは太宰にかぎったことではない。懊悩と達観、孤高と孤独、政治と文学、そして繁栄と滅亡。これら対置される諸相が時に入れ替わりながら、時に融合しながら、様々な価値が語られた。そこには繰り返される実朝論の季節とよぶべきものが確かにあった。

しかし今や実朝は語られない。血脈を絶やした文弱な三代将軍か、もしくは東国に覇を唱えた強力な権門か、というような歴史研究のファクトをめぐる言説に埋もれてしまい、かつて実朝というモデルに刻まれていた複雑な陰影はすっかり霞んでいる。それまでの扱いが過ぎたるものだったと懐かしむのであれば、あるいは今が本来の姿なのかもしれない。それでももうめぐらない季節へ思いを致すことそのものに何らかのノスタルジアを覚えるならば、実朝論はいまだに蠱惑的な記号であり続けている。

実朝論はすでに何者かによって解体されている。語られないということ、そのように解するほかない。価値判断の物差しの座を他に禪譲したというのではない、積極的な解体の憂き目にあった。実朝が生身の身体において公暁に首を落とされたように、実朝をとりまくナラティブのレベルでも論は

バラバラに解体されている。本来宿していたはずの統一性は失われ、無残な身体を私たちの前に晒している。文芸評論そのものの衰微という現実を横に置くとしても、実朝がかつてのように賑やかに語られなくなった理由がこの解体のされ方にある。いったい実朝論における何が解体されたのか。そして解体に手を染めたのは何者だったのだろうか。

そもそも近代における実朝論とは何か。金槐和歌集のうちの一首のアルケオロジを手がかりに紐解きたい。

建暦元年七月洪水浸天士民愁歎きせむ事を思ひて一人奉
向本尊聊致祈念と云

時により過ぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめ給へ

賀茂真淵は細かな技巧の有無を差し置いて、この歌を秀歌のひとつにあげた。

八大龍王とては歌ことばならねどかかることにかかはら
でよみ玉へるがををしき也。

〔鎌倉石大臣家集中〕 抜粹 賀茂真淵

「ををしき也」という贅辞、その理由のひとつは、王たる

自覚を持つ者による歌だからである。真淵は「歌ことばならねど」と婉曲的というが、はたしてこの実朝歌は素直に歌とよべるだろうか。祈禱のまじないや願文のたぐいのである。では何のための祈禱か。当然、撫民のための祈禱である。仁徳帝の故事や天智帝の「秋の田」の歌にあるように、王は民を慮る権利をもつ（義務ではない）。実朝の歌も王の意識が詠むために「ををしき也」となる。

もうひとつの理由は、万葉集の影響を読み取るためである。真淵は同時代の新古今集などと比較して、実朝の歌の純さと純粹さに驚いたことであろう。結果、真淵は実朝に万葉の影響を認めるに至る。藤原定家が実朝に万葉集を授けたことはまさに象徴的な出来事だった。古代万葉の精神の正統なる継承者、それが近代による決定的な実朝「発見」である。真淵は純粹な万葉という世界観を自身が生きた時代から隔絶して想像していた。そして、真淵にとってかつて彼と同じような経験をしたはずの先人こそが実朝だった。ますらをぶりの万葉の精神に範をとる歌が「ををしき」歌であることは自明のことだった。

明治になり、正岡子規は真淵の実朝「発見」を引き継ぐ。

こは生の好きで好きでたまらぬ歌に御座候。かくの如く勢強き恐ろしき歌はまたと有之間敷、八大竜王を叱咤する処、竜王も懾伏致すべき勢相現れ申候。

〔歌よみに与ふる書〕 正岡子規

いま子規の眼前には、まさに神を従えようと人の形相を超えて念じる実朝の像が結ばれている。この自然に相対する人の意志の強さは、いかにも明治の世にふさわしい。西洋近代に深く触れた子規にとって、目指すところのひとは「写生」である。しかし明治日本が西洋をそのまま模倣することはできない。日本なりの「写生」であるべきだからこそ、俳諧から抽出された発句を「写生」のためのツールとした。子規にとっても、求める理想の源流は万葉にさかのぼる。古今集や新古今集のレトリックが見失ってしまった叙景や内面の写実性を、万葉歌人の感性の中に見出そうとする。そして子規にとって実朝もまた「写生」の実践者である。素直な内面の発露や雄大な景色の描写は子規を大いに喜ばせた。

斎藤茂吉はアララギ派の詩人として子規を後継した。万葉の第一人者茂吉に至って、近代の実朝論の完成は徹底されたといえよう。

彼はこの歌を作るに際して一心を籠めたのは言ふまでもない。祈念をこめて吟詠するなるが故に訥々不器用となるのは自然である。さうして訥々の中に深甚の響きのあるのも自然である。巧妙ではないが莊重にして大きい響きあるのはこれが為めである。

(『斎藤茂吉歌論集』)

以上に見てきた万葉集と実朝論の同期においては、ふたつのドグマが貫かれている。ひとつは神話性の内包である。これは西洋のディスクリールにおける神話と野蠻の関係へと置き替えて、神話的であるからこそ雄大で猛々しい、というだけではない。ここである神話性とは、現状の肯定と変革とを問わず、主体が現実に向けて立場を表明するための根柢となるべき聖性である。ある人にとってはフーコーのエピステメーであるうし、ある人にとっては大澤真幸の「第三者の審級」である。ただし、神話は帰納的であり、神話は神話としてはじめから存在しない。また、客観的な事実であるともかぎらない。後代になって必要に迫られて創造される恣意的な歴史認識と伝説である。それはたとえば、かつて相聞歌が失われた万葉集が流行り、源氏物語が欠落した宣長の研究があったように。

神話の創造のされ方は現在から過去へ遡るがゆえに、いつでもロマン主義的な手法をとる。万葉や実朝に関しては、神話の創造のモチベーションとなっていたものは、儒仏の思想の干渉を受ける以前の美化された精神的な原像であり、後進日本を変革する「写生」という追求すべき理念である。このとき生じるロマン主義そのものは、具体的に到達すべき目標や理想の体現であるより前に、理性主義のカウンターとして発生した来歴のとおり、あくまでも現状認識の（ときに無力な）相対化への志向として現れる。各々の実朝論がこれら神話性を引き受けているのであれば、鎌倉での凄惨な

権力闘争の現実を相対化しようとする実朝の逃避を金槐集に見出すことは極めて容易なことであろう。

もうひとつのドグマは、啓蒙である。神話的な歌は、その文字面の素朴さに反して同時に啓蒙的である。古事記も万葉集も成立時点の支配体制を根拠づけ支えるためのテクストが散りばめられており、時代が下れば啓蒙は国粹の理念を实践するための契機として現れる。大伴家持の「海ゆかば」を引くまでもなく、啓蒙の要求はその原理上、さわめて演繹的で苛烈で、そして実践的である。真淵の宣長に対する執拗なまでの万葉ぶりの歌の添削も具体例としてあげられよう。これから文学的な分野における演繹的な思考は、政治においては政体の復古として現れ、思想においては排外的な国学的言説として現れ、芸術一般においては西洋的な写実主義として現れる。実朝もまた、宣長、子規、茂吉らにとつての啓蒙である。鎌倉という都から離れた地理的環境が生んだ一種の奇跡と見るだけでなく、各時代にとつての手本となるべき先駆者として高い評価が与えられた。

実朝の内部から神話性と啓蒙を抽出して言語化する行為、それが近代に繰り返される実朝論だった。近代の実朝論において神話と啓蒙は止揚されず調和している。「ををしき」「勢強き恐ろしき」「莊重にして大きい響きある」歌は、各々の思惑の神話として援用され、同時に行動的な啓蒙を誘引する模範となっている。呼び起こされた万葉という神話の体系と、そこから派生する啓蒙の生成が結びついたとき、実朝と

いう個に対する極めて近代的な処理が開始される。それはときに人生の矛盾と隘路を前にした煩悶青年であり、ときに愛国百人一首にとられる勤王家である。そして人は神話と啓蒙のあいだで姿を変えるめいめいの実朝像へ己を仮託した。

金槐集と万葉集との交差点が「ををしき」かぎりにおいて、近代の実朝論は安定していたといえよう。しかし、実朝論の発生以来つねに一体だった神話と啓蒙とは、ある時点を境に別々に語られることになる。真淵から茂吉らアラギ派に至る実朝論の系譜ともいべきオーソドキシィに対して、はっきりとパラダイムシフトを引き起こした者がいる。それは小林秀雄である。戦時中の小林はその著書「実朝」の冒頭で、真淵の評価よりも時代が遡るものとして松尾芭蕉による実朝への言及をあげる。小林にとつて芭蕉と「ををしき」歌は相いれない。万葉という先入観にとらわれない芭蕉の実朝像をまた、小林も見ようとしている。

子規が、世の歌よみに何かを与えようと何かに激している様はわかるが、実朝の歌は少しも激してはおらず、何か沈鬱な色さえ帯びている様にも思われる。僕には懾伏した竜王なぞ見えて来ない。「一人奉伺本尊」作者が見えて来ただけだ。

〔「実朝」 小林秀雄〕

小林には大いなる神仏を前に無力にもただただ祈る実朝が見えている。哀願と言つてもいいほどのものである。小林は実朝を万葉の後継者から外しにかかっている。この行為がもたらす重大な帰結は、近代の形成を支える神話や啓蒙という根柢を大きく揺り動かすものである。そして、戦時下に滅びゆく者に対する沈鬱なる思いと、小林一流の美的センスが重なるとき、これまでとは全く異なる神話が生成される。それは、滅亡の美しさと言うべき近代の中から生じる反近代的な神話である。

同時期に小林と似た理解をしたのが、太宰治だった。「アカルサハ、ホロビノ姿デアロウカ」と実朝は語る。太宰の小説「右大臣実朝」は、おおきな文脈においては実朝論とカテゴライズしていいだろう。この小説の特徴のひとつは、作中人物の実朝の発話が、他の登場人物と異なり、すべて片仮名で地の文に記されるという点にある。預言者か神の子か、いずれにせよ実朝は俗人とは大きく異なる存在として印象付けられている。

物語の終盤ではほとんど実朝の発言はなくなり、存在も少しずつ遠景に消えてゆく。しかし、物語ラストの吾妻鏡の引用によって読む者をあつといわせる仕掛けがあらわれる。消えゆく実朝の最後の光芒である。「出テイナバ主ナキ宿トナリヌトモ軒端ノ花ヨ春ヲ忘ルナ」。当時の岩波文庫からの引用がそのまま実朝のセリフとなっている。贋作と目されるこの歌をあえて実朝に語らせている。北条氏のためになす潤色

であると散々言われたこの歌を物語の最後に発話させることで、太宰の実朝論もやはり小林と同じく、沈鬱なる滅びとそ

のただ中にある美とを重ねる解釈を採ったといえよう。これらの変異した実朝論は、実朝論がめぐる直接的な原因となつたのであろうか。いやそうではないだろう。以上のことは、実朝論の構造が真淵―子規―茂吉と、小林―太宰のあいだにおいて断絶したのではなく、むしろ相変わらず強固な神話的な構造として維持されていることを意味している。あくまでもその時代が望む神話として成立し解釈され受容されている。

ただし何がしか違いがあるとすれば、小林と太宰の実朝論には、神話はあつても啓蒙はないといえるだろう。戦時中に他者の死を神話的に語ることはあつても、時代に即した具体的な行動を促すような啓蒙は描かれない。このことはま

ず戦争中の年齢が関係していると思われる。小林や太宰の年齢は徴兵の適齢からはずれ、戦場で死の可能性からは比較的に離れた世代である。したがって、実朝の死と自らの死を本質的に重ねることができない。もし重ねるものがあるとするれば、自分たちより若い世代の兵士たちの死であり、大日本帝国そのものの死である。

それらの死は神話的な出来事である。もし自分のことというのであれば、実朝を葬送するにあたって小林のように「天稟の上に眠ったことを信じよう」とは決して言わないだろう。江藤淳は小林のもつ傾向をよく言い当てている。「非行

動の文体」であると。「現実を拒否することによって、ものを聖化しようとする」と指摘する江藤の言葉は、まさに小林の実朝論に向けて投げかけているかのようである。また、小林はしきりに吾妻鏡編者が抱いているであろう実朝の死に対する罪悪感を強調しているが、編者の罪悪感とは小林にとっての同時代の死者たちに対する罪悪感と少なからずシンクロしているであろう。それは太宰にとつても同じことだった。「右大臣実朝」作中の近習が実朝の死を悼んで出家していることは、太宰に何らかの罪悪の感情があったことを意味するであろう。

確かに軒端の梅の和歌を辞世とした実朝は神話となった。小林や太宰が紡ぎ出す文章からは、行動をとともなう啓蒙とよべる要素を見つけることは難しい。つまるところ事態に対する当事者ではないのだ。ただし、啓蒙の欠落と罪悪の自覚という実存的な課題の提示は、小林と太宰のテクストが今でも時代の風雪に耐えることのできる重要な要素となっている。

当時の小林や太宰の散文は、啓蒙の欠落にもかかわらず若い世代には逆説的に啓蒙の書として読まれた。それは戦時中にラジオから聞こえた「山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」の実朝歌とは対照的な啓蒙だった。

明るいもの、健康なもの、建設的なものはすべてまやか

しであり、疑いをもったほうがよいといつかんがえを、太宰や小林の実朝像からうけとつた。

『源実朝』 吉本隆明

当時いち読者であった吉本隆明は、小林や太宰が描く実朝に敏感に反応する。後年に戦時中の実朝論を振り返る。次の引用の「かれら」とは小林や太宰を指すが、実質的には吉本自身を指すのは明らかである。

かれらにとつて、戦争のただなかにある自分という設定と、戦乱と合戦と武将たちの内訌のただなかのにつかつた実朝という設定とは、同じことを意味していたはずである。また、明るさ・単純さ・健康さ・痴呆・殺し合いのうえのにつかつた実朝という設定と、建設的・単純・健康・鍛錬・戦争のただなかにおかれた自分という設定とは、おそらくおなじことを意味していたはずであった。私には、これが〈実朝的なもの〉の本質としてうけとられたのである。

『源実朝』 吉本隆明

吉本は「明るさ・単純さ・健康さ・痴呆・殺し合いのうえのにつかつた実朝」を自身が置かれた環境にトレースする。

「建設的・単純・健康・鍛錬・戦争のただなかにおかれた自分」という設定には実朝を自身の先行者として実践的に観察

しようとする意図が含まれている。吉本がこの文章に込めた思いには、戦後の執筆当時に流布していた進歩的、革命的な思想と相いれなかった自身の心情が含まれていると思われる。そのことも手伝ってか、小林や太宰が語る事柄と吉本が語る事柄が一見シンクロしているようどこかずれている。

小林や太宰は「明るいもの、健康的なもの、建設的なものはすべてまやかし」とまでは考えなかったはずである。太宰が表現する「平家ハアカルイ」「アカルサハロビノ姿デアロウカ」という諸行無常なる実朝の言葉には、明るさも滅亡も共に同じレベルで同居している。もとより太宰の実朝は明るさも滅びも超越している。表面的な時代の風潮と、それらに反する陰鬱さや滅亡の予感のコインの裏表として一心同体のものと捉えられていたのではなかったか。吉本はあえて明るさを「まやかし」と言い切ることで、表面的なスローガンや建て前を超えた向こう側に、個人がどのように生き、また死ぬべきかという啓蒙を見ている。生粋の軍国少年でありながら、同時にクールな心持ちで混乱期を見つめる吉本の眼差しが想像される。

吉本同様に小林から影響を受けた中野孝次の思いは、沈鬱なるものを透過し、ついに宗教的な信仰へと向かう。実朝を詩人に留めず宗教者（ホモ・レリギオーズス）へと昇華させる。中野に見えている実朝は、大いなる神や歴史的必然を前にして、祈りを捧げるひとりの信仰者である。

実朝がその心のなかの土民愁嘆の苦しみを鎮めるためになしたえたのは、ただ祈るという行為だった。実朝という、現世での役割などよりまず第一義的に、生きものの世界が形而上的事件として感じられてしまう魂にとって、祈り、あるいは歌への呪縛だけが、感じてしまうことの唯一の方途だった。

『実朝考 ホモ・レリギオーズスの文学』 中野孝次

中野にとっては、実朝も自身もあくまで大いなる存在を前にしてひたすらに救済を求める実践者としてのホモ・レリギオーズスにすぎない。太宰が主に実朝の近習へ己を仮託するのに対し、中野は実朝そのひとに自身を仮託する。絶対的な死を前にして、物理的な努力も精神的な抵抗も無力である。この現世において祈りを捧げる以外に何ができるというのか。中野にとってもまた実朝は、時代に処し生死の意味と行動を仄めかすような啓蒙だった。

吉本や中野からみた実朝論は単なる神話ではない。彼らの語る実朝論は容赦なく自己言及的である。遠からず現実のものとなる戦場における死、本土決戦による死が人生のタイムテーブルののっている者たちにとっての実践の理論である。実朝の生は自らの生であり、実朝の死もまた自らの死である。そこに啓蒙という現実はあるても神話という感傷は見出しがたい。果たして彼らは神話を信じたのだろうか。護国の神となり靖国で会おうと心から誓い合うことがありえただろう

か。

ふり返れば実朝は近世以来ながらく時代に対して周縁的な存在であり続けた。たとえば実朝には桜井の別れもなければ、宇佐八幡宮の神託をめぐる忠誠もない。皇室の藩屏としての象徴的なシンボルがない。むしろ死して後鳥羽院に王朝の終焉を告げる武力蜂起のきっかけを作ってしまった。また、実朝の貴種性は戦後の時代に馴染んでいただろうか。どこか青臭い上流階級の煩悶と受け止められた向きもあっただろう。戦前も戦後も一貫して「大きな物語」からこぼれ落ちる存在だった実朝、それが実情のように思う。

そのような元来にしてイデオロギーとしては脆い実朝という概念から、神話のみを抽出しようとする行為と啓蒙のみを抽出しようとする行為が重なったとき、実朝は復元不可能なまでに解体されてしまった。なぜもはや統合されないのか。これと似たような疑問を吉本は現代詩に対して抱いている。吉本は多和田葉子ら後に続く世代の詩に神話性が欠如しているとして不思議そうな眼差しを向ける。

結論めいたことをいえば、神話としての現代詩、あるいは神話としての若い人たちの詩ということを考えることはまず不可能だ、そんなことは考えられないぞと思ってしまう。だいたい「無」だよ、ここには何もないよ、というの

は何かの兆候だと思えますけれど、そういう兆候だけは非常につきりとうかがえた。

（『日本語のゆくえ』 吉本隆明）

しかし誰もが分かっているのだ。吉本がいう神話には、啓蒙と野蠻とが胚胎している可能性を。「アウシュビッツのあとでは詩を書くことは野蠻である」と述べたアドルノの呪いを誰もが忘れられないのだ。皆、吉本のように戦時中の明るさをまやかしと言いながら、神話の不在を嘆くような鈍感なことはできない。詩作に神話を折り込むことは無神経にすぎる。アドルノは続けていう、「しかもこのことが、なぜ今日では詩を書くことが不可能になってしまったのかを教える認識をさえ蝕んでいるのだ」。神話を意図せずに創作すれば野蠻も啓蒙も象徴せずに済むであろう。はたしてそのような創作は詩と呼べるだろうか。少なくとも吉本は現代詩にたいして終生「無」としか言えなかった。

以上みてきた解体の過程は裏返せば、あるキャラクターが有機的に成立するための条件をよく示している。神話と啓蒙を有すると認められた者だけが、これまでも、そしてこれからも語り継がれる。一方で引き裂かれたものは、実朝論に限らず、また詩歌や散文を問わず、ポストモダン期にあつて至るところで同時多発的に生じたはずである。そして時代の転換点たる出来事が生じるたびに解体は加速した。数多くの語られなくなったものたちは抜いを持って余され、いつしか語

られなくなった。ただし、引き裂かれた断面がきれいである
ほどに、原型としての実朝に美的価値を求める衝動は抑えが
たい。神話という片割れが啓蒙を発するとき、また、啓蒙と
いう片割れが神話性を帯びるとき、実朝はふたたび語られは
じめるだろう。

参考

- 『金槐和歌集』 岩波書店
『歌よみに与うる書』 正岡子規 岩波書店
『モオツアルト 無常という事』 小林秀雄 新潮社
『右大臣実朝』 太宰治 岩波書店
『実朝考 ホモ・レリギオーズスの文学』 中野孝次 講談社
『源実朝』 吉本隆明 筑摩書房
『齊藤茂吉歌論集』 斎藤茂吉 岩波書店
『作家は行動する』 江藤淳 講談社
『日本語のゆくえ』 吉本隆明 光文社

(浜北区)

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

「入選」

発明群

内山正己

「再生エネルギー発電の、躍進装置」案

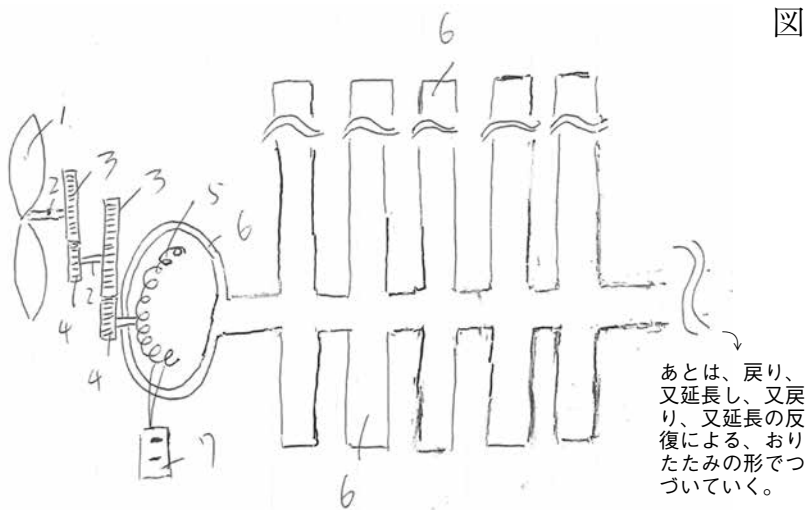
・水力発電や、風力発電の従来のものに応用。

・電磁誘導法則に基づき、磁石の内部で、コイルが回転して発電。又それを強大化するための歯車列。又現状一番磁力のつよいネオジム磁石を使用し、更に磁石そのものの、コイルを包む円磁石を一部とする、大きな本来の体積の磁石を使用。

・ポスト火力発電や、ポスト原子力発電の、エコで強大な発電が可能になる。気候変動の対策になる。

・仕組みはたとえば左より羽根車。(風車、又は水車。)シャフトをへて、歯車列。平歯車の〔大〕から〔小〕のくみあわせ。そこより、回転するコイル。コイルを包みます磁石の円磁石。その延長の本来の大きな体積の磁石。空間のたてを利用する棒状の各連なり。それは、又戻り、又延長し、又戻り、又延長の反復による、おりたたみの形でつづいていく。又コイルからは電力供給部。

図



番号は

- 1は羽根車（風車又は水車）
- 2はシャフト 3は平歯車の〔大〕
- 4は平歯車の〔小〕⇒歯車列
- 5はコイル 6は磁石（ネオジム磁石）
- 7は電力供給部（コンセント）

「人工太陽灯案と、それによる太陽光発電装置」案

しくみは発光ダイオード。自然太陽光の六種類の波長の色の部分。次にとつレンズ。次にパネルなどの太陽光発電部。その付随のバッテリー。そこでの発電電力に電力供給部。

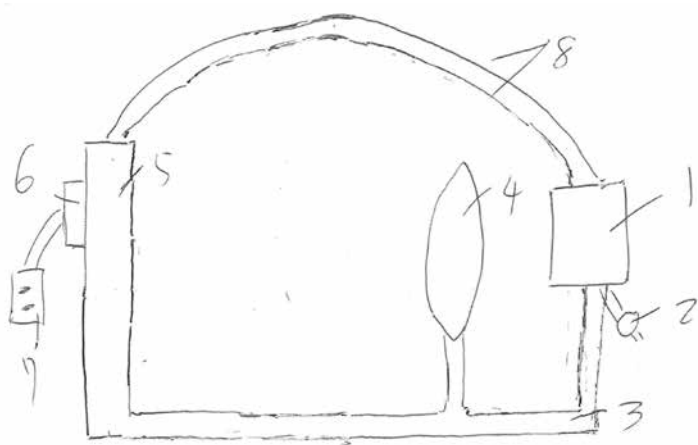
・真夜中や日差しの当たりにくい屋内でも可。

・プラグからの電力次第で24時間、太陽光発電が可。

・プラグからの電力値は太陽光発電の余じよう電力で充分まかなえる。初回のみ、プラグからの電力供給が必要。

・仕組みは例えば右よりプラグと発光ダイオード。太陽光の六種類の色の組み合わせ。その先にはとつレンズ。又、支え台も。その先に太陽光発電のセット。そのわきにバッテリー。その先に電力供給部。

図



番号は

1は発光ダイオード（太陽光の6種類の各色）

2はプラグ 3は支え台

4はとつレンズ

5は太陽光発電装置

6はバッテリー

7は電力供給部（コンセント）

8は次回からの太陽光発電の余じよう電力で発光ダイオードの電力の供給部の電流線

「人工光合成装置」案

光合成は生態系と、食料生産の基盤であるから、この促進は農業革命になる。

・構成はまず二種類の、自然太陽光の人工光作りの道具方式がある。共に人工太陽灯案による。

・一つは発光ダイオード方式。一つは蛍光灯とステンドグラス方式。ステンドグラスは各色の部分のくみあわせ。

・自然太陽光は六種類の波長の色の合体であるが、これを上記の道具で発色できる。又レンズで収束と拡散をする。

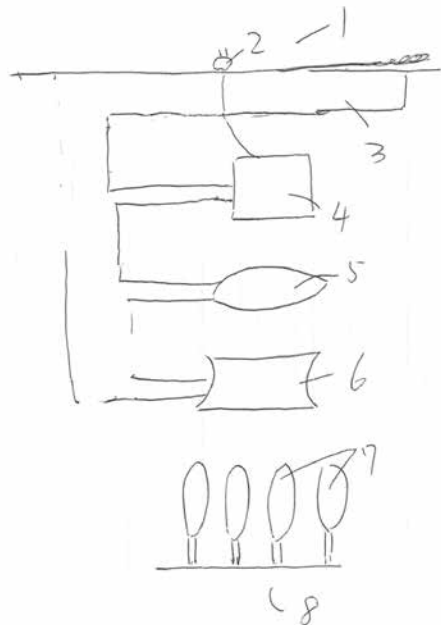
・二つめの仕組みは発光ダイオード方式。例えば天井があり、装置の支え台がある。そして各色（太陽光の六種類の色）の発光ダイオード。そのためのプラグ。そしてその光をうけ、収束するとつレンズ。次にその光を四方に拡散するおうレンズ。その下に植物群と土。又は水耕栽培の水。

・二つめは天井。装置の支え台。そして自然太陽光の六種類の色の組み合わせをもつステンドグラス。それを照らす蛍光灯とプラグ。そしてステンドグラスの下にとつレンズ。次におうレンズ。そしてその下に植物群と土。又は水耕栽培の水。

・ビルの、日差しの入りにくい屋内の、その各階でも可。又真夜中でも可。

・これは眠りのためのメラトニンや体内時計のセットにも卓上式で利用できる。

図



番号は

1 は天井

2 はプラグ

3 は支え台

4 は 2 種類の

(1 つは発光ダイオード

又は 1 つは蛍光灯とステンドグラス

5 はとつレンズ

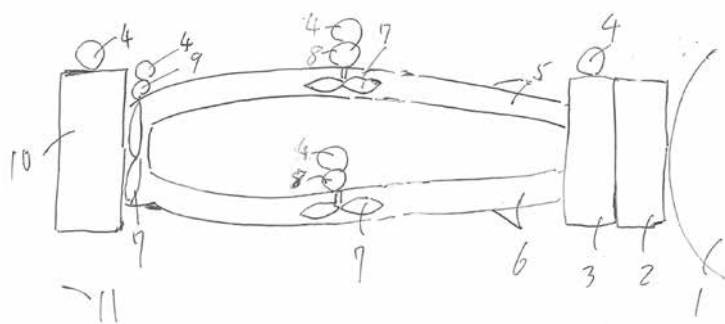
6 はおうレンズ

7 は植物群

8 は土又は水耕栽培の水

「海水で、内陸やその奥地を水でうるおす装置」案
 仕組みは海水を、イオン交換樹脂におき、真水にする。その真水を次に電気分解部。そこで真水を O_2 （酸素）と H_2 （水素）に分解。それを耐圧・耐熱・耐火・防水のコーティングをしたホースで内陸やその奥地にまで搬送。奥地などの集結地の希望の所の、水が渴している、そのタンクの中で、電気火花をとばして水にする。その水はホースにおき排水。水の枯渇している所をうるおす。電力は太陽光発電で各所をまかなう。なお図は単線のパターンであるが、複線のパターンも可。交流発電に便乗してもよいが、その交流発電が再生エネルギーの発電ならば、なおよい。

図



番号は

- 1は海 2はイオン交換樹脂部
- 3は電気分解部 4は太陽光発電部
- 5は O_2 （酸素）とその搬送ホース
- 6は H_2 （水素）とその搬送ホース
- 7はファン 8は電気火花部とそのタンク（水の合成）
- 9は水の排水ホース 10は内陸又はその奥地

「水虫を自分で治す方法」

実験であるが、歩くのも痛かった、左足の小指と薬指の間の水虫を、ヘアドライヤーで、痛いのを我慢しての加熱方式で、きれいに劇的に治した。荒唐治療。物理的なもので、普通は化学の水虫薬での治療。

「普遍的感染症薬」案

日常の何でもない食材が、病原体への特効薬に変身。

・梅と酢は、バクテリアやウイルスの各々に普遍的に強い殺菌効果がある。

・機序はそれらの外膜を刺激し、破り、そこに血液が侵入。

膨張して破裂の死滅。ちなみにアルコール消毒がウイルスは殺すが、手の細胞には殆ど無害の形も成立。又アルコール消毒のアルコールは飲めば毒で飲めない。

・副作用は梅は塩化ナトリウムが多く含まれ、動脈硬化になりやすいので、中和作用のあるバナナやりんごを後から併用する。又梅は赤く熟したものを使用。酢は水でうすめて炎症を防ぐ。

・口から摂取してよいが、看護師が汁を注射器で注入してもよい。普通梅は添えものに。酢はドレッシングなどであるが、陽性時にあえて多くたべるとよい。ただし梅はとりすぎると胃を荒すので注意。

・すべてのウイルスに適用でき、未知の変異ウイルスにも、現状のものにも。又バクテリアで抗生物質の耐性ができてし

まったものにもよい。豚熱や鳥インフルエンザにも可。

・民間療法であるが、民間療法の概念はないが、ないがしろにできない。

・各ワクチンの接種と併用できる。

「認知症薬の製造及びその大量生産方法」案

アミロイドβという蛋白質が脳に付着するとアルツハイマー型認知症という、認知症の主流を占める疾病になる。勿論

段階はある。しかし人体はこのアミロイドβに対し、すい臓から分泌する「アミロイドβ分解酵素」というものをもつていて、この分泌が血中を通し、脳関門を通過してアミロイドβを減らすようになっていく。しかしいかなせん、バランスの問題で、まにあわないことが多い。

・この案はこのアミロイドβ分解酵素を人工的に大量生産する方法である。そしてこれを認知症の患者に除く形で治療することを目的とする。

・まず製薬会社や研究機関がアミロイドβ分解酵素は蛋白質であるため、X線照射法又は質料分析とシーケンス法でアミノ酸配列を特定。これは自動的に塩基配列がわかる。その塩基配列を人工遺伝子作成法により、大腸菌に導入。培地や温度などの条件をととのえ、大腸菌を無限的に細胞分裂させる。ひっきょう各大腸菌の中で、アミロイドβ分解酵素が無限的に分裂している形になる。そこからアミロイドβ分解酵素をとりだすには(株)富士精機などの所有するホーヅナイ

ザーで自動的にはやくできる。

・そしてそのように抽出した、大量のアミロイドβ分解酵素を病院で医師や看護師が点滴や注射で認知症患者に注入。治療する。

「癌への治療薬とその大量生産方法」案

癌は細胞分裂の、とどまることのない分裂であり、それが正常な人体組織を侵略し、死に至らしめるものであるが、一方人体にはP53癌抑制遺伝子というものがあり、これのだす蛋白質が暴走をstopさせる機構がある。いかんせんバランスにおき、暴走の方が優位になるため、疾病になる。

・この案は、このP53癌抑制遺伝子の蛋白質を人工的に体外で大量生産し、患者に注入することで、治療を可能にするもの。暴走をとめる。増殖がとまり、消滅することもある。

・これを段階において説明すると、まず製薬会社や研究機関が、人体細胞のP53癌抑制遺伝子を抽出し、更にその特有の蛋白質を抽出する。それは分子生物学の手法である。

・その蛋白質を次に質料分析とシーケンス法でアミノ酸配列を特定。そのアミノ酸配列から人工遺伝子作成法によりDNAをつくる。次にそのDNAを遺伝子組みかえ法により大腸菌に導入。培地や温度などの条件をとのえて、大腸菌の無限的な分裂をさせる。ひつきょう、各大腸菌の内部でのP53癌抑制遺伝子の蛋白質は無限的にふえる。次にその大腸菌よりP53癌抑制遺伝子を取りだす。ホージナイザーという機械

がはやく自動的にでき、ホージナイザーは(株)富士精機などが所有。ホージナイザーでなくとも、ビーズ法とクリティック法の手法でもわりあいはやくできる。とりだしたP53癌抑制遺伝子を、病院で医師や看護師が癌患者に点滴や注射で注入し、癌の暴走をとめる治療ができる。すべての癌の部位や進行程度に適用できる。他の癌治療法と併用できる。

*

さて診断はともかく、普通人でも¥23,300で、癌は治していける。「高周波」の利用である。(株)パナソニックが「ポリカラン」という商品名で、肩こりや腰痛用に、電気店で販売しているが、高周波は遠赤外線や低周波とちがいで、体の深奥まで、少しは体液水に吸収されるが達することができ。

・心臓が体の各臓器の中で唯一癌にならないのは拍動で熱を他より帯びているから。実験では癌細胞は43℃で死滅する。なのでポリカランを使い、転用として癌と診断されたあたりを放射した場合、他の正常細胞は60℃位まで大丈夫なので、この差で癌細胞(組織)のみを攻撃できる。癌治療のポリシールは正常細胞をほほできるだけ温存し、癌細胞(組織)のみを攻撃するものであるが、この高周波療法はそつている。

・白血球でも骨髄やリンパ節での腫瘍をたたける。ただし脳腫瘍だけは不明。たとえば5秒間放射し、のぼせるまえに一分位休んでまたの回復で、効果がでるかはおわからない。又すい臓癌の余命三ヶ月の状態でも自分で治せる。他の治療との

併用も可。ちなみにすい臓（癌）をエコーでみる場合、すい臓は胃の裏側にあるのでおおむけで調べるが、私の案はうつ伏せである。直接的にみられるのでは。

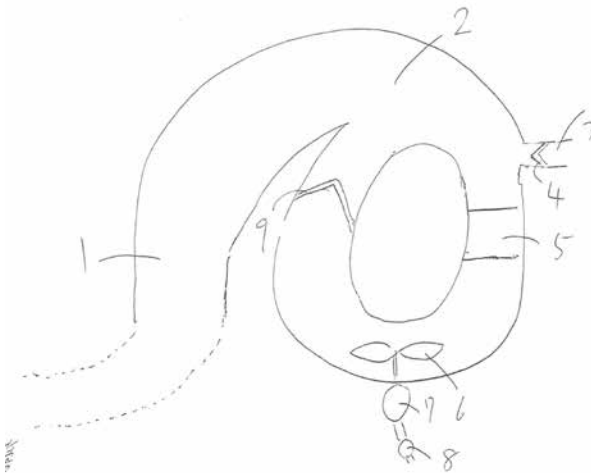
「地球汚染を減らす装置」案

微生物の偉大な力を借りて下水道の汚水の浄化のみではなく、燃やした一般の排気ガスを浄水化して処理する装置の案。産業廃棄物処理場と下水道処理場の二つの手法の合体。

・排気ガスに水を混ぜ、そこに槽の中の微生物をおき、その汚水を浄水化するのが基本。

・仕組みは排気ガスはたとえば煙突であり、車の排管により出る。そしてその排気ガスの管の途中に弁をもった水道水の注入管がある。その先に各微生物のいる微生物槽。その先の管の中にプラグからのモーターでのファン。その先は弁により途中の形で管に入る。

図



番号は

- 1は煙突又は車の排気管
2は排気ガス部
3は水道水と、その注入管
4は弁
5は微生物とその槽
6はファン
7はモーター
8はプラグ
9は弁

「大地震の発生時から、リアルに把握できる装置」案

現状の地震予知は地震発生後、十数秒が限界であるが、この案は上プレートと下プレートの固着とそのはがれの様と、更に弾性エネルギーの爆発の発生時と、その増大の様を、地上でかんたんに、リアルに把握でき、避難がより有利になる。

・仕組みは基本的に、地下にマイクrohホンと電流線。地上にスピーカーとコンピューター。地震の発生の仕組みは二種類があり、断層の、ずれのものと別に大地震のものがある。この案は後者を対象。仕組みはマグマの流れの力により、下プレートが上プレートの下にもぐりこんでいく。上プレートはいつかははねあがりたい、弾性エネルギーを蓄積していく。この時、上下プレート間に固着域ができ、やがてはがれ、上下プレートはずれていき、あるとき一気に上プレートははねあがる。この瞬間がいわゆる（大）地震の発生である。上プレートの上の建物や生活する人間たちに被害を与える。又上プレートのはねあがりは海水への悪影響として津波をもたらす。

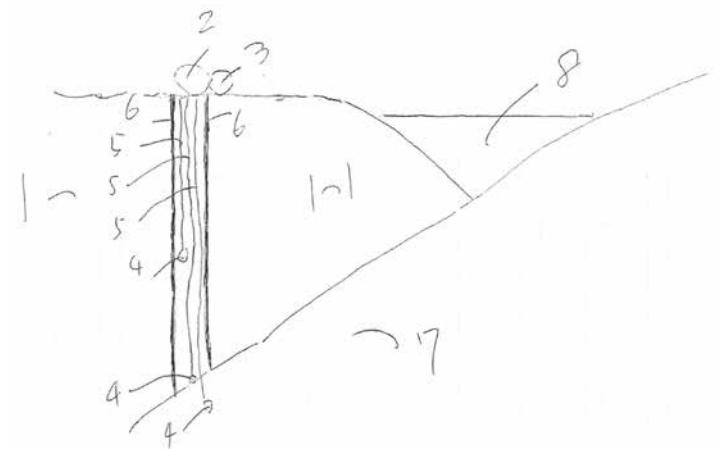
私の案はこの時、上・下プレートが岩石塊・層でできているので、岩石の破壊音が生ずるはずに着目する。これを地下のマイクrohホンで採取。又マイクrohホンで破壊音を電流に変換。電流線が地上へと届ける。地上ではスピーカーで電流を自然の岩石の破壊音として、又大きく再現。又このとき音を地上のコンピューターでもとらえ、こうばいのグラフにもとらえる。又マイクrohホンと電流線は鉄管内に装てん。鉄管の

地下への設置はドリル又はボーリングの技術をつかう。上プレートから下プレートのたての長さはマグマにより徐々にひらいていくが大体40km位である。P波による諸観測による。鉄管は地上のある点より、上プレートをつらぬき、又下プレートまでおろす。その中にはマイクrohホン三つ位と、各本の電流線がある。マイクrohホンは下プレートの中にまでおいていいし、上プレートの下部でも、上下プレートの接点あたりでもよい。

・マイクrohホンにより採取される岩石の破壊音は地震の発生時で始まり、どんどん増大し、ある地点でマックスになる。場合により、固着の成立とはがれからも採取可。電流線を介し、スピーカーで大きくとらえられる。リアルタイムで。気象庁はこれを元に地震判定会議でとらえ、政府が地震発生速報をだして、避難をよびかけられる。住民は避難の行動をとる。海辺の者たちは車で北へと移動する余裕もある。

・南海トラフ大地震に対して有効である。

図



番号は
 1 は上プレート 2 はスピーカー
 3 はコンピューター 4 はマイクロホン
 5 は電流線 6 はマイクロホン
 7 は電流線 8 は鉄管
 9 は下プレート 10 は海

(北区)

〔入選〕

賀茂真淵の業績

神谷 司

国学の「三哲」「四大人」と呼ばれた賀茂真淵は、ここ浜松の地で生まれ、その後、国学を発展させて、『万葉考』『冠辞考』『歌意考』『国意考』『語意考』といった本を書いている。私は、賀茂真淵の万葉集の研究における「古い時代の言葉とその時代の意味のまま理解し、その意味から当時の道理を明らかにしようとした」ことを評価し、この点を論点として評論する。

最初に、この論点の根拠の土台となる資料の一部を引用する。

「学問の方法は、古言（古の言葉）によって古意（古の意味や心）を知り、古意によって古道（古の道理）を明らかにしていくものです。それは、現代に生きる私たちに、もっと自分の国のことを深く知ろう、古のことを知る中で自分をつかり見つめようという自覚を促すものです。また、そこから、今風化しつつある日本人の心呼び覚まし、日本人の本性を大切にした生き方を呼びかけるものでもあります。」（浜松市立賀茂真淵記念館「今、国学の呼びかけるもの」から一

部引用）とある。

ここから賀茂真淵が、古い時代の言葉を古い時代の意味のまま理解することや古い時代の人々の心を理解することで古い時代の道理を明らかにしようとしていたことがわかる。賀茂真淵は、他の人々が手を付けなかった古典を研究しており、その時代に生きた人々の言葉を率直に読み取ることによって、その時代の人々の言葉の意味を解釈し、その時代の人々の心（気持ちなど）を理解して、その時代の道理を明らかにしている。これによって、古い時代のことを現代の私たちは深く知ることができるようになり、日本人の根底にある本性を大切にしてきた生き方を理解できる。日本の古典から、日本人の古来の生き方や文化などが理解できるとも言えるであろう。

また、古い時代の日本人の生き方が分かることで過去の日本人の歴史を学び、その歴史から様々なことを学び取ることができる。和歌から古来の日本人のすばらしい感性、生き方、生活様式から現代の日本人が参考にできることがあり、また、我々の心を震わせる感動を得ることもあるう。

万葉集は、それまで研究されたことのない未知の分野であり、しかも古くからの言葉を調べなければならないなど、大変苦労したと推定できる。真淵は、「古い時代の言葉をその時代の意味のまま理解」しようと努めた。分かりにくいことや解釈の難しい言葉が多々あったと思われるが、それらをじ

つくりと調べて、人々に分かりやすく解説したことによって、我々も「万葉集」をわかりやすく学ぶことができるようになった。

この裏付けとなる資料が、「まわりの人が注目しなかった大昔の万葉集などを、まず、古くからの言葉をじっくり調べることからはじめ、わかりやすく解説しました。なくなるまぎわまで学び続け、新しい学問「国学」をつくりました。」（ようこそ浜松市立賀茂真淵記念館へ）（資料）から一部引用）である。

真淵のこの功績により、我々は、教科書や資料に掲載されている内容を学習したが、それを私たちが学ぶために、賀茂真淵たちの多大な労苦があったことを忘れてはならない。これらの労苦によって私たちの学びが深まり、万葉集などを素晴らしいと感じることができ、また、感銘を受けることができるようになったことから、賀茂真淵に敬意を表する。

さらに、賀茂真淵の万葉集の研究について、以下の二点の資料の記述の一部を引用して、賀茂真淵の万葉集の研究における「古い時代の言葉をその時代の意味のまま理解し、その意味から当時の道理を明らかにしようとした」について論を進める。

①【縣居通信10月】「万葉に思いを馳せて　～真淵和歌『詠薄暮千鳥』【浜松市文化財】」

（令和2年10月1日）より一部引用

『万葉集』を研究し味読するのに、横から眺めるのではなくて、『万葉』の世界に直に（じか）に分け入り、『万葉』風の歌を自分も詠み、『万葉』風の書き方をしてみて万葉人になりきろうとしたのです。こうした考え方や万葉人が使っていた万葉仮名で和歌を書くという試みは、真淵の師であった春満が試み、真淵たちに勧めたものでした。真淵たちは、それを実践したのです。

こういう若き日の体験から、真淵はのちに69歳の時の『ひまなび』などで、『万葉集を常に見よ。且つ我歌もそれに似ばやと思ひて、年月によむほどに、其調も心も、心にそみぬべし』と力説するのでした。」

真淵自身が万葉風の歌を詠み、万葉風の書き方をして万葉人になりきろうとした姿勢がみられる。本来の研究では、万葉人の書いたものを確実に理解していくにはこの方法が一番である。万葉人のように実践し、万葉人の気持ち、考え方、文化、時代背景などを頭に入れながら、万葉風の歌を詠み、万葉風の書き方をするので万葉人に触れる、近付くことができると思われる。真淵自らが万葉人をしっかりと認識し、よく理解することで、そこからさらに後世に分かりやすく伝達できたのであろう。

②【国学と万葉集　～国学者たちの万葉研究とは？～】【縣居通信5月】から一部引用）

『万葉集』には儒教や仏教にとられない純粋な日本人の心が歌の形で残されていました。そして、『万葉集』では「万葉仮名」が使われていました。「万葉仮名」とは、日本語を表記するために表音文字として用いた漢字のことです。したがって、「万葉仮名」は平仮名・片仮名ができる以前に、その漢字本来の意味とは異なる日本語の音を書き記したのになります。そのため、異国の影響を受けていないであろう『万葉集』を読むことを通して、そこに詠み込まれている古代の人々の暮らしや考え方、文化を研究したのでした。

賀茂真淵は、古語に古代人の心が表れているとして、『万葉集』に古代の精神を求めました。そして、賀茂真淵は『万葉集』の研究を通じて、日本人の素朴な心情を「男性的で大らかな歌風」という意味の「ますらをぶり」と表現しました。そしてそれは『古今和歌集』に代表される平安時代から続いた女性的でやさしい歌風の「たをやめぶり」に対して、男性的な精神風土の尊重を主張したものでした。」

真淵が、万葉仮名から異国の影響を受けていないであろう『万葉集』から古代の人々の心を学び、書物として伝達したことにより、我々は当時のことを、これまでとは違う角度で見ることができるようになった。我々は、真淵の研究により、それまでよりもさらに過去の日本人の心が理解できるようになったとも言えるであろう。真淵は、古代の精神を究めようと努力し、この研究では「日本人の素朴な心情を男性的でおお

らかな歌風」と表現した。真淵の研究を通して、これまで明らかにされていなかったことが明らかにするなど、万葉集から様々な日本人の心の解明・判明に貢献した。

さらに、『万葉考』は、総論の「万葉集大考」と注釈からなり、巻六までは『別記』がついています。真淵の万葉観は極めて独特のものであって、「ますらをぶり」の意義を強調し、「まこと」や「しらべ」を大切にしました。万葉歌人として柿本人麻呂の偉大さを評価したのも真淵にはじまります。【真淵と万葉研究】（「一口解説」から一部引用）とある。

真淵は、万葉集の研究から、万葉歌人としての柿本人麻呂の偉大さを初めて評価した。それ以前は万葉集の研究はあまりなされていなかったが真淵の研究から、柿本人麻呂の評価が認識できたことやその歌の良さが後世まで理解できるようになったことは真淵の功績であり、評価できることである。

真淵がここで研究していなければ、柿本人麻呂の偉大さが気付かれずに埋もれたままになっていた可能性もあり、真淵のその発見は大きな意味を持つ。真淵は、現代の我々までつながりを持ち、万葉集の理解、味いなどに大きく貢献している。

①及び②の記述からも、賀茂真淵が「古い時代の言葉はその時代の意味のまま理解し、その意味から当時の道理を明らかにしようとした」ことを裏付けることができる。賀茂真淵の万葉集の研究は、海外からの言葉や文化、道理などを取り入れたことによって、置き去りにされた日本独自のものをよ

みがえらせたとも言えるのではないだろうか。日本独自の言葉や文化などに直に触れることで前述のように得ることも多い。

最後に、この浜松の地から偉大な国学者である賀茂真淵が誕生したことは浜松の誇りである。賀茂真淵が万葉集の研究により、日本の国学の発展に大きく寄与したことは喜ばしいことであり、その功績により現代に生きる我々が国学を分かちやすく学ぶことができるようになっていく。賀茂真淵が万葉集の研究により上げた功績は、今後も語り継いでいくべき価値あるものである。

(東区)

中西美沙子

「評論」は、論述することで解答を得ることではない、と考えます。論述する対象を自分のものとする折に生まれる「不確か」なものに、視線を置くこと。それが「評論」だと考えるのです。言葉を換えれば「整合」されずに「矛盾」を孕んだ論こそが、魅力的な「評論」だといえるでしょう。

その為には「論ずべき素材」を反復して「読み解く」ことが必要となります。

哲学者國分功一郎の『スピノザ 読む人の肖像』を読んでいて「読むこと」の重要性を改めて認識させられました。

國分はスピノザが同時代の哲学者のデカルトの書を、どのように「読み解いたか」に焦点を当てます。スピノザはデカルトの思想を「評価」しながら「疑問」を抱きますが、その根底には常に、「よく読む」ことがありました。

それは「肯定」と「否定」、そしてその間にある「曖昧さ」を読み解くことでもあります。特に「曖昧」で「理解されないもの」への強い意志が、思想に輪郭を与えているのです。それは「評論」の在り方にもいえることでしょう。

論ずることの危険は、自己の論を安易に肯定することで、それを避けるには、遠い視線、或いは他者の目で、自分の論を見ることがありません。

繰り返しいますが、その為には「読むこと」を疎かにしないことです。

実朝論の構成と解体

源実朝は武家の棟梁でしたが、歌人でもありました。「金槐和歌集」には、実朝の「精神の揺らめき」が窺えます。筆者は、国学者賀茂真淵、正岡子規、小林秀雄、吉本隆明など実朝を論じたものを「解体」として実朝に焦点を当てています。

筆者は取り上げた人たちの論に沿って「肯定」と「否定」を持つて論じています。その為に多くのテキストに当たり、それぞれの著者の「実朝論」から生まれる実朝の現代的な意義を模索しています。とても面白い視点であり、また丁寧な資料の読み方とそれへの論考に筆者の力量を感じました。

論文の中で魅力を感じたのは、「神話性の内包」というところです。「現状の肯定と変革とを問わず、主体が現実に向かった立場を表明する」その「根拠となるべき聖性である」という論点に惹かれました。

多岐に渡る思想家の引用などが表層的にならないためには、引用部分を精査することが求められます。その方が筆者の思いをより明確に伝えられるのではないかという印象を持ちました。

発明群

評論の方法は多様であるべきです。今回応募された「発明群」は、一見すると評論というカテゴリーから逸脱しているようにも思われます。が、繰り返し読んでみて思ったのは、世界と時代の変化、自然と社会と人の関係性がもたらした歪みへの問題提起でした。それを「発明」という形で論じたのは、一つの視野といえるでしょう。

環境・感染症などが人間にもたらす問題点を「発明」、いわゆる解決方法の試案として描いています。この方法の利点は、思い込みや感情論が排除されているところです。タイトルの「発明群」の「群」が示すように、筆者が多岐に渡って問題点にトライしたところに論の魅力が生まれたようです。

筆者の「発明群」の論は、その成果にあるのではなく、時代の持つ様々な問題点を炙りだしたところにあるといえるでしょう。

賀茂真淵の業績

言葉は時代を映すといわれています。国学者賀茂真淵も万葉集を分析することで「日本人の心」を映した人です。

筆者は、「古言」から「古道」の意味を論じています。論じるために「賀茂真淵記念館」の資料を使っています。真淵の著作やそれに関わる資料が足りないせいなのか、真淵の思想の

核に届いていません。

真淵の真髓は古語を読み解くことにあったといえます。

彼の「心」、いわゆる「精神」も、「読み解く」ことから得たと考えられます。真淵が分析した古語から受けたものを引用しながら「真淵の業績」を論じないと、表面的なものとなってしまうのではないのでしょうか。

賀茂真淵の思想を読み解くことは、「現代」と「真淵の論」を対比し「今」を示唆することでもあります。そんな意味で真淵の思想の前に立つことは、意味のあることだと思っています。

浜松工場予算復活陳情団154名名簿「浜松市史全」に掲載記事発見公開

国家の礎の一つを「鉄道」が果たしたのは自明のことです。でも「浜松工場（現JRR）」が多くの有志の陳情で誕生したことを、筆者の記述で初めて知りました。陳情のための様々な努力の経緯も記されています。明治の偉人である後藤新平や桂総裁などです。「浜松工場」の沿革を記述していますが、「評論」として成り立つかと考えると難しい。歴史的事実は重要ですが、筆者の見解が表現されていなくては「評論」とはなり得ないからです。

「浜松工場」と「浜松市」との関わりは資料として貴重です。浜松図書館に寄贈されたら如何でしょうか。

随筆

〔市民文芸賞〕

五十年目の告白

大塚賢治郎

誰も祝ってはくれなかったがとにかく五十年経った。世間では金婚と呼ぶ。沖縄返還の年の結婚だった。旅行中に北陸トンネルで列車炎上事故があったりして先行き不安の幕開けでもあった。日中国交回復もこの年だった。

結婚というのは面倒で、だが必要な摺り合わせ場面がたくさん起きる。それを乗り越えるのが最初の試練だ。私は街中に住んでいたから銭湯に行った。相手は疎開先の田舎にそのまま住み着いたので実家には家風呂があった。「お風呂が欲しい」遠慮がちにそう言った。

近所に家が無く水は天からもらい水を

桶に貯めて使っていたという。電気が引けたのは高校入学の年になってから。奥山線が無くなってバス通学、土ほこりの道路が通る三方原台地の北端から学校に通った。そういう不自由さはあったがとにかく両親が揃っていた。一方こちらは母親と一緒に借地に住んでいた。しかも定時制高校出、小中学校を通じて生活保護下だった。考えれば結婚に反対されるのは当たり前だ。自分が親なら絶対賛成できない。

二年経って会社の先輩が世話してくれた土地にバラックだが家を建てた。風呂が欲しくて家を建てるとは順序が逆だが

事情があった。あの四十八年オイルショックと狂乱物価である。資材がごとごとく値上がりした。それどころか市場のモノ隠しで基礎工事のコンクリートが手に入らない。鉄筋が無い、釘が無い。もう中止しようと思ったがとても言えない。人手が無いというので二人で会社を休んで瓦工事を手伝った。おっかなびっくりで二階の瓦葺きまでやった。

定年と前後してともに親が亡くなった。息子二人も大学を卒業した。孫がいないのを幸いとして旅行をした。海や川が好きだったのでよく近郊クルーズに行った。セーヌ川では二日間乗り放題19ユーロの切符を使った。ベネチアでは5ユーロの水上バス、バルセロナでは7ユーロの湾内クルーズ。マラッカ・漢江。言葉は通じないが楽しくも可笑しい珍道中は私の病気で終わった。僅か一年半のうち五回の入院。もう旅行はできないかな。

ところが実は続けて二人旅に出ている。この秋は奈良正倉院展に行った。奈良公園や、関西本線の紅葉が見事だっ

た。杖^{つえ}を置き忘れてドタバタもした。ホテルで「今日は色々あったね」の話のついでにというふりをして「どうして貧乏と貧乏が一緒になっちゃったのか」と五十年の思いを言った。いや五十年前の思いを初めて聞いた。こうして旅行できるまで回復したことを喜んでいるのだと感じた。

もう一度行くとしたらどこか聞いたらパリだという。セーヌ川をフリーパスで5周し火災から復元されたノートルダムを見たいという。やれやれパリで透析ができる病院を探さねばなるまい。結構忙しくなってきた。

(西区)

私も忘れたわ

中津川久子

令和四年、春のこと。めったに掛けてこない姉から電話がきた。

「いま体調をくずしていて、くだものが欲しいの」

SOSだ。姉が弱音を吐くということ、は、性格上よほどのことである。

「えっ、どうしたの。熱は、痛い所は」
私は機関銃のように放った。彼女に子どもはなく、連れ合いには先立たれて、この十年ひとり暮らしをしてきた。しかも、九十歳の超高齢とくる。それでも何とか身の回りのことをこなしてきたのだった。

とりあえず、冷蔵庫にある目ぼしい物をかき集めて夫を呼ぶ。ねー、お願い。あいよ。こんな時は夫が頼りになる。姉

宅まで車で十五分。着くと、指定席の縁側、台所をばたばたと覗く。案の定、寝室で布団を被っていた。

「やだー姉ちゃん、北枕じゃん」

「手間が省けていいら」

「もう、悪い冗談はよしてよー」

彼女に具体的な症状はなかったが、食欲不振と、寝ている方が楽だとしきりに言う。診察をすすめるも、聞く耳を持たずで閉口した。

ひとつ気になるのは、何を聞いても「忘れた」である。念のため保険証の置き場所を聞いてみた。眉間に人さし指を当てて、どうだったかなあ、と首を傾げる。いつも使っている食卓の上に、いつもどおり置いてあるのは確認済みだ。

そんなわけで、私が時々泊まってようすを見ることにした。いちど自宅に戻って、再び出向くと、前日に買ったばかりのいちごが消えているではないか。ごはんの代わりに食べたとしても、いちごの数からいって考えられない。

「いちご食べちゃったの」

「うん」

幼子が何のためらいもなく答えるのに似ている。

「えーっ、全部？」

次のことばを失った。

他にも幾つかの疑問点がある。多めに作った煮物、お浸しなどが短い時間に空になったのだ。その頃の食の細さからすれば、三日分の量である。あれこれ問い詰めたところ、ぐっと呑みこんだ。一方で、こっそりゴミ箱を探っている自分が居て、背筋が凍った。

食が戻らないまま十日が過ぎた。彼女は限界とみたのだろう、自ら施設入りを希望するようになった。しどろもどろの応答に、三度振り回される。いよいよか、まさか。こんな時は悪い場面しか浮かん

でこないものだ。

夫が不在で、やむなく自転車を走らす。漕いでも漕いでも縮まらない。満開の桜にこれほどまでに嫉妬したことがあっただろうか。姉ちゃん逝くなよ、待っててくれ。部屋に飛びこむ。かすかに布団が動いた。あつ動いた、生きてる。恐る恐る布団をめくる。彼女はうす目をあけて、何っ、てな顔を見せた。

「姉ちゃん良かったー、良かったよ」

とたん、へなへなと力が抜けていくのが分かる。

「生きていくのが大変になったよー」

「うんうん、そっか。いいよ、もう頑張らなくていいよ」

遠いむかし、姉がしてくれたようになんども頭を撫でてやった。ようやく落ち着いてきた。

もう待ったなし、かかりつけ医に直行だ。戸締り、火元を確認していると、

「ひさこー、保険証忘れるよー」

すかさず、指摘ときたもんだ。

「あれー、姉ちゃんに言われちゃったよ」

はしゃいで返したが、あんたに言われたくねえよ、と腹の中で思いつきり舌打ちをした。

「食欲がないと脱水を起こし、物忘れもすすむですよ」

五十半ばのドクターは、彼女と私を交互に見ながら続ける。

「心臓にも影響するんですよ」

「えっ、心臓にも、ですか」

「いいかね、水分をたくさんとって、好きな物をいっぱい食べるんだよ」

こんどは姉の顔を覗きこんで、一語一語噛み砕いて諭すのだった。私の涙腺は、ほろほろと緩んだ。

四日間の点滴が必要となったが、基本的な検査では特だん悪い所もなく安心した。これまで、介護とか支援とかは、どこか他人事のように聞き流してきた。しかし、七十半ばに立った今、我が身の問題としてずしりと響いてくるのである。

会計も済んで姉の手をとると、

「帽子、忘れてるよ」

「……………」

姉ちゃん、私も忘れたわ。

(南区)

「入選

調子の良い男の顛末

松田 健

今は昔……。

まだコンピューター自体が物珍しかった一九八〇年代の初頭、ある印刷会社が社運をかけて、その超高価な機械を思い切って導入することになった。それまで手書きか、せいぜい印刷物として残っていた重要書類や図面を、何時までも確実に残しておくためには、デジタル化していく必要があるという考え方が世間に広まりつつあり、その需要を目論んでのことであった。

今でこそ文書は勿論、自撮りした写真、動画、録音に至るまで、全て個人レベルで自分のパソコンやスマホで、当たり前前にデジタル化しておけるが、それを肩代わりするだけで商売になる時代があ

ったのである。

ところが社内で、その難しそうなコンピューターなる最先端の機械を誰が担当するかが問題になった。ただの凡人が下手に関わったりすれば、頭がおかしくなっている気が狂ってしまうのがオチだとか、いっぺんに目が悪くなってしまうと誰もが尻込みをしていた。

そこに白羽の矢が立ち操作を任されたのが、何処からかこの浜松に流れて来て、中途入社してきたばかりの三〇歳前後の風来坊の男だった。わざわざ社長がスカウトしてきたのではとか、経営者一族の親戚筋の者なのか？ と社員たちは噂した。何れにしてもコンピューターを扱うぐらいなので、男は余程優秀な人物なのだろうと思われた。

兎にも角にもコンピューターは精密機器なので環境が大事だと、社長室より立派な冷暖房付きの個室が用意され、それを扱う男にもストレスが溜まっていけないと、仕事をしながらラジオは聞き放題、お茶も好きな時に飲み放題となった。

そればかりか特殊技能手当などという名目で、男には営業部長や工場長達より高い役職報酬が与えられた。それで男は昼食も給食など取らず、わざわざ近くのレストランまで出掛けて、昼間からビールを飲んだりして優雅に過ごし良い気になっていた。

ある時、残業で社内に残っていた何人かの者が集まって、既に定時で退社していたその男の部屋に忍び込み、普段は遠目で見えていただけのその機械を取り囲み、しげしげと眺めていたが、その中の一人が、こんな物がと強がって、他の者が制止するのも構わず電源スイッチを入れてみた。

ツツツツートルルーンと電子音がした後、コンピューター本体のモニター画面が鮮やかな緑色に輝いてきた。おおーと声を発し暫く凝視していたが、やはり急に怖気づいてきてどうしても次の一手が出ず、すぐに電源を落とすことにした。これ以上、下手に触って壊してしまふことを危惧したのである。

ところが最初に上向きにして立ち上げたスイッチを、今度はその逆に下に向けて元の形に戻せば、それで済む筈だと思っていたが、画面は輝いたままで一向に消えない。うんっ何で、どうして？ 困惑し慌てふためき顔面蒼白になった。

当時のコンピュータは現在のパソコンの様に、画面上でカーソル一つ動かしていけば事が足りるという訳にはいかず、いちいちコマンドといわれる決められた命令文を、わざわざキーボードから打ち込まないと作動せず、ただ電源一つ落とすにしても、幾つかの手順を踏まなくてはならなかったのである。

慌てて、すぐに男の家に電話をかけ、勝手に機械に触れたことを陳謝し、電源の落とし方の指示を仰ぎ何とか事なきを得たが、この件以来、かねてから、この男を新参者のくせに調子の良い奴だと嫉んでいた連中までもが、そんなコンピュータを駆使する男は、やっぱり頭の良いう優秀な人物に違いないと、一目も二目も置くようになった。

こうして、たかだか電源一つのこと

で、彼らは益々コンピュータに対して畏怖の念を抱き、それを担当する男は、いよいよ調子に乗ってきて一人はくそ笑むばかりであった。

仕事を依頼してくる各事業所の担当者も、そんな男のことを、それなりの大学でも出た優秀な人物に違いないと思い込んでいたが、実は男は大学どころか夜間の定時制高校しか出ていなかった。

それなのに何故、そんな男が社内の大卒や工業高校卒の者たちをも差し置いて、それを任せられ重宝にされていたのかというと、男が一見、たしかに利発そうな容貌をしていたからである。人は得てして見かけで判断してしまうもの。外面が良いだけで頭も良い筈だと買い被ってしまうのである。

更に男は容姿以外にもソフトな低音の声質にも恵まれていて、人はそんな男から甘く囁かれると何故か簡単に欺かれてしまうのだった。それに加えて男はギターを弾くのが卓越して上手かった。

暇さえあればギターを持ち出してき

て、それをさり気なく爪弾いていたが、ギター一本でベンチャーズの「キアラバン」などを弾いて見せたりすると、聞く者は、えっ こんな難しそうな曲をいとも簡単に？ と、それだけで必ず驚愕した。軽く弦を弾いてアダモの「雪が降る」とか、岸洋子がカバリーしていたエンリコ・マシアスの「恋心」の一節でも唸れば、今度は決まって女たちが目を輝かせ興奮した。それらの現象が男を益々調子に乗せてしまうのであった。

雇用主の社長もそんな男の様子を見ていて、学歴は無くても何かは持っている男だと、すっかり信じ込んでしまっていた。



ところが男が四〇代になった頃から、パソコンが安価で世に普及し始め、次第に誰でもいとも簡単に、コンピュータなるものが気軽に扱える時代となった。

その影響で印刷業界は一気に斜陽となり、あれだけ社内で重宝にされていた男も一転、今度は無用の長物扱いとなり、

時代も新たな二一世紀に入った頃には、
いの一に番に職場を追われる身となつてし
まった。

誰もが理屈を理解し、まだ薄給の新入
社員でさえ最初からパソコンが扱える時
代に突入しても、くだんの男は相変わらず
胡坐をかいたまま努力を怠っていたのだ。
やがて化けの皮もすっかり剥がれ、
社内のコンピュータを扱う部署の中
で、もつとも時代遅れのオヤジになり下
がつていた。

既に五〇代ともなつての失職は、突
然、奈落の底に突き落とされるようなも
のである。普段から、この男を面白くな
い奴だと思つていた旧知の連中は、この
時こそ「ざまあみろ」と溜飲を下げたも
のである。

今は昔の物語……。

(北区)

「入選」

混ぜご飯

大庭 拓郎

真正正銘の爺さんだから大好きなスル
メは噛めないが、思う存分にご飯を食べ
ている。腹一杯が何よりのご馳走だ。冷
蔵庫には手料理が入っている。市販品は
どれもくどいのですべて自前だ。ご飯に
あれこれ和えて食べる。ハンバーグもあ
るし、ギョウザもある。小分けにして冷
凍保存するので湯煎してご飯に混ぜる。
小さな鍋で温めながら整えてスプーンで
食べる。

ジャガイモをたくさん貰つて、丸ごと
蒸かしてタッパで冷凍保存した。折々
に温めて頂く。今日は庭先のピーマンに
詰めて食べた。ジャガイモを潰して挽き
肉と合わせて蒸し焼きにした。ミニトマ
トやキュウリを入れたポテトサラダも素

晴らしい。多めに作つてご飯に添えた。
味噌汁との相性が抜群だ。ジャガイモは
いろいろに変身してくれる。蒸かした鍋
を空焚きにして塩をばらばら振り掛けて
食べた。ひび割れた皮から沁み込んだ塩
分が何とも旨い。ゆで卵やバナナなどを
添えて偏食にならないようにする。

子供の頃のゴーヤがすごく懐かしい。
えごくで苦くて大嫌いだつた。口をへの
字にして頑固に抵抗したが、鼻を摘ま
れてねじ込まれた。キュウリの化け物
みたいだが、栄養たっぷりだからと朝昼晩
に食べさせられた。お陰で、藪蚊に食
われてもお出来にならずに酷暑でも平気
だつた。今では、ゴーヤチャンプルは
大好物の一番になった。茶の間の窓に
這わせてグリーンカーテンを編む。夕
顔の側で可愛らしい黄色い花を咲か
せて、ゴーヤチャンプルのご馳走を作
つてくれる。

二番目の好物はお好み焼きだ。小麦
粉を溶いてフライパンに広げる。キャ
ベツと豚肉を乗せてウドンや卵を加
える。トマトやゴーヤをトッピング
すると絶妙な一品が生まれる。ソー
スをまぶしてフオ

ークで千切って食べる。得も言われぬスタミナ料理になる。晩酌の肴に持つて来いだがご飯にもなる。たつぷり作って冷蔵庫に保存しておく。

満腹の食道楽であるが、足腰もしつかり鍛えている。本物の年寄りだからうさぎ跳びなどは出来ないが、ラジオ体操を続けている。コロナの巣籠りが長引いて、運動不足を痛感した。一週間寝込むと、一か月分の筋肉が落ちると書いてあった。それではと、ラジオ体操を強化した。食いしん坊と暮らすには何より丈夫な体が大事。

朝寝坊して、ラジオ体操を入念にやってから、首の運動をする。首をぐるぐる回して、左右によじってお辞儀の仕草をする。ラジオ体操には、何故か首の運動が無い。上半身と首回りだけでは依怙贗員なので十回のスクワットを加えた。そして、寝床と隣室を歩き回りながら階段の往復を繰り返す。茶の間のメダカらに挨拶して朝昼ご飯をやる。また二階のウォーキングを続けて、台所でお米を研いでランチの準備をする。枕元のラジオ

を聞きながら一時間ほどやって、朝風呂に浸かる。

この頃は体がぐんと軽くなり、酒量が減ってご飯が旨い。新聞歌壇を書き写しながら口ずさむようになったからに違いない。いつしか真夏の誕生日に、短歌ノートを束ねて手作り歌集を作る習いになった。老体にもまだ伸び代が残っているようだ。子供の頃は朝ドラ「ちむどんどん」のお兄ちゃんみたいな粗忽者だったが、身体にダイヤモンドの原石が埋蔵されているらしい。混ぜご飯と頑張って宝物の発掘に挑戦したい。

(南区)

「入選」

昔の飛驒の 正月の風習

高橋 幸

昭和二十八年頃の飛驒の山里の正月を迎える風習の思い出である。

正月の準備は暮れの二十八日から始まった。

早朝五時ぐらいから、父母、義姉、長女、の四人で餅つきが始まった。父が杵を振るい義姉は手水を付けては餅を裏返しペタンペタンと餅をついた。母と姉は餅を丸めていた。餅の種類は白餅、草餅、キビ餅、あんころ餅等色々の種類の餅について長い期間食べるのであった。私達子供は邪魔にならない様見学していた記憶である。

正月のお飾りの「花餅」を父が作った。

山から木の古株を切ってきて其の枝に餅を小さく四角に切って刺すと白梅が咲いた様に綺麗になる。それを和室の鴨居に取り付けて部屋が白梅が咲いた様に華やいで正月を迎える雰囲気になるのであった。

いよいよ大晦日、一年の最後の日を迎えるのでお昼の行事に「年取り」と言う一年の労をねぎらって家族一同とお世話になったご近所の人達と他県に働きに出ていた姉も帰ってきて総勢十五人ぐらい揃って御馳走を食べながらの宴会が始まるのであった。

早朝から父母、義姉、姉達のご馳走の準備で大忙しだった。

メニューは出世魚のブリの麴漬け、野菜と切昆布の汁物、天ぷら、茶碗蒸し、なます、黒豆、きんぴらごぼう等であった。

岐阜は山国で海の生魚は無いので、何時も干し魚とかスルメ等を麴漬にして保存食にしていたのである。父は門松を立て、子供の私たちは掃除を手伝った。

いよいよ宴会の場所の用意である。八

畳の間と六畳の間の襖を取り外して十四畳の広間に変身させた。

そこに春慶塗のお膳がずらりと並べられ、にぎやかで楽しい宴会が始まるのであった。

我が家の御先祖は峠の麓に小さな旅人を泊める旅館業を営んでいたそう、お膳とか食器が沢山揃っていたのでまるで旅館の宴会場の様な風景であった。

宴会が終わるとその年の仕事はもう終わりではゆっくりコタツで寛ぐのであった。其の頃他県に働きに行っていた次女の姉が沢山のお土産を買って送ってくれた。

その当時は今の様に宅急便の様な便利な物は無くリング箱で蒸気機関車で運ばれて来て小さな村の駅に到着したのであった。

お土産は妹達の洋服、本、おもちゃ等であった。私は洋服と「少女ブック」であった。「少女ブック」に手塚治虫の漫画で「リボンの騎士」が掲載されており何よりの楽しみであった。

いよいよ正月を迎えた。この地域には

他家に「雑煮」を御馳走になりに行く風習があったのだ。私は子供なのに一人でご近所に買って貰ったばかりのハーフコートを着て御馳走になりに行った。広い客間に通されて其の家のおばさんが丁寧に春慶塗のお膳に春慶塗のお椀にお雑煮を運んで来て下さり、三つ指について新年のご挨拶をされるのであった。私も子供ながらに三つ指について新年のご挨拶をしてからお雑煮を御馳走になった。

午後又違う家に御馳走になりに行った。さすがにお腹がいっぱいで食べられないので残すと失礼に当たると思い、新品のコートのポケットの中に其の餅を入れて帰って来たのである。我が家に帰って其の餅を取り出そうとしたら、しつかりくっついていてなかなか伸びるばかりで取れないのである。えらく母に叱られた思い出である。子供の頃の正月が今から思うと物資の乏しい戦後の日本の、正月だけの大御馳走と新しい洋服と色々普段との生活が一変する事が本当にうれしく楽しい思い出であった。

昭和、平成、令和と三つの時代を急な

く生きてこられたが、昨年「おひとりさま」になってしまい、一人の正月はたとえ様の無い寂しさであった。これから残された人生を悔い無く生きて行こうと思っている。

(中区)

「入選」

生きてきた道

藤原百合子

今年も北海道の信子からカボチャが送られてきた。白い肌の雪化粧という大きなカボチャだ。ここ数年、十一月になるとカボチャやソバが送られてくる。

私も家で採れた、柿やキウイフルーツ、サツマイモ、そしてミカンを買って送る。

古里の村には信子の家族しかいない。みんな都会に出て行って過疎の村になって何十年経つのだろう。子供の頃から、今も信子との心の交流は変わらない。

北海道幌加内町字〇〇〇、私が生まれた古里、一番近い都会は旭川、だから浜松に来てから人に答える時は、旭川の近くだよと言ってはいたが、冬が近づくといつもテレビでは雪が降った早さとか、寒さとか、積雪の多さで幌加内が登場す

る。

昭和五十四年、長男が生まれた年「日本一寒い国」とテレビで放送されたこともある。

氷点下四十二度、私が十八歳まで住んでいた時には、ひと冬の間にマイナス三十度は何度かあったが、さすがに四十二度はなかったと思う。

七人兄弟の上から五番目、兄が三人、姉が一人、弟が二人。

その中でも私は一番小さく生まれた。昔でいうと五百匁、今なら一五〇〇gくらいだったのだろう。父の母、つまり母にすれば一緒に住んではなかったが姑に「この子はそうとう大切にしなければ死んでしまう、大概は助からんと思うが」と言われたそう。

しかし、体は小さかったが病氣という病氣もせず、今も元気で生きている。

元々、両親は岐阜県出身だったが、太平洋戦争の真最中の昭和十九年、空襲を避けて、父の親族が暮らす北海道へ、四才の長兄、二才の姉を連れてB29の爆弾が落とされる中、津軽海峡を渡ったそう

だ。

四人兄弟の末っ子で父親を幼い時に亡くして甘やかされて育ったであろう母にとっては、戦争が終わるまでという約束で渡った北海道は精神的にも肉体的にも過酷であった。

密林のような荒れ地を鋤やスコップで耕さなければならぬ日々、そして父の身内との軋轢あつれきとまではいかないまでも馴染めず、一人孤独であったと思う。

私が物心ついた時、私の目に映った母はいつも泣いてばかりいた。帰れもしないのに吹雪の中を「八百津に帰る」と言つては駅まで歩いていく姿だった。

貧しくて忙しくて、両親の愛情も感じられない日々だったが、次兄が中学を卒業した時同郷の同級生が、浜松に知人がいるので一緒に就職させてもらった。それが縁で皆浜松へ移り住むことになった。

私は上の兄弟は一人も高校へは行かなかったのに無理を言つて深川市にある高校へ通うことになり、最後に浜松にやつて来た。

兄たちは私が浜松に行った頃には兄弟で鉄工場を経営していた。

田舎者の私にとって浜松は温かな場所であった。兄の家に世話になりながら、金物屋の店員、スーパーマーケットの店員と二十四、五才まで働いた。そんな中、夫と出会い二十六才で結婚、夫は五人兄弟の末っ子で三男、兼業農家の両親と暮らしながら繊維の会社に勤めていた。そして三人の子供に恵まれた。

子供が小さい内は家事と子育てだけをしていたが末っ子の次女が生まれた年、家を新築していたのでそのローンや教育費など大変で四十代くらいから農園のパートで働き始めた。畑仕事は非常に疲れたがやりがいのある仕事だった。

平成十年、夫が勤めていた会社が倒産、路頭に迷った夫は自分で生地の卸の仕事をはじめた。私もパートを辞めて夫の仕事を手伝った。卸業の傍ら寝装品のギフトの箱つめの仕事を始めたが、夜遅くまで数をこなさなければならず、大変な苦勞であった。

平成十六年、私たち夫婦にとって青天

のへきききという出来事が起きた。元気で大阪で働いていた長女にガンが見つかり、一年二ヶ月の闘病生活の末翌年八月、二十八才の若さで旅立った。悲しみの中、私たちは夫が受け継いだ先祖の畑を耕し、折しも長女が亡くなった年に始まったファーマーズマーケットがすぐ近くにあるので、三年後くらいから参加しはじめた。ジャガイモ、玉ネギ、ゴーヤ、インゲン豆、等々、季節の野菜や、昔からの家なので甘夏ミカンや梅、キンカン、ブルーベリー、ビワ、柿。ただ出荷するには申告が必要である。種まきの日、植え付けした日、収穫日、農薬散布の有無、薬品の名前、回数、等々。沢山は出せないが朝早く夫が野菜を収穫して、朝食を食べた後私が袋づめをして車で五十分くらいのファーマーズマーケットに出荷する。

ファーマーズに出荷する様になって一年後くらいに私たち夫婦はプレハブの倉庫を利用して「布やさん」という生地の小売りを始めた。最初はお客が来てくれるかと心配で、夕方遅く、住宅街にチラ

シを作つて配りに歩いたり、新聞に小さな広告を載せたりもした。

半月、一年と過ぎる内、お客様は増えていった。信号機の側にある我が家の畑の隅にカンバンを立てた。信号待ちをして見つけてくれて立ち寄ってくれた人。

道をはさんで向かいの歯医者さんに治療にきていてカンバンを見て訪ねてくれた御夫婦はもうずっとお得意様に。

若いお母さんがネットで「安いよ」と書き込みをしてくれたり、県外からも訪れてくれたりする。初めて来てくれた方も「いらつしゃいませ」と挨拶するともう何度も来てくれた人のようにお話をしている。

ハギレから反物まで、綿、麻、ニット、ダブルガーゼ、デニム、二メートルカットの割安の生地や、キズはあるけど十分使える一枚百円＋税で売っている二メートルぐらいあるハンガー掛けの生地。

来てくださるお客様も昔と違って、ほうぼうの生地屋さんや、手芸屋さんやめていってしまう、いつまでも続けてね、と言われるが、店を始めて十四年余

り、今もファーマーズマーケットに出しながら自営業の布やさんが続けている。

夫、七十二才。私七十三才。ただ私たちには後継者がいない。

いつまで体が続くかわからないが頑張るしかない。

夫と二人精一杯生きていられること。沢山の人に支えられて毎日過ごせる日々。

この日々が続くことを願っている私である。そんな思いとは裏腹に、ゆつくりしたい思いがある。図書館へ行つて読みたい本を探したり、片道四十分くらいの所に嫁いだ次女が週末には八才になったばかりの男の孫と、三才の女の子を連れてやってくる。店の定休日是一日中畑仕事に明け暮れてしまうのが常だがたまにはゆつくり遊んでやりたいと思うこの頃である。

(北区)

たかはたけいこ

『ニンゲン』という生き物

世界中を覆った感染症拡大下で、昨年はロシアのウクライナ侵攻が始まった。日々、テレビに映し出される惨劇は、多くの現在の日本人が知識でしか知らない『戦争』のリアルな画像だ。

ロシアとウクライナを取り巻く各国の対応と世界的に発生したモノ不足と値上げの波。2022年は世界人類が『コロナ』、『戦争』、『モノ不足』の三重苦を味わった一年になり、年が明けても事態の収束は見えていない。

そんな中での市民文芸賞の選考は、気が重かった。とんでもない愚痴や出来事が綴られているのではないか。

応募作品を読み始めると、前述した重い気分はどこかに行ってしまった。人間はなんて、柔軟で、賢い生物なのだろう。苦しい状況のなかでも自分を見失うことなく、したたかに逞しく生きている。言葉を駆使して、自分の思いや感覚を書き残している。

選考を終わった今、考える。人類が生物の頂点でいられるのは、逞しさと共に『文字』を持つているからだ。私たち

は常に『今』を『文字』に書き残しているからだ。

『五十年目の告白』

結婚五十年を迎えた夫のつばやき。ふたりの子どもたちは別に暮らし、夫婦ふたりが寄り添って生きている。筆者は透析を受けなければならぬ病を持ったが、ものごとの捉え方はいつも前向きだ。最後の一文にある『復元されたノートルダム』にはっとした。

ああ、ここにも逞しいフランス人がいる。

『私も忘れたわ』

ひとり暮らしをしている九十歳の姉から、SOS電話がきた。筆者は姉の最期を看取る覚悟で、姉のもとに通う。少しずつ、壊れていく姉と決して若くはない筆者。高齢の姉は何度も死期を乗り越えて、一日一日を生きている。ひとつの死期を乗り越えるたびに、筆者と姉の絆が強くなる。

『調子の良い男の顛末』

コンピュータには絶対で無限の力があると、信じられていた時代があった。やがてコンピュータ社会になると見込んだ会社でコンピュータを導入して、専門職の男性を雇い入れた。コンピュータを知らない人はおっかなびっくりで、上座に据えた。やがて、コンピュータは社会に浸透していき、上座にいた男性も去っていったという、現代のおとぎ話。

『混ぜご飯』

たぶんひとり暮らしであろう高齢男性の暮らしだが、楽しく丁寧に描かれている。食事の支度をし、冷蔵庫の中をみて朝昼晩ごはんを食べる。庭で野菜を育て、ラジオ体操に行く。新聞歌壇を書き写し、時に自分の一句をひねり出す。誰もが願う老後が筆者の素晴らしい日常だ。

『昔の飛騨の正月の風習』

飛騨の正月がどのように迎え入れられていたかが、子どもだった筆者の目線で克明に描かれていて、文章を読んでいるうちに風景まで浮かび上がった。テレビがまだ普及していなかった時代、私たちは住んでいる土地での正月という、ハレの日をこうして迎えたものだ。

『生きてきた道』

北海道で七人きょうだいの五番目として生まれた筆者は、

様々な偶然で浜松の地に家族と共に根を下ろした。結婚し、子供を育て社会人として巣立たせた。今まで、生活のために一生懸命に働いてきた生活サイクルは変わらないが、ふと、筆者は考える。これからは、私のために私が生きていってもいいのではないか。

『言葉への想い』

中村 敏之

若者言葉の拡散が止まらない。聞き苦しい言葉を耳にする時もある。私も、言葉は生き物で変化し続けていることは頭では理解しているけど、どこかで拒否反応がある。文中に描かれている日本統治下で日本語を使うことを強要された体験をもつ、台湾人夫婦が話す美しい日本語を私も聞いてみたい。

『お出かけ日和』

池本 昌宏

小学三年生だった筆者は自宅の窓ガラスに映る、雨を眺めていて、流れる雨の多様性に興味を抱く。雨音、雨の日独特の空気の匂い、草花の葉が洗われる様子……

「変わっている」と人から言われようが、気にしない。筆者は雨の日が変わる地上で起こる様々な変化を、楽しむ技量があるから。

『ひめんなさい』

山田 知明

燕の巣を取り除いてくれと、義父に言われ、出かけた筆者。いざ巣を取り除こうとすると、雛がまだいることに気づき、その日は諦める。後日、ひなが巣立ったのを確認して取り除いたものの、翌年、気になって巣のあった場所を訪れて、「ごめんなさい」と呟く。

『浜松大空襲 昭和二十年六月十八日 母との死別体験記』

伊東 政好

かつて、日本は戦争をしていて、浜松の地も甚大な被害を受けた。私も両親や親せきから、浜松の街がどうなったかを断片的に聞いている。私に戦争の記憶を覚えてくれた人は、逝ってしまった。だからこそ、私はこの一編を「戦争」の生き証人の言葉として、市民文芸に活字として、残したい。

浜松大空襲 昭和二十年六月十八日

母との死別の体験記

伊東 政好

昭和二十年六月十八日夜十二時頃からサイレンが鳴る。母

親と姉と私は板屋町広小路の家の裏の小さな防空壕に避難した。父親は十八日の夜は近くの浜松倉庫に夜勤であった為一緒に居なかった。段々空襲が激しくなってきたので近くの大きな防空壕に移ることにした。防空壕を出た時、なんと三人はバラバラとなつてしまった。私は一人で南通りに出て逃げようとしたが、すでに焼夷弾が激しく落ちてきたのもどり母親を呼んだ。大きな防空壕にすでに入っていた。姉は近くの人と新川の中に入り母親の実家芳川松島まで逃げ助かった。私と母はそのまま朝まで防空壕の中で過ごした。ふっと眼がさめ母のひざに顔をうずめていた。母を起こしたが反応がなく一緒に入っていた人々はねむっているような状態であった。父親が夜勤からきてくれた。防空壕に入つて人を調べてくれたが私以外全員二十一名全員窒息死で亡くなっていた。私と父は母の実家である芳川松島に行き疎開した。しばらくたつてから私は声が出なくなり、三ヶ月あまりシブツしたりして治した。

昭和二十年六月十八日の大空襲の被災は浜松全体におよんだ。B 29 米軍の飛行機から落とされた大型焼夷弾六万五千も投下された。死者一万五千人と負傷者も多く出た。建物の損害一万六千戸になった。浜松は昭和十九年十二月十三日からたびたび空襲され多くの被害にあった。

もう二度とこのような戦争はしてはならないと感じた。母の死は三十四才であった。今も母の死を忘れることはできない。合掌

(中区)

詩

〔市民文芸賞〕

ツケマツゲ

サカイケント

山姥と

狙い定めて

咲くよ赤い花

今宵惑わす

マドモアゼル

朝方見ると

なまはげか

今宵も探す

新たな山姥

（東区）



巨星

乗松弘幸

三平八十九 鉄二八十八

くつきりと 暗くて 深い

(中区)

[illegible][illegible]

『市民文芸賞』

苦難だった日々

水野次郎

19歳のときだった

風の音に怯え 入口の付近の目に見えぬ
何かを感じとり 落ちつきを取り戻せない
時計を見れば夜1時

家を飛びだし堤防を走り狂おしくらい
泣き叫んでいた

母親が心配そうに後をつけてきた
荒れた夜中だった

翌日症状がさらに悪化し

父親にも恐れを抱き、思わず父親に

「父さんどうか精神病院へつれてって」と

窮余の一策を投じた

あまり覚えていないが気が付けば病院にいて

「ここはどこ？」と看護婦さんに尋ねた

念仏を5分間くらい唱える人
廊下の真ん中に立って

「お釈迦様、お釈迦」と小声で話す人
部屋の中に立ち上がって聖書を読む人
つきつけられた精神病の名に愕然として
落胆の日々が続いた

だが病院は自分に優しさを示した
泣きじゃくっていた僕に

ハンカチを渡してくれた看護婦さん

部屋を希望通り変えてくれた看護婦さん
わがままだらけだが

心の病に相当苦難した

ちようど私が入院3ヶ月で退院したとき

家のすぐ近くに大学ができた

だが心の病が治らない 学力も伴わない

最初の入院にかかってから20年もたつ
毎日が葉漬け

朝食後、昼食後、夕食後、寝る前
それを飲まなければ調子を崩してしまう

友情・愛情のない灰色の時代が続いていく

だが光明も少しずつ射しこんでいる

大学は中退したが

両親の加護があったからこそ

再び大学へ入学して卒業にこぎ着けた

毎日が感謝

だが働くことを恐れ

病気の餌食になっている

定かではないが

逸材となる日を夢見て今日も睡眠

(中区)

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

『市民文芸賞』

時 間

山 下 進

幼い頃

自宅の東の黒いコルタールを塗った板塀によりかかつて
日なたぼっこをしていた
前方には一面 畑が広がっていた
百メートルほど前には 舗装されていない
バス通りの道路があった

前方を見ていると 南から一頭の馬が荷車を引いて現われた
一人の御者が馬を操り 荷馬車は ゆっくりと ゆっくりと
北へ向かって進んで行った

幼い私には 荷馬車が私の視界から消えるまで 長い 長い
時間が過ぎたように思われた 大人になると 歓喜の時間は
とても短く感じ 苦しい時は とても長く感じることに気が
付いた

時間というものを理解しようとすると 人間の能力を超えて

いるように思える

宇宙の空間が 限らない広がりがある
把握し難いものに見えるのと 同じように
或る哲学者は 時間とは実在するものではなく 人間が想定
しているものだ と 唱えたそうだが

そうこうしているうちに 私のこの詩を書く時間も 終わりに
近づいた

(中区)

靴

尾内以太

右の靴底に穴がある
雨が降ると水が入る
指の間に水がたまる
穴は今ひとつしかない
かつてはいくつもあつた
さびしがり屋の穴たちは
いっしょになつてくつついて
ひとつの大きな穴になつた
川べりを穴ひとつの靴で歩く
あれ ちよつと違う気がして
右足を持ち上げて
靴底をのぞくと
もう靴底はない
靴下だけが見える
青い靴下

そういえば
靴下と靴底は
どちらが下だったか
右足を下ろす
地に足がつく
とにかく 僕は靴屋へ行つて
買わなくちゃ
靴裏を

(南区)

「入選」

出会い

根本 文子

どうやらふしぎなおじさんに会った
あちから見ればいつも見かけるおばさんらしい
私は人の顔って一度ぐらい見たって
全然覚えてないし気にもしない
行き交う人も皆同じく見える

その日いつものように
同じコースを同じ時間帯に歩いていた
前方から後向きで歩いてくる人がいる
田んぼに外れる事もなく正確だ
すれ違う時思わず声が出た
お達者ですね

おじさんは意外な事を言った
前にもよく見かけたよ
駅でハイキングにも行くんだねえ
もう十年も前にハイキングクラブに入っていて駅に集合して

いたのだ

私も行くもんでよく見かけたように言った
おじさんはこうも言った

この辺でもちよくちよく見るよ
そうこの辺はいつも行くお店があるのだ

おじさんは笑いながら

歩く特徴があるもんで手を振ってみせた
確かにそうだ

友達にも笑われる

こんなおじさんが居たなんて

まったくの驚きだ

自分の知らない所で

いつも見られていたなんて

ぞっとしたのも事実

でもそのおじさんは

笑顔がよかった やさしそうだった

又見かけたら声掛けて下さいねと言った

いつもどこかで見られている

悪いことは出来ないと思った。

入選

すみれの願い

吉川 愛

清潔な空気となって

あなたの肺に留まりたい

ヘモグロビンに乗って

あなたの隅々までクリーンにしたい

新鮮な緑黄色野菜となって

あなたの食卓を彩りたい

あなたの健康に欠かせない

実のある栄養素になりたい

あなたの目にする書物の文字となって

あなたの脳に作用したい

その豊かな知性の支柱になりたい

心地良いグルーヴの音楽となって

その形の良い耳を満たしたい

挫折そうになる時に

優しい調べとなってあなたの励ましになりたい

……この願いのすべては叶わない

だって 私はただの野すみれ

何の力もありやしない

だけど

すぐくすぐくあなたが好きだから

恋しいあなたの優しい眠りを祈って

毎晩 花びらを仕舞うのよ

(中区)

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

日常

岸田彩流

いつもの朝
いつものごはん
いつもの風景
いつもの教室
いつもの音楽
いつもの挨拶

いつもがあふれる日々
何も変わらないもの
そんな日々に少しでも
光があつたらなんて
思ってしまう日々も
いつもと変わらないもの

変わってしまう日々も
変わらない日々も
ひたすら時間はすぎゆく
ただ

変わらない日々があるから
少しのことが
変わる日になるのかもしれない
その変化に気付いた時、
私のころはどう動くのだろうか

（中区）

既存の社会を破壊してきた感染症が、まだ世界を揺るがしています。二十世紀以降もスペイン風邪、結核、SARS、エボラ出血熱とエイズ、コロナ他出現。ウクライナへの攻撃も続いています。早い終息を祈っています。

今年の応募作品の印象は、コロナの影響も有り、人間の行動も広がらぬままの生活で、静かな作品が多い印象を受けました。市民文芸賞「ツケマツゲ」変身のおもしろさ、仮面劇場参入と別人格を楽しむ作者の言葉の切り取り方は的確だが、もう少し書いて欲しい。「巨星」はデザイン化されたマス目に、シラトサンペイ兄弟と、カミイ、サスケ、ワタリなどの作者の分身が原作者と共に去っていくことへの哀悼が伝わってくる。ラストの二行が作品をより深くしている。「苦難だった日々」は、自分の中に起こったこと。病気に捕まったこと。病院での日々がドキュメンタリー風に、マトメて綴られている。自分の精神的な負の内状は仲々具体的に書けるものではないが、きちんと自分を把握できる人は病からも去れると思う。「時間」、コールドールを塗った時代感のある板塀でひなたぼっこ。そこに荷馬車がゆっくりと過ぎて行く。田舎道の草地と馬車の映像美風景を集の中に「時間は限りなく私的で、各人の人生に固有のものである」(藤井雅人)という言葉があった。ラストの二行は良く

使われる定書だが別表現の方が詩が広がっていくと思います。

入選「靴」は良くまとめられた作品。偶然のできごとを喻えも入れて一編の詩にした作品。「出会ひ」も時間とかかわる感覚の詩。時間は常に人間にとって大きなテーマである。時間はゆっくりとせわしなく私達の傍らから去っていく。「湖に浮かべたボートをこぐように、人はうしろ向きに未来へ入っていく。目に映るのは過去の風景ばかり、明日の風景は誰も知らないう。」ポール・ヴァレリーの名言を添えておきます。実際に目にしたことかもしれませんが、「後向きに歩く人」の登場がイメージを広げて、詩をふくらませておもしろくしています。最終の二行は不用で、作品を凡庸に思うと思います。「すみれの願い」は何故かせつない擬人化されたラブレターである。「日常」は過ぎゆく時間に反応、ふと立ち止まった作品。

ここで他の詩人の作品を紹介しておきます。「るるり。／＼りり。／＼りり。／＼りり。／＼りり。／＼りり。／＼りり。／＼りり。」

（「おれも眠ろう」草野心平）。「食わずには生きてゆけない。／メシを／野菜を／肉を／空気を／略／水を／親を／きようだいを／略／金もこころも／食わずには生きてこれなかった／略四十路の日暮れ／私の目にはじめてあふれる獣の涙」（くらし）石垣りん）。「私は不思議でたまらない／黒い雲から降る雨が／銀に光っていることが／略／青い桑の実たべている、／蚕が白くなることが／私は不思議でたまらない、／たれもしじらぬ夕顔が、／ひとりでばらりと開くのが。／私は不思議でたまらない。誰にきいても笑って、あたりまえだ」ということが」（「不思議」金子みすゞ）。自分の中にある何か一つ、取り出してみて下さい。

短 歌

〔市民文芸賞〕

人生へ読点を打つ血と肉となつた書籍を紐で縛つて

南区

尾内甲太郎

売るための本をバイクにくくりつけ秋風よりも秋風となる
売りがたさもろとも本の値段とす古本市は秋晴のなか
午後四時に魔法は解けて古書売りは足の疲れた父親となる

独り在れば「何してるの」と孫が問う為すことのあり為すこともなし

中区

坂口 ちせ

いわれなく時止まることのあり床にとどまる影の深きに

憚らず大きくしゃみした後の夜更けの部屋は深海のごとき

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

北からの冷たき風を抱きゐる丘に立つ樹の深き懷
 蟬声の真只中に入りゆけば蟬になりたり翅ふるわせて
 薬指液晶画面をすべる刻電車は夜を音なく離る

中区

桜花 ふみ

新婚の小さき播鉢使ひをりまだ百均がなかつたころの
 さつきから薬待ちゐるし若草がわが旧姓を呼ばれて立てり
 1／4の南瓜がぼんやりと黄を曝しをり夜の厨に

中区

松浦ふみ子

首なしのほとけ地藏を杉葉埋め秋葉古道は山巔つなぐ
 嶺行かば明るさ分かつさかひあり山襷刻む植林の線
 ミズナラの古株に呼ばれたづぬらるへ飼ひならされたかへ山に入らねば

浜北区

すずきとしやす

「入選」

南区 大庭 拓郎

消し忘れの灯がある家に帰り来て「おーい」
と小さくつぶやいてみる
風呂上がり鏡に立てばETか俺にそっくり手
を振りており
さらさらと月の光にほどこかれて咲きつぎてお
り窓の夕顔

中区 阪口佳寿子

身長がまた1センチ減っており健診受けて損
した気分
銀行も役所もやさしくしてくる私はかなり
な老人なるらし
特急の速さで記憶が飛んでゆく歩く速さでい
いのだけれど

浜北区 峯村友香里

添えられたレモン絞らずかじる君きつとたぶ
んねパセリも食べる
「一日に一度は君を笑わせる」秘密のルール
いつか話そう
理由もなく甘やかしたいときもあるホットコ
コアにマシユマロのせる

中区 宮本 恵司

いそいそと楽器をさげて集ひくる今朝の団員
憂ひの見えず
週一回練習の日こそ嬉しけれにこにこと集ひ
楽しく奏づ
また来週てんでの楽器さげて散りてんでの車
に走り去りたり

東区 森 都子

かくれんぼわざと顔出し「もういいよ」見つ
けてはしくて待ちきれなくて
また一人幼なじみの旅立ちぬ（あの子を返せ
花いちもんめ）
「いいものに生まれ変われよ」と祖母まねて
日干しのミミズ土に葬る

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

断捨離の手を止め浸る在りし日の母との時間
 写し絵の中
 花の名を思い出せずに日中を細胞ひとつ目覚める夜中

南区 相曾多加根

稲の穂の黄金色はざわめけり君の後ろを駆けていきます
 カチューシャはスカート揺らし水族館魚ばかり見ている君と

南区 赤堀 進

久々に散歩に出掛け友に会う互いにマスク目で語り合う
 鳥追いの手作り風車カラカラと庭の景色の趣変える

東区 井口 絹子

仏像を美術品のごと観てゆくに「眼を合はせて」と案内の僧
 カーテンの裏に隠れし蟬螂をそのまま置けり死に場所として

中区 石原新一郎

救急車搬送されてレントゲン肋骨三本悲劇のはじまり
 骨密度正常なのに何故何故と不自由の難まざまざと知る

北区 伊藤 美代

思いのあとさき
 僕五歳「時間は永遠」子鹿の瞳夢見るままに生きていたなあ
 長いこと生きてきたなあ生きるのはとってもつらい楽しいなあ

中区 内山 文久

寄せ植えの花をすり抜け草陰へ青大将は蛇の道を行く
 褐の眼のうさぎの「そら」はひもすがら夢を見ており鼻ふるわせて

南区 内山 正則

すり寄って甘えるネコを抱き上げる「バチッ」静電気お前平気か
 これ以上曲がる余地なし団子猫ストープの前独り占めする

北区 加藤 久子

西区 河合 和子

歳重ね気付くおまけの数多あり新玉葱をシャ
キシャキと食む
上ばかりみなくても良し地を向くも気品漂う
クリスマスローズ

中区 木下 文子

友逝きぬ脳梗塞に麻痺したる手にて賀状を書
きくれたるに
「月」といふバス停留所廃止さるかつては和
船渡船場なりき

中区 柴谷 俊行

新緑の坂道ベダル踏込めば汗が滲むよ乙女の
うなじ
雨上がり、走る行く手を見上げれば虹の分度
器、空一面に

中区 清水 紫津

居留地の友を偲びて短歌を読む神戸生まれの
亡母の若き日
この一首如何とメール送り来る短歌詠み合え
る子との一時

中区 鈴木 和子

電線にツイーヨツイーヨとただ一羽さびしく
ないか空は夕焼け
なぞり絵の鳥獣戯画のうさぎたち脳トレおい
て共に駆けたし

北区 鈴木 健示

赤蟻が列を成し来る老犬の口よりミルクの滴
落ちれば
肋骨も背骨も浮かぶ老犬と秋を歩めり今年限
りの

東区 鈴木 壽子

増やしてはならぬと思へど茶道書の新刊一冊
眺へてみる
貝母^{ばいも}の芽も有楽椿の下に伸びやうやく春の茶
花出揃ふ

北区 鈴木 弘子

冬には冬春には春のさみしさがこのまま冬で
いてほしい冬
無口でも笑顔でなくても許される不織布マス
クに救われている

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

中區 高山 紀恵
 空碧^{あお}し浜風清^{すが}し風高しコロナも忘れ皆天仰ぐ
 我も又犬も歩けば諺^{ことわざ}の当たるが如く賞に当たりぬ

東區 坪井いち子

ガラポンの当たりの鐘に誘われて並んでおりぬ我を忘れて
 れんげ田に手話で会話す若きパパはしゃぐ幼子満面の笑み

中區 手塚 みよ

老いたるは家事も手抜き暮らしなり吾が指の爪桜貝めく
 花殻に混ざりて切りし蕾ひとつ地に落ちたまま咲く仏桑花

東區 波静かを祈る

鶯の鳴き声待つこと小半時テレビの音量小さくしたまま
 十歳児が養老先生に真顔で問う「わからないです。いい人生って何ですか？」

西區 野末 妙子
 時々^{みなも}は水面に出でて空気吸う魚となりぬコロナに籠りて
 「ちようらかす」遠州弁にはあらざりし広辞苑の記載まじまじと視る

南區 袴田 成子

小三のオンライン授業に目を見張るまるではあばのための参観
 「なるほどね」と答えてくれた友の声我にとつては魔法の言葉

中區 平野 旭

生きてたら後が詰まるでさあ行こか屹度あの世も良い所だろに
 ミニボトル葉ケイタイ眼鏡有りカバンの中に重き人生

中區 福島 正義

赤とんぼ宇宙遊泳する吾子はママへ寄ったりパパへ寄ったり
 階下から匂い漂うパンの声もう起きろというがごとくに

北区 古谷聰一郎

不器用に生きて漸く八十路の身目下の男にまた叱られた
夕焼けの空が寂しい嘘ひとつ孤老の見栄で友が遠のく

南区 堀川 知音

紫陽花の束抱き帰宅する夫これ以上何を望むというのか
春光はガラス戸を透き虹いろにああわたくしは生かされている

西区 増井 照美

窓越しに入院の夫と会話するスマホ片手に口ミジュリのごと
十五キロ痩せて戻りし老い夫の専属ナースにならむと気張る

東区 松本ひで子

人生のまさかの坂や心不全山乗り越えて余生にのぞみ
新しきいのちいただき八十六亡夫の育てし椿描きたり

東区 宮澤 秀子

墓のみに残す故郷過疎となり見下ろす家並眠るごとくに
裏庭にしぶとく生える十葉を抜きつつ強さ我にも欲しと

中区 谷野富久恵

足元の箱につまずき照れ笑いそのツボ大事と笑いのフォロー
床の子が後ろ髪引く切なさを切って出掛ける早出の仕事

中区 山本 勝彦

昼月に見紛う色の碍子浮く雲ひとつなき群青のそら
逆光に木の葉いちまい舞うごとくちいさき鳥は木立を移る

中区 和久田郁江

轟音に鉦の手を止め腰伸ばす曲技飛行のスモークスター
キックして掛からぬバイクに二度三度夫のひと蹴り音響きけり

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

忘れろと風は吹くこの春の日の肌に留めし温もりさえも
 朝明けの蓄数えて梅の花待ち焦がるる日こそ
 楽しけれ

中区 和久田俊文

遠距離じゃうまくいかんとアドバイス過去の私に伝えてやりたい

磐田市 渥美 朋可

スマートフォン習いに来れば先客の背にみどり兎はぐっすり眠る

北区 安藤 圭子

山間^{やまあい}を出し^{いで}さしばはまっすぐに南を目指し編隊となる

西区 池谷 和廣

「オッサンよこっちの仕事をやってくれ」老いて勞せば名前呼ばれず

中区 石黒 實

夏みかんに蜂蜜かけてデザートに口中かすか夏の風吹く

西区 伊藤 友治

家並みも走る電車も融けそうな猛暑の昼に山鳩が鳴く

中区 伊藤 雅章

十五歳離れた兄の逝きし夕風鈴の紐固く結びぬ

西区 伊藤 米子

A4に娘の知らぬ我がプロフィール書き認めり生きし証を

南区 井浪 マリエ

潮騒が友となりけり月明り無人の島の一夜キヤンプよ

浜北区 岩城 悦子

夢の中朧げ浮かぶ逝きし娘の近寄るたびに僅かに離れて

南区 江間 得二

西區 遠藤 ゆき
物語あこがれ果てぬ毎日に「更級日記」をい
つか解する

浜北區 青海 まち
コロナ減り一番やりたかった事ひかりに乗っ
て東へ行こう

浜北區 大城きみ子
杖ついて墓参りする我のためそつと重ねる子
の手の冷たさ

東區 大檐 一郎
手をつなぐこれが息子である不思議このぬく
もりを味わいて歩む

中區 大山 啓
靴下を二枚重ねることなども老いたりと思ふ
一つ事なり

中區 岡本 蓉子
歩き方よくなったねと褒められて笑顔をかえ
す散歩の友に

北區 小川 道子
今年こそ自由に旅が出来るかと踊る気分もは
なく消ゆる

中區 加藤貴代美
死なないと約束したがドクターとされど我が
うつのたうち回る

東區 神谷 司
強い風台風並みの音とともに激しく荒れる春
一番よ

西區 かもともこ
一年を施設で送った父なのに鏡欲しいと一度
も言わず

中區 佐野美佐代
天王星は蝕の月にかくれゆく地球自転のスピ
ードを見た

東區 寒風澤 毅
我がいのち自然の中を歩かねば養えるばかり
とコロナの教え

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

白馬五竜パノラマウエイ乗りついで青いケン
咲く園歩み行く
浜北区 澤木 辰子

耳疑う確かに鳴いた今鳴いた我が家の庭にう
ぐいす鳴いたよ
西区 柴田千賀子

息子はサムライ孫はマルジェラ吾ネロリ一日
はじまるそれぞれの朝
北区 清水 孜郎

燈明のマッチの数に過ぎし日を数えおりたる
時雨の朝に
中区 白柳ますみ

冬枯れや秋の終わりを惜しみつつ心待ちする
まだ見ぬ君を
南区 杉浦 庸暢

奥山の空一面の桜色桜ぶきに身を投げけり
北区 鈴木 勝則

打ちよせる波のしぶきに頬濡らし沖行く船の
異国を思う
中区 鈴木 賢三

山近く列車の音が聞こえる日傷の痛みが雨を
知らせる
中区 鈴木由起子

夏過ぎて秋が来なくて冬無くて温暖化だと人
は言うけど
東区 高木 勝海

葬送を隣保の人に見送られ兄の九十七年別れ
の我が家
中区 高橋 幸

連休の酒場の暖簾揺れているネオンも滲む夜
風の手なり
浜北区 竹内オリエ

亀甲の樹皮ひび割れて洞となり太き松の木二
尋あまり
中区 遠山 長春

中区 戸田田 鶴子
青天や太鼓の音は空に抜け戸のあいたままあ
り秋まつり

中区 鳥井 美代
満月の力強さを戴きて八十路の我の元氣に変
えむ

南区 中村 淳子
ヘルメットひざ当てつけて幼らは軽やかにこ
ぐこども自転車

中区 中村 照美
天井と壁とカーテンの病室でウクライナの地
下室思った

東区 根本 文子
何となく気になっていた障子穴その気になっ
て十分で貼る

中区 巴 勢 里
たくましき鯉のぼりの腹澄んだ空別離への決
意強くなるなり

中区 飛 天 女
がんこさも古希を過ぎれば味となり子猫と遊
ぶ君との暮らし

北区 平井 要子
十年の月日の過ぎしうたの会人にも歌にもら
しき弾ける

中区 福田美津子
ウクライナの戦火に想う荷車に括りつけられ
て疎開したこと

北区 藤原 孝志
妻の指関節太く痛みあり家事の分担さつそく
始む

南区 招 金
予報では予測できない秋雨にエリアメールの
忙しく鳴る

西区 水野佐喜恵
ガラス越しの母との会話は途切れがち我らを
認め後は笑むのみ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

天竜区 美山 愛
 吾が^あ枢生花はならず千羽鶴入れてくれよとひたすらに折る

東区 村木 幸子
 大雨より二十日を過ぎぬ積まれぬし土囊の破れ目にカタバミの咲く

北区 ムラマツ
 偏差値は何れ^{いず}にいても今もなお影の如くにつかず離れず

南区 村松ヒサ子
 手の皺を互いに見ては笑い合う事無く一日過ぎるが嬉し

浜北区 山下 晏義
 インダスの源流深く山眠るエヴェレストありK2ありて

北区 山田 文好
 ジェット機の描くハートが秋空にやがて崩れるエアフェスタかな

中区 山中 伸夫
 封印を破りて鬼が動き出し平和な大地地獄に変える

中区 吉川 一美
 かさこそと落葉ふみ踏み楽しいな還暦過ぎたひとり遊びの

南区 由倉 典之
 我先に餌をよこせと叫ぶ雛なだめすかして親鳥の飛ぶ

天竜区 リコリス
 青い柿雷雨の後の落とし物秋の実りを待ちきれなくて

中区 渡野邊すみ子
 九十歳の私を若いと言う叔母は百歳間近かスマホを使う

短歌選評

清水正人

本集より選考を担当いたします。前任の村木道彦氏は高校の恩師で、三年間古文を学びました。作者の姿が生きて、まざまざと、ありありと感じられる作品にめぐり合うことが喜びです。隅々まで読ませていただきました。以下の五名の皆さんを本年度の「市民文芸賞」といたします。

人生へ読点を打つ血と肉となった書籍を紐で縛って

売るための本をバイクにくくりつけ秋風よりも秋風となる
売りがたさもるとも本の値段とす古本市は秋晴のなか

午後四時に魔法は解けて古書売りは足の疲れた父親となる

「古本市」で自らの「血と肉となった書籍」を自ら売る一連である。「秋風よりも秋風となる」や「売りがたさもるとも本の値段とす」「午後四時に魔法は解けて」といった感覚が非凡。本という存在の不思議な切なさを改めて認識するとともに、横書きの短歌をネットで検索する今という時代にも思いを馳せた。

独り在れば「何してるの」と孫が問う為すことのあり為すこともなし

いわれなく時止まることのあり床にとどまる影の深きに
憚らず大きくしやみした後の夜更けの部屋は深海のごとき

孤独は「孤」でも「独」でもない。むしろ「個」であり「特」なのだ。一首目の初句、二首目の二句、三首目の結句等に散

見する字余りや字足らずよりも作者の氣息やリアリティーが俄然勝ると感じる。

北からの冷たき風を抱きある丘に立つ樹の深き懷
蟬声の真只中に入りゆけば蟬になりたり翹るわせて
薬指液晶画面をすべる刻電車は夜を音なく離る

日常の中に、「冷たき風を抱きある」「翹るわせて」「電車は夜を音なく離る」といった非日常な視線がふと紛れ込む。それはまざれもなく作者の詩性であろう。とりわけ二首目の結句は作者の身体感覚と「蟬声」のシンクロニティーだ。

新婚の小さき挿鉢使ひをりまだ百均がなかつたころの
さつきから薬待ちゐし若草がわが旧姓を呼ばれて立てり
1/4の南瓜がぼんやりと黄を曝しをり夜の厨に

ごくごく日常的な情景を作者はほんのちよつとした跳躍で新しくする。「新婚の小さき挿鉢」「薬待ちゐし若草が」「1/4の南瓜」といった言葉の幹旋だ。（よんぶんのいち）を「1/4」と表記する必然を諾う。

首なしのほとけ地蔵を杉葉埋め秋葉古道は山巔つなぐ
嶺行かば明るさ分かつさかひあり山巖刻む植林の線
ミズナラの古株に呼ばれたづぬらるゝ飼ひならされたか山
に入らねば

〈飼ひならされたか〉といった慨嘆はともすれば上滑りしがちだが、一連を通読すると、十分な説得力を持つ。「ミズナラの古株」にそう尋ねられる瞬間がきつと誰にもあるのだろう。要はその問いを甘受できるか否かだ。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

吉兆と思ひ直せど今朝の蛇

南区

藤田 節子

月涼し獣舎に眼活き活きと

神の庭惜しみなく散る銀杏かな

賢治の忌音読はずむオノマトペ

蛇穴を出で砲声を聞くキーウ

中区

松島 義徳

枯れすすき定期試験の帰り道

他人は他人窓の外では虎落笛

闘魂の赤よ釣瓶落としての陽よ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

バスを待つベンチ暮れゆく桜かな

中区

大平 悦子

足もとに満ちる潮あり夏の富士

吊し柿ひねもす風をたのみかな

息白く遠嶺を指して話しけり

遠足は少し甘めの玉子焼き

浜北区

峯村 友香里

草紅葉馴れれば案外よく喋る

冬銀河抜けた乳歯の穴二つ

深呼吸するほどわたし冬になる

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

グーグルに教へを乞うて胡麻叩く

中区

和久田郁江

収穫のゴマの仕上げの夜なべかな

鎖場の足場確かむ登山靴

コーラスの白のマスクや舞台裏

雨の日の重き香の金木犀

中区

名倉智代

棕鳥のねぐらは駅の一等地

取りきれぬ草の実つけて猫帰る

毛糸編む魔法のやうな母の指

故郷は昭和の時間 蝉時雨

北区

二橋三千代

丁髷が豚汁配る村歌舞伎

冬来たるリハビリ室の人体図

蜜柑山峡の日射しを集めをり

茄子剪る共にどん底気分剪る

南区

鈴木やよい

胡瓜もむミックジャガーのステップで

介護して仕事して寝落ちして冬

鍵盤を走る指より蜜柑の香

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

ヤジ馬も去って火事場の水たまり

中区

山口 一郎

千年を生きてかくしやく嬰鑠滝桜

広辞苑昼寝の枕よき高さ

老眼鏡拭きて彼岸の墓掃除

母の日に肩もむ吾子の手の誉

西区

加藤 喬

山桜村の床屋のすえた椅子

さみだるる明日手術の父の黙

おでん食ぶ味のしみたる夫と食ぶ

「入選」

片肌を脱ぎて見事な始め

西区

池谷 和廣

ゆらゆらと青海亀の背に昼寝

浜北区

岩城 悦子

晶子忌は堀江細道青葉の香

萩の原ここ家康の負けし跡

恋に生く寂聴逝きぬ冬の月

命をたたみ木槿いま落ちゆけり

子雀のすとなすとなと降りてくる

植田はや風の道見ゆ夕日濃し

南区

伊藤 久子

窓開く初音や風の心地良さ

南区

内海セツ子

進み勝な振子時計や走り梅雨

強情も個性のひとつ柿若葉

秋夕焼過疎の団地も艶めきて

好まれる蜜柑のはるみ吾子の名も

露草やドクタイエロー今通過

コスモスや犯罪劇に俳句入る

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

中区

コスモスや草間に抜ける青い空

大橋 秀一

中区

園庭に子ら駆けまわる桜草

小楠恵津子

どしゃぶりやバス停脇の曼珠沙華

畳紙母の浴衣の色あせず

ふるさとや群れを離るる赤とんぼ

星祭夜行列車の窓に見て

友来るや浜名湖畔の盆踊

静寂やヨットレースを終えし浜

中区

親鸞の恋の一念読始

大村千鶴子

南区

雛飾る妻は雛を持たざりき

小澤 幸一

さわさわと光の波や青田風

病む肺に五月の風を満たしけり

リハビリ終へ色鮮明に秋の虹

狛犬の飛び出す構へ青嵐

うららかや本の一茶と旅ごころ

母よりも旨き大根炊いてやる

リング園小さき地藏の新しき

中区

勝田 洋子

夫と行く赤城の山や星月夜

一人言きかれてしまいいアマリリス

アマリリス彼岸の夫と一通話

麗かや甘藻ゆらゆら赤鳥居

中区

汽 水

汗拭ひ瞬間を待つタキヤ漁

フィナーレに燈籠浮かぶ舘山寺

鰯の子や応じるやうに湖を跳ね

稲妻や焼いた油揚げ一人呑む

中区

嘉山 春夫

カンナ咲く異常気象の川破る

浜松や街の真中の稲架高し

野良猫や消防局の曼殊沙華

更衣暑さ寒さにひと休み

東区

齋藤 純子

息子よりカーネーションを平和なり

ひたすらにひな壇飾る八十路かな

水仙の白が押しあふ青い空

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

秋晴や再スタートの退職日

南区

酒井 浩之

縫物の大好きな母春裕

東区

鈴木 浩子

秋天やペダル踏む母背筋伸び

拾はれぬままの銀杏八幡宮

ふるさとや父との釣りの秋の川

日短機嫌の悪い洗濯機

ふるさとの駅のにほひや秋の風

駿河湾は魚の宝庫初市場

南区

須川 てる子

中区

鈴木 由紀子

零れ萩地層にのこる二枚貝

城主三代の甲冑十三夜

月満ちて角艶めきぬ鬼瓦

水澄めり直線に舞ふ麦屋節

満月やずしんと重き貨車の音

山籠りする同胞やましら酒

月煌々膳に加ふる目玉焼き

お社にあぶらげ二枚竹の春

西区

奥浜名入日に鯉の跳ねてをり

簪目の寺領に萩のこぼれけり

対岸の風車まぢかに秋暑し

根こそぎの野分の後の松林

南区

励まされメールの一語夏近し

巫女装束脱ぎカツカツとブーツの音

注連作る翁おうの節くれ立った指

終バスの片隅に座す小晦日

野田 俊枝

渡辺 きぬ代

西区

秋近しティファニーブルーに変はる海

風に乗り迷ふてみたき花野かな

金婚の日や大輪の菊ひらく

南区

カルデラの湖うみを一周花の丘

つかまんとすれどつかめぬ秋の風

制服がひかりを知る日さくらもち

中区

腰痛の夫つまとばら園四千歩

うまいなあ孫のみそ汁蟬時雨

百才や子らと歩いて盆の寺

縣

裕子

赤堀

進

池谷 静子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

イナバウアーアロエの花の目白かな

東区

伊藤 俊夫

ただ端居免許と車捨て去りて

短髪の若き乙女よ聖五月

西区

太田 沙知子

彼岸花咲いて弟一周忌

菊人形小首かしげて聞き上手

中区

岩崎 五郎

中区

小 粥 通恵

片陰の校外学習十湖の碑

野の花を投げ入れ籠のさわやかに

助手席に置きある妻の夏帽子

幽玄へ誘はれさうな紅葉山

三宝に太き大根堂々と

家康のゆかり受け継ぐ秋祭

西区

岩崎 芳子

中区

岡部 澄子

曇天を押しあげてゐる蟬の声

菊花展斜めに抜けて古本屋

日輪に真向ひ香る花木槿

うつた姫に捧ぐ落葉を残しおく

水昏れて末枯の岸匂ひけり

冬オリオン指さすときは同時なる

水仙の香の中へ押す母の背な

中区

岡部すみれ

日溜りは祖母の匂ひの冬うらら

梅ふふむ水子地藏の口小さき

下萌ゆる土手のベンチで握り飯

中区

小楠 勝代

年賀状米寿の師匠えびす顔

春光やめざす山城急階段

ベランダのタオル持ち上げ遠花火

中区

小楠 達司

玉葱の下がる軒端の雨宿り

梅の花戴帽式に香り添え

母の忌の過ぎたる朝の春時雨

中区

小野田みさ子

春の水畦道の草ぬらしたり

夏嵐こうぼう麦を吹き立てる

髪少し伸ばし少女は秋に入る

南区

尾林せい子

ゆきあひのふつと項を萩の風

夏野へと厩舎の柵の開かれぬ

ははに添ふ計器うごめき晩夏かな

中区

糟谷 修子

退院すひとさじのかゆ行く秋に

語らひて患^{わづら}ふははと春を呼ぶ

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

べそをかく幼の膝に春の泥

中区

加藤 雅子

爆撃に削られてゆく春の星

西区

かともこ

六月の宵へその緒を見つめゐる

子の腕を落とす親にも夜の秋

「あばたでも香はいいよ」柚子貰ふ

緊要の課題も置きて冬の月

南区

金子 典子

南区

河合三代子

天空の風甘やかや雛飾る

真つ白な連絡帳や春を待つ

折紙の少女の指や風さやか

蒸しばんの丸くふつくら子供の日

切つ先に目線を集め西瓜切る

指先に露のかをりや鍋洗ふ

南区

神谷知恵子

中区

川島 泰子

梅が香の風の抜けみち父母の墓

読み耽る友の句画集春の宵

花疲れ母の形見の黄八丈

散りて猶いろ増す色葉きのふけふ

姿見にうつる人生秋深し

棟上げの重機延びゆく春の空

天竜区

吾が為のキャラメルを買ふ秋うらら

笹瀬 幸代

北区

万愚節だったら最初から言って

鈴木 健示

鉄琴のマレット跳ねる木の実雨

ポスティングする人走る大西日

秋の虹母の瞳に在る光

秋日和せえのおで食うカレーパン

西区

待ちわびた友の便りや初紅葉

清水 康成

中区

密やかに背戸を飾るや杜鵑草

鈴木 賢三

吊り橋を湖上渡りて夕紅葉

蚊遣り火や縁台将棋熱を帯び

友去りて庭に残りし枯尾花

靄さきて居丈高なる百舌の声

中区

儘ならぬ事よ身に沁む峠の灯

杉田 みさき

天竜区

二階より紙飛行機や五月晴

鈴木 利久

峠行く軽トラックの林檎かな

白牡丹活け贗作の蓬菜図

秋天衝く路上の若きランペッター

佛壇の漆の匂ふ夜の秋

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

神還る乗り捨ての雲沖に混み

中区

鈴木みちゑ

朱の色を刻々と変え秋夕焼

西区

竹平 和枝

大根煮て今日の暮れゆく手元かな

ご自愛をと書きてペン置く初時雨

静けさや赤岳の端に時雨虹

猫と居る名月の夜も常の夜も

西区

鈴木 嘉子

コスモスや母を介助の散歩道

中区

伊達 千春

爽やかや縹の空の奥の奥

足裏に銀杏落葉の仄温し

虫の声またもウクレレくり返し
うらやましふたつながらの秋の蝶

汗拭い眉毛書き足す昼下り

浜北区

竹内オリエ

朝露や意外にかたき茄子の棘

中区

戸田田鶴子

風光る住めば都で半世紀

ウクライナ・ロシア戦争闇の春

紫蘇もんで指ほんのりと若やぎぬ
背伸びしてもぐ柿枝が肩を打つ

西 区
ふる里や父の手塩の菊の花

外 山 加代

コスモスや線路の脇に手を振る子

栗のいがチクリと刺せる秘湯かな

うららかや蒔いた野菜の芽がちらり
草もみじ通院バスは定時刻

根 本 文子

南 区
大年や工事半ばの大土管

中津川 久子

生家もう空き家となりし昼ちちろ

中 区
背をまるめ大根きざむ母が居て

橋 本 英夫

CTスキャンぬーっと抜けたり冬銀河

表紙には汗の指紋の読み聞かせ
棟上げの槌のひびきや春近し

中 区

中村 つぎ子

花火果てマスクの群れの無口なる

中 区
城跡や兄の植ゑたる初桜

林 田 昭子

白木槿しずくも白し通夜の雨

城下町見渡す墓所の空高し

ロープウェイ湖の眺望といふ涼し

夫の逝き三寒四温幾年ぞ
いくとせ

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

福耳の湯上りの吾子菖蒲の香

東区

藤井 星子

玄関のぐちゃぐちゃ靴や夏休み

花のあと逝くそのひとのたたずまひ
龍田姫裳裾を川に浸しをり

南区

堀川 知音

スキップの少女ら土手の秋桜

たましひの澄みたる湖にしづむごと

北区

藤生 君江

東区

松本ひで子

山茶花の垣の隙間の出入り口

コロナ禍の挙式また延び春寒し

大輪のあじさい乾き紅葉色

焼け跡や割れ花鉢に春の雨

秋暑し工夫の腰の重き器具

二百年の里の棚田や曼珠沙華

北区

藤原 孝志

西区

宮崎 季有美

月明りの母のお供に影と行く

故郷の青水無月をくぐりけり

陽を浴びる一列なりし浮寝鳥

父の日のハモニカ奏づ晴れ舞台

捨案山子大の字なりて空眺む

学童の背より高しもろこしは

林道に丸太山積み風薫る

東区

宮澤 秀子

二つ三つシャツ買い足して初冬かな

中区

山田 知明

夏帽子声つなぎあふ峠みち

色鳥やコーヒー香るカフェテラス

葉桜になりし大樹や雀の子

天竜区

美山 愛

蜜柑むく母の髪の毛白髪増え

磐田市

渥美 朋可

グライダーふうわりふうわり初夏の風

赤トンボ群れ飛び喜寿を祝ふかな

春コート友とお出掛け孫娘

北区

山口 京子

永き夜やラジオと本と湯たんぽと

東区

井口 絹子

医師が告ぐ病知る日に虎が雨

息白し老いたる夫婦坂の道

里の味雑煮へおおか山盛りに

西区

池田 智子

汗みずく最新の体組成計

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

浜北区

我が影も八月の影大地踏む

市川 敏

中区

玄関に菊の鉢並べ人は老い

伊藤 久子

逆境にあればこそなほ百日紅ひやくじつこう

亡き母に語るも無言秋ふかし

東区

折れそうで細いサンマの海の色

井手賀代子

中区

蚕豆の莢山盛りとなりにつけり

伊藤 好子

ああ秋だハゼの実黄いろ空の青

ふらここを漕いで山々飛び越ゆる

中区

肌撫でる風透明や秋来る

伊藤 栄里

東区

風薫る古希のランチはハンバーグ

伊奈 宜子

長き夜やヴェルレーヌの詩二三篇にさん

初登山帽子は赤と決めにけり

浜北区

銀輪の刻むリズムや夏木立

伊藤 正

南区

薔薇手入れ心の乱れ棘の刺す

井浪 マリエ

鉛筆が転がる先に春の風

鰐広の黒き夏帽庭手入れ

青田波真つ正面に鳥海山 中区

右崎 容子

切り通しなほ暗かりきあけびの実 南区

岡田 親敬

爽やかや眉墨少し長く引き

暮れ紅葉公園脇の三輪車

遠州おちこち 中区
沢蟹潜むコンクリートの割れ目

内山 文久

春昼やはしびろこうと根競べ 中区

小川 恵子

河烏潜るさ銀のドレス着て

自販機のごとんと響く冬に入る

望郷の象の眼や秋の虹 南区

大田 勝子

スカーフを小粋に巻きて冬めく日 北区

小栗 道子

蟪蛄の首に飛びつく野良の風

家恋し青き六月果てにけり

隣人と雑談しつつ三つ葉摘む 中区

大屋 智代

園児たち遊びて白き息交わる 西区

おっさん

夏の昼部屋いっぱいに峠風

橋から見るイルミネーション冬桜

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
				待春やガラス戸越しに面会す 中区	痛き指気にもせず草取る日課 東区	切畠 正子		
				夏怒濤慰霊碑ならぶ摩文仁丘 東区	寒風に耐えて芒の細き茎			
				棉の実の爆ぜて赤子の尻白し 東区	日暮や悲しき声は誰のため 中区	佐藤 長徳		
				ゆるぎなき猷体の意思鳥渡る 中区	灯燈や行き交ふ人の笑みこぼれ			
				流水や冬晴れの空いちめんに 中区	山の宿満天の星鹿の声 浜北区	澤木 辰子		
				コロナ禍に一人するや三十日蕎麦 西區	七里香たぐりて行けば介護園			
				フライパンで薄切り南瓜トライする 西區	遊ばせてもらう菜園瓜の花 西區	柴田 ミドリ		
				朝寒の膝 ひざ に陽をおく窓際で	手折りしは蔓うめもどき提げ歩く			

北 区
鳥きて四谷棚田の田螺鳴く

清水 孜郎

天浜の鉄路の音や鰯の飛ぶ

北 区
山頭火泊りし旅籠初時雨

鈴木 章子

北風に卷かれそびれて松ぼくり

中 区
若き日の書きこみ多し書架の秋

白井 宜子

南 区
天高し浜松ジャズへ大拍手

鈴木 敦子

空色の杖は友だち天高し

夕ぐれのアウトレットや赤蜻蛉

中 区
散りし牡丹湯舟に浮かべ遊ぶ夕

白柳 ますみ

西 区
幼子の真摯な瞳梅を干す

鈴木 和

半月に見惚るる窓辺洗ひ髪

煌煌と産科の明かり寒北斗

西 区
エンジンのかかる間ふたり息白し

す ず き

中 区
ふわりふわ蒲公英の綿毛みな友だち

鈴木 京子

サングラスかけてポーズのおやつ前

日々草ひと雨ごとに友がへり

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

十三夜心まると教へけり 中区

鈴木 早苗

銀杏を踏み碎いての散歩道 東区

高木 勝海

狗尾草亜麻色となりなほ戯るる

連れあいが一人で出て行く秋の暮れ

白雲と白波連れて白子船 中区

鈴木 利定

初秋や江の電の音海の声 中区

竹下 勝子

編み笠を三味で揺らせて風の盆

会いにゆく土偶の女神文化の日

包み置く聖夜の^{あこ}吾子の枕元 中区

鈴木 由起子

山の日に山の名で呼ぶ介助犬 中区

竹田 道広

小豆入り父の定番かき氷

立秋やアイロン台に木綿シャツ

花鳥の啄むたびに辺り見る 東区

砂間 達也

初日の出モルゲンロートへの誓い 西区

竹平 安則

星涼し短波帯から外国語

パン抱えふと立ち止る初音かな

中 区
シーソーに振り返る子や秋深し

館 石 照 子

お茶席へ付け下げ纏ふ松の内

中 区
菊花蕪そえて一品秋深し

手 塚 み よ

中 区
耳遠き二人の会話山笑う

田 中 愛 子

天と地をつなぐ向日葵^{ひまわり}黄金色

南 区
秋思深く深し旅姿の芭蕉像

桃 花

振り返る伊賀茅門の苔紅葉

東 区
少年の端正な文字風涼し

田 中 美 保 子

人生はナビなき旅路花筏

中 区
遠花火三年ぶりの音聴く夜

鳥 井 美 代

人の世も花もつかの間しぐれけり

東 区
時雨るるやのめり込みたるミステリー

坪 井 い ち 子

中 区
田植えすみ白鷺集う八王子

永 田 恵 子

氷上の隊列息を呑む圧巻

強風に舞う落葉追いかける子等

分け隔て無き子の笑顔サ克蘭ボ

中区

平野 旭

母乳の香緑風清か吾子眠る

走り根に躓き放すゴム風船

南区

古谷 とく

一番星指差す稚と夕端居

水ぎはに芥かたより春めきぬ

中区

藤本 幸子

捨てられし子猫甘へをまだ知らず

北区

牧 元久

富士山と白を競いて辛夷咲く

涅槃会に赤き山門くぐり抜け

子らが採るペンケイがいて土用波

中区

藤森 文臣

秋冷や胸に残りし言葉尻

中区

ま さ こ

立ち止まり白き息吐く大雪溪

だいせつけい

賀状見て話題花咲く茶の間かな

台所母の背中やふかし芋

北区

古橋 美由紀

夜もすがらただ響き合ふ虫の声

北区

松本 栖枝

年明けや父の運転今日最後

佐鳴湖で白鳥さがす散歩かな

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

姫街道椿の林風通う

北区

村松 和憲

落花生天日に干され元気色

南区

由倉 典之

野路菊^{のじぎく}や本陣もある気賀の関

艶々の笑い出しそな柿ふたつ

年重ね古着ばかりの更衣

北区

山川 美恵子

二人とて時持て余す蟬時雨

中区

和久田 俊文

新緑を見つつ間食青い空

雨漏りの間隙抜きて蟬時雨

反り乍ら輝きながら鮎釣らる

北区

山口 英男

帰宅中かすかに揺れる眠り草

天竜区

渥美 貴輝

夏蝶のもつれてくぐる仁王門

あ ひ る

靴紐^{くつひも}を緩^{ゆる}めに結ぶ冬支度

中区

山中 伸夫

雑草に生き方学び草刈りぬ

北区

冬近し庭にムカゴの落ちる音

中区

有賀 千子

コロナ禍や素顔知らずに暮の秋

次郎柿磨いて包む貢物

東区

飯田 邦弘

夏霧の見えぬところに水の音

天竜区

内山 琉生

肌寒さ風が知らせる衣替え

天竜区

石原 煌騎

サングラス偽る時もありにけり

中区

大石 万鈴

早暁に牛舎に入り息白し

北区

伊藤 アツ子

夜桜や闇に光りて人酔わす

天竜区

岡部 涼汰

傘寿の身労り生きよと半夏生

北区

伊藤 美代

ミニトマト頬ほほばる孫の笑顔かな

中区

岡本 蓉子

晩菊におろかさ感じ哀れなり

天竜区

氏原 鳳星

熟れ柿のなか弦楽の闇を秘む

南区

尾内 以太

頬ゆるむ子や孫来たり春休み

北区

内山 昭子

亡き母と見上げた夜空大花火

中区

尾上 正代

秋蝶の来て野の色と風の色
西区

鈴木 茂子

江戸時代栄養摂取の玉子酒
天竜区

高橋 柊

終業式がんばりたいけどこもりうた
天竜区

鈴木 聖二

風高し負けじと泳ぐコロナ中
中区

高山 紀恵

梵鐘の音さまざまや夕霞
南区

鈴木 直美

青葉濃し老いら集いてカラオケを
中区

竹田 たみ子

冬探し太陽求め日の出見る
天竜区

鈴木 聖人

空浮かぶ月を隠すか綿の雲
中区

た ろ う

秋の雨ぬれた落ち葉を踏み歩く
天竜区

鈴木 蓮

敬老会喜寿も卒寿も無礼講
南区

中村 功

冬の朝夢から戻す母の声
中区

高田 周

深山や我此処にあり山桜
北区

中村 敏之

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

日も暮れて北風が吹くこの校舎

天竜区

中安 未彩

白木 槿子は外に出でて母を待つ

西区

西野 久美子

筆と墨余白うるほす秋の声

西区

松本 憲資郎

来年の米寿も嗅ぎたや金木犀

中区

宮田 昭夫

定型俳句選評

高柳 克弘

小説や評論は散文、俳句は韻文と言われるジャンルに属しています。散文は意味やメッセージを伝える事が第一義ですが、韻文にとつてそれは二の次です。快いリズムで言葉を並べるのが第一義となります。

歌人の二条良基に、歌のうまい人とへたな人はどこが違いますか、と尋ねたところ、「仏師、経師、箕作を、このよう順番で言えるのがうまい人だ。箕作、仏師、経師と言ってしまうのはへたな人だ」と答えたといひます。三つの職業の名前を、聞きやすい順番で言える人はセンスがあるということです。室町時代の連歌師・心敬が「ひとりごと」という歌論の中で伝えている逸話です。私も、みなさんの作品と向き合うときは、韻律の快さを意識しながら選んでいます。

ふだんの話し言葉や書き言葉では、聞き取りやすい語順などはあまり考えないでしょう。韻文を知ること、言葉はコミュニケーションの道具というだけでなく、音の響きや、質感などを備えていることに気づかされます。

賢治の忌音読はオノマトペ

藤田 節子

宮沢賢治の童話には独特のオノマトペが使われています。それを口に出して味わっているわけですね。賢治の文学の本質をとらえた内容でした。韻律の上では、「賢治の忌」よりも「賢治忌や」とすると良いでしょう。助詞の「の」が入ると、句の勢いが削がれてしまします。

蛇穴を出て砲声を聞くキーク

松島 義徳

「蛇穴を出づ」という季語を絡めて、ウクライナ侵攻の理

不尽を訴えています。社会的な題材を句に詠むのは難しいとされていますが、そこに果敢に挑み、自分の言葉で表現しています。調べの上では、「砲声」と「キーク」の語感の重なりが配慮されています。題材の重みの点から言って些細なことのようにも思えますが、そこそが肝要なのです。調べが良くない句は、どれほど重要なことを述べていても読者の心をつかみません。

足もとに満ちる潮あり夏の富士

大平 悦子

足元の情景から、いつきに遠方の「夏の富士」に展開して、遠近のめりはりのついた構図となつています。音韻の点からいえば、アの音が多いものですから、調べが明らかで、浜辺を歩く作者の気分の高揚を伝えていきます。

草紅葉馴れば案外よく喋る

峯村友香里

第一印象は無口な人だけれど、なじんでみると口数の多い人だということに気づいたということです。共感を呼ぶ内容ですね。この句は「慣れれば案外」の部分が、本来は七音であるべきところ、八音の字余りになっています。通常は、この部分の字余りは避けるべきとされますが、ここでは字余りによって饒舌な感じが強調されています。調べと内容が合致しているのです。

コーラスの白のマスクや舞台裏

和久田郁江

コロナ禍の現実を写し取った句です。舞台に出て歌うまでは、ぎりぎりの時間までしつかりマスクをして、感染対策を取っているというのです。全体的に硬い音が多いので、本番前の緊張感が伝わってきます。

「句調はずんば舌頭に千転せよ」（『去来抄』）と芭蕉は言いました。自分の書き留めた句を、目で追うだけではなく、何度も口に出して調べを確かめてみてください。

小 説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

月影の桜に巻かれた赤いスカーフ

東区

源次郎

園庭にこぼれた音符ぶらんこ揺らしてる

南区

中津川久子

「入選」

カラカラとドロップ缶最後の一粒はハツカ
中区 縣 敏子

鞆に詰め込んだ日常新しい自分に出会う旅

背伸びしても届かない君への想い

後ろ向きのまま明日へめりこむ
南区 尾内 以太

胸の鉄琴へ小石が落ちる

夕焼のすべり台に忘れたことば

母の着物リフォームして鏡の中で一回り
中区 伊藤 千代子

畔道の彼岸花日焼け顔の母浮かぶ
南区 加藤 美恵子

音もなく色取りどりの秋が舞う

「尋ね犬」電柱のビラ色褪せていく

空に穴かと思うこの街の今宵満月

蝶も涼を探して垣根を越える

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

道草回り道がいい晩夏の三日月

東区

源 次郎

上弦落ちれば夢とどまらず君の声

モノクロームの記憶たどれば今宵十三夜

南区

中津川久子

顔と貌つくつておんな鏡閉づ

熟れた夕日に赤い雨降らせてる妬心

遊女塚におぞおぞ^{まんじ}の宴

麻痺の右手しびれる七十一歳の朝

中区

雨宮智彦

深夜父の永眠コオロギの声止まる

東区

井手賀代子

ひとつ終わったとカレンダーに線をひく

いやいやが始まった幼子が通つてゆく道

浜北区

伊藤 正

学び舎の軋む廊下 五十年前の私がいる

木漏れ日にふれてうれしい虫がいる

浜北区

岩城 悦子

あゝ君は何処へいわし雲ばかり

小人のガリバーと泰山木の花の上に睡る

天竜区

赤銅も明くれば白し西空の月

岩本多津子

ひらり^{かわ}躲し上手く生きたか傘寿

中区

雑草もバトンタッチで咲き誇る

岡本 蓉子

転ばないマイペースで行く八十路

東区

程々にと切り上げて今日も遅い晩酌

要 弘子

朝もだいぶ冷えて熱い珈琲の香り

天竜区

特別な日にしたい、となびくワンピースの裾

河合 香織

しあわせと平仮名で書きたくなる日曜の朝

浜北区

朱にひそむ罪の意識彼岸花の畦歩く

木俣 史朗

晴れたと思えばまた曇る所在ない居間の人

中区

カチリとコップ割れた夜 明日言おう

櫻井 恵子

落ち込んで昼には忘れる『今日のあなた』

北区

予定表にしたら桜 長い長い下り坂

鈴木 章子

特急ですハートのエース まだまにあうよ

浜北区

春風のカーテン透けて蝶が舞い飛ぶ

竹内オリエ

硝子の月の気高く清く秋を透かせる

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

侍の口一文字菊人形

中区

戸田田鶴子

さよならと言って別れた秋の妖精

東区

根本 文子

美しき花トンネルを二往復

青い空一歩一歩秋を開く七十八

で虫に出会えてそつと歩を止める

東区

戸塚 郁代

冷やかな眼差しで気づくノーマスク

北区

古谷 聰一郎

門前に丸く正座の青大将

天気予報聞きつつ夜なべ支度の釣り道具

雨模様つゆ草ぐんと背のびした

中区

中谷 則子

良いことがありそう下ろしたての靴

東区

松尾 尚子

夏終わり玄関開けると蟬一匹

夕陽が無造作に詰め込んだ買物袋

マスクして出かける機会一つ二つ

南区

中村 淳子

風が渦巻く逢魔が時の交叉点

南区

村松 ヒサ子

キンモクセイ香り漂い自己主張

振り向かぬ後姿へ手を振る

中区
パラパラと餌まいてメダカ動き出す
渡辺 憲三

確かな老い背筋伸ばして背丈の測定

磐田市
リップクリーム塗り出すバレンタインの日
渥美 朋可

北区
色あせし花われと重ねみる
伊藤 美代

中区
太くて柔らかな虎杖いたどりによきによき
内山 文久

西区
愛は哀より出でて哀より愛し
遠藤 ゆき

中区
〈秋が来たね〉今日も書いてる見えない手紙
桜花 ふみ

西区
春帽子ちよこんと置いて席を立つ
大内 愛子

西区
コートのポケット心も体も温むカンコーヒー
おっさん

東区
天の川願いが叶うよ心のオアシス
神谷 司

中区
生垣に混じるミカンの白い芳香かおり
嘉山 春夫

中区
伊那はもう重き空か風の音
杉田 みさき

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

木もれ日に青きレモンの手に踊る

中区

鈴木 和子

大先輩とかみ合わない話談笑し

天竜区

リ
コ
リ
ス

植木の手入れ途中なのに汗でにじむシャツ

北区

鈴木 勝則

秋の夜に流星ひとつこぼれおち

北区

戸田 敬三

コンバインおこぼれもう鳥の群れ

中区

中野 まりこ

雨が真つすぐに降る昼下がり

中区

巴 勢里

冬近し静かな川原に数多の土のう

天竜区

美山 愛

自由律俳句選評

宮本卓郎

今号から自由律俳句の選者を務めさせていただきます。若輩者ですが、皆さんの作品ひとつ一つに込められた心情と真摯に向き合つてゆく所存です。よろしくお願い致します。

俳句は一つの段落をもっている一行の詩である

これは、自由律俳句の祖とされる萩原井泉水が自著「自然・自己・自由」の中で述べている俳句の定義です。

更に、この著書において自由律俳句について次のように記しています。

『常識的に考えると自由律俳句というのは、季題がなくともよろしい、十七音でなくともよろしいとすると、俳句がある柵の中から解放するものだと考えられよう。それだから束縛を脱して「自由」なのだと考えられよう。然し、事實は解放ではなくして限定なのである。……ここで誤解をふせぐために一言するが、「季題がなくともよろしい」というのであつて「季題があつてはならぬ」というのではない。……その意味において自由なのである。十七音ということも同様である。十七音が詩のリズムをもつて表現されているものなら結構である。……十七音でもよろしく、十七音でなくともよろしい。その意味において自由なのである。このように制約に捉われないという意味では、約束から解放されたものであるが、精神的には詩の精神たるポエジイをもつていなければならぬという点においては厳然たる意識をもつて限定する。』

さて、皆さんの作品を拝見させていただき、詠まれている主題の多様さに驚くと共に、それを自由律の世界で表現しようとする姿勢がひしひしと伝わってきました。

一方、定型句の体のものも一部ありました。いずれも先の井泉水の言を振り返られることをお勧めします。そ

の上で、次の二句を市民文芸賞に推します。

月影の桜に巻かれた赤いスカーフ

赤いスカーフは何を暗示しているのでしょうか。作者の切なる願望・情念か。それとも愛惜の念なのか。更にそこにオーバーラップする月影の黒のイメージ。このように言いたいことをそつと伏せ、読み手に想像させることにより句は多くのイメージを含み、詩心をも醸し出すことができるのです。

園庭にこぼれた音符ぶらんこ揺らして

こぼれた音符がぶらんこ揺らす、という独自の視点・発想がこの句を詩的なものにしていきます。対象物と作者の気持ちが一いつになつた措辞により、園児の歌声までも聞こえてくるようです。

ほかにも魅力的な句、気になる句がたくさんありました。いくつか紹介します。

でで虫に出会えてそつと歩を止める

日常のふとした一断面。作者のやさしいまなざしが感じられます。ただし、必要以上のルビは不要です。

木漏れ日にふれてうれしい虫がいる

ふれて、の措辞が木漏れ日のやさしさを、柔らかさをよく表しています。一方、うれしい、の部分は虫の動き等、具体的に述べると素晴らしい作品になると思います。

背伸びしても届かない君への想い

特急ですハートのエース まだまにあうよ

特別な日にしたい、となびくワンピースの裾

落ち込んで昼には忘れる「今日のあなた」

自由律ならではの句です。いずれもドラマ性があり、想像力をかきたてられます。

自由律俳句は自らの思い・感動を、どんなかたちにもなり得る風呂敷でそつと包んで表現したものだ、と伺ったことがあります。御一緒に自由律俳句での表現を楽しんでゆきましょう。

川
柳

〔市民文芸賞〕

永らえてじっくり煮込む夫婦鍋

北区

山口 英男

倦怠期夫婦茶碗が愚痴こぼす

東区

菊川 文江

錆び切った過去が覗いて邪魔をする

東区

竹山 恵一郎

腰かがめ目線あわせて看る介護

中区

宮崎 和子

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

中区

八十路坂足元照らす月明かり

母子草胸にしつかり咲き誇る

情熱の炎を煽る若い群れ

探したら言葉の渦に捲き込まれ

日の香り纏う孫らの笑い顔

中区

脱皮して未来へ翔る若い夢

誤解解き互いにゆずり歩み寄る

明日信じ捨て身で耐えた若い日日

的を射た言葉我が身を顧みる

苦と楽の糸を繋いで生きて行く

浅井 常義

南区

車椅子これっしかない生きる術

押してもらう抵抗のんで車椅子

慣れていく車椅子から見る景色

腕力つけ自由自在の車椅子

キレッキレのダンス楽しむ車椅子

東区

伊熊 靖子

しみついた心の襞にひそむ癖

でもまあと思えば返せば冬の月

西日射す汗も拭かずにめざす坂

平均値ひとの存在軽くさせ

まだまだとあがきながらも向かう闇

恭 子

源 次郎

北区

田中 恵子

東区

中村 雅俊

まあねしか言わぬ背中をドンと押す

成長のメモリー刻む柱さず

ドキドキもしないこの恋もう終わり

さりげない心に響くありがとう

本物の愛に育った大喧嘩

明日という夢を描いて見る夕日

モミジ葉がラストダンスの風を待つ

人生の旅に思わぬ途中下車

陽に干して膨らんだ夢撞いてみる

美しい日本語乱す若者語

中区

中村 禎次

中区

名倉 智代

もう帰ろ三度言ったが帰らない

信号に引つかからずに目的地

出来たのに夜明けの夢に盗まれる

千年の歴史に耐える法隆寺

雨の日は雨のリズムで楽しもう

また人災防げたものが大事故に

支え合う杖が欠かせぬ老いふたり

いつまでも友と見ていたキャンプの火

きつと来る私と影が別れる日

やっぱりねスタミナ食は鰻です

北区

ウォーキング八十路の脚が一万歩

古谷 聰一郎

後輩が追い越してゆく習い事

中区

荒 沢 博

一票の行方気にして午後八時

共白髪赤い糸さえ色あせる

惨状の弱者の涙見る涙

耳鳴りか虫の声かと独り言

他人には心も見せている背中

南区

牧 田 龍 司

遠花火昔の恋と酒を酌む

南区

伊 藤 信 吾

子を宿し娘が母の顔を見せ

妻背中母に似てきた割烹着

美味しいもの黙食しても目が笑う

初恋のあの娘の声が耳の中

老いの壁乗り切る知恵が肩を押す

バイク音背中で聞いて車種を当て

句読点打ってこまめに小休止

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
---	---	------	----	----	---	----	------	-------	----

日々努力創意工夫の好奇心

北区

伊藤 美代

手ごたえを肌に直感即実行

目標は自ら決めてゴールまで

大臣の失言数多世の嘆き

東区

内山 敏子

今日よりも明日に向ける思い遣り

さあ帰ろ夕焼け雲が歌ってる

柿熟れて民話の里が下りて来る

開発の波に消された散歩道

人生を走り続けて今がある

北区

小川 憲雄

たなぼたで今日のゲームはもらい物

夏まつり花火の音が懐かしい

楽しみの一番なのは食べることに

中区

嘉山 和美

スルーした言葉の刺の抜き加減

献立に母の腕鳴る里帰り

断捨離へ縋る目をするお気に入り

甘くみた余裕に潜む落とし穴

月光に照らし出される自尊心

東区

菊川 文江

国葬の意義に疑問符纏い付く

彩りを添えてはにかむミニトマト

自分史の結末に咲く白い花

中区

鈴木 敏子

カーナビの終わり付近で迷う道

グルメより素朴な味が性に合い

鳥の目に気付かず遊ぶ稚魚の群れ

縫うよりも時間がかかる糸通し

退院日余白を埋める夢を持つ

天竜区

鈴木 俊彦

針を刺す度に今日あり生きてるぞ

願い事賽銭箱で眠ってる

辛い過去二人で越えて湯に浸かる

西区

鈴木 均

感動の余韻に浸る間の余裕

磨かれて手間を愉しむ境涯に

夢は見るだけで止まるな掴むもの

自分史に誇れる証積む余生

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

孫来たるビニルプールに目も潤む

西区

高柳 龍夫

子供消え広場の隅に生える草

事もなく今日が過ぎ行く満足感

冬晴れてここに極楽日向ぼこ

東区

竹山 恵一郎

自由だが孤独と背中合わせの日

思い込み次から次へ負の連鎖

核心に触れると毬の弾まなく

沈黙が埋み火に風送り込む

コロナ禍に一人カラオケ友励む

南区

寺田 喜代子

山奥の唯一のバスがまた消える

甘くなれ干柿のれん時を待つ

ばんそうこう孫は手に張り満足げ

中区

徳田 美知子

赤とんぼ遊びに誘う指の先

気まぐれな山の天気泣かされる

弁当のぬくもり包む母の愛

ボランテア寄り添い流す玉の汗

要支援妻を支えて老いを知る

中区

戸塚 忠道

取敢えず妻の流儀で家事をする

青春をたぐり合わせる長話

久々に出遇った男よく喋り

無農薬への字くの字も庭胡瓜

東区

藤井 星子

思い出のコーヒークップ手が滑り

亡き母を姉と語らい夜長の灯

軽い嘘ついて心は揺れ続け

母は海涼しい顔で嘘もつく

北区

藤田 盛雄

過ぎた日を想い出すより今日生きる

だとしても少しの毒は今日の福

時により聞えぬ振りも処方箋

生き様を見せて旅立つ梅雨晴れ間

中区

馬淵 征稍

妻逝って包丁出番今日もなく

リードから解き放たれて朝清し

組板のリズム軽やか朝の歌

躓きも一つの節目夢を追う

中区

宮崎 和子

元気でねいつもの別れ笑顔添え

体幹の強さが欲しい独り立ち

弱る足寄り添い歩く老いの坂

北区

山口 英男

若い芽を大きく伸ばすほめ上手

身の程を知れば気楽に生きられる

いやなこと聞き流すのも生きる知恵

ぎりぎりの暮らしに耐えた今の幸

晩成の夢を指折る散歩道

中区

池田 稔

風鈴を揺らす余裕もない猛暑

褒め言葉もらい一日丸く住む

寒の梅固き蕾で時を待ち

北区

伊藤アツ子

赤トンボ案山子と共に笑ってる

喜びも悲しみもある古希の春

北区

梅川 一恵

悔ひとつ明日の命の着火剤

目出度いと只ほめられる敬老日

大丈夫お口達者に動いてる

北区

距離感を埋める努力が無二の友

加藤 典男

傷跡の一つ一つを支え合う

気配りが不安を越える市民権

東区

ワクチンをうちたいけれど怖さあり

神谷 司

くるくると変わる天気で春来る

淡い夢バブルのように消え去りて

中区

今世紀ワクチン無しで生き抜けぬ

佐藤 永典

また一つ無くして仕舞う友と歯を

手洗いにマスク・ワクチン生きる道

浜北区

失望を生んではかりの自己嫌悪

竹内オリエ

きのうの神一転すれば鬼のきょう

里の香に誘われ息子帰り来る

中区

炎天の茄子つやつやと太りいる

戸田田鶴子

セーターを一枚ふやす旅支度

巣立ちゆく燕一日騒がしく

北区

ワクチン接種保護者ですかで妻ニヤリ

夏目 正樹

私の歯今日もコップで薬の湯

幸せがこんな所に落ちていた

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

検診を受けて再検についてくる

東区

根本 文子

透明なりード夫の首に掛け

中区

馬淵よし子

ぼちぼちが待てずがつつが動く人

長生きへ思いもよらぬ紙パンツ

ガツガツと食べれる秋は遠くなり

終活は未練を捨てて明日に生き

私を鍛えてくれる向かい風

西区

鵜 瑠璃

しがらみを押さえて明日も息をする

中区

足立 和代

あなたとの暮らし冒険の連続

非情にもくり返される人の罪

大物の兆し梓からはみ出す子

北区

藤生 君江

手作りの手提げ巾着愛つまる

温暖化避ける手段はEVか

西区

池谷 和廣

小盆栽かけた年月五十年

家康の戦の跡を民話にて

一人暮らし話しかけるは小さき山

浜北区

七十の手習い愉し今が旬

伊藤 正

中区

拉致過酷四十五年も留めおかれ

鈴木 和子

石畳ここが昔の街道か

ウクライナを守るスクラム冬迫る

中区

野菜増す健康寿命反応し

稲垣久美子

北区

毎日の老老介護順送り

鈴木 勝則

二刀流影の努力に歓喜あり

夢で行く海外旅行費用なし

北区

テラスにて家族で囲むバーベキュー

小川 道子

中区

公僕と言われた時代遠くなり

鈴木 賢三

久々の身近で花火夜和む

破れ鍋に綴じ蓋なれど睦まじく

南区

お互いに交わらずゆくデモと蟻

尾内 以太

南区

握手して明日の風を手に入れる

鈴木千代見

靴底のいつも重たい人生だ

何かある涙拭って抱きしめる

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

中区
高橋 紘一
「やらまいか」自分のためと知る努力

二刀流魅せて記したSHOタイム

中区
竹田たみ子
風鈴や程良き音色隣家より
目薬をさしつつ読書秋の夜

中区
高山 功
建替えに残し柿の木たわわの実

西区
竹平 安則
不安搔き立て思考停止へ詐欺電話

美味そうなカタログにらむ歳の暮

アラートに睡眠不足減る命

中区
高山 紀恵
断捨離がやっと出来たヨお引越し
又楽し住めば都よ仮住まい

北区
藤原 孝志
言えば口論じつと我慢の胸の内
忘れてる天の恵みの井戸の水

西区
竹川 美智子
病まで数値化されて手当受け

東区
馬塚 五朗
絵手紙で野菜のお礼二胡仲間

乗り慣れた車キズつけ老いを見る

受け答え相手の真意まづつかむ

ぼんぼんと上がる花火に月笑顔

北区

松本 栖枝

紫陽花を活けて嬉しや居間の午後

初笑い目尻のしわのまた一つ

南区

由倉 典之

落花生剥いた横から手が伸びる

床の間に昭和レトロの黒電話

天竜区

宮澤 正人

ゴミ出しもアイコンタクト妻指図

中区

和久田 俊文

記憶良くなる本買って忘れてる

ウエディングのアルバムに問う幸福度

カラマツの秋化粧終え星月夜

東区

森 恵子

皆既食子供に戻り「見た見た」と

南区

あ つ 子

三錠の薬に今朝も励まされ

口紅のへらぬコロナに終わりみえ

北区

池谷 八重子

年老いて遊び上手は羨まし

北区

山田 良藏

身も心も動ける時が楽しいよ

神籤にも除菌スプレー置かれをり

浜北区

岩城 悦子

小 説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
診察も二割負担でパスが増え	南区		江間 得二	総菜を買えば上げ底値上げ秋	浜北区		澤木 辰子	
ここによき母と二人の猫暮らし	西区		遠藤 ゆき	猛暑日に疲れましたと扇風機	中区		白柳ますみ	
青年の走る姿に拍手する	中区		岡本 蒼子	母逝くも父に会うため旅したく	中区		鈴木 京子	
風に舞ふ雪追ふ子等の頬赤し	北区		影山 久恵	戦争を語れる人は卒寿超え	中区		鈴木由起子	
父よりも分かるはスマホ威張る我	中区		加藤貴代美	世界から異次元となる日本国	東区		高木 勝海	
ワクチン接種一二三四あと何回	南区		桜 吐志晴	救急車走りゆく日は気鬱なる	中区		手塚 美誉	

ポケットに隠れた嘘の大きいびき

南区

中津川久子

猫座るテレビ画面の真ん中に

中区

山中伸夫

夢追いに少し疲れし爪を切る

中区

平野旭

沢山生きるつもりで並ぶ宝くじ

南区

松井康男

この夏は人込みを避け涼求む

南区

招金

獣道日陰^{たくま}遅し山野草

北区

ムラマツ

目標は先にあるから意義がある

北区

谷田貝忠弘

川柳選評

今田久帆

今年度は昨年より応募者が六名増え、四四八句でした。その中で私の心を捉えた二五句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳は五七五のリズムを大切にします。五七五が日本語の調べを作り、相手の心に響き、共感しやすくなります。余分な言葉を削いで響かせると相手の胸に共鳴し、余韻を楽しんでもらえます。「母を想う」は六音字ですが「母想う」にすれば、句が締まり、リズムが生まれます。「て、に、を、は」などを付け加えて、中七を中八（八音字）にして、句を重くしてしまうことがあります。句にリズムを与え、生き生きさせるためにも、ぜひ避けて下さい。「月を見る」も「月」だけで、その光景が浮かびます。動詞を用いなくても表現でき、広い世界が浮かんできます。そして句ができ上がった時に、声に出して読んでみましょう。リズム感があり、流れる句ならば相手の胸に響きやすくなります。

市民文芸賞予選句

悔ひとつ明日の命の着火剤
脱皮して未来へ翔る若い夢
腕力つけ自由自在の車椅子
共白髪赤い糸さえ色あせる
軽い嘘ついて心は揺れ続け
他人には心も見せている背中
傷跡の一つ一つを支え合う
子供消え広場の隅に生える草
しみついた心の襷にひそむ癖

支え合う杖が欠かせぬ老いふたり
断捨離へ縋る目をするお気に入り
幸せがこんな所に落ちていた
何かある涙拭って抱きしめる
終活は未練を捨てて明日に生き
退院日余白を埋める夢を持つ
ボランティア寄り添い流す玉の汗
日の香り纏う孫らの笑い顔
人生を走り続けて今がある
開発の波に消された散歩道
あなたとの暮らし冒険の連続
遠花火昔の恋と酒を酌む

市民文芸賞

永らえてじっくり煮込む夫婦鍋

苦楽をともしにしてきた夫婦はお互いの長所短所を知り尽くし、互いを理解し合っているのができる。
味わい深い人生を送ることができる。

倦怠期夫婦茶碗が愚痴こぼす

結婚したばかりの時は何もかも新鮮であったのに、歳月を重ねると慣れが生じて、新鮮味が薄くなる。するとつい愚痴をこぼすことが増え、空気が淀んでしまう。

錆び切った過去が覗いて邪魔をする

使わなくなると次第に錆びて機能を果たさなくなる。過去の様々な汚点が顔を出すと未来への気持ちを引っ張るようになる。

腰かがめ目線あわせて見る介護

自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解するのに、互いの目線を合わせることで、互いの理解が進んでいく。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸 第69集』作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸第69集」を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(二編)	児童文学	30枚以内(二編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(二編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワープロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

※ 原稿が複数枚になる場合はページ番号を付けてください。

六 選 者
七 募集期間

選者の氏名は、令和五年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第69集」の作品募集要項に記載します。
令和五年九月一日(金)から十一月二十日(月)まで。(必着)

八 応募上の注意

九 発表 十 表彰 十一 その他

① 応募作品は、本人の創作で未発表のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。

② 応募する作品ごとに、規定の応募票(コピー可)を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所創造都市・文化振興課、中区まちづくり推進課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。

③ 応募原稿の書き方については、別紙募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。

④ 応募時に、選考結果通知のための返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、84円切手を貼って、作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品の部門の数に関係なく一通で結構です。

⑤ 難読の語や特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。応募原稿は必ず清書したものを提出してください。

⑦ 作品掲載の際には、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。

⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。

⑨ 応募原稿は、返却いたしません。必要な方は事前にコピーをおとりください。

⑩ 応募後の、原稿の修正はできません。

選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で令和六年二月初旬までにお知らせします。

市民文芸賞及び入選の作品は、令和六年三月発行予定の第69集に掲載いたします。

市民文芸賞の方には、令和六年三月の表彰式で賞状と記念品、「浜松市民文芸第69集」を二部贈呈いたします。

入選の方には、「浜松市民文芸第69集」を一部贈呈いたします。

購入される場合は、一部七〇〇円です。

御提供いただいた個人情報、応募者への連絡及び確認のために使用し、目的外に利用することはありません。また、御本人の同意なく第三者に開示・提供することはありません。

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六 浜松市中区早馬町二一 クリエイト浜松内 ☎〇五三一四五三一三九三三

「浜松市民文芸」第69 集応募票

部 門		小説 ・ 児童文学 ・ 評論 随筆 ・ 詩 ・ 短歌 ・ 定型俳句 自由律俳句 ・ 川柳 1 箇所○で囲んでください	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙 1 枚目の右欄外にも、同じように記入してください 原稿枚数（ページ数） 枚	
ふりがな		ふりがな		
氏 名		発 表 名 ペンネーム		
年 齢		通学先・市外在住の方の勤務先		
年 齢		歳	名 称	
(令和5年11月20日現在)				
住 所		〒		文 芸 館 使 用 欄
電話番号				

編集後記

二十年前の『浜松市民文芸』を読んでいたら、随筆の部に二人の気になる名前を見つけました。一人は私が小学生の時に教わった先生。もう一人は昔一緒に勤めたことがある方の名前でした。当時は住まいが区名ではなく、町名になっていて、共に家族への思いを綴った内容でしたので読んでみてすぐに確信しました。家族とのつながりといえは、今回は選には入りませんでした。伊東政好さんの随筆「浜松大空襲 昭和二十年六月十八日 母との死別体験記」が特別に掲載されています。ぜひ、お読みください。

市民文芸賞の記念品は今年も折金紀男先生の手製本工房O塾手作りのブックジャケットです。先生から教えていただいたのですが、ブックカバーは和製英語で正式にはブックジャケットというそうです。自分だけのブックジャケット、ぜひ、大切にお使いください。先生は今年度の「近代詩鑑賞講座」で講座生と一緒にテキストとなる詩集を製本し、自分だけの詩集本を作成しました。来年度は「石川啄木鑑賞講座」です。とても楽しみです。折金先生には『浜松市民文芸』の平成8年から19年の12年間評論の部の選者を務めていただきましたが、当時の選評には毎年のように「推敲」という言葉が出てきています。『浜松市民文芸第51集』の選評には『感じたことは「推敲」の不足です。文章が重複していたり、論旨がつながらなかったり、または誤字脱字などは何度かの「推敲」をかさねることによって修正できるはずです。……』とあり、「推敲」の大切さを述べています。「推敲」辞書で引くと「文章の字句を苦心して何度も練り直すこと」。評論だけではなく、俳句でも詩でも自分の作品すべてに「推敲」は大切ですね。

今年度も皆様のおかげで『浜松市民文芸第68集』を無事刊行することができました。クリエート浜松4階浜松文芸館講座室前の廊下の展示ケースに『浜松市民文芸』が第1号からずらっと並んでいます。見るたびに伝統とその重みを感じます。今年の応募作品総数は九部門で二一三四点、投稿者は五百二十七名でした。市民文芸賞は三十四名、四百二十四名の方が入選しました。昨年に比べると高校生、公募が減りましたが、詩の部では高校生が市民文芸賞を受賞しています。浜松の文芸を愛する多くの方に支えられている「浜松市民文芸」です。とてもありがたいと思います。

なお、『浜松市民文芸』の裏表紙は今回も静岡大学地域創造学環の学生たちにお願いしました。浜松文芸館のキャラクター「俳人（はいと）くん」と「ことばちゃん」です。浜松文芸館同様、よろしくお願いします。

最後になりましたが、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、ご協力に感謝し、厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 鈴木隆之

浜松市民文芸 第68集

令和五年三月十一日 発行

発行 浜松市
編集 浜松市文化振興財団

浜松文芸館

〒433-0109 九一六

浜松市中区早馬町二一

☎〇五三三四五三三九三三

印刷

杉森印刷株式会社

